

上信越自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書15

—信濃町内 その1—

うら の やま  
裏ノ山遺跡

ひがし うら  
東 裏遺跡

おおく ほみなみ  
大久保南遺跡

うえ の はら  
上ノ原遺跡

旧石器時代

本文編

2000

日本道路公団  
長野県教育委員会  
長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書15

—信濃町内 その1—

うら の やま  
裏ノ山遺跡

ひがし うら  
東 裏遺跡

おお く ぼみなみ  
大久保南遺跡

うえ の はら  
上ノ原遺跡

旧石器時代

本文編

2000

日 本 道 路 公 団  
長 野 県 教 育 委 員 会  
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー



野尻湖遺跡群航空写真（平成5年11月2日撮影）



大久保南遺跡黒曜石集中（SH3）出土状況

## 例 言

1. 本書は長野県上水内郡信濃町の所在する裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡の発掘調査報告書のうち、旧石器時代についての調査結果を取録したものである。
2. 本書に取録した遺跡は調査区外にも広がっており、信濃町教育委員会等により別件の調査が行われていることから、正式地点名を裏ノ山遺跡高速道路地点、東裏遺跡高速道路地点、大久保南遺跡高速道路地点、上ノ原遺跡高速道路地点とし、略称としてH地点を用いることとする。また、東裏遺跡についてはさらに細分され高速道路第1～3地点に分かれることとなる。報告書内の表記については、現況で特に影響のないと思われる裏ノ山、大久保南、上ノ原遺跡についてはH地点の表記は省略してある。
3. 調査は上信越自動車道建設に伴う事前調査として実施し、日本道路公団より長野県教育委員会を通じた委託事業として、財団法人長野県埋蔵文化財センターおよび財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターが実施した。
4. 上記遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』10～15他で紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は、本書の記述の方が優先する。
5. 本書は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 信濃町内 その1』のうち、裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡・旧石器時代 本文編と図版編である。利便上本文編と図版編の2冊に分けて製本を行った。本書を含む信濃町内の上信越自動車道建設に伴う発掘調査報告書は下記のとおりである。

【上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 信濃町内その1】

「日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡」旧石器時代 本文編・図版編

【上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 信濃町内その1】

「裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡」旧石器時代 本文編・図版編

【上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 信濃町内その1】

「貫ノ木遺跡・西岡A遺跡」旧石器時代 本文編・遺構・遺物図版編・写真図版編

【上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 信濃町内その2】

「星光山荘A遺跡・星光山荘B遺跡・西岡A遺跡・貫ノ木遺跡・上ノ原遺跡・大久保南遺跡・東裏遺跡・裏ノ山遺跡・針ノ木遺跡・大平B遺跡・日向林A遺跡・日向林B遺跡・七ツ栗遺跡・普光田遺跡」縄文時代～近世 本文編・図版編

【上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 信濃町内その2】信濃町データ編

6. 本書に掲載した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道平面図（1：1,000）をもとに作成したほか、国土地理院発行の地形図（1：25,000）を使用した。
7. 巻頭図版および写真図版の航空写真は縮写真剥製、併共同測量、併こうそくに撮影を委託したものである。
8. 出土物等の理化学分析は次諸氏機関に依頼し、それぞれ報告をいただいた。  
花粉・プラントオパール・ローム層分析：併パレオ・ラボ  
<sup>14</sup>C年代測定：併古環境研究所

残存脂肪酸分析：榊コーシャ

黒曜石産地同定：沼津工業高等専門学校 望月明彦

黒曜石年代測定・黒曜石産地同定：立教大学 鈴木正男

9. 石器の石材名については信濃町ナウマンゾウ博物館中村由克氏の指導により、整理担当者が鑑定を行った。
10. 挿表測は一部を榊アルカと榊こうそくに委託した。
11. 石器実測図に付いている番号を報告番号とする。報告番号は本文・挿表・実測図・写真のすべてに共通する。
12. 挿表中に用いられている石材・黒曜石産地等の記号は図版編凡例に基づくものである。
13. 挿表の各種組成表内の礫の取り扱いは以下のとおりである。

ブロック別出土層位組成・ブロック別器種組成・石材別器種組成とブロック別石材数量組成については礫を含んだ組成となっている。

ブロック別石材重量組成については、石器と礫を別に扱っている。
14. 挿表中の重量の単位はすべてgとなっている。
15. 本文中で用いた石器の呼称については第1章第4節に記した。
16. 本文および表中で、無斑晶質安山岩と安山岩を下記のように区別をしている。

無斑晶質安山岩：黒色でガラス質の強い緻密な安山岩。産地は長野県飯山市北部～新潟県津南町付近と思われるが、長野・群馬県境にある八風山付近で採集されるガラス質黒色安山岩とはほぼ同質の岩石である

安山岩：無斑晶質安山岩以外の安山岩。多くは遺跡周辺で採集可能な、多孔質の普通輝石安山岩である。
17. 本文中の加工の表現は下記のとおりである。

正方向の剥離（加工）：石器の腹面を打面とした背面側への剥離（加工）。

反方向の剥離（加工）：石器の背面を打面とした腹面側への剥離（加工）。

強剥離（加工）・強い剥離（加工）：縁辺が鋸歯縁状になるような素材を強く断ち切る剥離（加工）。

中剥離（加工）：強剥離と弱剥離の中間的な剥離（加工）。ブランディング。

弱剥離（加工）・弱い剥離（加工）：素材の形状をほとんど変えない弱い剥離（加工）。

平坦剥離（加工）・平坦な剥離（加工）：器面内部まで入り込む剥離（加工）。

折れ：偶発的な折れと意図的な折れの両者を含む。
18. 遺物の計測・属性・出土位置等は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 信濃町内その2』信濃町データ編に記載されている。
19. 遺構の写真撮影は各調査担当者、遺物の写真撮影・現像・焼付けは西島 力が担当した。
20. 本書の執筆・編集・校正は谷 和隆が行い、土屋 積が全体を校閲した。
21. 発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご指導・ご協力を得た。本文中にお名前を掲げさせて頂いたが、厚く感謝申し上げたい。
22. 本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、長野県立歴史館が保管する。

## 本文目次

### 序

### 例言

### 第1章 調査の概要

第1節	調査の経過	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査体制と調査期間	2
3	指導者・協力者	3
4	発掘および整理事業参加者	4
第2節	調査の方法	5
1	発掘調査の方法	5
2	整理事業の方法	8
第3節	遺跡周辺の環境	8
1	遺跡の地理的環境	8
2	遺跡の歴史的環境	12
第4節	基本層序	13
1	野尻湖遺跡群における基本層序	13
2	各遺跡の層序と石器文化	13
第5節	石器の器種分類	14
第2章	裏ノ山遺跡	
第1節	遺跡と調査の概要	18
1	遺跡の概要	18
2	調査の概要	18
第2節	裏ノ山Ⅰ石器文化	23
1	裏ノ山Ⅰ石器文化の概要	23
2	遺構	23
3	遺物	24
4	母岩別資料と接合資料	25
5	剥片剥離技術	25
第3節	裏ノ山Ⅱ石器文化	25
1	裏ノ山Ⅱ石器文化の概要	25
2	遺構	28
3	遺物	35
4	母岩別資料と接合資料	42
5	剥片剥離技術	45
第4節	その他の石器	45
1	遺構	45
2	遺物	45

### 第3章 東裏遺跡

第1節	遺跡と調査の概要	47
1	遺跡の概要	47
2	調査の概要	47
第2節	東裏H1Ⅰ石器文化	55
1	東裏H1Ⅰ石器文化の概要	55
2	遺構	56
3	遺物	58
4	母岩別資料と接合資料	59
5	剥片剥離技術	61
第3節	東裏H1Ⅱ石器文化	61
1	東裏H1Ⅱ石器文化の概要	61
2	遺構	62
3	遺物	65
4	母岩別資料と接合資料	67
5	剥片剥離技術	67
第4節	東裏H1Ⅲ石器文化	67
1	東裏H1Ⅲ石器文化の概要	67
2	遺構	69
3	遺物	70
4	母岩別資料と接合資料	71
5	剥片剥離技術	71
第5節	第2地点	71
1	第2地点の概要	71
2	遺構	73
3	遺物	79
4	母岩別資料と接合資料	95
5	剥片剥離技術	102

### 第4章 大久保南遺跡

第1節	遺跡と調査の概要	103
1	遺跡の概要	103
2	調査の概要	103
第2節	大久保南Ⅰ石器文化	107
1	大久保南Ⅰ石器文化の概要	107
2	遺構	107
3	遺物	116
4	母岩別資料と接合資料	119
5	剥片剥離技術	121
第3節	その他の石器	122
1	遺構	122

2	遺物	122
<b>第5章</b>	<b>上ノ原遺跡</b>	
第1節	遺跡と調査の概要	124
1	遺跡の概要	124
2	調査の概要	124
第2節	上ノ原I石器文化	126
1	石器文化の概要	126
2	遺構	127
3	遺物	135
4	母岩別資料と接合資料	137
5	剥片剥離技術	140
第3節	上ノ原II石器文化	140
1	石器文化の概要	140
2	遺構	142
3	遺物	145
4	母岩別資料と接合資料	146
5	剥片剥離技術	147
第4節	その他の石器	147
1	遺構	147
2	遺物	147
<b>第6章</b>	<b>成果と課題</b>	
第1節	各石器文化の位置付け	148
1	はじめに	148
2	各石器文化の様相	148
3	まとめ	154
<b>第7章</b>	<b>自然科学分析</b>	信濃町データ編 (別分冊)
<b>第8章</b>	<b>接合資料</b>	信濃町データ編 (別分冊)
<b>第9章</b>	<b>結論</b>	158
引用、参考文献		159
報告書抄録		



## 挿図目次

第1図	グリッド呼称法	6	第11図	東裏遺跡H2地点の微地形	52
第2図	野尻湖遺跡群の地形	7	第12図	東裏遺跡H2地点の層序1	53
第3図	野尻湖周辺の遺跡分布図	9	第13図	東裏遺跡H2地点の層序2	54
第4図	基本層序	14	第14図	大久保南・上ノ原遺跡の調査範囲と地形	104
第5図	石器分類の概念図	17	第15図	大久保南遺跡の微地形と層序	105
第6図	裏ノ山遺跡の調査範囲と地形	19	第16図	上ノ原遺跡の微地形と層序	125
第7図	裏ノ山遺跡の微地形	21	第17図	各石器文化の主な石器1	155
第8図	裏ノ山遺跡の層序	22	第18図	各石器文化の主な石器2	156
第9図	東裏遺跡の調査範囲と地形	48	第19図	各石器文化の主な石器3	157
第10図	東裏遺跡H1地点の微地形と層序	51			

## 挿表目次

第1表	野尻湖周辺遺跡一覧	10	第20表	東裏H1Ⅲ石器文化器種組成	68
第2表	野尻湖周辺遺跡調査一覧	11	第21表	東裏H1Ⅲ石器文化石材組成	68
第3表	裏ノ山Ⅰ石器文化ブロック別出土層位組成	23	第22表	東裏H2地点ブロック別出土層位組成	72
第4表	裏ノ山Ⅰ石器文化器種組成	23	第23表	東裏H2地点器種組成	72
第5表	裏ノ山Ⅰ石器文化石材組成	23	第24表	東裏H2地点石材組成	73
第6表	裏ノ山Ⅱ石器文化ブロック別出土層位組成	25	第25表	東裏H2地点母岩別資料分類基準表1	96
第7表	裏ノ山Ⅱ石器文化ブロック別器種組成	26	第26表	東裏H2地点母岩別資料分類基準表2	97
第8表	裏ノ山Ⅱ石器文化石材別器種組成	26	第27表	東裏H2地点母岩別資料分類基準表3	98
第9表	裏ノ山Ⅱ石器文化石材組成	27	第28表	東裏H2地点母岩別資料分類基準表4	99
第10表	裏ノ山遺跡母岩別資料分類基準表1	43	第29表	東裏H2地点母岩別資料分類基準表5	100
第11表	裏ノ山遺跡母岩別資料分類基準表2	44	第30表	東裏H2地点母岩別資料分類基準表6	101
第12表	東裏H1Ⅰ石器文化ブロック別出土層位組成	55	第31表	大久保南Ⅰ石器文化ブロック別出土層位組成	106
第13表	東裏H1Ⅰ石器文化器種組成	55	第32表	大久保南Ⅰ石器文化器種組成	108
第14表	東裏H1Ⅰ石器文化石材組成	56	第33表	大久保南Ⅰ石器文化石材組成	109
第15表	東裏H1地点母岩別資料分類基準表	60	第34表	大久保南Ⅰ石器文化母岩別資料分類基準表	120
第16表	東裏H1Ⅱ石器文化ブロック別出土層位組成	61	第35表	上ノ原Ⅰ石器文化ブロック別出土層位組成	127
第17表	東裏H1Ⅱ石器文化器種組成	62	第36表	上ノ原Ⅰ石器文化器種組成	128
第18表	東裏H1Ⅱ石器文化石材組成	63	第37表	上ノ原Ⅰ石器文化石材組成	129
第19表	東裏H1Ⅲ石器文化ブロック別出土層位組成	67	第38表	上ノ原遺跡母岩別資料分類基準表1	138

第39表	上ノ原遺跡母岩別資料分類基準表 2	139
第40表	上ノ原Ⅱ石器文化ブロック別出土層位組成	141
第41表	上ノ原Ⅱ石器文化器種組成	141
第42表	上ノ原Ⅱ石器文化石材組成	142

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査の経過

### 1 調査に至る経緯

本書の裏ノ山遺跡、東裏遺跡、大久保南遺跡、上ノ原遺跡の発掘調査は、日本道路公園（以下、公団）による上信越自動車道建設に関連して行われたものである。なお、信濃町内では本書の4遺跡の他に、9遺跡、計13遺跡の調査が行われているが、13遺跡の縄文時代以降と他9遺跡の旧石器時代の報告は別冊母にて行う。

従来、長野県においては、高速道等にかかわる埋蔵文化財保護は広域にわたる統一的措置が求められることから、長野県教育委員会（以下、県教委）が対応し、発掘調査は（財）長野県埋蔵文化財センター（以下、センター）が実施してきた。また御道拡幅などこれらと一体的に行われる開発についても市町村と協議の上、センターが調査を行う場合が多い。

東裏遺跡、上ノ原遺跡は周知の遺跡として知られていたが、その範囲は未確定であり、また、周辺には未周知の遺跡の存在も予想されるところであった。これら周知の遺跡の内容および範囲を把握するための試掘調査は、センターにより本調査と並行して実施され、未周知の遺跡を確認するための試掘調査は県教委により行われた。その結果、新発見の遺跡として裏ノ山遺跡が、周知の遺跡範囲の変更により、大久保南遺跡が調査対象に加わった。

調査範囲は、国道新設部分・高速道と橋台で接する部分・現国道拡幅部分・取り付けの県道・町道改良部分など、工事内容・時期・現況などがさまざまであった。そのため、調査区設定・調査方法・調査時期などが、埋蔵文化財調査の観点からふさわしくない点もあろうが、最善を尽くした結果であり、当初の目的は達成できたといえよう。周辺も含めての調査区域・調査年度等は別項に記した。

なお、今回の調査区外にも遺跡が広がっており、同遺跡の別地点と区別するため、今回の調査地点名をそれぞれ裏ノ山遺跡高速道路地点・東裏遺跡高速道路地点・大久保南遺跡高速道路地点・上ノ原遺跡高速道路地点としておく。また、H地点を高速道路地点の略称として用いることとする。

センターでは、須坂以北の上信越自動車道・中野市内のいわゆるオリンピック道路の調査に対応するため、平成3年、中野市立ヶ花に中野支所を設置した。中野支所は翌4年から中野調査事務所となった。平成5年から信濃町内の発掘調査が始まり、日本旧石器時代の発掘調査史上例のない大規模調査が行われた。平成7年度、降雪の中、信濃町内での発掘調査を終え、平成8年3月、閉所された。以後の整理作業は長野調査事務所に引き継がれている。

各遺跡の調査年次は事項に記したが、発掘および整理は年度ごとに公団が県教委に委託し、県教委がセンターに再委託して実施された。発掘調査の契約面積は下記のとおりである。

平成5年度	東裏遺跡	36,000㎡
平成6年度	裏ノ山遺跡	8,500㎡
	東裏遺跡	4,000㎡

## 第1章 調査の概要

	上ノ原遺跡	3,500㎡
平成7年度	東裏遺跡	4,500㎡
	大久保南遺跡	4,500㎡
	上ノ原遺跡	7,000㎡

## 2 調査体制と調査期間

調査体制及び調査期間は以下の通りである。

### (1) 平成5年度

調査体制	事務局長	峯村忠司
	同 総務部長	神林幹生
	同 調査部長	小林秀夫
	中野調査事務所長	関 孝一
	同 庶務課長	高野幹郎
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	岡村秀雄 酒井健次 常長虎徹 前田利彦 久保田秀一郎
調査期間	東裏遺跡	平成5年4月19日～同年12月18日

### (2) 平成6年度

調査体制	事務局長	峯村忠司
	同 総務部長	神林幹生
	同 調査部長	小林秀夫
	中野調査事務所長	関 孝一
	同 庶務課長	高野幹郎 6月より村山茂美
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	寺島俊郎 神林忠克 (裏ノ山・東裏遺跡) 久保田秀一郎 (裏ノ山・上ノ原遺跡) 鶴田典昭 石原洲一 (上ノ原遺跡)
調査期間	裏ノ山遺跡	平成6年4月18日～同年11月11日
	東裏遺跡	平成6年11月14日～同年12月13日
	上ノ原遺跡	平成6年10月24日～同年12月9日

### (3) 平成7年度

調査体制	事務局長	峯村忠司
	同 総務部長	西尾紘雄
	同 調査部長	小林秀夫
	中野調査事務所長	関 孝一
	同 庶務課長	村山茂美
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	谷 和隆 (東裏遺跡) 柳沢佑三 竹内聖彦 前田利彦 (東裏・上ノ原遺跡) 片山 徹 久保田秀一郎 三木雅博 (大久保南・上ノ原遺跡) 石原洲一 (上ノ原遺跡)

調査期間	東裏遺跡	平成7年7月18日～同年10月13日
	大久保南遺跡	平成7年4月5日～同年8月12日
	上ノ原遺跡	平成7年8月17日～同年11月28日

**(4) 平成8年度**

整理体制	事務局長	青木 久
	同 総務部長	西尾紀雄
	同 調査部長	小林秀夫 (兼長野調査事務所長)
	長野調査事務所長	小林秀夫
	同 庶務課長	戸谷 功
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	大竹憲昭 神林忠克 谷 和隆 柳沢佑三

整理作業内容 遺物の分類・実測、遺構図作成

**(5) 平成9年度**

整理体制	事務局長	青木 久
	同 総務部長	山崎悦雄
	同 調査部長	小林秀夫 (兼長野調査事務所長)
	長野調査事務所長	小林秀夫
	同 庶務課長	戸谷 功
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員・調査員	大竹憲昭 谷 和隆 藤森俊彦 中島英子

整理作業内容 遺物実測、写真撮影、遺物・遺構図のトレース・図版組み、原稿執筆、編集・校正

**(6) 平成10年度**

整理体制	所長	佐久間鉄四郎
	副所長	山崎悦雄 (兼管理部長)
	調査部長	小林秀夫
	管理部長補佐	宮島孝明
	調査課長	土屋 積
	調査研究員・調査員	大竹憲昭 谷 和隆 中島英子

整理作業内容 遺物実測、写真撮影、遺物・遺構図のトレース・図版組み、原稿執筆、編集・校正

**(7) 平成11年度**

整理体制	所長	佐久間鉄四郎
	副所長	山崎悦雄 (兼管理部長)
	調査部長	小林秀夫
	管理部長補佐	宮島孝明
	調査課長	土屋 積
	調査研究員・調査員	大竹憲昭 谷 和隆 中島英子

整理作業内容 遺物実測、写真撮影、遺物・遺構図のトレース・図版組み、原稿執筆、編集・校正

**3 指導者・協力者**

発掘調査と整理作業にあたり、下記の方々や機関にご指導ご協力を得た。お名前を記して感謝したい

(敬称略・五十音順)。

麻生敏隆 阿部芳郎 有本雅己 安齋正人 安藤政雄 池谷信之 石川恵美子 伊藤 健 稲田孝司  
 大竹幸恵 大田原潤 岡村道雄 岡本東三 荻 幸二 小野 昭 織笠 昭 角張淳一 軽部達也  
 木崎康弘 栗島義明 小池義人 小杉 康 小菅将夫 小林達雄 近藤洋一 酒井潤一 佐藤宏之  
 佐藤雅一 佐藤良二 沢田 敦 実川順一 菅沼 亘 島田和高 白石浩之 鈴木次郎 鈴木忠司  
 鈴木宏之 鈴木正男 須藤隆司 砂田佳弘 諏訪順 関口博幸 大丁原豊 高尾好之 高見俊樹  
 竹岡俊樹 館野 孝 田中 総 谷口康浩 鄧 聰 辻本崇夫 堤 隆 鄭 漢徳 戸沢充則 中島庄一  
 中島 誠 長沼 孝 永峯光一 中村由克 野口 淳 朴 英哲 橋本勝雄 原川雄二 比田井民子  
 平口哲夫 藤野次史 藤原妃敏 保坂康夫 松沢亜生 松島吉信 松藤和人 道沢 明 宮坂 清  
 宮坂光昭 宮下健司 宮田栄二 望月静雄 望月明彦 矢島國雄 柳田俊雄 山下秀樹 山田晃弘  
 山田昌久 山本 誠 山本正敏 吉井雅勇 吉川耕太郎 渡辺哲也  
 信濃町教育委員会 ㈱アイシー ㈱アルカ ㈱協同測量 ㈱こうそく ㈱写真測図研究所  
 ㈱新日本航業 ㈱ズコーシャ 中野土建㈱ ㈱パレオ・ラボ ㈱北條組

#### 4 発掘および整理事業参加者 (平成5年～平成11年)

##### (1) 発掘調査参加者

青木洋子 青木義和 青柳正一 青柳貴義 青山智恵子 青山弘美 秋本 仁 麻田紀子 荒井 明  
 荒井久子 有賀保訓 飯島隆夫 飯田静夫 池田和子 池田きよ子 池田公吾 池田 強 池田祐一  
 池田良高 石井賢一 石川はつ子 石沢善藏 石田寿文 石田要三 市川 武 伊藤久美子 伊藤彦市  
 井上司郎 今井百合子 岩下昭吉 上杉俊美 牛木悦次郎 宇田国男 内田 守 内堀恭次 江口陽子  
 大狭真純 岡田あき子 岡野康子 荻原敬藏 荻原千代子 荻原みな 奥戸トモエ 柏熊康弘 勝田早苗  
 加藤充也 金井和久 金井五朗 金井富男 金子康子 川口耐子 川村幸彦 岸田 務 北沢栄造  
 北沢孝美 北沢武雄 北沢まさ 北島久美子 草間保雄 久保田貴美江 久保田哲子 熊谷たつ子  
 倉澤浩子 栗田杵雄 黒岩信治 黒田哲郎 黒田敏夫 公平千鶴子 小坂仁造 小坂幸子 小島多喜子  
 小橋ふみ子 小林計雄 小林和子 小林節子 小林たえ子 小林 保 小林紀子 小林美智子 小林仁子  
 古森順次郎 近藤美恵 斉藤憲興 斉藤花子 酒井 泉 柳原公美 桜井 忠 佐藤麻枝 佐藤高明  
 佐藤喜子 佐藤和三郎 塩入善仁 静谷明子 渋谷幾久恵 渋谷伸治 渋谷とし子 渋谷春代 島田善美  
 白井隆太郎 須賀真理子 菅谷澄子 鈴木 越 鈴木健一 須藤久子 関 克也 関川幸子 関谷照二  
 関谷花江 善財 弘 高沢正富 高野明子 高野陽子 高橋浦一 高橋 静 高橋 深 高橋富美江  
 高橋 勝 高橋安正 竹内寅雄 竹内良子 武田初枝 田子定夫 田中周衛 田村 哲 田村昭治  
 田村多恵子 塚田 宏 塚田悦子 塚田てい 土屋實治 坪井ふみ子 伝田正樹 徳武 洋 徳武孝文  
 徳満勲子 徳竹ミサオ 徳竹喜春 徳永徳一 徳永利夫 豊森知弘 中川 愷 中島亮之進 長原和子  
 永原今朝男 中村のぶ子 中村博恵 中村美由紀 中村よし子 中山安雄 成田三郎 西澤 紘  
 根岸チノ子 根岸由恵 野口由夫 野本秀男 長谷川悦子 長谷川和朗 長谷川真平 長谷川芳恵  
 畠山 智 服部つや子 服部正志 馬場知則 早川貞治 早川智恵美 原 いち 原美知子 原山一弘  
 平塚せつ子 広瀬しず子 福岡邦友 藤木利高 藤城昂子 藤原洵子 布施 亨 踏分実 降旗 茂  
 降旗まつ子 牧 一誠 巻柄智也 牧千代子 町田俊雄 町田友雄 町田英子 町田幸重 松井ひめ子  
 松木由美子 松野クライレーネ 松村明子 松本幹雄 丸山悦夫 丸山三喜雄 三澤貞利 水越玉子  
 三井薫夫 宮川 久 宮川朝子 宮崎良雄 宮沢敏子 宮島武次郎 宮本義章 向山弥重子 村田今朝一  
 村田達哉 村田宗之 村田やすの 森田千代江 矢沢とし子 山岸育夫 山田啓子 山森澄江 湯本美雄

横山真理子 吉川榮子 吉川しげ子 吉沢元典 吉澤由香 若林次郎 渡辺益男 渡辺三千代 割田武治

### (2) 整理作業参加者

阿部 敬 荒井かち 荒井恵子 新井晴美 市川ちず子 岩泉辰子 宇賀村節子 内田 仁 内田陽一郎  
 内山恵美子 内山清子 追川吉生 大橋里奈 大林久美子 門内政広 河崎裕二 川本真由美  
 北沢三枝子 北森梨恵子 倉沢より子 蔵田愛子 小林克次 小林奈美江 駒村和子 佐藤桂子  
 島田恵子 須藤友美子 高久昌子 高城大輔 高柳すえ子 滝沢久子 滝沢みゆき 武田友子 玉井久雄  
 張 龍俊 塚田祐子 寺門義範 寺田真木子 戸枝周平 戸谷邦隆 中沢祐一 中島 透 野口 淳  
 野沢久子 平井義敏 藤原泰子 堀木照美 堀本香代子 丸山和子 丸山園枝 三木陽平 峯村恵子  
 三上義子 峯村敏子 宮川優作 宮坂美樹 宮崎正枝 宮野尾和子 宮本宰江 村田雅子 矢澤健太郎  
 矢田美智子 柳沢りり子 柳原澄子 柳原智子 山崎明子 山科 哲 山田理恵 横田節子 横山 真  
 吉川孝子 吉川耕太郎 吉田米子 吉田 望 渡辺恵美子

## 第2節 調査の方法

### 1 発掘調査の方法

#### (1) 試掘と調査区の設定

本調査に先がけて長野県教育委員会及び、長野県埋蔵文化財センターにより高速道路路線範囲内の試掘調査が行われ、その結果に基づき調査範囲を設定した。

未周知の遺跡であった裏ノ山遺跡は地形的に好条件であったため重機でのトレンチ調査が行われ、遺物が検出されたため丘陵頂部周辺に調査区を設定した。

東裏遺跡の伊勢見山裾部は広い平坦面となっており、ほぼ全面を調査区とした。

未周知の遺跡であった大久保南遺跡は、東裏遺跡・上ノ原遺跡とは一連の平坦面にあったため、重機による試掘を行った結果、遺物が検出されたためほぼ全面を調査区とした。

上ノ原遺跡は高速道路用地内が一連の平坦面となっていたため、ほぼ全面を調査区とした。

#### (2) 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡の名称と遺跡記号は下記のとおりである。遺物・写真他の記録類の注記などもすべてこれによる。

裏ノ山遺跡 MUR 東裏遺跡 MHU

大久保南遺跡 MOK 上ノ原遺跡 MUE

#### (3) グリッドの設定と呼称法 (第1図)

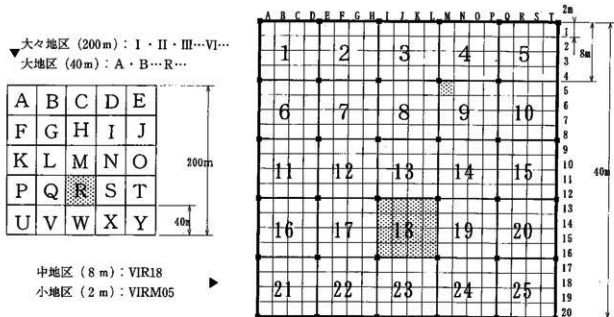
グリッドの設定にあたっては、国家座標を基準として大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した。

大々地区：調査対象地区全体にかかるように200m×200mの区画を設定し、北西から南東方向にⅠ・Ⅱ・Ⅲ……とローマ数字で表記した。

大地区：大々地区を40m×40mの25区画に分割し、北西から南東へAからYまでの大文字アルファベットを用いた。

中地区：大地区を8m×8mの25区画に分割し、北西から南東へ1から25の算用数字を用いた。

小地区：大地区を2m×2mの400区画に分割し、小地区とした。大地区の北西角を起点として東西軸上に西から東へAからTまでアルファベット、南北軸上に北から南へ01から20の数字を付して、両者の組



第1図 グリッド呼称法

み合わせて「A01」のように小地区名とした。

上記の呼称を組み合わせ、たとえば大々地区「VI区」、大地区「R区」、中地区「18区」(8m×8m)は「VIR18」と表記される。また、大地区「R区」を小地区に分割した「M05」(2m×2m)の場合は「VIRM05」と表記される。

(4) 遺構記号

記録・注記等の便宜を図るために遺構名称は記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は原則として検出時に決定するため、主として平面的な形態や遺物の分布状況等指標としたもので、必ずしも遺構の性格を示すものはない。整理段階で遺構名称変更の必要が生じた場合は、発掘時の遺構記号・遺構番号は欠番とし、新しい遺構記号の最終番号に追加した。本書で報告する遺構番号は前述の理由から飛び番号が生じているが、混乱を避けるため発掘時の遺構記号・遺構番号をそのまま使用した。したがって最終遺構番号=遺構数とはならない。

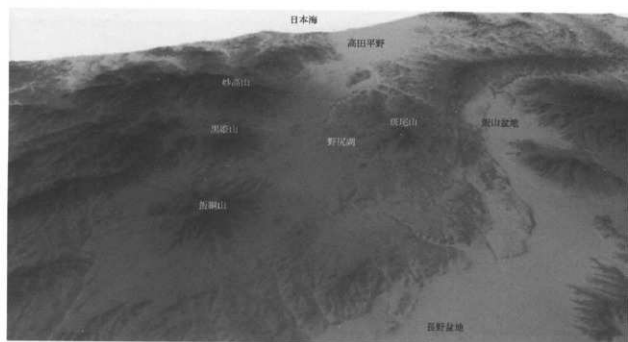
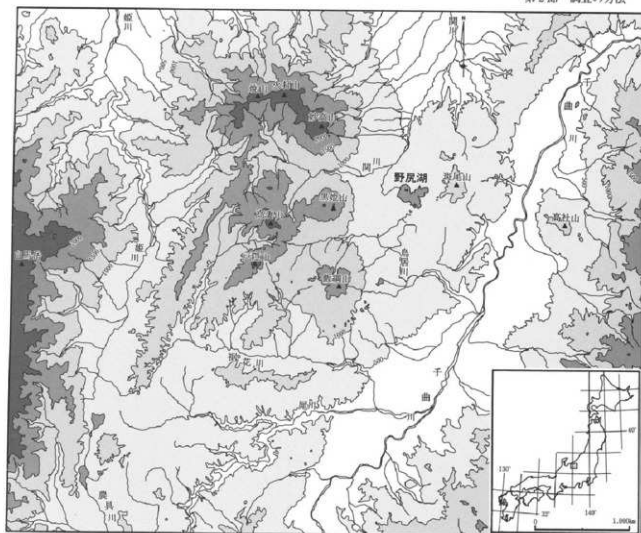
なお、本書の遺構記号は当センターで共通して用いているもので、以下のとおりである。

- [BL] 旧石器時代の石器・剥片集中
- [SB] 2m以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。(竪穴住居址、竪穴状遺構)
- [SK] 単独もしくは他の掘り込みと関係が認められないSBより小さな掘り込み。(土坑、陥し穴、貯蔵穴、井戸等)
- [SH] 石(主に礫)が面的に集中するもの。ただし旧石器時代の石器・石片集中であるブロックには、発掘時に決定することが困難なため用いない。(集石、礫群、配石)
- [SQ] 遺物が面的に集中するもの。(ごみ捨て場、祭祀址)
- [SV] 炭化物集中
- [NR] 自然流路

(5) 遺物の取り上げと記録方法

旧石器時代の遺物が主体となったため、遺物の取り上げに際しては、測量業者に委託して、光波トラン





第2図 野尻湖遺跡群の地形

シートを用い端点測量を行った。現地では、出土位置をmm単位までの精度で、端点の属性として、①点の種類別（石器、石器、礫といった遺物の種類等）②出土層位③遺物番号をデータとして電子野帳に記録し、それをもとに作成した編集図面、観測成果簿、観測データ（フロッピーディスク）の3種で管理している。また、群葬や良好な遺存状態で集中していた遺物については、別に微細図を作成した。

遺物の取り上げ番号は、遺構に帰属する遺物については、遺構ごとに1番から番号を付し、包含層・遺構外の遺物については遺跡全体、あるいはグリッドごとに1番から番号を付した。注記については以下のとおりである。

裏ノ山遺跡……遺跡全体を通して遺物番号を付けた。（例：MUR・55）

東裏遺跡……中地区もしくは大地区ごとに番号を付けた。また、平成5年度調査の遺物については遺跡記号の後に調査地点名が丸付きで記載されている。（例：MHU②V-U-5-55 MHU V-C・55）

大久保南遺跡・上ノ原遺跡……大地区ごとに番号を付けた。大久保南遺跡については中地区IV-G区についてはIVを省略してある。遺構に帰属する遺物については遺跡記号に続いて遺構記号を記した。

（例：MOK・G・55 MOK・SH-3・55 MUE・IV-M・55）

## 2 整理作業の方法

### (1) 遺物の整理方法と管理収納

遺物の洗浄については、使用痕観察のため、無垢品質安山岩のような表面が風化・劣化が著しい遺物以外は、超音波洗浄機を用いた。

遺物の注記終了後、石器・土器・礫を分別し、それぞれに作業を進めていった。

石器の整理では最初に器種判別作業を行った。器種判別時の観察項目は以下のとおりである。

器種/材質/礫面の遺存状態/欠損部位/遺存度/剝離方向/打面形態/打角/打面長さ/長さ/幅/厚さ/重量

器種判別後、石器実測作業と並行しながら、母岩判別<sup>(註1)</sup>、接合作業を行った。作業の結果得られた母岩別資料及び、接合資料は石材単位で1から番号を付けて台帳に登録した。

礫の整理では、礫の計測・観察を行った後接合作業を行った。

遺物個々の計測値及び、観察事項に関しては、信濃町データ編（CD-ROM）に記載する。

遺物管理は、石器、礫の大別に従いそれぞれ収納している。

遺物は長野県立歴史館が管理を行う。

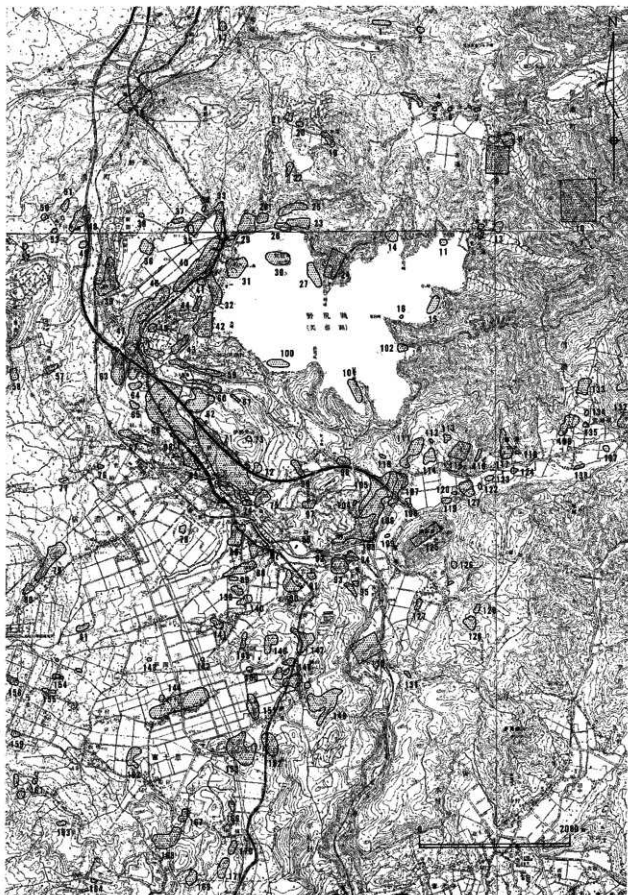
## 第3節 遺跡周辺の環境

### 1 遺跡の地理的環境（第2図参照）

野尻湖は長野県の北端の水上内郡信濃町にある。この湖の西側を中心に北西南東方向に約6km、北東南西方向に約4kmの範囲に旧石器時代から縄文時代草創期の38遺跡が集中しており、野尻湖遺跡群と呼ばれている。本書で報告する遺跡はすべて野尻湖遺跡群に含まれる。

野尻湖は日本海に面する高田平野と内陸の長野盆地との間にあり、古くから交通の要所となっていた。

(註1) 日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡旧石器時代層では「個体判別」という呼称を用いたが、厳密に個体レベルまで分類できるものが少ないため、本書では「母岩判別」という呼称を用いることとした。呼称は異なるが判別精度は日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡旧石器時代層と大きく変わらない。



第3図 野尻湖周辺の遺跡分布図



年度	野尻湖の発掘	信濃町内の発掘	高遠遺跡周辺の発掘	おもなできごと
1948(昭23)	ナウマンゾウの化石発見			
1953(昭28)		持久保津跡の石器、旧石器と銅器		
1958(昭33)		二ヶ倉遺跡(開掘)		
1962(昭37)	☆野尻湖発掘始まる	持久保津跡		ナウマンゾウ、オオツノシカ化石を発見
1963(昭38)	第1次野尻湖発掘	伊勢屋山遺跡(国学院大学)		野尻湖発掘、C14年代測定と花粉分析によるウルム氷層の確認
1964(昭39)	第3次野尻湖発掘	持久保津跡		はじめて石器(削片)を発見
1965(昭40)	第4次野尻湖発掘	持久保津跡、猪俣島遺跡		ナウマンゾウの歯骨の一端を発見
1966(昭41)		持久保津跡(堀平跡)		
1967(昭42)		持久保津跡(可込)		
1973(昭48)	第5次野尻湖発掘			「月と星」の発見
1974(昭49)	74年3月調査調査 74年10月仲町調査			
1975(昭50)	第6次野尻湖発掘			ビーナス像(?)の発見
1977(昭52)	第1次野尻湖発掘	仲町「水遣工事」		
1978(昭53)	第7次野尻湖発掘			ナウマンゾウの歯骨を発見
1979(昭54)	第2回湖上発掘(仲町)			黒紙紙でナウマンゾウの骨を発見 仲町遺跡で縄文早期期の土坑墓発掘 白部社のナイフ型石器発見
1981(昭56)	第8次野尻湖発掘			「ヤリ状木器」、管製スレイバーの発見 2.4mのナウマンゾウの骨発見 陸奥文字器の発見
1982(昭57)	第3回湖上発掘(仲町、向新田)			ケルメイトの磁器
1984(昭59)	第9次野尻湖発掘			向新田遺跡で縄文中期の土坑墓発掘
1985(昭60)	第4回湖上発掘(仲町、向新田、黒月台、貫ノ木)	大久保南遺跡(北取り)		白部社のナイフ型石器発見
1987(昭62)	第10次野尻湖発掘			管製スレイバー発見
1988(昭63)	第5回湖上発掘(貫ノ木)			管製スレイバーを伴う生活痕を確認
1989(平1)		☆町教育委員会の調査始まる		丸巻遺跡で平安時代の住居跡を発見 丸巻遺跡(開掘) 猪俣島跡、壺などが出土
1990(平2)	第11次野尻湖発掘	大道下遺跡(会社事務所) 上ノ原遺跡(開拓) 持久保津跡(削ぎトイレ) 一里塚遺跡(町道) 丸巻地遺跡(町道)		第11次発掘でナウマンゾウの足跡化石を確認 上ノ原遺跡で6基が並んだ石圍炉を発見
1991(平3)	第6回湖上発掘	貫ノ木遺跡(保楽所) 大道下遺跡(上取り) 丸巻地遺跡(資料露場) 赤川遺跡(国道18号)		湖上発掘でナウマンゾウの化石発見
1992(平4)		貫ノ木遺跡(保楽所) 東裏遺跡(町道) 役原敷遺跡(店跡) 赤川遺跡(国道18号) 江原遺跡(町道)		貫ノ木遺跡で層層磨製石斧4点や特殊な尖頭器を発見
1993(平5)	第12次野尻湖発掘	東裏遺跡(特別開闢老人ホーム) 東裏遺跡(宅地造成) 上ノ原遺跡(町道) 石根遺跡(町道) 西岡日遺跡(宅地造成) 七ツ茶遺跡(開道)	☆高遠遺跡建設に伴う発掘調査始まる 日向林日遺跡 七ツ茶遺跡 東裏遺跡 貫ノ木遺跡 菅光田遺跡	日向林日遺跡で石斧41点出土 上ノ原遺跡で持久保型ナイフ型石器多数出土 丸巻遺跡(町道)堀ノ内系の石器群が出土 東裏遺跡(開)で「削片尖頭器」出土
1994(平6)	第7回湖上発掘(仲町)	東裏遺跡(町道) 七ツ茶遺跡(開道) 日向林日遺跡(宅地) 貫ノ木遺跡(宅地) 北野原日遺跡(町道) 山根遺跡(広城島遺) 轟山遺跡(ゴルフ場) 赤道遺跡(ゴルフ場)	七ツ茶遺跡 向林日遺跡 大平日遺跡 貫ノ木遺跡 東裏遺跡 上ノ原遺跡 貫ノ木遺跡 西岡日遺跡	湖上発掘で野尻湖文化の石器多数発見 貫ノ木遺跡(開)で砥石5点出土 山根遺跡で弥生土器が多数出土
1995(平7)		大久保南遺跡(開道) 上ノ原遺跡(消火用) 石根敷遺跡(急傾斜対策) 山根遺跡(広城島遺) 赤道遺跡(ゴルフ場) 持久保津跡「ゴルフ場」 上ノ原遺跡(開道) 上ノ原遺跡(宅地)	七ツ茶遺跡 日向林日遺跡 東裏遺跡 大久保南遺跡 上ノ原遺跡 貫ノ木遺跡 西岡日遺跡 黒山山荘石遺跡	大久保南遺跡(開)で黒曜石の石核が多数出てきて出土 赤道遺跡で縄文土器など24,000点以上出土 黒山山荘遺跡で特子梨型石斧など出土 上ノ原遺跡(開)で、堀ノ内系の石器群が多数出土
1996(平8)	仲町遺跡、立ヶ鼻遺跡で地質調査	上ノ原遺跡(開道) 吹ノ原A遺跡(広城島遺) 山根遺跡(広城島遺) 大久保南遺跡(開道) 七ツ茶遺跡(町道) 大道下遺跡(掘立て) 東裏遺跡(町道)	貫ノ木遺跡	上ノ原遺跡で堀ノ内系石器群が2つの場所から出土 吹ノ原A遺跡で新石器群が出土 山根遺跡で弥生中期の住居跡が出土 大道下遺跡で縄文早期の土器が多数出土
1997(平9)	第13次野尻湖発掘 仲町遺跡、立ヶ鼻遺跡で地質調査	吹野原A遺跡(広城島遺) 上ノ原遺跡(掘立て) 貫ノ木遺跡(ガスパイプ) 東裏遺跡(町道) 上ノ原遺跡(町道) 黒月台遺跡(寺跡) 役原敷遺跡(貯蔵場)		上ノ原遺跡で砥石と石斧素材がおかたの状態でも出土 東裏遺跡で堀ノ内系の石器群が出土 黒月台遺跡で手への持久保型ナイフと小形の石器群が出土 吹ノ原A遺跡で人形の石核が出土

第2表 野尻湖周辺遺跡調査一覧

湖の西側には北から妙高、黒姫、飯綱の火山が並び、東側には斑尾山が存在し、これらの山々に囲まれている。水面標高は654m、面積は3.96km<sup>2</sup>である。野尻湖の水は西岸の池尻川から流れ出し、関川を経て日本海へと注ぐ。烏居川は遺跡群内から南西に向かって流れ、千曲川を経て日本海へと注ぐ。分水嶺は貫ノ木遺跡・上ノ原遺跡内に存在するが、本書の対象となった調査範囲はすべて烏居川水系となっている。

野尻湖周辺には火山の影響によりローム層が堆積している。主たる火山灰の給源とそれぞれの火山の活動期は次のとおりである（地学団体研究会1996）。飯綱火山の活動期は約34万年前と約20万年～15万年で、約6万年前に水蒸気爆発を2回起こしている。黒姫火山の活動開始年代は約25万年前で最新のマグマ噴火は約4.3万年前である。妙高火山の活動開始年代は約30万年前で、最新のマグマ噴火は約4200年前である。焼山火山の活動開始年代は約3000年前で現在も活動中である。斑尾火山は約70万年前と55万年前頃に活動をしていた。したがって、上部旧石器時代には飯綱、黒姫、斑尾火山はすでに休止しており、活動していた火山は妙高火山ということになる。また、焼山の活動は縄文時代以降となる。

野尻湖は約7～6万年前に起こったと思われる黒姫山からの池尻川泥流が、斑尾山西麓からの川を堰き止めたことによって誕生した。その後湖西側の仲町丘陵の隆起と湖東側の沈降により、形を変化させながら現在の野尻湖へとなっていく。貫ノ木遺跡の北西部にある池尻川低地は後期旧石器時代には野尻湖の一部であったことが確認されている。

野尻湖周辺は丘陵地帯となっている。旧石器時代の遺跡は丘陵の様々な場所に立地している。丘陵頂部、中腹の緩斜面やテラス状の場所、丘陵の裾部など比較的平坦な地形に遺跡が形成される場合が多い。また、現在の水田域となっている部分の多くが、かつては池や湖、湿地であったことが確認されており、野尻湖以外にも多くの水場が存在していたこととなる。これらの丘陵地形と水場環境の良さから、多くの狩猟対象動物が生息していたと考えられる。これら丘陵地帯では隆起・沈降が激しく旧石器時代には現在の地形とはかなり異なった様相を示していたと思われる。7～6万年前頃の野尻湖底堆積物である貫ノ木層が貫ノ木遺跡において約50mの比高差が確認されており、1万年で10m近く隆起していたことになる。したがって、旧石器時代の人々が活動していた当時は、現在の地形よりも起伏が緩やかであったと考えられる。

## 2 遺跡の歴史的環境

野尻湖はナウマンゾウの化石が湖底から発見されたことがきっかけとなり、古くから学術調査が行われてきた。近年になって、町教育委員会や県教育委員会（埋文センター）により数多くの遺跡が調査されるようになり多大な成果があがってきている。それらの調査の経過について、信濃町立野尻湖ナウマンゾウ博物館により簡潔にまとめた年表があるので、第2表に転載した。特にこの2～3年の発掘調査の成果は著しく、現在それらの整理が進められている中で、遺跡群の評価は刻々と変化しているが、現時点では以下のようにまとめられよう。

現在確認されている野尻湖周辺における最古の人類遺跡は立ヶ鼻遺跡であり、中期旧石器時代（約5～4万年前）に相当する（野尻湖周辺の発掘調査経過については第2表参照）。立ヶ鼻遺跡からは、ナウマンゾウなどの動物化石と共に石器や骨角器などが出土している。立ヶ鼻遺跡以外では仲町遺跡で確認されているが、こちらも湖成層からの出土であり、陸上の風成層からはまだ確認されていない。

後期旧石器時代に入ると遺跡が激増し、野尻湖遺跡群が形成されるようになる。全国的に見ても遺跡数は多く、遺跡規模は高い遺跡群となっている。また、器種組成も特徴的で、1遺跡から1～数点の出土が一般的であった斧形石器を多量に組成する遺跡が多く存在する。また、斧形石器の研磨に用いたと思われる砥石も同じ遺跡内から発見されている。台形石器も大量に出土しており、その形態も他地域のものと比較すると大形で斉一性の高いものとなっている。また、ナイフ形石器も多く存在する。同一時期と思われ

る遺跡間においても斧形石器、台形石器、ナイフ形石器の組成が異なる点も注目される。

約2.5～2.4万年前の始良丹沢火山灰(AT)降灰以後も多くの遺跡が存在している。また、系統が異なると思われる複数の石器群が存在するようになる。裏ノ山遺跡や東裏遺跡のように黒曜石やチャート、無斑品質安山岩などを石材とし、2個縁加工のナイフ形石器や槍先形尖頭器、搔器などを主な組成とする石器群、貫ノ木遺跡 XI グリッドやセツ栗遺跡のような珪質頁岩や珪質凝灰岩、無斑品質安山岩を主な石材とし、基部加工のナイフ形石器、彫器を組成する石器群、西岡A遺跡のような無斑品質安山岩を主な石材とし横長剝片を素材とするナイフ形石器を特徴とする石器群などが存在し、中には九州地方にみられるような剝片尖頭器や台形石器を組成する石器群もある。それぞれの石器群がある程度の時間幅をもって登場し、異なる系統の石器群が同時期に存在していた可能性も高いと考えられる。

後期旧石器時代終末期には断片的ではあるが多くの遺跡で、神子柴系石斧が発見されている。また、ナイフ形石器や槍先形尖頭器の石器群と比べると遺跡数は少なく、規模も小さいが細石器の石器群も存在する。

縄文時代草創期にも人間の生活の跡が確認される。星光山荘B遺跡では隆起線文土器片とそれに伴う石器類が多量に発見されており、その他にも爪形文土器を出土する遺跡などいくつかの遺跡が確認されている。表裏縄文土器の出土量は特に多い。その後、縄文時代前期頃までの遺物は多く発見されているが、中期以降になると少なくなり遺物が断片的に出土する程度になる。現在のところ縄文時代遺跡からの住居跡の発見はなく、土坑や陥し穴、集石遺構などが残されているのみである。

弥生時代・古墳時代の遺跡は非常に少なく、断片的に土器片などが出土するのみである。

平安時代になると再び遺跡数が増える。大規模な集落は発見されていないが住居が数件でいどの小規模な遺跡が点在するようになる。

中世には野尻湖周辺に集落が点在するようになる。また、高田平野から長野盆地を結ぶ経路となっていたようだ(各遺跡の位置、時期については第3図、第1・2表を参照)。

## 第4節 基本層序

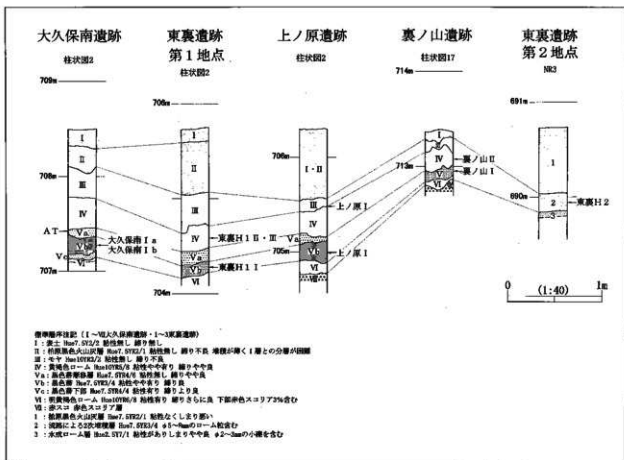
### 1 野尻湖遺跡群における基本層序(第4図)

当センターで調査をおこなった信濃町内の遺跡では、共通する層分が行われている。層名の呼称法は以下のように定めた。地表から近い順にローマ数字でI層、II層、III層…とした。それぞれが細分できる場合にはアルファベット小文字でa、b、c…と第2文字目に付加することとした。たとえばV層が3つに細分できる場合には上部よりVa層、Vb層、Vc層としている。また、遺跡によってはさらに細分できる遺跡もあり、その場合には第3文字目にアラビア数字を1、2、3…を付加して表現した。

野尻湖遺跡群における基本層序と各遺跡の標準的な層序を第4図に示した。これらの層序は野尻湖発掘調査団および信濃町教育委員会 で用いられている呼称との対比も可能となっている。

### 2 各遺跡の層序と石器文化(第4図)

本書で報告する遺跡の多くは複数の時期の生活跡が残されている複合遺跡となっている。旧石器時代遺跡に残されたある一時期の石器のまとまりを石器文化として捉えることとする。複数の石器文化が存在する場合には、古いと思われる順にローマ数字でIから順に名前をつけることとした。本書で報告する石器文化は裏ノ山I・裏ノ山II・東裏高速度路地点第1地点のI～III石器文化(東裏H1I・東裏H1II・東裏



第4図 基本層序

H1III)・大久保南I・大久保南II・上ノ原I・上ノ原IIである。また、東裏遺跡高速道路第2地点については、複数の石器文化が空間的、層位的に重なっているために事実記載段階での石器文化の位置付けは行っていない。それぞれの石器文化および、各地点の主たる遺物出土層位を第4図に示した。

大久保南遺跡と上ノ原遺跡、東裏遺跡 H1地点の一部では、比較的厚い土層の堆積が認められる。これら3遺跡ではVa層とVb層の分層が可能であった。また、大久保南遺跡ではVc層の分層も行われた場所が存在した。

一方、尾根の頂部に立地する裏ノ山遺跡は堆積が薄く、V層を分層することができなかった。また、IV層とV層の境界もV層がブロック状に入り込み不安定であった。

東裏遺跡第2地点では風成層からの遺物出土はなく、自然流路に伴う2次堆積と思われる水成層中から遺物が出土したため、他の遺跡とはまったく異なる様相が見られた。遺物の主たる包含層である2層からは、後期旧石器時代初頭の遺物と縄文時代早期の遺物が同一層準から検出される状況で、層序による時期決定が難しい状況が見られた。

## 第5節 石器の器種分類

本書で行った石器の器種分類の基準を以下に示す(第5図)。完形品、器種としての2次加工が認められる石器の破片について1点とカウントする。また、接合するものはあわせて1点とする。各器種の具体



例は本文を参照していただきたい。

#### (1) 斧形石器

石器の長軸と平行する2側縁に主として平坦な加工が施され、石器の長軸に直交するような刃部を持つ石器。刃部には研磨が施されるものが多い。従来、「局部磨製石斧」と呼ばれているものがこれに含まれるが、研磨の認められないものや、用途が木材の伐採以外にもあったと考えられる点から斧形石器という呼称を用いる。

欠損しているものについても、接合がなく素材からの両側縁への加工が認められる場合は1点として認定している。剥離後に加工が認められないものは調整剥片、そこに研磨面が認められるものについては刃部破片として捉えている。

#### (2) ナイフ形石器

鋭い素材縁辺による刃部と、刃漬し加工による側縁が認められる石器。日本の後期旧石器時代を代表する石器。茂呂型、杉久保型、国府型などの型式名があり形態は多様である。石刃、縦長剥片を素材とし、細長い形状を示すものが多い。

#### (3) 剥片尖頭器

縦長剥片を素材として、尖った先端と左右基部を挟りこむ加工により基部が作りだされている石器。九州地方に分布する石器で、近隣地域での出土例がないことから、剥片尖頭器ではなく基部加工のナイフ形石器とする考え方もできる。しかし、共存するナイフ形石器や台形石器に九州地方の石器と共通する特徴が認められることから、剥片尖頭器として認識すべきとの判断に至った。

#### (4) 台形石器

ナイフ形石器の範疇に含まれる石器の中で、長軸に対して刃部が直交に近い角度を持つ石器。特徴的に存在しているため、器種名を別にすることとした。従来「台形縁石器」と呼称されていた石器のうち、2側縁に加工を施すことにより、基部を作出している石器はここに含まれる<sup>(21)</sup>。

#### (5) 槍先形尖頭器

主として平坦な加工により先端および、周縁が作り出されている石器。柳葉形、木葉形、広葉形をしているものが多い。加工は先端部のみではなく、器体全体に及ぶ。平坦な剥離により面的に加工されるものと、プランティングにより周縁が加工されるものがある。

#### (6) 石刃

目的をもった技法により連続して剥離された両側縁が平行する縦に長い石器。平面形は似ていても偶発的に剥離されたものや、剥離に連続性が認められないものは縦長剥片としこれと区別する。また、組成表中の石刃には両付き剥片も含まれカウントされている。

#### (7) 貝殻状刃器

鋭い縁辺と切り立った側縁を持つ石器。「台形縁石器」と呼称されている石器の一部<sup>(22)</sup>。明瞭な加工は少なく、数回の剥離、折れ面、切断面、打面、素材末端などのきりたった面で1以上の側縁が形成される。2次加工のある剥片との区別が難しいが、長幅比が1:1に近く平面形が台形もしくは円形を呈しており、かつ刃部に使用痕と思われる微細剥離が認められるものをこれにした。

#### (8) 搔器

連続する加工により、厚い刃部が作り出されている石器。平面形は円形、拇指状を呈するものが多い。目安として刃部背面と腹面の角度が45度以上のものを搔器、以下のものを削器とし分別することとする。

#### (9) 搔器状石器

加工によって比較的急角度の刃部が作り出されているもので、平面形が円形もしくは台形を呈する。従

米「台形椽石器」と呼ばれていたものの中で、連続する加工による刃部が認められるものをさす<sup>(註3)</sup>。「ウワダイラ型台形石器」(白石1978)、「立野ヶ原型ナイフ形石器」(麻柄1986)と呼ばれていたもの多くがこれに属する。

⑩ 削器

連続する加工による刃部を持つ石器。形態や加工は様々である。

⑪ 抉入削器

削器のうち刃部がノッチ状になるものをさす。

⑫ 鋸歯縁状削器

連続する強い加工や平坦な加工により、鋸歯縁状の刃部が作り出されている石器。複数のノッチ部によるベックと呼ばれている石器などもここに含む。

⑬ 厚刃攪器

打面や折れ面などの切り立った縁辺から加工を施し、90度に近い角度の刃部が作り出されているもの。

⑭ 角錐状石器

断面形が三角形を呈し、素材の腹面側から平坦な加工が施され、背面中央に1条の稜が作り出されている石器。

⑮ 細石刃

細石核から連続的に剥離された小形の石刃。石器自体にはほとんど加工が施されないが、組み合わせ道具として用いられたと考えられている。

⑯ 細石核

細石刃が剥離された石核。石核調整が顕著で規格的な形状を示す。

⑰ 彫器

極状剥離によって作り出された彫刻刀面を持つ石器。極状剥離を施すための部位の設定と打面作出の特徴により、型式分類を行うことができる。

⑱ 削片

極状剥離によって剥がされた削片。

⑲ 挿錐器

2側縁もしくは1側縁の加工により錐状の先端部が作り出されている石器。定形的なものは少ない。

㉑ 楔形石器

相対する2端に反対向からの剥離が認められる石器。

㉒ 2次加工のある削片

器種としての認定ができなかったが、2次加工が認められる削片。

㉓ 微細剥離のある削片

使用痕の可能性を持つ微細な剥離が見られる削片。

㉔ 剥片

石核などから打ち剥がされた石片。

(註1) 佐藤宏之の分類では台形椽石器のI-a-2類およびI-b-3類の一部がこれにあたる(佐藤1988)。

(註2) 佐藤宏之の分類では台形椽石器のI-a-1類およびI-b-1、I-b-2類がこれにあたる(佐藤1988)。

(註3) 佐藤宏之の分類では台形椽石器の田類がこれにあたる(佐藤1988)。

## 04 剥片(チップ)

剥片剥離や加工時に出る非目的な細かい石屑。剥片との厳密な区別が難しいために、本報告では約1cmの長さを基準とし、それより小さいものを剥片とした。

## 05 石核

剥片を剥くための母体、または剥いだあとの石塊。

## 06 礫器

礫を素材とし、粗い加工によって刃部が作り出されている石器。チョッパー、チョッピングツールが該当する。

## 07 敲石

敲打痕が認められる石器。ハンマー。

## 08 磨石

磨面のある石器。

## 09 砥石

砥ぎ面のある石器。斧形石器の研磨が主な用途と思われる。



第5図 石器分類の概念図

## 第2章 裏ノ山遺跡

### 第1節 遺跡と調査の概要

#### 1 遺跡の概要

裏ノ山遺跡は、長野県上水内郡信濃町大字柏原字裏ノ山525-1番地他に所在する。本遺跡は野尻湖の南西部に広がる丘陵地帯に位置する伊勢見山から南に向かう尾根上に位置する。野尻湖南岸までの距離は約1.5kmほどである。遺跡の水は鳥居川に流れ込むため、千曲川水系となっており、関川水系の野尻湖とは異なる。標高は708~714mとなっている。

遺跡の北には標高759mの伊勢見山があり、山頂付近に伊勢見山遺跡が存在する。西から南には低地が広がっており東裏遺跡が存在する。この低地との比高差は約45mで、水を得る為にはこの比高を下らなければならない。調査区は尾根上の平坦面の大部分が含まれているため、遺跡範囲の大半は調査区内にあると思われる。

遺跡を東に下ると旧石器時代には湿地および池であった針ノ木の低地が広がっており、その先には大平B遺跡を見わたすこともできる。

調査区は戦後に開墾された畑地となっており、調査直前まで耕作が行われていた。遺跡から旧石器時代遺物のほかに縄文時代の遺物が若干検出されている。

#### 2 調査の概要

##### (1) 調査範囲と調査方法 (第6図)

未周知の遺跡だったが地形条件が良かったため、平成5年度に重機によるトレンチを入れたところ、ローム層中より遺物が検出されたため、本格的な調査を行うこととなった。

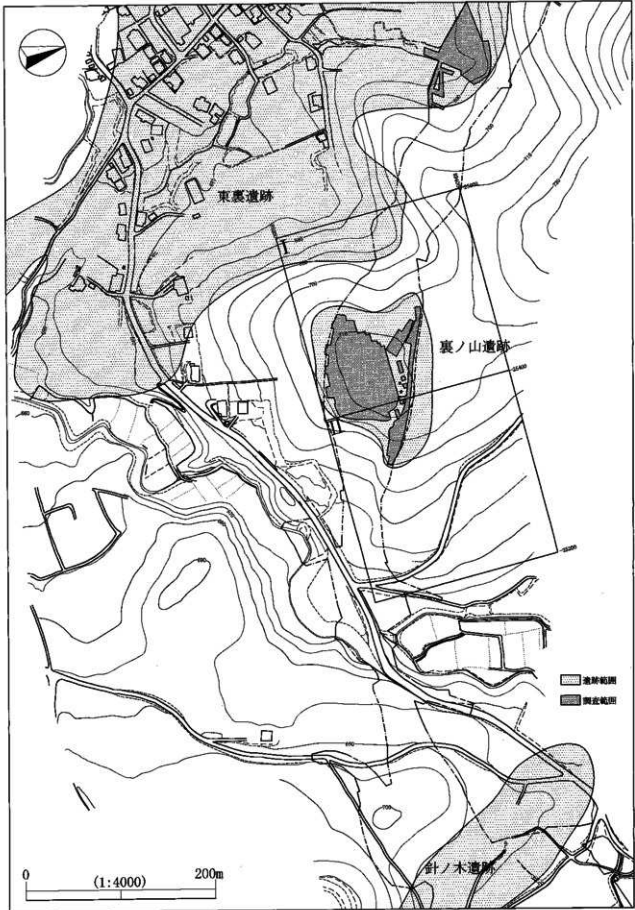
本調査は平成6年に行われた。まず、尾根上の平坦面全面を重機によりローム層(IV層)上面までを慎重に掘り下げた。次に8mグリッド内にある16の2mグリッドのうち、一番北側で西から2番目のグリッドを原則としてテストピットを設定し、人力によりVII層まで遺物の検出を行い、遺物が検出された周囲を随時拡張し、最終的には第6図の調査範囲となった。

調査前の予想では旧石器時代の小規模な遺跡と予想されていたが、多くのテストピットから遺物が検出され、旧石器時代遺跡としては大規模な調査となった。

グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様に従い設定した。杭打ち測量、遺物取り上げは(株)こうそくに委託して単点測量を行った。

##### (2) 調査経過 (調査日誌抄)

平成6年度	5月13日	尾根奥(I-O-R、II-K)掘り下げ開始	
4月5日	除雪開始	6月9日	尾根頂上部III層まで掘り下げ
4月18日	作業開始 表土剥ぎ 杭打ち 試掘開始	6月22日	尾根部分IV層上面まで掘り下げ
4月22日	田層より手掘りによる掘り下げ開始	6月23日	東端部まで拡張
5月11日	尾根先端部(I-R・W・X)掘り下げ開始	6月30日	ラジコンヘリによる空撮 高所作業車から全体写真



第6図 裏ノ山遺跡の調査範囲と地形

## 第2章 裏ノ山遺跡

撮影	10月6日	杖上の柱状図作成開始	
7月4日	北側幅杖浴いを迂回道路設置のため掘り下げ開始	10月28日	高所作業車による全体写真撮影 東側幅杖IV、V層掘り下げ
7月8日	調査範囲東端部よりIV層掘り下げ開始		
7月19日	北側幅杖浴い土層図作成	11月2日	V層面出土状況の航空写真撮影
7月20日	東に延びるやせ尾根砥石出土のため表土剥ぎ	11月4日	南側道路下表土剥ぎ後掘り下げ
9月2日	IV層面出土状況空測	11月8日	杖部分掘り下げ
9月8日	V層掘り下げ開始	11月10日	コンク図作成
10月3日	針ノ木遺跡の調査が開始となり寺島調査研究員兼行	11月11日	作業終了

調査

### (3) 調査結果の概要

裏ノ山I石器文化と裏ノ山II石器文化が検出された。

V層に生活面を持つと思われる裏ノ山I石器文化からは、石器16点、礫1点が出土した。斧形石器、台形石器、砥石等が組成するが、ブロックは1つのみと小規模である。

IV層に生活面を持つと思われる裏ノ山II石器文化からは、27のブロックが検出され、石器7631点、礫280点が出土した。2割縁に加工が施された大小のナイフ形石器を特徴とする石器文化で、ナイフ形石器の総数は72点となっている。また、加工具も多く播器115点、削器166点となっている。石材は黒曜石が主体で約半数を占めるが、無斑品質安山岩とチャートも多く見られる。

### (4) 地形と層序 (第7・8図)

丘陵頂部周辺に立地しているため、頂部付近では堆積が薄く、標高が下がるにしたがって、各層の堆積が厚くなる傾向が見られる。

I層は表土で10cm～20cmの厚みを持っている。耕作土が主体である。

II層はI層とほとんど色調の違いがなく、分層が困難であった。特に頂上付近(第8図柱状図5～7・17・18付近)では純層として確認できなかった。II層に対比される部分の多くはI層に含まれていると考えられる。

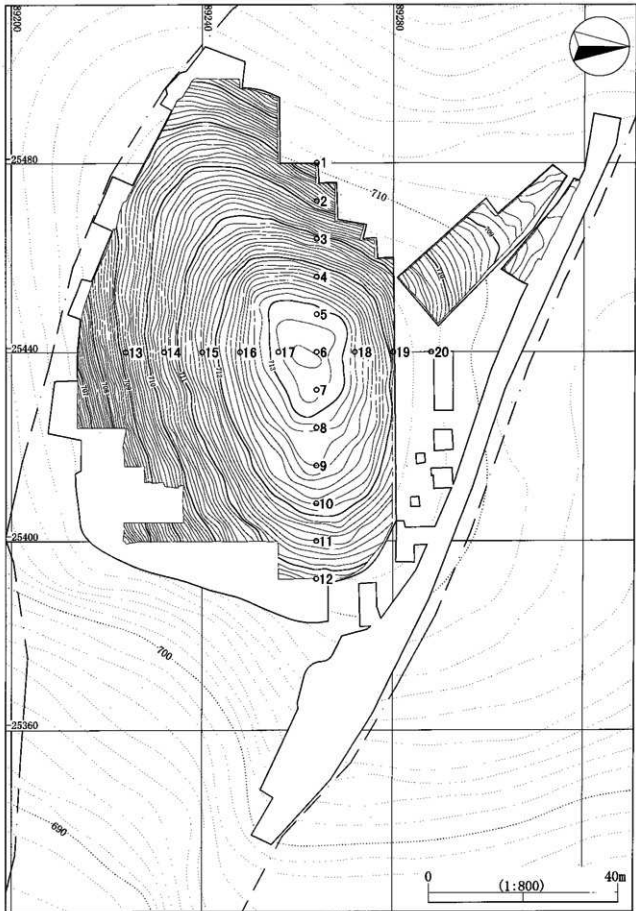
III層は20cm前後の厚みを持つ。頂上付近ではI層～III層が混在しており分層が難しくなっている。また、ロームと黒色土が混在している部分をIII層と総称しているため、堆積が薄い場所では、IV層上部に対比される部分もIII層となっていると思われる。

IV層は20cm前後の厚みを持つ。堆積状況がよい場所では、下半部に赤褐色のスコーラが見られ上下の分層が可能となっている。頂上付近では堆積が不安定で、III層、V層がブロック状に混入する状況が見られる。

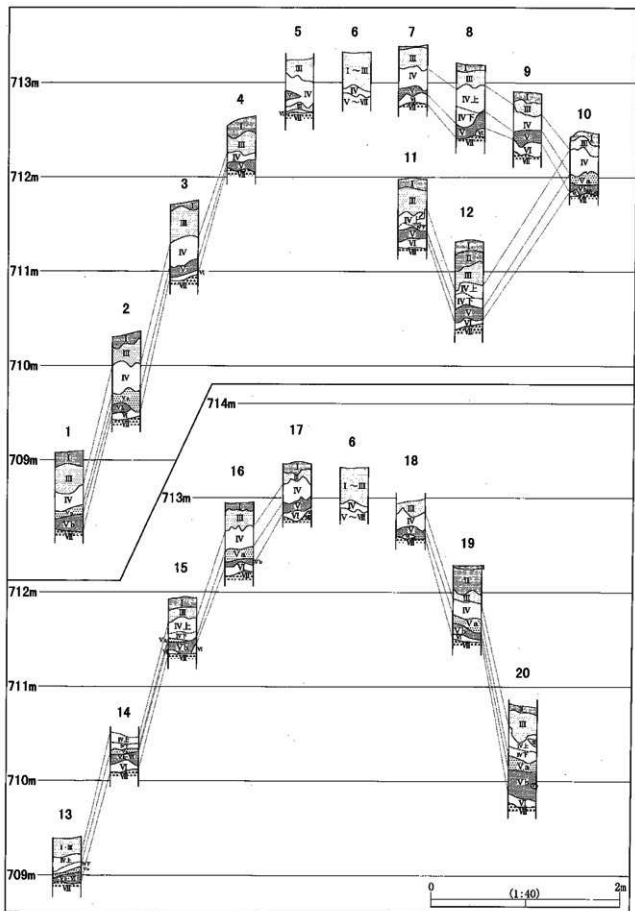
V層は15～20cm程度の厚みを持つ。a・bに分層できる場所は少なく、大部分で一括してV層となっている。また、Vc層は確認できなかったが、V層下部～VI層に対比されると思われる。堆積が薄い頂上付近ではVI層と混在しており、VII層がブロック状に入り込む状況も見られた。ATはVa層上部または、V層上部に含まれていると思われる。

VI層は10cm前後の厚みを持つが、堆積の薄い場所ではV層下部に含まれていると思われる。

VII層以下は中部野尻ローム層となるが、遺物は検出されなかった。



第7図 裏ノ山遺跡の微地形



第8図 裏ノ山遺跡の層序



## 第2節 裏ノ山I石器文化

## 1 裏ノ山I石器文化の概要

## (1) 遺物の出土層位 (第3表)

遺物総数が17点でIV層から2点、V層から15点の遺物が出土している。全体的に堆積が薄く不安定な層序となっているが、V層に生活面があると考えられる。

## (2) 器種組成 (第4表)

石器16点、礫1点が出土した。器種組成は斧形石器2点、台形石器2点、2次加工のある剥片1点、剥片6点、石核1点、砥石1点、敲石1点、斧形石器破片1点<sup>(注1)</sup>である。

## (3) 石材組成 (第5表)

黒曜石、凝灰岩が多い。重量比で無斑品質安山岩、砂岩の比率が高いのは、敲石、砥石の礫石器が影響している。

## 2 遺構

## (1) 遺物の分布 (図版1)

ブロックは1ヶ所のみで、調査区東端の尾根先端の斜面落ち際に位置している。ブロック外遺物には裏ノ山II石器文化の遺物分布域と重なっているものも見られる。

遺構	IV	V	合計	比率
BL1	2	12	14	82.4%
外		3	3	17.6%
合計	2	15	17	
比率	11.8%	88.2%		

第3表 裏ノ山I石器文化ブロック別出土層位組成

遺構・石材	斧形石器	台形石器	2次加工のある剥片	器種別のある剥片	剥片	石核	砥石	敲石	斧形石器破片	礫	合計	比率
BL1	1	1	1	1	6	1	1	1		1	14	82.4%
外	1	1							1		3	17.6%
合計	2	2	1	1	6	1	1	1	1	1	17	
比率	11.8%	11.8%	5.9%	5.9%	35.3%	5.9%	5.9%	5.9%	5.9%	5.9%		
黒曜石		1	1	1	2						5	29.4%
無斑品質安山岩					1						1	5.9%
玉髄		1									1	5.9%
凝灰質頁岩	1										1	5.9%
凝灰岩	1				3				1		5	29.4%
砂岩							1	1			2	11.8%
安山岩						1				1	2	11.8%
合計	2	2	1	1	6	1	1	1	1	1	17	

第4表 裏ノ山I石器文化器種組成

	遺構	石材組成									合計	比率
		無斑品質安山岩	安山岩	黒曜石	玉髄	凝灰質頁岩	凝灰岩	砂岩	合計	比率		
数量	BL1	1	2	5		1		3		2	14	82.4%
	外				1			2			3	17.6%
	合計	1	2	5	1	1		5		2	17	
	比率	5.9%	11.8%	29.4%	5.9%	5.9%		29.4%	11.8%			
石器重量	BL1	71.57	549.69	43.85		128.3		69.27		2499.35	3362.03	97.8%
	外				13.12			63			76.12	2.2%
	合計	71.57	549.69	43.85	13.12	128.3		132.27		2499.35	3438.15	
	比率	2.1%	16.0%	1.3%	0.4%	3.7%		3.8%		72.7%		
重量	BL1		2990								2990	100.0%

第5表 裏ノ山I石器文化石材組成

## (2) ブロック

### 1. 第1号ブロック (図版2)

II Q6グリッドを中心として、北西-南東方向に約40m、北東-南西方向に約16mの楕円の広がりを持つ。遺物が散漫で、数が少ない。

器種組成は斧形石器1点、台形石器1点、2次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片1点、剥片6点、石核1点、礫石1点、敲石1点、礫1点となっている。砕片がなく、剥片数も少ないことから石器製作の痕跡はないと判断される。遺物総数が14点しかないが、石材は6種もあり、特定石材に偏らないといえよう。石材組成は無斑品質安山岩1点、安山岩2点、黒曜石5点、凝灰質頁岩1点、凝灰岩3点、砂岩2点となっている。

接合した遺物はない。

## 3 遺物

### (1) 斧形石器 (図版3・報告番号1～2)

1は背面のほぼ全体が礫面となる凝灰質頁岩の横長の剥片を素材としている。平坦な剥離により左右側縁の表裏に加工が施されているが、側面から見る稜線は直線ではない。刃部を中心に研磨が施されており、刃部縁付近は研磨に覆われている。風化が進んでいるため、研磨方向を読み取ることができず、背面の礫面と研磨面との境界も不明瞭で漸移的となっている。基部周辺の加工頻度は低い。平面形状は最大幅が刃部側にやや偏っており、刃部は緩い弧状を呈している。刃部加工は左側縁にまで及んでいて、鋭利な刃が左側縁下部にも続いている。側面形状は凹凸が目立つものの表裏対称に近い。

2は節理に沿って割れた凝灰岩を素材としている。石材は蛇紋岩にも似ており、中間的な特徴を持っている。左側縁には粗い加工が見られるが、右側縁と基部は折れ面となっている。加工頻度が低いため、未製品と考えられる。

### (2) 台形石器 (図版4・報告番号3～4)

3は黒曜石の縦長剥片を素材としている。素材を縦に用いて打面側を基部としている。その基部を中心に表裏に平坦な剥離を施して打面を削除している。先端はなく平たくなっている。

4は玉髓の貝殻状剥片を素材としている。素材を横に用いて、左右側縁の表裏に平坦な剥離による加工が施されている。加工頻度が高く、打面および末端は切除されており、平坦な剥離の他にブランディング状の剥離や細かい弱剥離も見られる。平面形は最大幅が刃部付近となるバチ形を呈している。これらの状況より「日向林型台形石器」として判断できる。

### (3) 礫石 (図版4・報告番号5)

5は砂岩製で風化のためか、ひび割れが多く見られ遺存度は50%程度と思われる。研磨面は表面と側面に見られる。表面の研磨面は浅い溝状を呈しているが、その周囲にも及んでいる。研磨方向は一方向と思われる。側面の研磨面は幅も狭く局部的である。裏面は凹凸が目立つ。研磨面以外への加工痕は認められない。

### (4) 敲石 (図版4・報告番号6)

6は砂岩製の大型の敲石である。やや扁平な棒状を呈しており、敲打痕は下端部および側縁に部分的に見られる。

(註1) 斧形石器に接合している。

## 4 母岩別資料と接合資料

## (1) 母岩別資料 (第10~11表)

石器総数16点に対して母岩数が9となっていることから、ほとんどの石器が単独個体といえる。母岩判別作業は石器文化を分けず裏ノ山遺跡全体で行ったため母岩番号は連番とはならない。

## (2) 接合資料

斧形石器1点の接合が見られるのみである(報告番号2)。

## 5 剥片剥離技術

遺物数が少なく、遺跡内に剥片剥離の痕跡がほとんど見られないため、直接的に剥片剥離技術を読み取ることではできない。

## 第3節 裏ノ山II石器文化

## 1 裏ノ山II石器文化の概要

## (1) 遺物の出土層位 (第6表)

I層~Vb層で遺物が出土している。主体となるのがIV層で、約半分にあたる遺物が出土している。II層は耕作により攪乱されているため、ほとんど遺物が検出されていない。I層に比較的遺物が多いのは耕作の影響と考えられる。V層からI割強の遺物が検出されていることを考慮すると、生活面はIV層の下

遺構	I	II	III	IV	V	Vb	攪乱	攪乱I ~III	攪乱IV ~VI	不明	風倒木 I~III	風倒木 IV~VI	合計	比率
BL1	7		21	75	9			1					113	1.4%
BL2	47		136	228	35		3	1			5	10	465	5.9%
BL3	10		49	127	39								225	2.8%
BL4	35		77	187	29	5	2				1	3	339	4.3%
BL5	60		175	255	56	2	25				1	2	576	7.3%
BL6	8		3	7	2								20	0.3%
BL7	15		2	9	2		2	1				1	32	0.4%
BL8	155		135	424	104	10					8	2	838	10.6%
BL9	91		94	166	85	5	4				8	5	458	5.8%
BL10	8		23	34	10			1					76	1.0%
BL11	29		33	90	16	6	1				1		176	2.2%
BL12	26		70	103	63	5	1						268	3.4%
BL13	109		61	385	86	6	2		1		5		655	8.3%
BL14	75		204	468	169	8	3	3	4				934	11.8%
BL15	51		165	305	39	7	17	45	4		3	1	637	8.1%
BL16	17		12	20	1								50	0.6%
BL17	60		21	31									112	1.4%
BL18	48		86	640	33	7	1	3	1			4	823	10.4%
BL19	37		68	153	28	6	8	100	102				502	6.3%
BL20	22		47	144	37	2	1	37	44				334	4.2%
BL21	18		5	2	3			1					29	0.4%
BL22	24		20	52	15	1	1					2	115	1.5%
BL23	5		6	3	1								15	0.2%
BL24	12		14	36	12	2							76	1.0%
BL25	2		10	3									15	0.2%
BL26			4	5						8			17	0.2%
BL27		1	4	5	1								11	0.1%
合計	971	1	1545	3957	875	72	74	190	156	8	32	30	7911	
比率	12.3%	0.0%	19.5%	50.0%	11.1%	0.9%	0.9%	2.4%	2.0%	0.1%	0.4%	0.4%		

第6表 裏ノ山II石器文化ブロック別出土層位組成

半部にあると考えられようか。

## (2) 器種組成 (第7・8表)

石器7631点、礫280点が検出された。72点のナイフ形石器、115点の播器、166点の削器を特徴とする器種組成といえよう。槍先形尖頭器は存在しない。

遺構	ナイフ形石器	台形石器	石刀	貝殻状刃器	播器	播器刃部剥片	削器	彫器	削片	鎌器	楔形石器	2次加工のあまる削片	2次加工のあまる削片	2次加工のあまる削片	剥片	砕片	石核	礫石	磨石	石石	凹石	礫器	原石	礫	合計	比率		
BL1				1	4	1	1						3	1	67	11	9						1	14	113	1.4%		
BL2					13		8						5	8	10	265	97	41	1				1	15	465	5.9%		
BL3			1				7							1	7	143	32	17	2						15	225	2.8%	
BL4		2	2	2	1		2				1	1		12	14	203	59	14	3	2	1			1	19	339	4.3%	
BL5	1	2	1	2			6		1	1	4			3	16	377	112	40						1	9	576	7.3%	
BL6	2						2						1	1	3	9	1	1								20	0.3%	
BL7	2	4	2	1	1									2	14	3	2			1	1					32	0.4%	
BL8	5		1	20		12	1						8	7	13	490	212	48					2	17	838	10.6%		
BL9	8		4	1	1	6	5						5	14	272	63	26	2	1						45	458	5.8%	
BL10		1					1							4	39	11	7	1				1			12	76	1.0%	
BL11	3	1	2	1	2	2	2						5	3	4	92	43	8	1						9	176	2.2%	
BL12	3		2	1	3		8	1					2	4	15	150	45	13							21	268	3.4%	
BL13	4			6	7	15							3	14	27	226	323	21	1				2	1	7	655	8.3%	
HL14	10	1	3	9	17	1	25		1		2			16	29	478	256	40	8				2	3	33	934	11.8%	
BL15	9	1	1	7	17	5	23				2			22	43	233	242	20								3	637	8.1%
BL16	1			1	1		2							8	17	14	1									5	50	0.6%
BL17	2			2	1		2							1	10	43	46	3								3	112	1.4%
BL18	9		1	9	9	1	15				1			24	36	242	460	5	1						10	823	10.4%	
BL19	5	1	1	4	8	2	16	1			1			11	35	142	262	7							21	582	7.5%	
BL20	2	1	1		6		5					1		2	14	164	103	22	4	1	2				6	334	4.2%	
BL21	1	1	1	1	1		1							2	16	7									1	1	29	0.4%
BL22	3	1	3	2	2		2					3	1	3	3	64	17	6		1				2	2	115	1.5%	
BL23							1	1						3	5	2										2	15	0.2%
BL24	1						3	1				2		1	2	44	9	6	1							6	76	1.0%
BL25							1					1		2	1	11										1	15	0.2%
BL26							1							1	1	8						1				3	17	0.2%
BL27	1				1									3	3	1										5	11	0.1%
合計	72	15	23	50	115	10	166	10	2	5	44	1	144	316	3817	2429	360	25	5	5	3	4	10	280	7911			
比率	0.9%	0.2%	0.3%	0.6%	1.5%	0.1%	2.1%	0.1%	0.0%	0.1%	0.6%	0.0%	1.8%	4.0%	48.3%	30.7%	4.6%	0.3%	0.1%	0.1%	0.0%	0.1%	0.1%	1.3%				

第7表 表ノ山II石器文化ブロック別器種組成

遺構	ナイフ形石器	台形石器	石刀	貝殻状刃器	播器	播器刃部剥片	削器	彫器	削片	鎌器	楔形石器	2次加工のあまる削片	2次加工のあまる削片	2次加工のあまる削片	剥片	砕片	石核	礫石	磨石	石石	凹石	礫器	原石	礫	合計	比率		
黒曜石		49	10	2	48	71	9	105	2		3	3		104	243	924	1544	89								3197	40.4%	
黒曜品質火山岩		3	1	7		5	1	17	1					21	12	5	1210	441	71				1			1796	22.7%	
珪質頁岩		5	2	7		1	5	2	2					4	1	9	82	3								123	1.6%	
珪質凝灰岩							1										64	2	1					3	2	73	0.9%	
玉髄			1	1												2	3	2								9	0.1%	
凝灰質頁岩		4		2	1			10	4					4	6	19	244	31								316	4.0%	
凝灰岩		1		1			4							2	3	6	152	14	10	2			1		6	202	2.6%	
緑色凝灰岩															1	26	1										28	0.4%
チャート		7	1	3	3	36		22	1		2	10	1	17	41	1143	344	158						5	5	1797	22.7%	
砂岩																5		1	14	1			3		27	51	0.6%	
石英																	5		1							1	6.0%	
粘板岩																3										3	0.0%	
鏡石英						2		1							7	12	2						1			25	0.3%	
流紋岩		1														1										2	0.0%	
安山岩		1													14	4		8	4	5	3				237	276	3.5%	
頁岩		1					1								1											3	0.0%	
輝緑岩															1											1	0.0%	
珪化木															1											1	0.0%	
不明																3	1								3	7	0.1%	
合計	72	15	23	50	115	10	166	10	2	5	44	1	144	316	3817	2429	360	25	5	5	3	4	10	280	7911			
比率	0.9%	0.2%	0.3%	0.6%	1.5%	0.1%	2.1%	0.1%	0.0%	0.1%	0.6%	0.0%	1.8%	4.0%	48.3%	30.7%	4.6%	0.3%	0.1%	0.1%	0.0%	0.1%	0.1%	1.3%				

第8表 表ノ山II石器文化石材別器種組成



遺物数は多く、剥片、碎片、石核の出土数から石器製作が行われていたことが考えられる。

### (3) 石材組成 (第9表)

数量比では黒曜石が全体の約40%となっているが、重量比では約6%と低い割合となっている。礫石器の素材となる安山岩や砂岩の数量は少ないが、個々が重いため重量比では高い割合となっている。剥片石器では黒曜石、無斑品質安山岩、チャートを主体とする石器文化として評価できよう。

## 2 遺構

### (1) 遺物の分布 (図版5~10)

遺物は丘陵頂部を中心に分布している。図版5に石器と礫全点の分布図を、図版6にそれをブロック分けした図を示した。ブロック分けは平面的な遺物のまとまりに、石材分布を考慮して分けてあるが、それ以上の意味はない。また、すべての遺物がいずれかのブロックに属する様にした。

環状ブロック群の可能性も考えられるが、次の2つの理由で環状ブロック群とすることを避けた。第1に現時点で類似するナイフ形石器を伴う石器文化で環状ブロックが認められていない。第2に丘陵頂部の平坦面が円形を呈しており、ここに複数のブロックを配置すると自然に外形が円形を呈してしまう。

礫の分布を見ると (図版7下)、礫群のような集中は見られず、各ブロックに分散して存在する。石材は在地の多孔質の安山岩が主体だが、砂岩も多く見られることから、敲石や台石として、あるいは配石に用いるために持ち込まれたものと考えられる。

図版8・9は石材別の分布と接合関係を示している。また、図版7上は石器全点と全石材の接合を示している。各石材により分布がことなることが読み取れる。石材分布および接合資料の詳しい記載は各ブロックの部分で行う。

遺跡内には耕作および風倒木痕により層序が擾乱されている部分がある。これらと重なる場所は遺物が2次的に動いていることが考えられる。図版10上にその分布を示した。しかし、これらの擾乱による遺物の移動は小さいと思われる。

### (2) ブロック

#### 1. 第1号ブロック (図版11)

I WM01グリッドを中心として、北-南約12m、東-西約8mの楕円形の広がりを持つ。調査区西端の斜面落ち際に位置し、東に第2号ブロックがある。

石器99点、礫14点が出土した。出土層位はI層~V層でIV層から最も多く遺物が出土している。器種組成は貝殻状刃器1点、搔器5点、削器1点、2次加工のある剥片3点、微細剥離のある剥片1点、剥片67点、碎片11点、石核9点、礫器1点で、ナイフ形石器は組成しない。石材はチャートが大半を占め、黒曜石が存在しない。

第2号ブロックと1点、第8号ブロックと3点の接合資料を共有している。

#### 2. 第2号ブロック (図版11)

I SA16グリッドを中心として、北-南約10m、東-西約7mの楕円形の広がりを持つ。西に第1号ブロック、北東に第7号ブロック、東に第4号ブロック、南東に第3号ブロックが位置している。

石器450点、礫15点が出土した。出土層位はI層~V層でIV層からもっとも多く遺物が出土している。器種組成は搔器13点、削器8点、楔形石器5点、2次加工のある剥片8点、微細剥離のある剥片10点、剥片265点、碎片97点、石核41点、敲石1点、台石1点、原石1点で、ナイフ形石器は組成しない。石材はチャートが302点と3分の2近くとなっているが、無斑品質安山岩も137点と多く、黒曜石は1点しかない。

第1号ブロックと1点、第3号ブロックと1点、第8号ブロックと4点、第13号ブロックと1点の接合

資料を共有している。

### 3. 第3号ブロック (図版12)

I XE08グリッドを中心として、北-南約8m、東-西約5mの楕円形の広がりを持つ。調査区南端の斜面落ち際に位置しており、北西に第2号ブロック、北に第4号ブロック、北東に第5号ブロックが位置している。

石器210点、礫15点が出土した。出土層位はI層～V層でIV層からもっとも多く遺物が出土している。器種組成は石刃1点、削器7点、2次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片7点、剥片143点、砕片32点、石核17点、敲石2点で、ナイフ形石器と搔器は組成しない。石材はチャートが大半を占めている。

第2号ブロック、第4号ブロック、第16号ブロックとそれぞれ1点づつの接合資料を共有している。

### 4. 第4号ブロック (図版13)

I SK20グリッドを中心として直径約20mの円形の広がりを持つ。非常に広い範囲に及んでいるが、遺物が集中するのは中央付近の直径10m程度の範囲で外側ほど散漫な分布となっている。周囲を第1～3、5～8、10、15号ブロックに囲まれており、多くのブロックと隣接している。

石器320点、礫19点が出土した。出土層位はI層～V層でIV層から最も多く遺物が出土している。器種組成は台形石器2点、石刃2点、貝殻状刃器2点、搔器1点、削器2点、揉錐器1点、楔形石器1点、2次加工のある剥片12点、微細剥離のある剥片14点、剥片203点、砕片59点、石核14点、敲石3点、磨石2点、台石1点、礫器1点となっている。石材はチャートが97点で最も多いが、黒曜石、無班品質安山岩、凝灰岩も50点以上あり、多様となっている。

第3号ブロックと1点、第5号ブロックと2点、第18号ブロックと1点の接合資料を共有している。

### 5. 第5号ブロック (図版14)

I XO05グリッドを中心として北-南約16m、東-西約9mの楕円形の広がりを持つ。調査区南端の斜面落ち際に位置しており、多くの遺物は北半分に集中している。南西に第3号ブロック、北西に第4号ブロック、北に第6号ブロック、北東に第15号ブロック、東に第16号ブロックが位置している。

石器567点、礫9点が出土した。出土層位はI層～V層でIV層から最も多く遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点、台形石器2点、石刃1点、貝殻状刃器2点、削器6点、削片1点、揉錐器1点、楔形石器4点、2次加工のある剥片3点、微細剥離のある剥片16点、剥片377点、砕片112点、石核40点、原石1点で、搔器が組成しない。石材はチャートが大半を占めている。

第4号ブロックと2点、第19号ブロックと1点、第25号ブロックと1点の接合資料を共有している。

### 6. 第6号ブロック (図版13)

I SO20グリッド付近に直径5m程度の円形の広がりを持つ。第4号ブロックと第15号ブロックの境界付近のやや遺物密度が高い部分が第6号ブロックとなっている。遺物分布は散漫で数が少ない。

石器20点が出土した。出土層位はI層～V層でI層から最も多く遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器2点、削器2点、楔形石器1点、2次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片3点、剥片9点、砕片1点、石核1点で搔器が組成しない。石器製作の痕跡がほとんどなく、製品の率が高いといえよう。石材は凝灰質頁岩が最も多く、黒曜石の割合も高い。

接合資料の共有はない。

### 7. 第7号ブロック (図版13)

I SF10グリッドを中心として直径約12mの円形の広がりを持つ。調査区北西端の斜面落ち際に位置しており、遺物密度は低く散漫である。南西に第2号ブロック、南に第4号ブロック、東に第8号ブロックが位置している。

石器32点が出土した。出土層位はI層～V層でI層から最も多く遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器2点、台形石器4点、石刃2点、貝殻状刃器1点、搔器1点、微細剥離のある剥片2点、剥片14点、砕片3点、石核2点、台石1点となっている。台形石器4点に特徴があり、製品率が高く石器製作の痕跡があまり見られないと評価できようか。石材は無斑晶質安山岩が最も多いが、黒曜石、チャートの割合も高い。

第8号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 8. 第8号ブロック (図版14)

I SM10グリッドを中心として直径約15mの円形の広がりを持つ。南に第4号ブロック、西に第7号ブロック、北東に第9号ブロック、東に第11号ブロック、南東に第10号ブロックが位置している。遺物数が多く密度も高い。

石器821点、礫17点が出土した。出土層位はI層～V層でIV層から最も多く遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器5点、貝殻状刃器1点、搔器20点、削器12点、彫器1点、楔形石器8点、2次加工のある剥片7点、微細剥離のある剥片13点、剥片490点、砕片212点、石核48点、磨石1点、凹石1点、原石2点となっている。ナイフ形石器は大形で先端が尖るものと、小形で先端が尖らないものが見られ、搔器は円形で甲高なものが見られる。剥片、砕片、石核の数も多く、石器製作の痕跡が残されている。石材はチャートが約半数で無斑晶質安山岩の比率も高い。

第1号ブロックと3点、第2号ブロックと4点、第7号ブロックと1点、第9号ブロックと1点、第10号ブロックと1点、第11号ブロックと1点、第12号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 9. 第9号ブロック (図版15)

I ST06グリッドを中心として北-南約15m、東-西約24mの楕円形の広がりを持つ。南西に第8号ブロック、南に第11・13号ブロック、南東に第14号ブロックが位置している。礫が多い部分が東西2ヶ所に存在する。

石器413点、礫45点が出土した。礫の数量は最も多くなっている。出土層位はI層～V層でIV層から最も多く遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器8点、石刃4点、貝殻状刃器1点、搔器1点、削器6点、彫器5点、楔形石器5点、2次加工のある剥片5点、微細剥離のある剥片14点、剥片272点、砕片63点、石核26点、敲石2点、凹石1点となっている。ナイフ形石器と削器が多く、搔器が少ないといえよう。石材は無斑晶質安山岩が半数以上を占めている。

第8号ブロックと1点、第10号ブロックと1点、第11号ブロックと1点、第12号ブロックと1点、第13号ブロックと1点、第14号ブロックと2点、第15号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 10. 第10号ブロック (図版16)

I SP13グリッドを中心として直径約7mの円形の広がりを持つ。丘陵の頂部に位置しており、周囲を第4・8・9・11・12・15号ブロックに囲まれている。

石器64点、礫12点が出土した。出土層位はI層～V層でIV層から最も多く遺物が出土している。器種組成は台形石器1点、削器1点、微細剥離のある剥片4点、剥片39点、砕片11点、石核7点、敲石1点となっている。石材は黒曜石が最も多いが、無斑晶質安山岩、凝灰質頁岩、チャートも多く見られる。

第8号ブロックと1点、第9号ブロックと1点、第11号ブロックと2点、第12号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 11. 第11号ブロック (図版12)

I SR10グリッドを中心として直径約8mの円形の広がりを持つ。丘陵頂部に位置し周囲を第8～10・12・13号ブロックに囲まれている。



石器167点、礫9点が出土した。出土層位はI層～Vb層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器3点、台形石器1点、石刃2点、貝殻状刃器1点、搔器2点、削器2点、楔形石器5点、2次加工のある剥片3点、微細剥離のある剥片4点、剥片92点、砕片43点、石核8点、敲石1点となっている。石材は無斑品質安山岩が最も多いが、チャート、黒曜石、凝灰質頁岩も見られる。

第8号ブロックと1点、第9号ブロックと1点、第10号ブロックと2点、第12号ブロックと2点、第14号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 12. 第12号ブロック (図版17)

I TA14グリッドを中心として直径約10mの円形の広がりを持つ。丘陵頂部に位置し周囲を第10・11・13～15・19・20号ブロックに囲まれている。

石器247点、礫21点が出土した。出土層位はI層～Vb層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器3点、石刃2点、貝殻状刃器1点、搔器3点、削器8点、彫器1点、楔形石器2点、2次加工のある剥片4点、微細剥離のある剥片15点、剥片150点、砕片45点、石核13点となっている。石材は無斑品質安山岩と黒曜石が多用されている。

第8号ブロックと1点、第9号ブロックと1点、第10号ブロックと1点、第11号ブロックと2点、第14号ブロックと2点の接合資料を共有している。

#### 13. 第13号ブロック (図版18)

ITB10グリッドを中心として直径約8mの円形の広がりを持つ。丘陵頂部に位置し周囲を第9・11・12・14・20号ブロックに囲まれている。他のブロックと比べると範囲が狭い割に遺物密度が高くなっている。

石器648点、礫7点が出土した。出土層位はI層～Vb層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器4点、貝殻状刃器6点、搔器7点、削器15点、楔形石器3点、2次加工のある剥片14点、微細剥離のある剥片27点、剥片226点、砕片323点、石核21点、敲石1点、原石1点となっている。搔器、削器が多く組成し、剥片、砕片、石核が多く石器製作の痕跡が認められる。石材は黒曜石が7割近くを占めている。また、無斑品質安山岩も多く見られる。

第2号ブロックと1点、第9号ブロックと1点、第14号ブロックと1点、第15号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 14. 第14号ブロック (図版16)

ITH09グリッドを中心として北-南約11m、東-西約16mの楕円形の広がりを持つ。西に第13号ブロック、北西に第9号ブロック、北東に第23号ブロック、東に第24号ブロック、南東に第22号ブロック、南に第20号ブロックが位置している。遺物数が多く、南半分特に集中している。

石器901点、礫33点が出土し、遺物数が最も多いブロックとなった。出土層位はI層～Vb層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器10点、台形石器1点、石刃3点、貝殻状刃器9点、搔器18点、削器25点、剥片1点、楔形石器2点、2次加工のある剥片16点、微細剥離のある剥片29点、剥片478点、砕片256点、石核40点、敲石8点、礫器2点、原石3点となっている。ナイフ形石器、搔器、削器が多く組成し、剥片、砕片、石核が多く石器製作の痕跡が認められる。石材は無斑品質安山岩が半数弱を占め、黒曜石の利用も多い。

第9号ブロックと2点、第11号ブロックと1点、第12号ブロックと2点、第13号ブロックと1点、第20号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 15. 第15号ブロック (図版17)

IXS01グリッドを中心して北-南約16m、東-西約10mの楕円形の広がりを持つ。周囲を第5・6・

10~12・16・18~20号ブロックに囲まれている。遺物数が多く特に中央付近の遺物密度が高い。

石器624点、礫13点が出土した。出土層位はI層~Vb層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器9点、台形石器1点、貝殻状刃器7点、搔器22点、削器23点、揉錐器2点、2次加工のある剥片22点、微細剥離のある剥片43点、剥片233点、碎片242点、石核20点となっている。ナイフ形石器、搔器、削器が多く組成し、剥片、碎片、石核が多く石器製作の痕跡が認められる。石材は9割近くが黒曜石となっている。

第9号ブロックと1点、第13号ブロックと1点、第19号ブロックと1点、第21号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 16. 第16号ブロック (図版18)

I XT08グリッドを中心として直径約8mの円形の広がりを持つ。西に第5号ブロック、北に第15号ブロック、北東に第18号ブロック、南東に第17号ブロックが位置している。遺物が少なく散漫なブロックとなっている。

石器45点、礫5点が出土した。出土層位はI層~V層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点、貝殻状刃器1点、搔器1点、削器2点、微細剥離のある剥片8点、剥片17点、碎片14点、石核1点となっている。石材は黒曜石が8割以上を占めている。

第3号ブロックと1点の接合資料の共有がある。

#### 17. 第17号ブロック (図版19)

I YD10グリッドを中心として直径約16mの円形の広がりを持つ。調査区南端に位置し、北西に第16号ブロック、北に第18号ブロックが存在する。

石器109点、礫3点が出土した。出土層位はI層~IV層でI層から最も多く遺物が出土している。出土層位が浅いのは斜面の落ち際に位置している影響と思われる。器種組成はナイフ形石器2点、貝殻状刃器2点、削器2点、2次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片10点、剥片43点、碎片46点、石核3点となっている。搔器がないのが特徴といえよう。石材は黒曜石が9割近くを占めている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 18. 第18号ブロック (図版20)

I YD04グリッドを中心として北-南約11m、東-西約14mの楕円形の広がりを持つ。周囲を第15~17・19・21号ブロックに囲まれている。遺物数が多く密度が高い。

石器813点、礫10点が出土した。出土層位はI層~Vb層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器9点、石刃1点、貝殻状刃器9点、搔器10点、削器15点、揉錐器1点、2次加工のある剥片24点、微細剥離のある剥片36点、剥片242点、碎片460点、石核5点、敲石1点となっている。ナイフ形石器、搔器、削器が多く組成し、剥片、碎片、石核が多く石器製作の痕跡が認められる。石材は黒曜石が9割以上となっている。

第4号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 19. 第19号ブロック (図版21)

I TE20グリッドを中心として直径約10mの円形の広がりを持つ。周囲を第15・18・20~22号ブロックに囲まれている。

石器495点、礫7点が出土した。出土層位はI層~Vb層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器5点、台形石器1点、貝殻状刃器4点、搔器10点、削器16点、彫器1点、楔形石器1点、2次加工のある剥片11点、微細剥離のある剥片35点、剥片142点、碎片262点、石核7点となっている。ナイフ形石器、搔器、削器が多く組成し、剥片、碎片、石核が多く石器製作の痕跡が認められる。

石材は黒曜石が約9割となっている。

第5号ブロックと1点、第15号ブロックと1点、第20号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 20. 第20号ブロック (図版22)

I TE14グリッドを中心として北-南約9m、東-西約15mの楕円形の広がりを持つ。周囲を第12～15・19・22号ブロックに囲まれている。

石器328点、礫6点が出土した。出土層位はI層～Vb層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器2点、台形石器1点、石刃1点、搔器6点、削器5点、楔形石器1点、2次加工のある剥片2点、微細剝離のある剥片14点、剥片164点、砕片103点、石核22点、敲石4点、磨石1点、台石2点となっている。ナイフ形石器、搔器、削器が多く組成し、剥片、砕片、石核が多く石器製作の痕跡が認められる。石材は無斑晶質安山岩と黒曜石が半数近く用いられている。

第14号ブロックと1点、第19号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 21. 第21号ブロック (図版23)

I YL02グリッドを中心として直径約14mの円形の広がりを持つ。調査区南東端の斜面落ち際に位置しており、南西に第17号ブロック、西に第18号ブロック、北西に第19号ブロック、北に第22号ブロックが隣接している。遺物数が少なく散漫である。

石器28点、礫1点が出土した。出土層位はI層～V層でI層から最も多く遺物が出土している。出土層位が浅いのは斜面落ち際のために層序が安定していないためと思われる。器種組成はナイフ形石器1点、石刃1点、搔器1点、微細剝離のある剥片2点、剥片16点、砕片7点となっている。石材は黒曜石が半数強を占めている。

第15号ブロックと1点、第24号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 22. 第22号ブロック (図版23)

I TO15グリッドを中心とした直径約20mの円形の広がりを持つ。調査区東端の斜面落ち際に位置しており、南に第21号ブロック、南西に第19号ブロック、西に第20号ブロック、北西に第14号ブロック、北東に第24号ブロックが位置している。

石器113点、礫2点が出土した。出土層位はI層～Vb層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器3点、台形石器1点、石刃3点、貝殻状刃器2点、搔器2点、削器2点、楔形石器3点、鋸歯縁状削器1点、2次加工のある剥片3点、微細剝離のある剥片3点、剥片64点、砕片17点、石核6点、磨石1点、原石2点となっている。石材は多様で、黒曜石、無斑晶質安山岩、凝灰岩、凝灰質頁岩、チャートが用いられており、特定石材に偏らない。

接合資料の共有はない。

#### 23. 第23号ブロック (図版15)

I TO02グリッドを中心として北-南約20m、東-西約10mの楕円形の広がりを持つ。南東に第24号ブロック、南に第22号ブロック、南西に第14号ブロック、北西に第27号ブロックが位置している。調査区北隅に位置しているが、遺物は散漫で遺物分布域は調査区内ではほぼ収束していると思われる。

石器13点、礫2点が出土した。出土層位はI層～V層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は搔器1点、削器1点、彫器1点、微細剝離のある剥片3点、剥片5点、石核2点となっている。石材は凝灰質頁岩、黒曜石、チャート等が用いられている。

第24号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 24. 第24号ブロック (図版19)

II PC09グリッドを中心として北東-南西約24m、北西-南東約18mの楕円形の広がりを持つ。南西に第

22号ブロック、北西に第23号ブロックが位置している。遺物が少なく散漫である。

石器70点、礫6点が出土した。出土層位はI層～Vb層でIV層から最も多く遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点、削器3点、彫器1点、楔形石器2点、2次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片2点、剥片44点、砕片9点、石核6点、敲石1点となっている。石材はチャートが主体となっている。

第21号ブロックと第23号ブロックと、それぞれ1点づつの接合資料を共有している。

#### 25. 第25号ブロック (図版21)

I NM17グリッドを中心として約6mの円形の広がりを持つ。南に第9号ブロック、北に第26号ブロックが位置しているが、両者からはやや離れている。遺物が少なく散漫である。

石器14点、礫1点が出土した。出土層位はI層～IV層でIII層から最も多く遺物が出土している。器種組成は削器1点、楔形石器1点、2次加工のある剥片1点、剥片11点となっている。石材は凝灰岩が多い。

第5号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 26. 第26号ブロック (図版20)

I NI02グリッドを中心として東-西約20m、北-南約15mの楕円形の広がりを持つ。少し距離をおいて第25号ブロックが南に位置している。遺物が少なく非常に散漫となりまとまりがなく、一般的なブロックとは異なるものと思われる。

石器14点、礫3点が出土した。出土層位はIII層～IV層でIV層から最も多くの遺物が検出されている。器種組成は削器1点、2次加工のある剥片2点、微細剥離のある剥片1点、剥片8点、石核1点、凹石1点となっている。石材は黒曜石と無斑晶質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 27. 第27号ブロック (図版22)

I OG13グリッドを中心として北-南約10m、東-西約20mの楕円形の広がりを持つ。南には距離をおいて第9号ブロックが位置している。遺物密度が低く散漫となっている。また、ブロック中央部付近は表土までの調査しか行われておらず、数点の遺物が検出されなかった可能性が考えられる。

石器6点、礫5点が出土した。出土層位はII層～V層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点、搔器1点、剥片3点、砕片1点となっている。石材は黒曜石、無斑晶質安山岩、凝灰岩とばらついている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

### (3) 石材別遺物分布状況

#### 1. 黒曜石 (図版8)

総石器数7911点中3197点(約40%)を占める黒曜石は、遺物分布域の東半分偏って集中する傾向が見られる。特に第13～15、18、19号ブロックでは、多量の剥片、砕片が存在しており黒曜石による石器製作の様子が伺える。接合資料の共有もこれらのブロック内で完結しており、外側に出て行くものは認められない。

対称的に調査区の外縁に近いブロックの黒曜石数は少なく、ブロック内に散漫に分散しており、スポット的に集中する場所が見られない。

黒曜石の集中域は無斑晶質安山岩の集中域とごく一部が重なる他は、他の石材の集中域と重ならない。特にチャートの集中域とは明瞭に分かれている。

#### 2. 無斑晶質安山岩 (図版8)

1796点出土している無斑晶質安山岩は全体の約23%を占める。黒曜石と比較するとやや散漫であるが、

遺物分布域の北側に何ヶ所かの集中域が認められる。

第2、8号ブロックではチャートの集中域と重なり、第12、20号ブロックでは黒曜石の集中域と重なっている。

接合資料は黒曜石よりは遠距離に移動している様子が伺えるが、頻度は低い。

### 3. チャート (図版9)

1797点出土しているチャートは全体の約23%を占める。他の石材よりもまとまる傾向があり、あまり分散していない。これらの集中域は調査区西側に多く分布しており、黒曜石とはずれている。接合資料はこの集中域間でよく接合しており、よく動いていると評価できよう。

### 4. 頁岩類 (図版9)

珪質頁岩、凝灰質頁岩、凝灰岩等の堆積岩は各ブロックに分散して存在し、あまり集中しない傾向が見られる。

#### (4) 微細遺物の分布 (図版10)

何ヶ所かのブロックおよび、遺跡内に帯状のベルトを設定して土壌を採取し、水洗選別を行い微細遺物の検出を行った。土壌は1辺50cmの正方形を平面的な単位として、層ごとに採取した。

基本的には水洗選別による微細遺物の和は剥片数に比例していることがわかる。

#### (5) 礫の分布 (図版7)

280点出土した礫は各ブロックに散在している。在地の多孔質安山岩の垂角礫を主体としており、完形のものが多くなっている。裏ノ山遺跡の層序中にこの礫は含まれないことと、ブロック内から出土することから、人為的に持ち込まれたものと考えられる。

礫は各ブロック内に5～20点程度散在しており、礫群を形成することはない。多くの礫に焼けと思われる赤化は認められないことから、これらの礫は台石、磨石、敲石等に用いるために遺跡内に持ち込まれたことが予想される。

#### (6) 風倒木痕の分布 (図版10)

遺跡内には多くの風倒木痕が見られた。風倒木痕周辺では層の乱れに伴い遺物の移動も見られるが、移動距離は長くても1m程度であり、大きくブロックの形状や組成を変化させることはないと思われる。

## 3 遺物

### (1) ナイフ形石器 (図版24～29・報告番号1～56)

#### 1. 尖鋭な先端を持つもの (1～40)

尖鋭な先端を持つため、刺突の機能を持つと思われるナイフ形石器である。先端を持たない台形石器とは弁別される。

1～7は縦長剥片を素材として、打面を基部側に置き素材の剥離軸と石器の主軸がほぼ同一で、基部に加工が施されているナイフ形石器である。

1は珪質頁岩製で、背面の剥離痕の方向に規則性が認められず、礫面も見られることから、石刃素材とはいえないものである。右側縁基部と左側縁先端に正方向のブランディングが施されている。平面形は細長く、基部は打面がそのまま残されているため平たく、先端は加工により尖鋭に作出されている。

2は凝灰質頁岩製で背面には大きな礫面が残されている。右側縁基部に正方向の強い剥離による加工が施されているが、打面がそのまま残されているため基部は平たい。先端は鈍く尖っているが加工は認められない。

3は珪質頁岩製で、背面に礫面と多方向の剥離痕が見られるため、石刃素材とはいえない。加工は基部

両側と先端右側に正方向の中剥離が施され、基部への加工は石器中程まで及んでいる。刃部背面は礫面となっているが、滑らかなため剥離面と変わらない機能があったと考えられる。基部と先端は鈍く尖り平面形は木葉形を呈している。

4～6は石刃を素材としており、基部片側と反対側縁の先端に正方向の加工が施されている。打面は基部側に置かれているが加工により除去され尖っているため、平面形が柳葉形を呈する。

7は石刃を素材としており、基部は両側縁に正方向の加工により打面は除去され尖っている。また、基部腹面には反方向の平坦な剥離が見られる。先端左側縁にも正方向の加工が見られるが、わずかに欠損している。

8～16は縦長剥片を素材として、打面を基部側に置き素材の剥離軸と主軸が同一方向で、2側縁に加工が施されているナイフ形石器である。剥離軸と主軸が一致しているためか、加工による素材の形状変化の度合いは低く、弱い加工も見られる。

8～10は黒曜石製で左右がほぼ対称となっている。基部への加工により打面が除去され、鈍く尖っており、尖鋭な先端を持つため、平面形が木葉形を呈している。加工には正方向の中、弱剥離が用いられており、両者の境界は漸移的となっている。

11は黒曜石製で右側縁の肩が張り左右非対称となっている。先端にも鋭さはないため、台形石器との中間的なナイフ形石器として位置付けられようか。

12、13は背面の剥離痕の方向が不揃いなため、素材は石刃とはいえない縦長剥片と思われる。13は正方向の中剥離により強く素材が断ち切られている。

14は黒曜石製で左右がほぼ対称となっている。わずかに打面が残されている他は8～10の特徴と共通している。

15はチャートの石刃を素材としている。左側縁の加工は鈍角で強く素材を断ち切っている。先端は欠損している。

17～20は寸詰まりの縦長剥片もしくは、貝殻状剥片を素材としている。素材の剥離軸と石器の主軸が斜めになる。加工は2側縁に施され、打面は基部側に置かれるが除去される。片側の側縁に肩部を持つ左右非対称の平面形を呈するものが多い。背面には多方向からの剥離痕が見られるため、素材の形状の斉一性が低く、刃部が非直線的になるなど形状にばらつきが見られる。

16・21～25は石刃もしくは縦長剥片を素材としている。素材の剥離軸と石器の主軸が斜めになる。2側縁に加工が施され、基部側に置かれた打面は除去される。

16の加工は正反方向から施され切り立った側縁を作出している。先端はわずかに欠損しているが、尖鋭と思われ、刃部は主軸に対して斜めになり、切り出し状を呈している。

23は右側縁の基部側半分と左側縁の先端側半分に正方向のブランディングが施されている。左側縁基部側には加工が見られず、2側縁に施される加工は連続しない。

24の素材は凝灰岩の石刃で、長く薄いつまみ状を示している。2側縁に加工が施され、先端と基部は尖るように作出されており、平面形は左右対称形に近い。「茂呂型ナイフ形石器」の範疇に含まれるものと判断できよう。

25は黒大形の黒曜石の石刃を素材としている。左側縁先端付近に狭い刃部が存在するが、それ以外の側縁にはブランディングが施される。右側縁は全体にブランディングが施されているが、中央付近に角があり、それより上半の加工は鋸歯縁状を呈している。そのため、先端と基部が尖るように作出されているが、左右は非対称形となっている。「茂呂型ナイフ形石器」の範疇に含まれるものと思われる。

26～31は寸詰まりの縦長剥片もしくは貝殻状剥片を素材としている小形のナイフ形石器である。打面は

尖端側に置かれ、素材の剥離軸と石器の主軸が斜めになるもので、2側縁に加工が施され尖端と基部が尖り、打面は除去されている。素材の形状にばらつきがあるためか、完成品の形態の斉一性も低い。

32~34の素材は縦長剥片であるが、背面には多方向の剥離痕が見られるため、石刃とはいえないものである。打面は尖端側に置かれ、素材の剥離軸と石器の主軸が斜めになる。2側縁に加工が施され基部と尖端は尖り打面は除去される。刃部側側縁の肩が張り左右は非対称形になる。

35は在地の安山岩を素材としている。多孔質の石で剥片石器の石材としては希少な例となる。横長剥片を素材として、尖端側に打面を置き剥離軸と主軸が斜めから横になるように素材を用いている。2側縁に加工が施され、左右かきは対称形に作出されている。加工は切り立っており、素材が大きく断ち切られている。風化が激しく剥離が読み取りづらい石器となっている。

36は凝灰岩の石刃を素材としている。打面を尖端側に置き、剥離軸と主軸が同じになるように素材を用いている。2側縁に正方向のブランティングが施され打面は除去されている。ほぼ左右対称形であるが、尖端と基部は丸みを帯びている。

37の素材は背面には礫面が見られるが薄くて、縦に長い石刃である。打面を尖端側に置き、剥離軸と主軸が斜めになるように素材を用いている。2側縁に加工が施され打面は除去されている。右側縁は全体にわたり正方向のブランティングが施されているが、先端付近には反方向のブランティングも見られる。先端は非常に鋭利で、基部はやや丸いが尖っている。刃部側の右側縁の肩がやや張るが左右対称に近い形を呈している。「茂呂型ナイフ形石器」の範疇に含まれる石器として考えられよう。

38は貝殻状剥片を素材として、基部を尖端側に置き剥離軸と主軸が斜めになるものである。左側縁に正方向の加工が施され打面が除去されている。右側縁基部には折れ面が見られるが明瞭な加工は認められない。ナイフ形石器と台形石器との判別が難しいものとして考えられる。

39・40は横長剥片の剥離軸と主軸が直交するように素材を用いている。この素材は板状剥片石核から連続的に剥離される規格的なものではない。39は1側縁に、40は2側縁に加工が施されている。いずれも遺跡内でのあり方は客体的で他に同種に分類されるものはない。

## 2. 素材の一辺にブランティングが施されているもの (41~48)

41~48は寸詰まりの縦長剥片もしくは貝殻状剥片を素材としている。素材の打面が基部側に置かれるもの(41~45・47)と、尖端側に置かれるもの(46・48)が見られる。いずれも尖端を持つが、尖鋭なもの46ぐらいである。44・48には刃部と思われる部位にブランティングとは異なる正方向の剥離が見られる。

## 3. 分類が不可能なもの (49~56)

49~56は欠損により、全体像が見えないため分類ができないものである。

### (2) 台形石器 (図版29~30・報告番号57~71)

57~65は素材の剥離軸と石器の主軸が同一方向のものである。素材には貝殻状剥片、寸詰まりの縦長剥片が用いられる。加工には平坦な剥離とブランティング、折断が見られる。いずれも打点を基部側に置き、基部両側縁に加工もしくは折断が見られるが、背面の稜構成に規則性が見られないため、素材末端方向の縁辺形状が不安定となっている。そのため、加工の施されない刃部形状も多様で、刃部の判断が難しいものが存在する。全体的な形状も斉一性が低くばらついている。

66~71は素材の剥離軸と石器の主軸が直交もしくは斜交するものである。素材には貝殻状剥片が用いられる。加工は66~68に平坦な剥離が69~71にブランティングが用いられているが、方向は正反両方向見られる。素材を横に用いて打面と末端を折断するように加工を施すが、素材の剥離軸と石器の主軸が同一方向のものと比較すると、斉一性が高くなっており、刃部もはっきりしている。

(3) 貝殻状刃器 (図版31~32・報告番号72~85)

貝殻状剥片を素材として、素材の持つ鋭い縁辺を刃部とし、1以上の切り立った側縁をもつ石器である。縁辺には加工部位、折断面、打面、切り立った末端等が見られる。鋭い縁辺と、切り立った側縁を持っていればよいために加工は必要最低限しか施されず、素材の形状もそのまま維持されているものが多い。そのため、形状の斉一性が低く多様である。

(4) 彫器 (図版32~33・報告番号86~91)

素材の形状の規制が少なく多様で、彫刀面周辺以外の周縁加工が少ないことから、それぞれの形状が異なり、「神山型」「上ヶ屋型」などの型式名が付けられるようなものが存在しない。

86は寸詰まりの縦長剥片を素材としている。素材の切り立った縁辺を打面として背面側に極状剥離が施されている。極状剥離後に彫刀面尖端に正方向の弱い剥離が若干見られる。極状剥離の打面作出のための加工はなく、周縁の加工もないことから偶発的な衝撃剥離による可能性も否定できない。

87は凝灰質頁岩の貝殻状剥片を素材としている。素材は打点付近から縦に裂けているようで、その割れ面を打面とする極状剥離と、素材の打面部を打面とする極状剥離が見られる。両者の切り合いは境界部に微細な剥離が施されているために読み取れず、どちらが先かは不明となっている。上部の彫刀面からの弱い方向の剥離が見られるが、それ以外の周縁への加工はない。

88は珪質頁岩の縦長剥片を素材としている。素材の左側縁に平行する極状剥離が施されているが、打面は正方向の加工により強く折断されている。また、この折断面には反方向の弱い剥離も若干見られる。基部右側縁には正方向の弱剥離が見られ、基部は尖っている。

89はほぼ全体が剥離のネガ面に覆われており、素材の主要剥離面が観察できない。つまり、多数の極状剥離により器面全体が覆われているということになる。それらの打面は別の極状剥離面の場合が多い。彫器ではなく小形縦長剥片を目的とする石核の可能性も考えられようか。

90は凝灰質頁岩の節理にそって剥離した大形剥片の一部を素材としている。極状剥離は素材の折れ面を打面として施されている。

91は凝灰質頁岩の縦長剥片を素材としている。素材の末端を斜めに断ち切るように反方向の強い剥離を鋸歯状に施し極状剥離の打面を作出している。打面側は折れておりその折れ面を切る反方向の剥離が見られる。

(5) 撻錐器 (図版33・報告番号92~94)

それぞれ形状の異なる貝殻状剥片が素材となっており、その一端の2ヶ所にノッチ状の加工を施して尖頭部を作出している。形態の斉一性は低い。

92はチャートの剥片の末端に正方向の加工により尖頭部を作出している。左右両端は左右方向からはさまれるような衝撃剥離が見られることから、楔形石器としての機能も果たしていたと考えられる。

(6) 擲器 (図版34~48・報告番号95~177)

115点と多くの擲器が出土している。石刃素材は少なく、厚みを持つ貝殻状剥片もしくは、寸詰まりの縦長剥片を素材として、円形、楕円形、拇指状を呈するものが主体となっている。

95~102は黒曜石の厚みを持つ貝殻状剥片もしくは寸詰まりの縦長剥片を素材としているものである。正方向の加工を周縁の大部分に施して丸い刃部を作出している。そのため、平面形が円形、もしくは楕円形を呈している。99以外は長さが3cm前後で小形である。

103は無班晶質安山岩製の分厚い貝殻状剥片を素材としている。周縁の大部分に加工が施されているが、下側縁から左右側縁下半には正方向の加工が、上側縁から左側縁肩部には反方向の加工が施され刃部が作出されている。平面形は円形を呈している。



104・107～110・113・115は黒曜石の厚みを持つ縦長剥片を素材としている。素材の末端を中心として正方向の加工により丸い刃部が作出されており、平面形は拇指状を呈している。素材背面の剥離方向の規則性は低く、厚みも不安定であるため石刃素材とはいええないものとなっている。

106は黒曜石製搔器の一部分のようだが、右上と左下両端からの剥離により器体が大きく変形させられているため、全体像が見えない。搔器が楔形石器に転用されたものなのだろうか。

105・112は黒曜石の分厚い剥片から折れたものを素材としている。素材を縦長に用いて、端部に正方向の加工を施して丸い刃部を作出している。平面形は拇指状を呈している。

114は黒曜石の横長剥片を素材としている。素材を横に用いて下側縁に正方向の加工を施して丸い刃部を作出している。平面形は拇指状を呈している。

116は黒曜石の分厚い剥片を素材としている。素材を横に用いて下側縁に正方向の加工を施して丸い刃部を作出している。平面形は円形を呈している。

117～124は黒曜石の寸詰まりの縦長剥片を素材としている。素材を縦に置いて、末端を中心して正方向の加工を施し丸い刃部を作出している。また、加工部位は片側側縁全体にまで及ぶ。平面形は拇指状を呈する。

125～127は黒曜石の縦長剥片を素材としている。末端ではなく側縁に正方向の加工を施して刃部を作出している。124の刃部は弧状を呈し、125の刃部は直線的である。126の刃部は左右側縁に見られ、右側縁は弧状に左側縁は直線状に作出されている。これらの平面形は拇指状もしくは短冊状を呈している。

128～130は黒曜石の厚みのある貝殻状剥片を素材としている。素材の打面側が横や斜めに置かれ、丸い刃部が作出されている。

131は黒曜石の分厚い貝殻状剥片を素材としている。加工には正方向の強制剥離と微細剥離が見られるが、器形を整えるような中剥離が見られないため、刃部が整った弧状を呈さない。

132の素材の打面は切断されており、その切断面および、切り立っている左側縁より背面に平坦な剥離が施されている。素材末端には正方向の加工により直線的な刃部が作出されているが、左側縁にはベック状のノッチ部が複数見られる。

133～144には腹面に平坦な剥離が見られる。この剥離は刃部加工を切って施されるのが一般的で、刃部再生のためと考えられようか。172～177はこの剥離による剥片と思われる<sup>68)</sup>。これら腹面に平坦な剥離が見られる搔器の素材、加工、形状の特徴はその他の搔器と共通している。

145・146・148～156・158・159・161～164・166～171は、鶏卵大の円礫から剥離された、背面に大きな礫面を残す剥片を素材としている。素材が小形で球状を呈しているため、そこから剥離される1次剥片の背面はドーム状を呈している。その形状をそのまま利用して搔器に加工していると思われる。チャート素材とする搔器の多くがこの方法で製作されているが、原石の状態が異なる黒曜石や無斑品質安山岩にはあまり見られない。

#### (7) 削器 (図版49～57・報告番号178～223)

166点の削器が出土している。素材には縦長剥片が多用されるが、石刃石核から剥離されるような規格的なものは少なく、大きさや形状にはばらつきが見られる。基部や周縁への加工はあまり見られず、刃部のみ刃付けとしての加工が施されるものが多い。そのために形態の斉一性は低い。黒曜石とチャート製は小形で、無斑品質安山岩と頁岩系石材製は大形の傾向が見られる。

178・180・181は正反両方向からの加工により、刃部が作出されている。素材には縦長剥片が用いられ、表裏両面に平坦な剥離が施されるため、槍先形尖頭器のような器面をしているが、鋭尖先端は持たない。

(註1) 器種分類上は搔器刃部剥片とした。

179は正方向の加工のみが見られるが、素材および、平坦な剝離や鈍い先端を持つなど槍先形尖頭器に近い特徴を持つ点で、両面に加工が施されるものと共通性が認められる。

182から186は左右側縁2カ所に刃部が作出されており、それぞれの刃部加工が正方向と反方向で逆になるものである。素材には黒曜石は貝殻状剥片が、珪質凝灰岩には石刃が用いられている。いずれも加工は刃部のみ施されている。

187・188は反方向の加工により刃部が作出されている。素材には黒曜石の縦長剥片が用いられている。刃部は平坦な剝離と弱い剝離により作出されている。刃部以外への明瞭な加工は認められない。

189～196は凸状の刃部を持つ。素材には貝殻状剥片が用いられ、その側縁に正方向の加工を施し弧状の刃部を作出している。

197～205も凸状の刃部を持つが、縦長剥片および石刃が素材となっている。側縁に正方向の加工を施し弧状の刃部を作出している。刃部は素材の違いにより貝殻状剥片素材のものより、長く緩い弧状を呈している。

206～217は直線状の刃部を持つ。刃部に長さが必要となるためか、素材には縦長剥片が用いられる。片側の側縁はほぼ全体に正方向の加工が施され刃部が作出されるものが多い。

218～221・223はノッチ状の刃部を持つ。直線状の刃部を持つものより、刃部の長さを必要としないためか、素材には縦長剥片以外に貝殻状剥片(219)・横長剥片(220)も用いられている。加工も側縁に限定されずに、素材末端に施されるものも見られる(220)。

222はチャートの三角形の大形貝殻状剥片を素材として、反方向の加工を右側縁に施して、直線的な刃部が作出されている。下端は欠損しているが、尖鋭な先端を持つ可能性が高い。

#### (8) 楔形石器 (図版57～59・報告番号224～239)

224～236は長幅比が1:1に近いものである。素材には貝殻状剥片が主に用いられているようだが、縦長剥片が使用の結果、短くなったものも含まれる可能性がある。上下両端には打点部が潰れている平坦な剝離が見られるものが多い。226・228には潰れを伴わない中剝離も認められる。

237～239は縦長の形状を呈している。縦長剥片を縦に置き打面と末端を両端としている。その両端には打点部が潰れている平坦な剝離が見られる。

#### (9) 石刃 (図版60～62・報告番号240～253)

23点の石刃が出土している。これ以外に背面構成や打面の観察から石刃と判別しなかった縦長剥片は多く存在する。

240・245・246・251・252に打面調整が、242・244・251に頭部調整、250に稜上調整が見られるが、いずれの石核調整もあまり顕著ではない。頁岩系石材と無斑晶質安山石岩が多いが、黒曜石、チャートの利用は少ない。

#### (10) 削片 (図版62・報告番号254)

254は石刃と思われる縦長剥片を素材としている彫器から剝離された削片である。打面は点状となっており詳細はわからない。左側縁には種状剝離前のもと思われる複数の剝離が見られるが、それぞれの剝離痕の開始部はペントタイプとなっており、打点が見られない。また、末端側にも種状剝離前と思われる彫り面作出のための打面作出のような反方向のブランディング状剝離が見られる。

#### (11) 石核 (図版63～74・報告番号255～291)

255～268は黒曜石製の石核である。

255～261は縦長剥片剝離を目的とした石核である。255が石刃石核に近いが、その他は90°単位の打面転移が見られるサイコロ状の石核となっている。いずれも剝離が進んでおり小形化しているために、サイコ

口状となっていると思われ、石核となった初期の段階では異なる形状を呈していたと思われるが、その形状の予想は難しい。

262～265は貝殻状剥片剥離を目的とした石核である。262・264にはボジ面が見られるため、剥片を素材とした石核と考えられる。262・265は作業面が固定され、打面が横に移動していくもので、263・264は打面・作業面とも転移が行われるものである。いずれも打面調整や頭部調整は見られない。

266は縦長剥片剥離を目的とする石核が、貝殻状剥片剥離を目的とする石核に転移したものである。

267は石核としたが、腹面に平坦な剥離痕が見られる攝器の可能性も考えられる。

268は鵝卵大の原石から1回だけ剥離が行われた石核で、持ち込まれている原石の大きさを知りうる資料となっている。

269～273は無斑品質安山岩製の石核である。

269・270は縦長剥片剥離を目的とした石核である。180°の打面転移が認められるが、剥離が進み小形化してしまっている。270にわずかに打面調整痕が見られる。

271～273は貝殻状剥片剥離を目的とした石核である。271は90°単位の打面、作業面転移が見られるサイコロ状石核で、272・273は作業面が固定される板状石核である。

274～281は珪質凝灰岩・凝灰質頁岩・凝灰岩を石材とした石核である。

274は縦長剥片剥離を目的とした石核である。頭部調整が見られるが打面調整は見られない。

275～280は貝殻状剥片剥離を目的とした石核である。大形の石核には縦長剥片の剥離痕も見られる。サイコロ状(276～278)と板状(275・279)が見られる。

281の礫面には線状痕を伴う磨り面が見られる。この磨痕が剥離面を切っている部分も確認できる。形状が板状を呈していて、反対側の面は平坦な剥離痕に覆われているため、斧形石器に関連するものとも考えられる。

282～286・289～291はチャート製の石核である。

282・283は小形の縦長剥片剥離を目的とした石核である。節理面、半剥離面、平坦な礫面を打面としており、282に頭部調整状の剥離以外に石核調整は認められない。

284～286・290・291は貝殻状剥片剥離を目的としている石核である。打面と作業面を交互に入れ替えるチョッピングツール状のもの(284・290・291)と、作業面が固定される板状のもの(285・286)が見られる。また、289は節理面で割れた礫片を素材としている。

287・288は鉄石製の石核である。いずれも貝殻状剥片剥離を目的とする板状の石核である。

(10) 敲石(図版75～76・報告番号292～299)

292～294は小形で扁平棒状を呈する敲石である。いずれも、棒状の端部に敲打痕が見られ、292と293には両端に敲打痕が認められる。

295は珪質凝灰岩製の礫器状の敲石である。石材が緻密で剥片石器類に用いられているものと共有している。礫器のような剥離が両方向から施されており、その稜線上に敲打痕が見られる。礫器もしくは石核としての理解も可能である。

296は敲石としたが一般的なものとは異なる。端部ではなく器面ほぼ中央部に敲打痕と線状の傷が見られる。上半部は折れている。

297は大形の敲石である。隅丸の三角柱形を呈し上部は折れている。その面と面の境界部の稜を中心に敲打痕が見られる。

298～299は大形の棒状敲石である。敲打痕は298の下端および側面に、299の両端に見られる。

(10) 凹石 (図版76・報告番号300~301)

300・301は扁平な円礫を素材としており、表裏の扁平面のほぼ中央に敲打による凹が見られる。301の側面には磨痕が認められる。

(14) 礫器 (図版76・報告番号302)

302は扁平な円礫を素材としている。裏面から3回の大きな剝離により片刃が作出されている。

#### 4 母岩別資料と接合資料

(1) 母岩別資料 (第10・11表)

母岩判別は裏ノ山Ⅰ、裏ノ山Ⅱ石器文化を分けずに行った。そのため、裏ノ山Ⅰ石器文化の石器17点も表中に含まれている。

遺物総数が多く、無斑晶質安山岩や黒曜石など個体差が少ない石材もあることから、完全な個体レベルまでの分類は不可能であった。したがって、ここで分類された母岩には複数個体含まれているものが多いこととなる。

母岩番号は石材ごとに付けてあるが、分類可能で複数あるものについては1から連番で、分類可能で単独のものには999を、焼けや風化が原因で分類できなかったものには9999を付けた。また、黒曜石については蛍光X線による産地分析後に母岩分類を行ったため、産地別に番号を付けてある。

##### 1. 黒曜石

数量が多く個体差も少ないことから、数量が多い母岩グループには多くの個体が含まれていると思われる。蛍光X線分析による産地判別では、8割以上を和田鷹山群が占め、和田芙蓉ライト群と和田小深沢群が次に多いことから、ほとんどの黒曜石産地は和田エリア内にあることとなる。また、中性子放射化分析では82点中46点がTAKAYAMAとなっていることから、蛍光X線分析の和田鷹山群となっているものについても、半数以上がTAKAYAMAとなる可能性が考えられる。

その他の産地としては諏訪屋ヶ台群と蓼科冷山群が見られるがわずかである。

なお、ブロックにより産地が偏る傾向は見られなかった。

碎片以外の石器類の約5割に礫面が見られる。

##### 2. 無斑晶質安山岩

数量が多く個体差も少ないことから、数量が多い母岩グループには多くの個体が含まれていると思われる。無斑晶質安山岩の特徴は野尻湖遺跡群に一般的に見られるものと共通しており、産地としては飯山北部から津南方面が予想されようか。

碎片以外の石器の4割弱に礫面が見られ、黒曜石より少なくなっている。

##### 3. チャート

碎片以外の石器の7割以上に礫面が見られる。礫面の特徴から原石は鶏卵大の円礫が多いことがわかる。礫面の見られる石器の多さは、鶏卵大のチャートの原石が遺跡に持ち込まれ、石器製作が行われたことを示していると思われる。

##### 4. 珪質頁岩・珪質凝灰岩・緑色凝灰岩・凝灰質頁岩・凝灰岩・頁岩

頁岩系の石材で新潟県以北に産地が存在すると思われる。多くは珪化が弱く器体表面にややざらつきが見られるもので、津南周辺で採集できるものと同質である。しかし、珪質頁岩の一部には器体表面が光沢を持つほど滑らかなものも含まれ、より遠隔地より持ち込まれた可能性が考えられる。

礫面が見られるものは5割前後となっている。

石材	母岩番号	濃淡	色調	透明度	編・斑品・スジ等	含有物
Ag	999	8				
An	1	101	淡黄色	不透明	なし	細かい気泡が多く入っている 風化が進んでいる
An	2	44	黄褐色	不透明	編の一定しない細い編が見られる	気泡は少なめである
An	3	3	灰オリーブ色	不透明	編の一定しない黒色の編が見られる	気泡は多めである
An	4	25	灰色	不透明	編の一定しない黒い編が見られる	気泡は多めである
An	5	7	灰色	不透明	編の一定しない黒い編が見られる	気泡の入り方は標準的である
An	6	69	灰オリーブ色	不透明	編の一定しない黒色の編が見られる	気泡は多めである
An	7	274	赤褐色	不透明	なし	気泡は多めである
An	8	24	灰色	不透明	なし	気泡は多めである
An	9	340	灰色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的である
An	10	85	黄褐色	不透明	なし	気泡は少なめである
An	11	48	灰色	不透明	なし	気泡は多めである
An	12	17	にぶい黄色	不透明	なし	大きい気泡が入っている
An	13	104	黄褐色	不透明	なし	気泡は多めである
An	14	6	暗灰黄色	不透明	なし	細かい気泡が多く入っている
An	999	24				
An	9999	187				
Ch	1	192	暗赤褐色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	2	13	灰色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	3	23	灰色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	4	26	灰色	不透明	部分的に暗灰色帯が見られる	なし
Ch	5	8	緑灰色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	6	7	灰色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	7	78	緑灰色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	8	79	灰色	不透明	青黒色の編が不規則に入っている	なし
Ch	9	37	灰色	不透明	青黒色の編が不規則に多く入っている	なし
Ch	10	11	オリーブ灰色	不透明	青黒色の編い編が不規則に入っている、毎1mm以下の編が見られる	なし
Ch	11	33	灰色	不透明	青黒色の編い編が少し見られる	なし
Ch	12	8	灰白色	不透明	青黒色の編い編が不規則に入っている	なし
Ch	13	10	灰白色	不透明	青黒色の編い編が少し見られる	なし
Ch	14	15	暗灰色	不透明	なし	なし
Ch	15	10	オリーブ灰色	不透明	なし	なし
Ch	16	7	灰色	不透明	白色の細い編が見られる、チャート特有のひび有り	なし
Ch	17	20	灰色	不透明	白色の細いスジが少し見られる	なし
Ch	18	27	灰色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	19	2	暗緑灰色	不透明	青黒色の編い編と白色の編い編が見られる	なし
Ch	20	57	暗灰色	不透明	白色の編い編が少し見られる、チャート特有のひび有り	なし
Ch	21	16	緑灰色	不透明	青黒色の編が少し見られる	なし
Ch	22	53	灰色	不透明	白色の細い編が見られる	なし
Ch	23	10	灰色	不透明	青黒色の編い編が不規則に多く入っている	なし
Ch	24	22	灰色	不透明	青黒色の編い編が見られる、チャート特有のひび有り	なし
Ch	25	7	灰色	不透明	青黒色の編い編が不規則に多く入っている	なし
Ch	26	5	オリーブ灰色	不透明	青黒色の編が見られる、チャート特有のひび有り	なし
Ch	27	3	灰褐色	不透明	チャート特有のひび少し有り	なし
Ch	28	4	オリーブ灰色	不透明	青黒色の編い編が多く見られる	なし
Ch	29	20	暗灰色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	30	62	灰色	不透明	青黒色の編い編が見られる、チャート特有のひび有り	なし
Ch	31	4	暗緑色	不透明	青黒色の編が少し見られる	なし
Ch	32	15	緑灰色	不透明	青黒色の編が見られる	なし
Ch	33	5	灰オリーブ色	不透明	青黒色の編い編が少し見られる	なし
Ch	34	3	オリーブ灰色	不透明	部分的に青黒色帯が見られる	なし
Ch	35	6	灰色	不透明	青黒色の編い編が多く見られる、チャート特有のひび有り	なし
Ch	36	3	灰色	不透明	青黒色の編い編が少し見られる	なし
Ch	37	4	オリーブ灰色	不透明	H色の編いスジが見られる	なし
Ch	999	47				
Ch	9999	485				
GT	1	28	灰白色	不透明	なし	白色粒子が多く見られる
GT	999	1				
Ja	1	8	にぶい赤褐色	不透明	部分的に黄色の編が見られる	なし
Ja	2	3	暗赤色	不透明	なし	なし
Ja	999					
Ob-SWHD	1	19	黒色	透明	黒いスジが縞状に見られる	なし
Ob-SWHD	2	21	黒色	半透明	黒い部分が縞状に見られる	なし
Ob-SWHD	999	1				
Ob-TSTY	999	1				
Ob-WDHY	1	37	灰色	透明	暗灰色のスジが縞状に見られる	なし
Ob-WDHY	2	37	黒色	透明	なし	なし
Ob-WDHY	3	18	黒色	透明	黒いスジが縞状に見られる	なし
Ob-WDHY	4	2	黒色	透明	なし	大きな気泡が入る
Ob-WDHY	5	10	茶褐色	半透明	茶のスジが縞状に見られる	なし
Ob-WDHY	6	17	黒色	透明	黒いスジが縞状に見られる	なし
Ob-WDHY	7	2	黒色	透明	なし	なし
Ob-WDHY	8	3	灰色	透明	なし	なし

第10表 裏ノ山遺跡母岩別資料分類基準表1

第2章 裏ノ山遺跡

石材	母岩番号	透物数	割断面色調	透明度	編・斑品・スジ等	含有物
Ob-WDHY	9	1	暗灰色	半透明	やや色の濃い編が見られる、梨のよう にザラザラしている	僅かに小さな球顆が入る
Ob-WDHY	10	13	暗灰色	半透明	黒色の部分が塊状に見られる	なし
Ob-WDHY	999	3				
Ob-WDKB	1	15	灰色	半透明	暗灰色のスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDKB	2	11	黒色	透明	なし	なし
Ob-WDKB	3	5	黒色	透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDKB	4	1	黒色	透明	部分的に暗灰色のスジが塊状に見られ る	なし
Ob-WDKB	5	8	茶褐色	半透明	茶のスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDKB	6	14	黒色	透明	黒いスジが塊状に見られる	小さな球顆が少し入る
Ob-WDKB	7	2	黒色	半透明	幅1~2mm程度の白色の編が見られる	小さな球顆が入る
Ob-WDKB	8	3	灰色	半透明	なし	大きな球顆が入る
Ob-WDKB	9	1	灰色	半透明	なし	非常に小さな球顆が少し入る
Ob-WDKB	10	6	灰色	透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDKB	1	8	黒色	半透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDKB	2	4	黒色	透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDTK	999	1				
Ob-WDTK	9999	1				
Ob-WDTM	1	2	黒色	半透明	白い編が見られる	小さな球顆が少し入る
Ob-WDTM	999	1				
Ob-WDTN	1	4	黒色	半透明	幅の一定しない白い編が見られる、黒 いスジが塊状に見られる	僅かに球顆が入る
Ob-WDTN	2	3	黒色	半透明	僅かに暗灰色のスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDTN	3	14	黒色	半透明	白い部分が塊状に見られる	なし
Ob-WDTY	1	313	灰色	半透明	暗いスジが塊状に見られる	小さな球顆が入る
Ob-WDTY	2	358	黒色	透明	なし	なし
Ob-WDTY	3	151	黒色	透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDTY	4	46	黒色	透明	部分的に黒いスジが塊状に少し見られ る	大小さまざまな球顆が入る
Ob-WDTY	5	125	茶褐色	半透明	茶のスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDTY	6	166	黒色	透明	黒いスジが塊状に見られる	大きめの球顆が少し入る
Ob-WDTY	7	15	黒色	透明	なし	なし
Ob-WDTY	8	44	黒色	半透明	全体に霧がかかっているような感じに 見える	小さな球顆が入る
Ob-WDTY	9	7	黒色	半透明	全体に濃い霧がかかっているような感 じに見える	小さな球顆が少し入る
Ob-WDTY	10	72	黒色	半透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDTM	999	1				
Ob-WDTM	1	1	黒色	半透明	なし	小さな球顆が少し入る
Rh	999	2				
Sa	999	3				
Sa	9999	1				
Sh	999	2				
Sl	1	2	暗緑灰色	不透明	なし	非常に細かい気泡が入っている
Sl	999	1				
SS	1	90	灰白色	不透明	白いスジが見られる、暗灰色の編が見 られる	なし
SS	999	27				
SS	9999	7				
TS	1	21	淡黄色	不透明	なし	細かい気泡が少し入っている
TS	2	31	灰白色	不透明	暗オリーブ灰色の編が少し見られる	細かい気泡が入っている
TS	3	18	淡黄色	不透明	なし	なし
TS	4	14	淡黄色	不透明	なし	非常に細かい気泡が少し入っている
TS	5	9	灰白色	不透明	なし	細かい気泡が少し入っている
TS	6	5	淡黄色	不透明	なし	気泡の入り方は層状である
TS	7	14	灰白色	不透明	なし	なし
TS	8	4	灰白色	不透明	なし	なし
TS	9	2	明緑灰色	不透明	なし	なし
TS	10	2	灰白色	不透明	なし	なし
TS	11	2	淡黄色	不透明	なし	なし
TS	12	3	灰白色	不透明	なし	オリーブ黒色の粒子が見られる
TS	13	8	淡黄色	不透明	なし	なし
TS	14	17	灰白色	不透明	オリーブ黒色の細い線が見られる	なし
TS	15	10	灰白色	不透明	なし	なし
TS	16	6	灰白色	不透明	前面面に緑色帯が見られる	細かい気泡が少し入っている
TS	17	2	灰白色	不透明	チャートのようなスジが見られる	なし
TS	18	48	淡黄色	不透明	なし	なし
TS	999	14				
TS	9999	89				
Tu	1	8	淡黄色	不透明	暗緑灰色の帯が層状に入る	なし
Tu	2	21	灰色	不透明	なし	なし
Tu	3	3	暗オリーブ灰 色	不透明	なし	なし
Tu	4	13	灰白色	不透明	なし	非常に細かい粒子が入っている
Tu	5	12	灰色	不透明	なし	細かい気泡が入っている
Tu	6	9	オリーブ灰色	不透明	なし	細かい気泡が入っている
Tu	7	2	淡黄色	不透明	なし	なし
Tu	8	2	暗灰色	不透明	なし	ガラスのような細かい粒子が見られる
Tu	9	4	淡黄色	不透明	部分的に赤色が見られる	直径1mm以下の黒色粒子が見られる
Tu	11	69	灰白色	不透明	なし	なし
Tu	999	10				
Tu	9999	31				
安山岩	999	1	灰色	不透明	なし	白色粒子が多く見られる
安山岩	999	2				
安山岩	9999	8				

第11表 裏ノ山遺跡母岩別資料分類基準表2

## 5. その他石材

敲石、白石等の礫石器には安山岩が多用されている。この安山岩は遺跡周辺で採集可能な多孔質の安山岩で、礫石器や礫群の礫として用いられることが多いが、剥片石器の素材にはならない。その他礫石器には砂岩も用いられる。

### (2) 接合資料

117組315点の石器が接合している。最大接合数が12点で多くが2～3点の接合であった。そのため、石器製作を復元できるような接合資料はほとんど認められなかった。

接合資料の分布は図版7～9に示してあるが、多くのブロック間接合が見られ互いのブロックが関連しあっている様子がうかがえる。

## 5 剥片剥離技術

多くの剥片、破片が存在し盛んに石器製作が行われていたことが予想される。剥片剥離の目的剥片としては次の(1)～(3)が挙げられる。

### (1) 縦長剥片

石核には多角柱状を呈するものが見られるが、小形化してサイコロ状を呈するものも多い。打面調整や頭部調整が若干見られるがあまり顕著ではない。連続して縦長剥片が剥離されているが、石刃石核と言い切れるほどの石核調整は認められない。石材には黒曜石や頁岩系石材が多用されており、多くのナイフ形石器等の素材となっている。

### (2) 貝殻状剥片・横長剥片

打面、作業面転移を頻繁に行うサイコロ状の石核と作業面が固定される板状の石核から剥離される。剥片の形状の斉一性は低く、スクレイパー類の素材となっているが、製品率は低い。石材は無疵品質安山岩が多用される。

### (3) 分厚い貝殻状剥片

鶏卵大の小形円礫器一端をチョッピングツール状に打面と作業面を入れ替えながら剥離を行う。1つの石核から剥離される剥片は少なく、数枚程度と思われる。分厚さともとの礫面の持つ球状の曲面を利用して搔器の素材となっている。石材はチャートが圧倒的に多い。

# 第4節 その他の石器

## 1 遺構

### (1) 遺物の分布 (図版79)

裏ノ山II石器文化のブロックと平面状は重なっているものがほとんどだが、石器の型式から明らかに異なる時期のものと判断できる。

## 2 遺物

### (1) 細石核 (図版80・報告番号1～2)

1は黒曜石の剥片を素材としている。素材の打面に調整を施し細石核としての打面を作出して、背面を作業面として細石刃を剥離している。素材の縁辺から末端にかけて反方向の加工が見られる。形状は扁平な円柱形を呈している。素材の主要剥離面は他の剥離面より風化が進んでいるようで傷が多く見られる。

裏ノ山II石器文化の石器を拾って、細石核として利用したと考えられようか。

2は黒曜石の剥片を素材としている。素材の打面から削片状の剥離により打面を作出し、作業面の反対側の小口には稜上の調整が認められる。しかし、細石刃剥離の痕跡はなく擧器等の破片の可能性も考えられる。

(2) 網石刃 (図版80・報告番号3～9)

4・5の側縁には明瞭な加工が見られ、5～9の打面・バルブは折断されている。

(3) 槍先形尖頭器・有茎尖頭器 (図版80・報告番号10～11)

10・11は両面が平坦な剥離に覆われているため素材が読み取れない。両者とも表裏両面への平坦な加工により、細長く成形され断面形は凸レンズ状を呈し、側面系も直線的で反るようなことがないため、旧石器時代末から縄文時代草創期の遺物と考えられる。



## 第3章 東裏遺跡

### 第1節 遺跡と調査の概要

#### 1 遺跡の概要

東裏遺跡は長野県上水内郡信濃町大字柏原字東裏405他に所在する。野尻湖南西にある標高758.4mの伊勢見山の南西麓に位置している。伊勢見山麓から約300mが遺跡範囲となっており、その長さは1300mを超える。遺跡北西部は大久保南遺跡と上ノ原遺跡が隣接しており、沢により遺跡が区分されているものの、ほとんど繋がっている。伊勢見山山頂付近には伊勢見山遺跡が(樋口・小林1964・小林1982)、そこから南西に向かう尾根の平坦部には妻ノ山遺跡が存在し、周囲を旧石器時代の遺跡に囲まれている。遺跡内の伊勢見山裾部の湧水地を水源とする沢が南東に向かって流れ、下流で烏居川に合流する。

本遺跡の時期は旧石器時代～縄文時代早期、平安時代を主体としているが、長野盆地と高田平野をつなぐ北国街道が近くを通過していたため、古墳時代や中近世の遺物も検出されている。

平成5年には当センターの調査と並行して信濃町教育委員会により特別養護老人ホーム地点の調査が行われ、「杉久保系石器群・瀬戸内系石器群・槍先形尖頭器の石器群」などが検出されている(渡辺1994)。その後も宅地造成や町道拡幅に伴う発掘調査が町教育委員会によって何度か行われている(第2表参照)。

#### 2 調査の概要

##### (1) 調査範囲と調査方法(第9図)

高速道路の長さ約900mに遺跡範囲が重なった。調査区内北西側よりセンターの規定の大々地区をⅠ区～Ⅷ区に区切り、調査を行った。調査の都合上、伊勢見山中腹の柏原スキー場以南をⅠ区、Ⅰ区から北西に下りた山裾から県道までの約500mの範囲をⅡ区、県道より北西側をⅢ区として調査を行った。このⅠ～Ⅲ区の呼称は他の遺跡との統一を図るため、Ⅰ区を第1地点、Ⅱ区を第2地点、Ⅲ区を第3地点として報告を行う。グリッドは当センター仕様にしたがって、北西よりⅠ～Ⅷ区を設定した。

調査は3年にまたがって行われた。平成5年度は第1地点の伊勢見山中腹部(Ⅶ-F・K区)をⅠ-A区、伊勢見山南東谷部湧水地帯(Ⅶ-P・Q・R・U・V・W区)をⅠ-B区として調査を行った。また、第2地点の現存する湧水流路以北で工場跡以南(Ⅲ～Ⅴ区の大部分)の調査を行った。

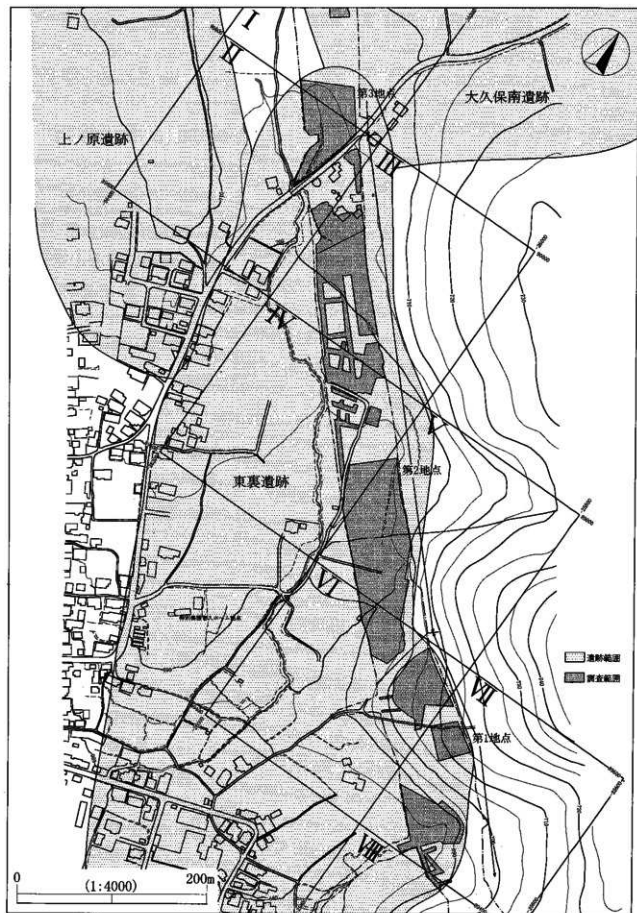
平成6年度は第2地点の北端にあたる工場跡地(Ⅲ区の一部)の調査を行った。

平成7年度には第1地点の残り(Ⅵ-D・E・I・J区)と第2地点の湧水流路以南の調査を行った。

調査は先行トレンチを設定して遺物・遺構の有無の確認を行い、遺物・遺構が確認された周囲を包含層まで重機により掘り下げ、それ以下は人力による掘り下げで遺物・遺構の検出を行った。

遺物取り上げは(株)こうそくに委託してトータルステーションを用いた単点測量により行った。また、遺構に関しては手取による測量を行った。

地形測量はラジコンヘリによる空中撮影・測量を行った。



第9図 東表遺跡の調査範囲と地形

## (2) 調査経過 (調査日誌抄)

平成5年度	12月2日	1区・2区空掘	
4月6日	重機による除雪開始	12月10日	閉所式 作業終了
4月13日	表土剥ぎ開始 センター杭にそってトレンチを入れる	平成6年度	
4月19日	発掘作業開始式	11月4日	表土剥ぎ作業開始
4月20日	3区柏原黒色火山灰層の掘り下げ黒曜石散点と土師器散点出土	11月15日	平安時代住居跡検出
5月6日	信濃町教育委員会中村由克氏による現場指導	12月1日	谷間黒色土中より縄文早期土器集中区を検出
5月7日	2区表土剥ぎ開始	12月7日	空掘
5月13日	3区掘り下げ終了	12月13日	作業終了
5月18日	明治大学戸沢克則氏による現場指導	平成7年度	
5月20日	2区掘り下げ 平安時代の住居跡の調査進む	6月20日	重機による抜根および表土剥ぎ開始
5月26日	切片実頭器出土 旧石器時代の遺物多し	8月1日	2区掘り下げ開始 旧石器・縄文前期遺物検出
5月26日	野尻湖調査団地質グループの現地見学	8月21日	1区表土剥ぎ開始
7月15日	1区表土剥ぎ開始	8月24日	1区テストピット掘り下げ開始
7月29日	同志社大田松雄和氏による現場指導	8月28日	2区空掘・空掘
8月3日	文化庁岡村道雄氏による現場指導	9月4日	1区Vb層のブロック検出
8月12日	2区空掘・空掘	9月5日	2区ため押し 工事用道路以外の調査終了
8月16日	明治大学矢島國雄氏視察	9月13日	1区テストピット調査終了 遺物検出部周辺面の調査開始
9月16日	明治大学安森政雄氏による現場指導	9月28日	引渡し日せまり上ノ原遺跡担当班から応援を得る
9月22日	国学院大学小林達雄氏による現場指導	10月2日	2区残件(工事用道路下)表土剥ぎ開始
10月15日	信濃町立柏原小学校6年生見学・発掘体験学習	10月4日	2区残件人力による掘り下げ開始
11月12日	1-A・2区谷部空掘	10月5日	1区掘り下げ終了 遺物取り上げ写真撮影
		10月13日	2区残件調査終了 現場撤収

## (3) 調査結果の概要

## 1. 第1地点

伊勢見山尾根中腹部で3つの石器文化が確認された。

Vb層中に生活面があると思われる東裏遺跡高速道路第1地点I石器文化(以下東裏H1I石器文化)から6ヶ所のブロックが検出され、石器461点、礫10点が出土した。ナイフ形石器、石刃を特徴としており、石材は黒曜石を主体としている。

IV層中に生活面を持つと思われる東裏遺跡高速道路第1地点II石器文化(以下東裏H1II石器文化)から12ヶ所のブロックが検出され、石器257点、礫129点が検出された。左右側面に挟り込むようにプランディングを施した台形石器を特徴としている。石材は無斑品質安山岩が主体となっている。

IV～III層に生活面を持つと思われる東裏遺跡高速道路第1地点III石器文化(以下東裏H1III石器文化)から6ヶ所のブロックが検出され、石器180点、礫12点が出土した。国府型ナイフ形石器を組成の特徴とし、無斑品質安山岩と黒曜石を石材の主体としている。

その他に東裏H1III石器文化に隣接する場所には無文土器を伴う縄文時代草創期の遺物分布域が存在し、裏ノ山よりの山裾谷部(1-B区)からは表裏縄文土器、押型土器などの縄文時代草創期～早期の遺物および平安時代の住居跡が検出されている。

## 2. 第2地点

調査区南東部に5ヶ所の自然流路跡が検出され、その河床の2次堆積の砂礫層中から旧石器時代の遺物が大量に検出された。ナイフ形石器、台形石器、槍先形尖頭器、斧形石器の組成と型式から複数の石器文化が混在していることが予想されている。しかし、層位的には後期旧石器時代初頭と思われる斧形石器と縄文時代早期の押型文土器が同一層準から検出されることから、層位的区分は不可能となっている。平面的にはある程度まとまりが観察できるが、境界は不明瞭で無理に分けると客観性を欠くこととなるため、事実報告では旧石器時代の遺物に関しては1つのまとまりとした。自然流路内を中心に分布する11ヶ所のブロックより石器6542点が出土した。礫に関しては流路内に多量に存在していたが、人為性の確証が得られないため遺物との判断はできなかった。主な器種組成はナイフ形石器116点、槍先形尖頭器30点、播器243点、削器225点となっている。石材は無斑晶質安山岩が最も多く、チャートや黒曜石も多用されている。旧石器時代以外には縄文時代草創期～前期、平安時代の遺構、遺物が検出されている。

## 3. 第3地点

第3地点から旧石器時代の遺物は検出されなかった。

## (4) 基本層序

## 1. 第1地点 (第10図)

第1地点は伊勢見山中腹の傾斜がやや揺るやかとなる尾根上に位置している。全域で風成堆積層が確認され、標準層序との対比も可能となっている。全体的には堆積は薄いが、傾斜の緩い東裏H1 I石器文化の遺物分布域では厚い堆積が見られ、V a・V b層も容易に分層できた。尾根の背の部分にあたる東裏H1 II石器文化・東裏H1 III石器文化の遺物分布域では堆積が不安定で、IV～VI層がブロック状に混在する層も多く確認された。

## 2. 第2地点 (第11～13図)

伊勢見山の麓にあたる第2地点は遺跡形成当時存在していたと思われる自然流路が埋没している。調査区内には湧水が見られ小川が流れている状況であった。多くの旧石器時代遺物はこの自然流路内の砂礫層から検出されている。遺物分布域の層序は自然流路の影響により、場所により大きく異なっており、標準層序との対比ができない状況である。

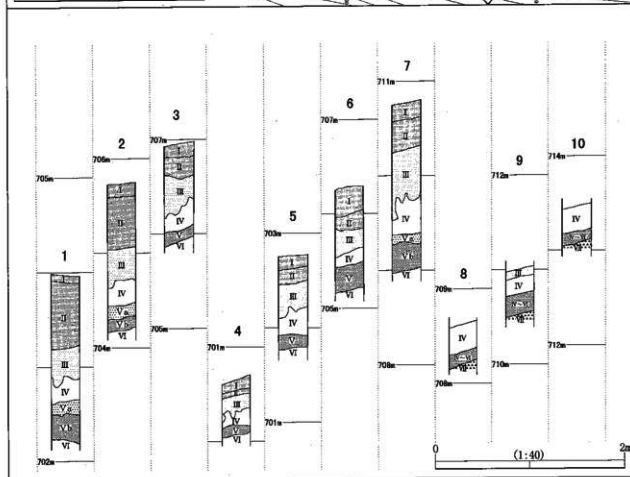
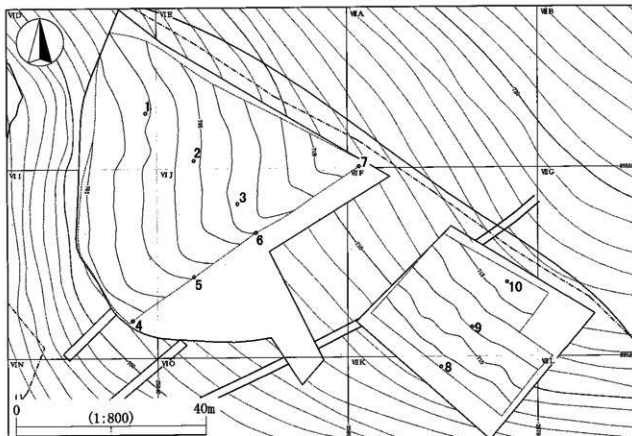
伊勢見山斜面では風成堆積が確認できるのが、遺物分布域外となっている。断面2が該当するが、やや水の影響が見られる。

湧水の源は(第11図、断面2)南東部の地形測量範囲が半島状に突き出ている地点付近であり、調査前にはそこを源とする小川が、NR2とほぼ同じ経路をたどって流れていた。旧石器時代に存在していたNR1～5の自然流路の水源も山際からの湧水と思われる。湧水点は何ヶ所か存在したために、自然流路も複数存在したと考えられようか。

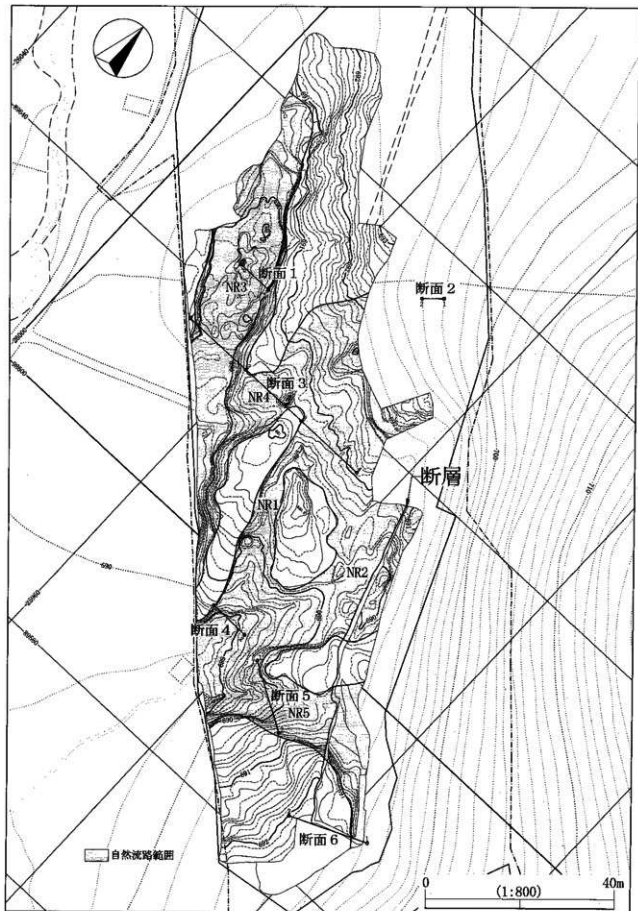
基本的な堆積状況は地表から柏原黒色火山灰層、その下に流路に伴う砂礫層、シルト層が続く。流路外には砂礫層は見られず、柏原黒色火山灰層の下にシルト層がくる。このシルト層は上部～下部野尻ローム層の2次堆積層と思われるが、水の影響が強見られ、白色化・粘土化している部分や鉄分の集積が見られる。また、流路外のシルト層中には中部野尻ローム起源と思われるスコリア層が部分的に見られるが、全体的には柏原黒色火山灰層直下から多くのスコリア・火山礫が見られるため、中部野尻ローム層以下相当のローム層を起源としていることが考えられる。

流路の底より下位のシルト層には中部野尻ローム層に相当すると思われるスコリアや火山礫層が無い。そのため、下部野尻ローム層以下の層順が相当すると思われる。

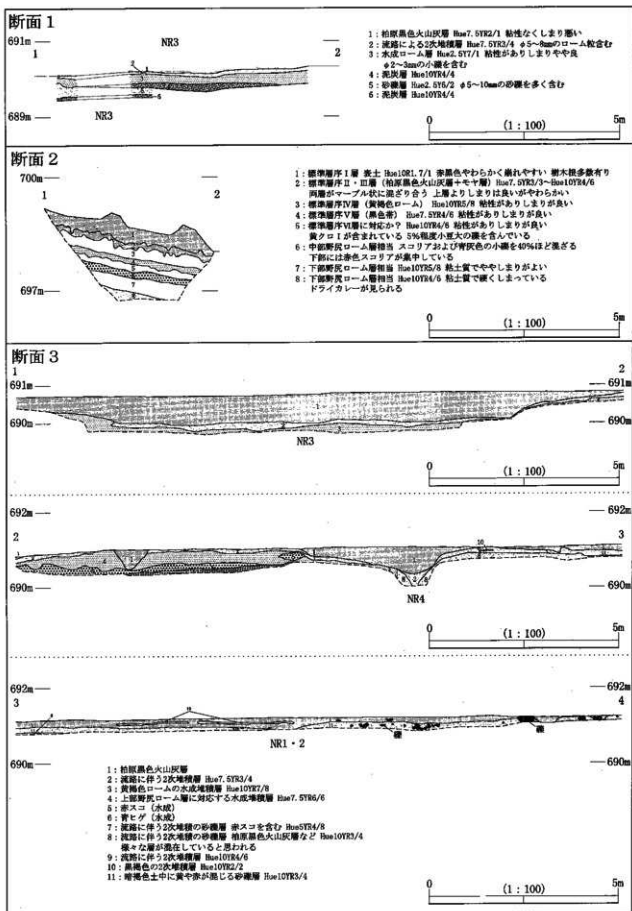
流路内の砂礫層からは多くの礫と共に石器が検出されている。砂礫にはスコリアや火山礫が多く見られ、



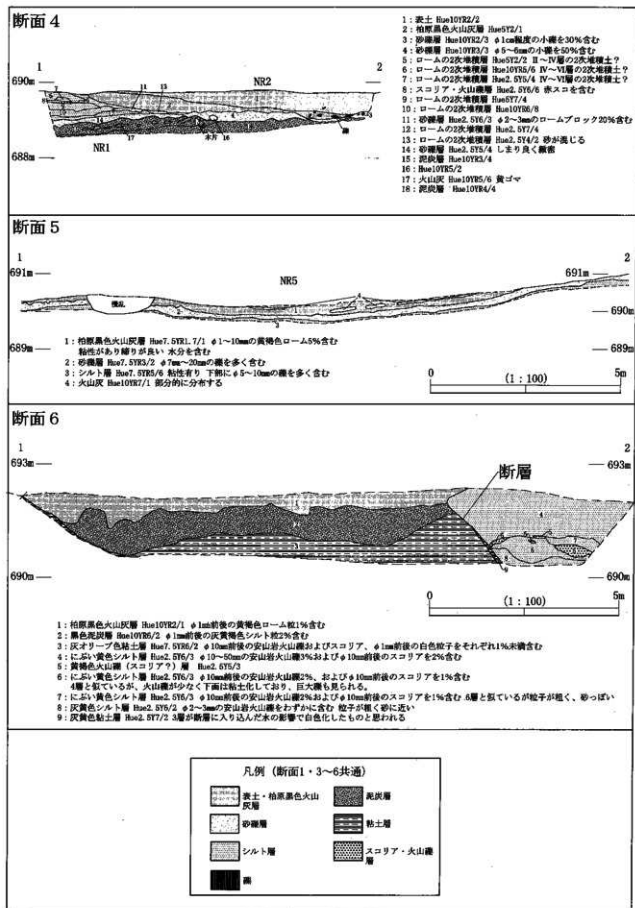
第10図 東裏遺跡 H1地点の微地形と層序



第11図 東裏遺跡 H2地点の微地形



第12図 東裏遺跡 H2地点の層序1



第13図 東表遺跡 H2地点の層序 2



ふるいがけしたローム層の残渣のような状態となっている。流路外のシルト層には中部野尻ローム層相当と思われるスコリア・火山礫層がある場所と無い場所があることから、流路内および流路周辺の上部～中部野尻ローム層に相当する土砂が、流路内で洗われて流路内の砂礫層が形成されたと考えられる。砂礫層中からは斧形石器・ナイフ形石器・種子架型石斧・押型文土器等が同一レベルで検出されるため、少なくとも後期旧石器時代初頭～縄文時代早期の間は堆積せず、遺物や礫が洗い出されていた状態であったと予想される。柏原黒色火山灰層下部からは縄文時代早期末と思われる条痕文系の土器が面的に検出されているため、その時期には流路が埋没する堆積環境に変化していたといえる。

## 第2節 東裏H1 I 石器文化

### 1 東裏H1 I 石器文化の概要

#### (1) 遺物の出土層位 (第10図・第12表)

伊勢見山尾根の中腹斜面に位置しているが、やや傾斜が弱くやや凹地状になっているため堆積は比較的厚い。V a層とV b層も明確に分層できた範囲が大部分を占めた。

Ⅲ層～Ⅵ層で石器461点、礫10点が検出された。最も遺物が多いのはV b層で、次いでV a層となっており、生活面はV b層中にあると思われる。

遺物	Ⅲ	Ⅳ	V a	V b	Ⅵ	V	機土	不明	合計	比率
BL1	1	14	16	8					39	8.3%
BL2		6	12	4					22	4.7%
BL3	1	18	42	25	1				87	18.5%
BL4	3	36	57	178		6			280	59.4%
BL5	2	10	2	3					17	3.6%
BL6 一括						1	6		7	1.5%
外		5	4	6	1		1	2	17	3.6%
合計	7	89	133	224	2	7	7	2	471	
比率	1.5%	18.9%	28.2%	47.6%	0.4%	1.5%	1.5%	0.4%		

第12表 東裏H1 I 石器文化ブロック別出土層位組成

遺構・石材	ナイフ形石器	台形石器	貝殻状石器	掻器状石器	抹鉢器	2次加工のある剥片	微細剥片のある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	斧形石器	礫	合計	比率
BL1			3			1	1		25	5			4	39	8.3%
BL2	1		1			1	3	1	15					22	4.7%
BL3		1	5	2		1	3		64	11				87	18.5%
BL4	5	1	14		1	3	8	16	152	72	5		3	280	59.4%
BL5				1					11	5				17	3.6%
BL6									5		2			7	1.5%
一括									1		1			2	0.4%
外			1			1		2	8	1		1	3	17	3.6%
黒曜石	3		24	3	1	6	13	15	246	91	4			406	86.2%
無珉晶質安山岩						1		1	19	1	2			24	5.1%
珉質頁岩	2	1					2	2	11					18	3.8%
珉質凝灰岩	1													1	0.2%
凝灰質頁岩									3					3	0.6%
凝灰岩									2	2				4	0.8%
チャート		1						1			2			4	0.8%
蛇紋岩												1		1	0.2%
安山岩													10	10	2.1%
合計	6	2	24	3	1	7	15	19	281	94	8	1	10	471	
比率	1.3%	0.4%	5.1%	0.6%	0.2%	1.5%	3.2%	4.0%	59.7%	20.6%	1.7%	0.2%	2.1%		

第13表 東裏H1 I 石器文化器種組成

	遺構	黒曜石	無斑晶質安山岩	珪質頁岩	珪質凝灰岩	凝灰質頁岩	凝灰岩	チャート	蛇紋岩	安山岩	合計	比率	
石器・ 礫数量	BL1	32		1		1	1			4	39	8.3%	
	BL2	10		11	1						22	4.7%	
	BL3	82		2	1		1	1			87	18.5%	
	BL4	260		10	4		2	1		3	280	59.4%	
	BL5	15		2							17	3.6%	
	BL6			6		1					7	1.5%	
	一括			1				1			2	0.4%	
	外	7		3	1			1	1	3	17	3.6%	
	合計	406		24	18	1	3	4	4	1	10	471	
	比率	86.2%		5.1%	3.8%	0.2%	0.6%	0.8%	0.8%	0.2%	2.1%		
石器重量 %	BL1	72.8		2.29		4.51	11.68				91.28	2.7%	
	BL2	21.52		103.21	1.04						125.77	3.7%	
	BL3	189.12		28.21	5.8		2.31	1.88			227.32	6.7%	
	BL4	1094.8		223.27	25.09		0.25	127.37			1470.78	43.6%	
	BL5	59.3		210.85							270.15	8.0%	
	BL6			731.92		64.91					796.83	23.6%	
	一括			24.65				134.28			158.93	4.7%	
	外	42.06		111.25	9.46		9.91	4.61	53.47		230.76	6.8%	
	合計	1479.6		1330.15	145.85	1.04	71.73	21.84	268.14	53.47	0	3371.82	
	比率	43.9%		39.4%	4.3%	0.0%	2.1%	0.6%	8.0%	1.6%	0.0%		
礫重量 %	BL1									2380	2380	69.2%	
	BL4									800	800	23.3%	
	外									260	260	7.6%	
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	3440	3440		
比率	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%				

第14表 東裏H I I 石器文化石材組成

## (2) 器種組成 (第13表)

石器461点の器種の内訳はナイフ形石器6点、台形石器2点、貝殻状刃器24点、搔器状石器3点、搔錐器1点、2次加工のある剥片7点、微細剥離のある剥片15点、石刃19点、剥片281点、砕片94点、石核8点、斧形石器1点となっている。

## (3) 石材組成 (第14表)

石器461点の石材の内訳は黒曜石406点、無斑晶質安山岩24点、珪質頁岩18点、珪質凝灰岩1点、凝灰質頁岩3点、凝灰岩4点、チャート4点、蛇紋岩1点となっている。礫の石材はすべて多孔質の安山岩である。

## 2 遺構

## (1) 遺物の分布

伊勢見山尾根の中腹に6ヶ所ブロックが検出された。調査前はスキー場のゲレンデとして利用されており、遺跡としてはかなりの傾斜地に立地している。礫群はなく、礫の数も少ない。

## (2) ブロック

## 1. 第1号ブロック (図版80)

VIDO16グリッドを中心として北-南に約12m、東-西に約7mの楕円形の広がりを持つ。調査区西隅の斜面の落ち際に位置しており、北東に第2号ブロック、南東に第3号ブロックがある。

石器35点、礫4点が出土した。出土層位はIII層～Vb層でVa層から最も多くの遺物が出土している。

器種組成は貝殻状刃器3点、2次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片1点、剥片25点、砕片5点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第2号ブロックと1点の接合資料を共有している。

## 2. 第2号ブロック (図版81)

V1DR15グリッドを中心として北-南に約4m、東-西に4mの円形の広がりを持つ。西南西に第1号ブロック、南に第3号ブロックが位置している。

石器22点が出土した。出土層位はIV層～Vb層でVa層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点、貝殻状刃器1点、2次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片3点、石刃1点、剥片15点となっている。石材は珪質頁岩、黒曜石が多用されている。

第1号ブロックと1点の接合資料を共有している。

## 3. 第3号ブロック (図版81)

V1DR18グリッドを中心として北東-南西に約10m、北西-南東に約7mの楕円形の広がりを持つ。北西に第1号ブロック、北に第2号ブロック、南東に第4号ブロック、南南東に第5号ブロックが位置している。

石器87点が出土した。出土層位はIII層～VI層でVa層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は台形石器1点、貝殻状刃器5点、撻器状石器2点、2次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片3点、剥片64点、砕片11点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第4号ブロックと2点、ブロック外と1点の接合資料を共有している。

## 4. 第4号ブロック (図版80)

V1EB20グリッドを中心として北西-南東に約14m、北東-南西に約10mの楕円形の広がりを持つ。北西に第3号ブロック、西南西に第5号ブロック、南南東に第2号ブロックと第3号ブロック、南東に第6号ブロックが位置している。

石器277点、礫3点が出土した。出土層位はIII層～V層でVb層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器5点、台形石器1点、貝殻状刃器14点、撻器1点、2次加工のある剥片3点、微細剥離のある剥片8点、石刃16点、剥片152点、砕片72点、石核5点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第3号ブロックと2点、ブロック外と1点の接合資料を共有している。

## 5. 第5号ブロック (図版81)

V1S01グリッドを中心として北北東-南南西に約5m、西北西-東南東に約3mの楕円形の広がりを持つ。北西に第3号ブロック、北東に第4号ブロックが位置している。

石器17点が出土した。出土層位はIII層～Vb層でIV層から最も多くの遺物が出土している。

器種組成は撻器状石器1点、剥片11点、砕片5点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

## 6. 第6号ブロック (図版81)

V1JF04グリッドを中心として北-南に約4m、東-西に約3mの円形の広がりを持つ。北西に第4号ブロックと第5号ブロックが位置している。

石器7点が出土した。V層から1点、撻乱から6点の遺物が出土している。

器種組成は剥片5点、石核2点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多いことから、隣接する東表H1II石器文化に属する可能性も考えられる。

ブロック外と1点の接合資料を共有している。

### 3 遺物

#### (1) ナイフ形石器 (図版82~83・報告番号1~5)

1は黒曜石の寸詰まりの縦長剥片を素材としている。打面を基部側に置き基部左側縁には正方向の、右側縁には反方向の中剥離が施されている。先鋭な先端を持つが、先端への加工は見られない。先端から左右側縁には鋭い刃部があり、使用痕と思われる微細剥離痕が表裏に見られる。いわゆる「ペン先形ナイフ形石器」として理解できる石器である。

2は黒曜石の縦長剥片を素材としている。打面を下に置くくと左側縁ほぼ全体に微細剥離痕が表裏に見られるが、背面より腹面の微細剥離痕が顕著で平坦である。左側縁中程に正方向の中剥離が見られ、加工の可能性が考えられるが、その他には明瞭な加工痕はない。そのため、素材の形状がほぼ維持されている。先端は尖らない。

3と4の珪質頁岩は暗褐色で光沢がある非常に質の良いもので、山形県や秋田県で採集できるものと良く似ている。

3は珪質頁岩の縦長剥片を素材としている。素材の打面側を基部として、基部両側縁に正方向のプランティングを施している。打面は加工により大部分が除去されているが、わずかに残っている。先端は尖っているが加工はなく、基部も鈍く尖っているため平面形は木葉形を呈する。

4は珪質頁岩の縦長剥片を素材としている。打面を基部側に置き基部両側縁に反方向の加工を施して打面を除去している。右側縁には全体に加工が見られるが、下半部は反方向の上半部は正方向のプランティングが施されており、さらに先端付近では反方向の加工が施されている。先端はわずかに欠損しているが尖っていたと思われ、基部も尖り平面形は隅丸縦長の菱形を呈している。

5は黒曜石のナイフ形石器の基部である。先端側は大きく欠損しているため全体形がわからない。剥片に末端側を基部として、基部両側に反方向のやや平坦剥離を施して尖った基部を作出している。加工部位は弱く抉れているため、掻錐器の可能性も考えられる。

#### (2) 台形石器 (図版83・報告番号6)

6は珪質頁岩の貝殻状剥片を素材としている。素材の打面が基部側にくるように縦に用いて、左右側縁に反方向のプランティング状の加工を施している。刃部は斜めとなり弱い弧状を呈する。基部端には打面の可能性が考えられる素材面がわずかに残されている。

#### (3) 貝殻状刃器 (図版83~86・報告番号7~22・31・33)

24点の貝殻状刃器はすべて黒曜石で、刃部にあたる素材縁辺には使用痕と思われる微細剥離痕が認められる。黒曜石以外の石材にも貝殻状刃器に近いものが存在するが、微細剥離痕が明瞭ではないため器種認定には至らなかった。

多くは打面等の素材の持つ切り立った縁辺を側縁としているが、7・9・10・13・31・33に折断が、7・8・9・11・12に明瞭な加工が見られる。

#### (4) 搔器状石器 (図版85・23~25)

3点の搔器状石器はいずれも黒曜石の貝殻状剥片を素材としており、素材の末端に刃部加工を施している。

23の刃部は直線状を呈する平刃となっている。右側縁に見られる剥離痕はやや新鮮な感があり、調査時の傷の可能性がある。

24は素材末端の折れ面隅から右側縁角部にかけて反方向の加工を施して刃部を作出している。

25は素材末端部に正方向の中剥離を、打面側には反方向の中剥離を施して両端に搔器状の刃部を作出し

ている。また、左右側縁には微細剥離痕が顕著に見られる縁辺が存在することから、貝殻状刃器としても利用されていたと考えられる。

(5) 2次加工のある剥片・微細剥離のある剥片 (図版86・報告番号26~30・32)

加工や微細剥離が見られるが、製品としての認定に至らなかったものである。用途的には貝殻状刃器や石刃と共通するものが多いと思われる。

(6) 石刃 (図版87~89・報告番号34~50)

19点を石刃として認定したが、打面調整、頭部調整、稜上調整等の石核調整はあまり見られない。打面は広く残されているものが多く、単剥離面が目立つ。器体も比較的厚く、反りも大きいものが見られる。

そのため、石刃石核から剥離された目的剥片と石刃とは様相が異なっている。

42・45・46・50の背面にはポジ面が見られることから、剥片素材の石核の存在が予想される。

48には打面調整が、50には稜上調整が見られる。

(7) 斧形石器 (図版89・報告番号58)

58は蛇紋岩の礫面を有する剥片を素材としている。図上裏面に礫面が見られ、表面基部にある広い剥離面が素材バルブ付近にあたると思われる。両側縁および基部に対して部分的に平坦な剥離が見られるが、さほど顕著ではなく、素材縁辺や折れ面がそのまま側縁となっている部分も多い。刃部は両面に研磨痕が施され鋭く作出されており、潰れや刃こぼれは認められない。研磨は両面とも刃部に対して垂直に近い向きで施されているがやや左に傾いている。平面形は左右側縁が平行し、直線的な刃部のため短冊形を呈している。

(8) 石核 (図版90~91・報告番号52~57)

52・53は黒曜石の板状石核である。剥片を素材として、背面もしくは腹面に作業面を固定し、打点を横にずらしながら、貝殻状剥片を剥離している。

54は黒曜石の板状石核である。剥片を素材としているが、腹面を作業面として縦長剥片を複数剥離している。180°の打面転移が認められる。

55は黒曜石の石核である。作業面は正面と左側面に見られる。基本的には大形の貝殻状剥片を剥離しているが、石核が大形のため左側面に見られる作業面には縦長剥片の剥離痕も見られる。

56は無斑品質安山岩のサイコロ状の石核である。90°の打面、作業面転移が頻繁に見られるため、サイコロ状の形状を呈している。剥離された剥片は貝殻状剥片が主体となっているが、石核が大形のため縦長剥片も剥離されている。

57は打面と作業面を入れ替え、交互に剥離を行う石核であるが、剥離された剥片は少ないと思われる。

## 4 母岩別資料と接合資料

### (1) 母岩別資料 (第15表)

東裏遺跡 H1地点の母岩判別はⅠ~Ⅲの石器文化を分けずに行っている。表中に母岩別の各石器文化の組成を示してある。1母岩が複数の石器文化に組成していることからわかるように、無斑品質安山岩や黒曜石など個体差が少ない石材もあり、完全な個体レベルまでの分類は不可能であった。したがって、ここで分類された母岩には複数個体の含まれているものが多いこととなる。

母岩番号は石材ごとに付けてあるが、分類可能で複数あるものについては1から連番で、分類可能で単独のものには999を、焼けや風化が原因で分類できなかったものには9999を付けた。また、黒曜石については蛍光X線による産地分析後に母岩分類を行ってあるが、番号は通しで付け、別列に産地を示した。

石材	母岩番号	遺物数			剥離面色調	透明度	縞・斑・スジ等	含有物	Ob産地
		I 石器文化	II 右器文化	III 右器文化					
Ag	1		5		灰色	不透明	なし	黒色粒子とガラスのような粒子が見られる	
Ag	999		3	1					
An	1		1	6	にぶい黄色	不透明	なし	気泡は見られない	
An	2	1	12	2	黄褐色	不透明	なし	気泡は少なめである	
An	3	3	5	1	にぶい黄色	不透明	なし	気泡は多めである	
An	4	1	8	30	灰色	不透明	なし	気泡はやや多めである	
An	5	1	7	1	灰色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的である	
An	6	3	5	3	灰色	不透明	やや色の濃い細かい縞が少し見られる	気泡はやや多めである	
An	7	3	4		灰色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的である	
An	8	4	12		灰色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的である	
An	9	5	57	18	灰色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的である	
An	999	1	2	1					
Ch	1		3	1	暗褐色	不透明	細いスジが少し見られる	なし	
Ch	2		1	1	暗褐色	不透明	なし	なし	
Ch	3	1	1	10	灰色	不透明	暗灰色の細かい縞が不規則に入っている チャート特有のひび有り	なし	
Ch	4		2	1	暗褐色	不透明	なし	なし	
Ch	5	1	1	6	緑灰色	不透明	なし	なし	
Ch	999	2	5	5					
GT	999		1						
Ja	999		1	1					
Ob	1	6	1	14	黒色	透明	黒いスジが縞状に見られる	なし	SWID
Ob	2	2			黒色	半透明	細かい縞が節理にそって見られる	なし	SWHD
Ob	3	5			黒色	半透明	黒いスジが縞状に見られる	なし	WDTN
Ob	4	1	1		黒色	半透明	黒いスジが縞状に見られる	小さな球状が入る	WDKB
Ob	5	1	3	2	黒色	不透明	なし	なし	WDTK
Ob	6	2	1		黒色	透明	黒いスジが縞状に見られる	なし	不可
Ob	7	2	1	2	黒色	不透明	なし	なし	不可
Ob	8	1	3		黒色	不透明	なし	なし	WDTY
Ob	9	2	4		黒色	半透明	なし	なし	WDTY
Ob	10	27	4	5	黒色	半透明	黒いスジが縞状に見られる	なし	WDTY
Ob	11	3			黒色	半透明	黒いスジが縞状に見られる	なし	WDTY
Ob	12	1	2		黒色	半透明	黒いスジが縞状に見られる	なし	WDTY
Ob	13	38	5	1	黒色	透明	黒いスジが縞状に見られる	なし	WDTY
Ob	14	44	7	2	黒色	半透明	黒いスジが縞状に少し見られる	僅かに球状が入る	WDTY
Ob	15	66	7	2	黒色	透明	なし	なし	WDTY
Ob	16	60	6	5	黒色	透明	黒いスジが縞状に見られる	なし	WDTY
Ob	17	53	1		灰色	半透明	黒いスジが縞状に見られる	なし	WDTY
Ob	999	6	3	6					
Sa	1		2		灰色	不透明	黒い細いスジが不規則に見られる	なし	
Sa	999		3	3					
Se	999		1	5					
SS	1	6	1		淡黄色	不透明	なし	なし	
SS	2	3	4	10	灰白色	不透明	灰色の縞が見られる	なし	
SS	3		2		灰白色	不透明	なし	なし	
SS	4	2	1		灰黄色	不透明	なし	なし	
SS	999	6	3	2					
TS	1		3		灰白色	不透明	なし	なし	
TS	2		2		灰白色	不透明	なし	なし	
TS	999	3	1	3					
Tu	1		2		灰白色	不透明	なし	ガラスのような粒子が見られる 気泡の入り方は少なめである	
Tu	2		5	1	灰白色	不透明	なし	ガラスのような粒子が見られる 気泡は見られない	
Tu	3		2		灰白色	不透明	なし	非常に細かい気泡が少し見られる	
Tu	999		5	1					
Tu	9999	2							
安山岩	6		1						
安山岩	999		1						

第15表 東表H1地点母岩別資料分類基準表

## (2) 接合資料

17組44点の石器が接合している。最大接合数が5点が多くが2～3点の接合であった。そのため、石器製作を復元できるような接合資料はほとんど認められなかった。

接合資料の分布は図版79に示してある。

石器文化をまたぐ接合は認められなかった。

## 5 剥片剥離技術

目的剥片として石刃を代表とする縦長剥片と貝殻状剥片が認められる。特に縦長剥片剥離は特徴的で、本石器文化の特色といえる。

縦長剥片は大形のサイコロ状石核から剥離される場合もあるが、多くは剥片を素材とする板状剥片石核から剥離されている。大形剥片の打面等の切り立った側縁を打面として、その小口を打点とすることにより縦長剥片を複数剥離していく。剥離される剥片は打面が広く残り、分厚く反りが目立つものが多く、形状も大きさの斉一性もあまり高くない。

打面調整や稜上調整等の石核調整はほとんど行われないうである。

貝殻状剥片は、作業面を固定し打点を側縁にそって横に移動させる板状剥片石核と、90°単位の打面転移が繰り返されるサイコロ状の石核の2種から剥離されている。剥離された剥片の形状、大きさの斉一性は低い。

## 第3節 東裏H1II石器文化

## 1 東裏H1II石器文化の概要

## (1) 遺物の出土層位 (第10図・第16表)

伊勢見山から続く尾根上の背に近い部分に位置しているため、堆積は薄くV層の細分もできない状況であった。IV層も薄く上下の層との乱れも多少見られるため層の安定度は低い。

III層～V層から石器257点、礫129点が検出された。最も遺物が多いのはIV層で、次いでIII層となっており、生活面はIV層中にあると思われる。

## (2) 器種組成 (第17表)

石器257点の器種組成はナイフ形石器7点、台形石器8点、貝殻状刃器1点、搔器状石器1点、削器6点、2次加工のある剥片6点、微細剥離のある剥片1点、石刃5点、剥片164点、砕片30点、石核18点、斧形石

遺構	III	IV	Va	Vb	V	攪乱	不明	合計	比率
BL1	4	19	5	1	1	1		31	8.0%
BL2		11	1	1	5			18	4.7%
BL3	8	15	1	2	1			27	7.0%
BL4	4	6			1			11	2.8%
BL5	3	15			4			22	5.7%
BL6	5	27			2			34	8.8%
BL7	7	20	1	1	1			30	7.8%
BL8		12	1		6			19	4.9%
BL9		8		1	2			11	2.8%
BL10	7	28			4	1		40	10.4%
BL11	15	44			2			61	15.8%
BL12		6				1		7	1.8%
一括							1	1	0.3%
外	14	46		1	9	3	1	74	19.2%
合計	67	257	9	7	38	6	2	386	
比率	17.4%	66.6%	2.3%	1.8%	9.8%	1.6%	0.5%		

第16表 東裏H1II石器文化ブロック別出土層位組成

遺構・石材	ナイフ形石器	台形石器	貝殻状刃器	撿器状石器	撿器	彫器	2次加工のある削片	微細彫刻のある削片	石刃	剥片	砕片	石核	片形石器	原石	砥石	敲石	礫	合計	比率	
BL1							1	1	3	20	5						1	31	8.0%	
BL2		1								13	3	1						18	4.7%	
BL3										19	6	1					1	27	7.0%	
BL4						1	1			7							2	11	2.8%	
BL5	1									12	1	1	1			1	5	22	5.7%	
BL6		1					1			13	2	1	2				14	34	8.8%	
BL7	1		1	1						9	4	1				1	12	30	7.8%	
BL8	1									7	4	3				2	19	19	4.9%	
BL9		2			1		1			1	5	1						11	2.8%	
BL10		1						1	1	11	1	2	1	1	1		21	40	10.4%	
BL11	4				1		1			30	4	5					16	61	15.8%	
BL12							1			5								1	7	1.8%
一括										1									1	0.3%
外		3				3				12		2						54	74	19.2%
黒曜石		6	1	1	5		2			32	9	3						59	15.3%	
無斑晶質安山岩	5	1				1				98	20	9						134	34.7%	
珪質頁岩					1			1	1	5								8	2.1%	
玉髓										8								8	2.1%	
凝灰質頁岩						1	1		3	1								6	1.6%	
凝灰岩										9		4			1	1		15	3.9%	
緑色凝灰岩		1																1	0.3%	
チャート	2							1	1	7		1	1					13	3.4%	
砂岩										1	1				2	1		5	1.3%	
蛇紋岩										2	1		4					7	1.8%	
鉄石英										1								1	0.3%	
安山岩																1	128	129	33.4%	
合計	7	8	1	1	6	1	5	1	5	164	30	18	4	1	3	2	129	386		
比率	1.8%	2.1%	0.3%	0.3%	1.6%	0.3%	1.3%	0.3%	1.3%	42.5%	7.8%	4.7%	1.0%	0.3%	0.8%	0.5%	33.4%			

第17表 東裏H1II石器文化器種組成

器4点、原石1点、砥石3点、敲石2点となっている。

### (3) 石材組成 (第18表)

石器257点の石材の内訳は黒曜石59点、無斑晶質安山岩134点、珪質頁岩8点、玉髓8点、凝灰質頁岩6点、凝灰岩15点、緑色凝灰岩1点、チャート13点、砂岩5点、蛇紋岩7点、鉄石英1点、安山岩1点となっている。礫の石材は凝灰岩が1点あるが、それ以外はすべて多孔質の安山岩である。

## 2 遺構

### (1) 遺物の分布

伊勢見山尾根の中腹に12ヶ所のブロックが検出された。調査前はスキー場のゲレンデとして利用されており、遺跡としてはかなりの傾斜地に立地している。東裏H1II石器文化の分布域は隣接しており、尾根の下側にあたる。

礫群はないが礫の数は多く、ブロック内に石器に混ざって検出されるものが多い。また、ブロック外にも多く散在している。

### (2) ブロック

#### 1. 第1号ブロック (図版93)

VI JB04グリッドを中心として北西-南東に約7m、北東-南西に約6mの楕円形の広がりを持つ。東南東に第2号ブロックと第3号ブロックが位置している。東裏H1II石器文化の遺物分布域には最も近く隣接している。

石器30点、礫1点が出土した。出土層位はIII層-V層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種



	遺構	黒曜石	無斑晶質安山岩	珪質頁岩	玉髓	凝灰質頁岩	凝灰岩	緑色凝灰岩	チャート	砂岩	蛇紋岩	鉄石炭	安山岩	合計	比率
石器・雑放棄	BL1	5	17		2	3			1		1	1	1	31	8.0%
	BL2	2	16										1	18	4.7%
	BL3		26										1	27	7.0%
	BL4	4	4			1							2	11	2.8%
	BL5	11	4								1		6	22	5.7%
	BL6	7	7		1	2	1	1			2		13	34	8.8%
	BL7	11	5						1	1			12	30	7.8%
	BL8	2	8	2			2		1	2			2	19	4.9%
	BL9	4	1	1			4		1					11	2.8%
	BL10	1	9				3		2	1	3		21	40	10.4%
	BL11	2	24	4	4		3		7	1			16	61	15.8%
	BL12		4	1			1						1	7	1.8%
	一拵		1											1	0.3%
	外	10	8		1		1						54	74	19.2%
合計	59	134	8	8	6	15	1	13	5	7	1	129	386		
比率	15.3%	34.7%	2.1%	2.1%	1.6%	3.9%	0.3%	3.4%	1.3%	1.8%	0.3%	33.4%			
石器重量表	BL1	4.03	77.94		48.65	65.27			6.89		1.52	6.1		210.4	1.6%
	BL2	2.43	762.27											764.7	6.0%
	BL3		662.23											662.23	5.2%
	BL4	67.15	39.63			11.76								118.54	0.9%
	BL5	111.07	42.37								10.22	288.99		452.65	3.5%
	BL6	19.88	373.39		37.24	53.31		7.41			182.64			673.87	5.3%
	BL7	122.55	25.05						1.13	117.4				266.13	2.1%
	BL8	5.09	688	46.03			127.6		5.09	5250				6121.81	47.7%
	BL9	56.9	6.37	5.52			259.73		35.46					363.98	2.8%
	BL10	6.98	101.17				901.98		430.21	319.11	43.84			1803.29	14.1%
	BL11	12.91	437.84	39.89	44.78		77.99		131.24	18.82				763.47	6.0%
	BL12		14.2	35.14			3.61							52.95	0.4%
	一拵		147.99											147.99	1.2%
	外	57.67	338.37		13.89		17.52							427.45	3.3%
合計	466.66	3716.82	126.58	144.56	130.34	1388.43	7.41	610.02	5705.33	238.22	6.1	288.99	12829.5		
比率	3.6%	29.0%	1.0%	1.1%	1.0%	10.8%	0.1%	4.8%	44.5%	1.9%	0.0%	2.3%			
雑放棄表	BL1													0	0.0%
	BL3												70	70	0.1%
	BL4												4570	4570	4.2%
	BL5												3495	3495	3.2%
	BL6						6.7						37830	37836.7	34.4%
	BL7												19030	19030	17.3%
	BL8												740	740	0.7%
	BL10												6080	6080	5.5%
	BL11												5225	5225	4.8%
	BL12												460	460	0.4%
	外												32405	32405	29.5%
	合計	0	0	0	0	0	6.7	0	0	0	0	0	109905	109912	
	比率	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%		

第18表 東裏H1II石器文化石材組成

組成は2次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片1点、石刃3点、剥片20点、碎片5点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

## 2. 第2号ブロック (図版93)

VIJD06グリッドを中心として北-南に約2m、東-西に約4mの楕円形の広がりを持つ。西北西に第1号ブロック、南東に第3号ブロックが位置している。

石器18点が出土した。出土層位はIV層～V層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は台形石器1点、剥片13点、碎片3点、石核1点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

## 3. 第3号ブロック (図版93)

VIJF07グリッドを中心として北北東-南南西に約2m、東南東-西北西に約2mの円形の広がりを持つ。

北西に第1号ブロックと第2号ブロック、南東に第8号ブロックが位置している。

石器26点、礫1点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅴ層でⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は剥片19点、砕片6点、石核1点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

#### 4. 第4号ブロック (図版93)

VIQ12グリッドを中心として北西-南東に約6m、北東-南西に約3mの楕円形の広がりを持つ。北東に第5号ブロック、東南東に第6号ブロックが位置している。

石器9点、礫2点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅴ層でⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は削器1点、2次加工のある剥片1点、剥片7点となっている。石材は黒曜石、無斑品質安山岩が多用されている。

#### 5. 第5号ブロック (図版93)

VIS10グリッドを中心として北西-南東に約6m、北東-南西に約3mの楕円形の広がりを持つ。南西に第4号ブロック、南南東に第6号ブロック、東南東に第7号ブロックが位置している。

石器17点、礫5点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅴ層でⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点、剥片12点、砕片1点、石核1点、斧形石器1点、敲石1点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

#### 6. 第6号ブロック (図版94)

VIT13グリッドを中心として北西-南東に約6m、北東-南西に約5mの円形の広がりを持つ。西北西に第4号ブロック、北北西に第5号ブロック、北東に第7号ブロックが位置している。

石器20点、礫14点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅴ層でⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は台形石器1点、2次加工のある剥片1点、剥片13点、砕片2点、石核1点、斧形石器2点となっている。石材は安山岩が多用されている。

#### 7. 第7号ブロック (図版94)

VIJC11グリッドを中心として北-南に約6m、東-西に約6mの円形の広がりを持つ。西に第4号ブロック、北西に第5号ブロック、西南西に第6号ブロック、東北東に第8号ブロックが位置している。

石器18点、礫12点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅴ層でⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点、貝殻状刃器1点、搔器状石器1点、剥片9点、砕片4点、石核1点、敲石1点となっている。石材は安山岩、黒曜石が多用されている。

#### 8. 第8号ブロック (図版94)

VIJF10グリッドを中心として北北西-南南東に約8m、東北東-西南西に約10mの楕円形の広がりを持つ。北北西に第3号ブロック、西南西に第7号ブロック、南南東に第9号ブロックが位置している。遺物数が少なく散漫なブロックである。

石器17点、礫2点が出土した。出土層位はⅣ層～Ⅴ層でⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点、剥片7点、砕片4点、石核3点、砥石2点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

#### 9. 第9号ブロック (図版95)

VIJL13グリッドを中心として西北西-東南東に約7m、北北東-南南西に約5mの楕円形の広がりを持つ。北西に第8号ブロック、南西に第10号ブロック、南に第11号ブロックが位置している。

石器11点が出土した。出土層位はⅣ層～Ⅴ層でⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は台形石器2点、削器1点、2次加工のある剥片1点、石刃1点、剥片5点、石核1点となっている。石材は黒曜石、凝灰岩が多用されている。

## 10. 第10号ブロック (図版95)

VI JF15グリッドを中心として北北東-南南西に約8m、西北西-東南東に約7mの楕円形の広がりを持つ。北西に第7号ブロック、北北東に第8号ブロック、北東に第9号ブロック、東に第11号ブロック、東南東に第12号ブロックが位置している。

石器19点、礫21点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅴ層でⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は台形石器1点、石刃1点、剥片11点、砕片1点、石核2点、斧形石器1点、原石1点、砥石1点となっている。石材は安山岩が多用されている。

第11号ブロックと1点の接合資料を共有している。

## 11. 第11号ブロック (図版94)

VI JJ16グリッドを中心として北東-南西に約5m、北西-南東に約4mの円形の広がりを持つ。北に第9号ブロック、西に第10号ブロック、南東に第12号ブロックが位置している。

石器45点、礫16点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅴ層でⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器4点、削器1点、2次加工のある剥片1点、剥片30点、砕片4点、石核5点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

第10号ブロックと1点、ブロック外と1点の接合資料を共有している。

## 12. 第12号ブロック (図版95)

VI JL18グリッドを中心として西北西-東南東に約8m、北北東-南南西に約3mの楕円形の広がりを持つ。西北西に第10号ブロック、北西に第11号ブロックが位置している。

石器6点、礫1点が出土した。出土層位はⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は2次加工のある剥片1点、剥片5点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

## 3 遺物

## (1) ナイフ形石器 (図版96・報告番号1～7)

1・2は尖鋭な先端を持ち、縦長剥片を素材として、素材を石器の主軸と同一方向に用いるナイフ形石器である。1は基部周辺に正方向の加工が施されている。基部側に置かれた打面は広く残されている。左右対称形で基部は尖らず、先端はわずかに欠損している。2は2側縁に正方向の加工が施されている。基部側に置かれた打面は加工により除去されている。ほぼ左右対称形で基部は丸く、先端は尖鋭である。

3～5は尖鋭な先端を持ち、横長剥片を素材として、素材の剥離軸を石器の主軸に対して直交するように用いるものである。3・4は2側縁に正方向の加工が施されている。側縁に置かれた打面は加工により折断されている。左右非対称で先端側は切出状を呈していて基部は尖らない。5は先鋭な刃部を持つものの仲間としたが欠損しており、残存部には尖鋭な先端は残されていない。

6・7は先端付近を斜めに折断することにより尖鋭な刃部が作出されているナイフ形石器である。共に石刃状の縦長剥片を素材とし、石器の主軸と同一方向に用いられている。6の打面は基部側に、7の打面は先端側に置かれており、7の基部両側縁には加工が施されているが、欠損している。

## (2) 台形石器 (図版97・報告番号8～15)

8～13は貝殻状剥片を石器の主軸に直交するように用いて、素材を折断する強い剥離により両側縁をノッチ状に作出している台形石器である。そのため、刃部と左右側縁の境は錐のように尖鋭に尖っている。加工は正方向の強い剥離が主体で、基部断面形が角柱状を呈するものが多い。9の加工は比較的平坦で左側縁の加工は反方向のものとなっている。刃部は8～11がほぼ平ら、12・13が切出状を呈している。

14は貝殻状剥片を石器の主軸と直交するように用いて、打面側を正方向の加工により折断しているが、

反対側の側縁は折れ面となっている。

15は欠損部位が多く全体像が見えないもので、ナイフ形石器や削器等の破片の可能性も考えられる。

(3) 削器 (図版98・報告番号16~18)

16~18は貝殻状剥片および寸詰まりの縦長剥片の一部に加工を施して刃部を作出している削器である。加工および加工部位は様々で、形態の斉一性は低い。

16は黒曜石の貝殻状剥片を素材としている。素材の末端および打面側には正方向の強・中剥離が施され掻器的な厚い刃部が作出されている。打面はこの加工により除去されている。また、左側縁には反方向の平坦な加工が見られ、右側縁に残されている素材そのものの鋭い縁辺には微細剥離痕が認められる。

17は寸詰まりの縦長剥片を素材としている。部分的に正方向もしくは反方向の弱剥離が見られる。

18は黒曜石の寸詰まりの縦長剥片を素材としている。左側縁には正方向の平坦剥離によりノッチ状の刃部が作出されており、打面縁の上側縁には正方向の平坦剥離により厚い刃部が作り出されている。また、下側縁には反方向の平坦剥離が見られるが、剥離の開始部は潰れている。

(4) 彫器 (図版98・報告番号20)

20は凝灰質頁岩の縦長剥片を素材とした彫器である。素材の右側縁を打面、打面を作業面に設定をして極状剥離が行われている。その後、極状剥離面から背面全体に平坦剥離を施しており、この極状剥離面を打面として右側縁にも極状剥離を施している。器体下半部は欠損している。

(5) 微細剥離のある剥片 (図版98・報告番号19)

19は微細剥離のある横長剥片である。背面末端部にはボシ面が見られる。

(6) 石刃 (図版98~99・報告番号21~24)

5点を石刃として認定したが、打面調整、頭部調整、稜上調整等の石核調整は見られない。打面は単刺離面が多い。器体は比較的厚く、反りも大きいものが見られる。

23・24は接合する。

(7) 石核 (図版99・報告番号25~26)

18点の石核が出土しているが、明らかな石刃石核はない。

25は凝灰岩の石核である。主要な作業面は図上正面となっており、上下に打面を設定し剥離を行っている。残されている剥離痕には縦長剥片は見られないが、縦長剥片が剥離されていたと思われる。打面調整等は見られない。

26は無斑品質安山岩の石核である。礫面形状から無斑品質安山岩の亜角礫を素材としていることがわかる。図上上部を打面、正面を作業面に固定して剥離が行われている。打面調整、頭部調整は認められない。剥離された剥片は幅広の縦長剥片と思われる。

(8) 斧形石器 (図版100~101・報告番号27~30)

27は全体が2次加工による剥離面で覆われているため素材の状況がわからない。左右側縁および基部は正反方向の平坦剥離が施されている。左右側縁には剥離が潰れており切り立っている。研磨は表裏両面に認められ、刃部に対してほぼ垂直方向の線状痕が認められる。刃部は欠損後に再加工したようで、刃部縁辺に研磨痕は認められない。平面形はわらじ形を呈している。

28は礫面を持つ蛇紋岩の剥片を素材としている。左右側縁は正反方向の平坦剥離が施されている。背面には礫面が見られ、刃部から基部付近にまで研磨が見られる。裏面にも刃部から胴部にかけて研磨が認められる。研磨による線状痕は刃部にほぼ直交する方向で見られる。平面形は左右対称のわらじ形を呈し、刃部は丸く狭い。

29の右側縁の大部分は折れ面となっている。刃部にはこの折れ面を切る加工が施されていることから、

この斧形石器は再加工品であることが予想される。研磨は表裏両面の刃部付近に見られるが、裏面には基部にも研磨が認められる。刃部は右側に最大長が偏っている。

30は斧形石器の刃部破片と思われるが、製品中に同一母岩の斧形石器はない。

#### (9) 敲石 (図版101・報告番号31)

31は板状の直角礫を用いた敲石だが、敲打による潰れ以外にも側縁からの平坦剥離も見られることから、単純な敲石以外の機能も考えられようか。

#### (10) 砥石 (図版102・報告番号32~33)

砂岩製の砥石2点が出土した。扁平板状の円礫の片面に1条の砥面が見られる。33には凹面が形成されているが、32の使用頻度は低いようで凹面はほとんどない。32は砥面を上、33は砥面を下にした状態で出土した。

### 4 母岩別資料と接合資料

#### (1) 母岩別資料 (第16表)

東裏遺跡 H1 I 石器文化の母岩別資料の記述を参照。

#### (2) 接合資料

5組12点の石器が接合しているのみで、石器製作を復元できるようなものは認められなかった。

接合資料の分布は図版92に示してある。

### 5 剥片剥離技術

目的剥片には縦長剥片と貝殻状剥片が認められる。

縦長剥片を目的とした石核数が少ないため、その剥離技術の復元は困難となっている。石刃やナイフ形石器の観察から、打面調整、頭部調整、稜上調整等の石核調整は認められない。

貝殻状剥片についても石核数が少ない状況であるが、サイコロ状、板状、チョッピングツール状の石核が確認できる。

## 第4節 東裏 H1Ⅲ石器文化

### 1 東裏 H1Ⅲ石器文化の概要

#### (1) 遺物の出土層位 (第10図・第19表)

伊勢見山から続く尾根上の背に近い部分に位置しているため、堆積は薄くV層の細分もできない状況であった。IV層も薄く上下の層との乱れも多少見られ安定度は低い。

Ⅲ-IV層より石器180点、礫12点が検出された。最も遺物が多いのはⅢ層だが、層の安定度が低いため、本来の生活面がⅢ層中にあるかはわからない。

#### (2) 器種組成 (第20表)

石器180点の器種組成はナイフ形石器4点、槍先形尖頭器1点、搔器1点、削器7点、楔形石器1点、2次加工のある剥片12点、微細剥離のある剥片3点、石刃2点、剥片114点、砕片

遺構	Ⅲ	Ⅳ	合計	比率
BL1	2	3	39	8.3%
BL2	7	3	22	4.7%
BL3	30	9	87	18.5%
BL4	14	5	280	59.4%
BL5	6	12	17	3.6%
BL6	66	26	7	1.5%
一括		2	2	0.4%
外	2	5	17	3.6%
合計	127	65	471	
比率	27.0%	13.8%		

第19表 東裏 H1Ⅲ石器文化ブロック別出土層位組成

第3章 東表遺跡

遺構・石材	ナイフ形石器	槍先形尖頭器	播磨	削器	楔形石器	2次加工のある削片	微細刃維のある削片	石刃	刮片	砕片	石核	磁石	礫	合計	比率
BL1									5					5	2.6%
BL2				2		1	1	1	5					10	5.2%
BL3			1	2		4	1	1	21	3	2	2	2	39	20.3%
BL4				1		1			13		4			19	9.9%
BL5				1	1	1			11	1	3			18	9.4%
BL6		2	1		1	3	1		56		16	2	10	92	47.9%
一括		1												1	0.5%
外		1				2			3	1	1			8	4.2%
黒曜石	1	1	1	3		8	1		28	3	11			57	29.7%
無珪品質安山岩	3			4		4		1	51	1	7			71	37.0%
珪質頁岩								1	11		3			15	7.8%
珪質凝灰岩							1		1					2	1.0%
玉髄							1							1	0.5%
凝灰質頁岩									3					3	1.6%
凝灰岩											1	1		2	1.0%
チャート					1				19	1	4			25	13.0%
砂岩												3		3	1.6%
鉄石英									1					1	0.5%
安山岩													12	12	6.3%
合計	4	1	1	7	1	12	3	2	114	5	26	4	12	192	
比率	2.1%	0.5%	0.5%	3.6%	0.5%	6.3%	1.6%	1.0%	59.4%	2.6%	13.5%	2.1%	6.3%		

第20表 東表H1 III石器文化器種組成

遺構	黒曜石	無珪品質安山岩	珪質頁岩	珪質凝灰岩	玉髄	凝灰質頁岩	凝灰岩	チャート	砂岩	鉄石英	安山岩	合計	比率
BL1		2	1			1		1				5	2.6%
BL2	4	4	1		1							10	5.2%
BL3	9	20	1	1			1	4	1		2	39	20.3%
BL4	7	3	5			2		2				19	9.9%
BL5	4	8				1		5				18	9.4%
BL6	27	32	6	1				13	2	1	10	92	47.9%
一括		2										2	1.0%
外	6		1									7	3.6%
合計	57	71	15	2	1	3	2	25	3	1	12	192	
比率	29.7%	37.0%	7.8%	1.0%	0.5%	1.6%	1.0%	13.0%	1.6%	0.5%	6.3%		
BL1		33.21	60.34			28.92		24.53				147	6.4%
BL2	14.96	35.37	4.09		4.8							59.22	2.6%
BL3	36.4	219.11	7.35	26.42			39.55	71.97	125.84			526.64	23.0%
BL4	29.8	59.12	53.1			49.5		12.19				203.71	8.9%
BL5	17.51	189.95					15.62	35.66				258.74	11.3%
BL6	122.59	480.31	101.16	6.16				248.72	66.8	3.28		1029.02	44.9%
一括		12.94										12.94	0.6%
外	31.89		23.92									55.81	2.4%
合計	253.15	1030.01	249.96	32.58	4.8	78.42	55.17	393.07	192.64	3.28	0	2293.08	
比率	11.0%	44.9%	10.9%	1.4%	0.2%	3.4%	2.4%	17.1%	8.4%	0.1%	0.0%		
BL3												0	0.0%
BL6											1923.2	1923.2	100.0%
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1923.2	1923.2	
比率	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%		

第21表 東表H1 III石器文化石材組成

5点、石核26点、敲石4点となっている。

### (3) 石材組成 (第21表)

石器180点の石材の内訳は黒曜石57点、無斑晶質安山岩71点、珪質頁岩15点、珪質凝灰岩2点、玉髄1点、凝灰質頁岩3点、凝灰岩2点、チャート25点、砂岩3点、鉄石英1点となっている。礫の石材はすべて多孔質の安山岩である。

## 2 遺構

### (1) 遺物の分布

伊勢見山尾根の中腹に6ヶ所のブロックが検出された。調査前はスキー場のゲレンデとして利用されており、遺跡としてはかなりの傾斜地に立地している。

礫群はなく礫の数も少ない。

### (2) ブロック

#### 1. 第1号ブロック (第104図)

VII FF17グリッドを中心として東北東-西南西に約6m、北北西-南南東に約4mの楕円形の広がりを持つ。東南東に第2号ブロック、東北東に第3号ブロックが位置している。

石器5点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅳ層でⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は剥片5点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

接合資料の共有はない。

#### 2. 第2号ブロック (第104図)

VII FJ18グリッドを中心として北東-南西に約5m、北西-南東に約3mの楕円形の広がりを持つ。西北西に第1号ブロック、北東に第3号ブロック、南東に第4号ブロックが位置している。

石器10点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅳ層でⅢ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は削器2点・2次加工のある剥片1点・微細剝離のある剥片1点・石刃1点・剥片5点となっている。石材は黒曜石、無斑晶質安山岩が多用されている。

接合資料の共有はない。

#### 3. 第3号ブロック (第105図)

VII FM16グリッドを中心として北東-南西に約8m、北西-南東に約7mの円形の広がりを持つ。南西に第2号ブロック、南南西に第4号ブロック、南東に第6号ブロック、東北東に第5号ブロックが位置している。

石器37点、礫2点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅳ層でⅢ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は搔器1点・削器2点・2次加工のある剥片4点・微細剝離のある剥片1点・石刃1点・剥片21点・砕片3点・石核2点・敲石2点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

接合資料の共有はない。

#### 4. 第4号ブロック (第104図)

VII KL01グリッドを中心として東北東-西南西に約8m、北北西-南南東に約5mの楕円形の広がりを持つ。北北西に第2号ブロック、北北東に第3号ブロック、北東に第5号ブロック、東に第6号ブロックが位置している。

石器19点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅳ層でⅢ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は削器1点・2次加工のある剥片1点・剥片13点・石核4点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

接合資料の共有はない。

### 5. 第5号ブロック (第104図)

VII FS15グリッドを中心として北西-南東に約8m、北東-南西に約4mの楕円形の広がりを持つ。西南西に第3号ブロック、南西に第4号ブロック、南南西に第6号ブロックが位置している。

石器18点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅳ層でⅣ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は削器1点・楔形石器1点・2次加工のある剥片1点・剥片11点・砕片1点・石核3点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

接合資料の共有はない。

### 6. 第6号ブロック (第105図)

VII KS01グリッドを中心として北北西-南南東に約12m、東北東-西南西に約10mの楕円形の広がりを持つ。北西に第3号ブロック、西北西に第4号ブロック、北に第5号ブロックが位置している。

石器82点、礫10点が出土した。出土層位はⅢ層～Ⅳ層でⅢ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器2点・槍先形尖頭器1点・削器1点・2次加工のある剥片3点・微細剝離のある剥片1点・剥片56点・石核16点・戴石2点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

接合資料の共有はない。

## 3 遺物

### (1) ナイフ形石器 (図版106・報告番号1～4)

1は尖鋭な先端を持ち黒曜石の縦長剥片を素材としている。石器の主軸と素材の剝離軸を同一方向に用いて打面を基部側に置いている。右側縁全体と左側縁下半に正方向のブランディングが施され、尖鋭な先端と丸い基部を作出している。平面形は左右ほぼ対称形で細長い柳葉形を呈している。

2は尖鋭な先端を持ち無斑晶質安山岩の横長剥片を素材としている。石器の主軸と素材の剝離軸を直交するように用いている。素材の打面側となる右側縁に正方向の中、強剝離を施して打面を除去しており、左側縁下半部にも正方向の弱剝離が施されている。平面形は左右非対称の切出形を呈している。

3・4はいわゆる「国府型ナイフ形石器」である。3は無斑晶質安山岩の横長剥片を石器の主軸と直交するように用いている。素材打面側である右側縁全体に正方向の強剝離を施して打面を除去している。また、左側縁下半には正方向の平坦剝離も見られる。平面形は左右ほぼ対称で細長い形状を呈しており、先端は尖り基部端は欠損している。焼けているようで表面には細かいひびが見られる。

4は無斑晶質安山岩の横長剥片を石器の主軸と直交するように用いている。素材打面側である右側縁全体に正方向の強剝離を施して打面を除去している。平面形は左右非対称で刃部が弧状を呈する細長い半月形を呈しており、先端と基部は尖っている。風化が激しく稜線はとろけている。

### (2) 槍先形尖頭器 (図版106・報告番号5)

5は黒曜石の寸詰りの剥片を石器の主軸と同一方向に用いており、打面を基部側に置いている。左右側縁に正方向の中剝離を施して尖鋭な先端を作出している。基部にあたる素材打面は折れており先端は尖る。平面形は三角形を呈する。槍先形尖頭器というよりは角錐状石器に類する石器なのだろうか。

### (3) 削器 (図版106・報告番号6～8)

6は黒曜石の寸詰りの剥片を素材としている。素材末端部に正方向の強剝離を施してノッチ状の刃部を作出している。

7は無斑晶質安山岩の貝殻状剥片を素材としている。左右側縁に正方向の強剝離を施して、鋸歯状の刃部を作出している。下端はやや尖る。

8は黒曜石の寸詰りの剥片を素材としている。右側縁に平坦剝離を施して刃部を作出している。



## (4) 石核 (図版107・報告番号9)

9は無珣品質安山岩の剥片を素材とした石核である。素材剥片の背面にもポジ面が見られる。貝殻状剥片および横長剥片が剥離されているが、有効な剥片の剥離痕はない。

## (5) 剥片 (図版107・報告番号10)

10は凝灰岩の縦長剥片である。背面にはポジ面が見られることから、剥片素材の石核の切り立った側縁の小口から何枚かの縦長剥片を剥離したことがわかる。

## 4 母岩別資料と接合資料

## (1) 母岩別資料 (第16表)

東裏遺跡 H1 I 石器文化の母岩別資料の記述を参照。

## (2) 接合資料

接合作業を行ったが、接合する資料はなかった。

## 5 剥片剥離技術

目的剥片には縦長剥片と貝殻状剥片が認められる。また、国府型ナイフ形石器の存在から、瀬戸内技法の存在も確認できるが、遺跡内には瀬戸内技法による剥片剥離の痕跡は残されていない。

縦長剥片剥離には報告番号10の剥片に見られるような、剥片の打面等の切り立った側縁の小口から剥離を行うものが認められた。石刃石核は認められない。

石核26点のほとんどが貝殻状剥片を目的とするもので、サイコロ状、板状、チョッピングツール状の石核が確認できるが、剥離が進み小形化しているものが多い。

## 第5節 第2地点

## 1 第2地点の概要

## (1) 遺物の出土層位 (第11～13図・第22表)

自然流路の影響のため、信濃町の標準層序との対比ができない部分が多い。対比できたものについてはII～VI層の層名を与えているが、これに関しても流路の影響を受けている可能性があり、遺物本来の層とは言い切れない状況である。

不明となっているほとんどの遺物が自然流路内の砂礫層から出土している。この層では後期旧石器時代初頭～縄文時代早期の遺物が同一レベルで出土するため、層位的な年代決定ができない状況となっている。

1～3の層名が与えられているものは1995年調査時に出土した遺物でNR2の南東部からNR5を中心とした範囲にあたる。1層は黒色土で標準層序のII層に対比できる。2層は自然流路内の砂礫層に、3層はその下部のシルト層でロームの再堆積層と考えられる。

したがって遺物の大部分が自然流路内の砂礫層から出土したこととなり、層位的な年代は与えられないこととなる。

## (2) 器種組成 (第23表)

石器6542点が出土した。内訳は槍先形尖頭器30点、有茎尖頭器1点、剥片尖頭器2点、ナイフ形石器116点、台形石器18点、貝殻状刃器7点、彫器75点、削片10点、搔器243点、搔器状石器2点、削器225点、揉錐器15点、角錐状石器5点、楔形石器17点、2次加工のある剥片166点、微細剥離のある剥片229点、石

第3章 東義遺跡

遺構	II	III	IV	V	VI	1	2	3	攪乱	不明	合計	比率
BL1		70								208	278	4.2%
BL2	5	23	4							303	335	5.1%
BL3	18	56	5							3621	3700	56.5%
BL4	65	159								48	272	4.2%
BL5		47								174	221	3.4%
BL6	53	237		2	1					53	346	5.3%
BL7	6	65					1			307	379	5.8%
BL8	3									138	141	2.2%
BL9						15	18	33	10	1	77	1.2%
BL10	56	106	33			12	38	10	1	35	291	4.4%
BL11						274	200		4		478	7.3%
一括										24	24	0.4%
外							1				1	0.0%
合計	206	763	42	2	1	301	258	43	15	4912	6543	
比率	3.1%	11.7%	0.6%	0.0%	0.0%	4.6%	3.9%	0.7%	0.2%	75.1%		

第22表 東義H2地点ブロック別出土層位組成

遺構・石料	焼先形尖頭器	有茎尖頭器	羽片尖頭器	ナイフ形石器	合形石器	只殻状刃器	彫器	磨片	磨器	棒状石器	磨器	杖状石器	角筒状石器	磨形石器	2次加工のある磨片	微細何れのものも磨片	刃片	針片	石核	斧形石器	押形石器	磨器	磨石	緑石破片	原石	合計	比率	
BL1			10			2	9	5							6	10	4	169		55				7	1	278	4%	
BL2	1		6				1	14	19						9	5	6	231	6	45				1		335	5%	
BL3	18	1	38	4	54	4	184	134	8	4	9	85	82	194	2534	95	227						4	21	3700	57%		
BL4	2		4			7	1	9	11	2		1	6	12	20	178	7	11						1		272	4%	
BL5	1		5		3	1	14	12		1	2	4	6	12	134	16	8							1	1	221	3%	
BL6	2		7	5	3	1	5	19				3	7	20	7	219	29	19		2			2		2	346	5%	
BL7	1	1	6	2	4	2	2		9	2		1	13	33	1	241	31	26					3		2	379	6%	
BL8	1		1	8	2	1	3		4					5	7	4	94	7	4							141	2%	
BL9			1						4					6	4	1	48	3	9					1		77	1%	
BL10	1		16	3	2	1		1	3	2		1	10	29	2	177	22	15	2				2		2	291	4%	
BL11			14	2	5		2	1	13	1			15	18	4	284	83	25	5	3			3			478	7%	
一括			1				1	1							3		10	1	2					1		23	0%	
外																	1									1	0%	
黒曜石	18	1	51	8	3	6	5	52	1	36	3	7	47	83	11	332	104	43								811	12%	
無稜晶質火山岩	6		38	2	1	31	4	122	124	3	2	2	67	47	199	2504	105	188					3	2		3448	53%	
球質頁岩	2	1	12	2	1	9		8	8	1			4	11	8	69	1	32								149	2%	
珪質凝灰岩			1					1								4	8	1								15	0%	
玉髓			1	2	1			1					1	2	2	16	3	1								30	0%	
凝灰質頁岩			1					2	2						2	11	4									22	0%	
凝灰岩	1		9	1	7	7	7	24					12	20	7	366	9	42	2				7	1		515	8%	
緑色凝灰岩					1			1									1	2								4	0%	
チャート	3	1	2	2	1	18	45	1	24	8	3	8	31	61	26	912	64	143				2	1	5	1361	21%		
砂岩																	7									19	0%	
蛇紋岩																											28	0%
石英														1			2	1								4	0%	
水晶																		1						1		2	0%	
鉄石英			1	1			1	4		5					2	3	2	22	2	3						46	1%	
流紋岩															1												1	0%
安山岩							1	1									65	2	5							12	86	1%
頁岩						3			1								5	1									10	0%
合計	30	1	2	116	18	7	75	10	243	2	225	15	5	17	166	229	253	4316	300	445	9	3	3	41	1	6	6543	
比率	0%	0%	0%	2%	0%	0%	1%	0%	4%	0%	3%	0%	0%	0%	6%	3%	4%	4%	96%	5%	7%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	

第23表 東義H2地点器種組成

	遺構	黒曜石	無班品質安山岩	斑状頁岩	珪質凝灰岩	玉髓	凝灰質頁岩	凝灰岩	緑色凝灰岩	チャート	砂岩	蛇紋岩	石英	水晶	鉄石英	流紋岩	安山岩	頁岩	合計	比率	
石器・遺構	BL1	10	104	9		3	1	52		79	7				7		5	1	278	4.2%	
	BL2	15	196	8	1	3	1	23	1	80	1				1		4	1	335	5.1%	
	BL3	249	2569	44	2	13	13	193		546	14				25		37	4	3700	36.6%	
	BL4	31	159	6		1		9		57							8	1	272	4.2%	
	BL5	39	96	15	1		2	18	1	38	2				3		6		221	3.4%	
	BL6	105	79	5	3	1		63		77			1		1		8	3	346	5.3%	
	BL7	47	48	6	2	2	1	32		210	2				3	1	4		379	5.8%	
	BL8	49	14	28	1			12		34					1		1		141	2.2%	
	BL9	6	16	4				18	2	28			1		1		1		77	1.2%	
	BL10	60	69	10	2			25		118			2		2		2		291	4.4%	
	BL11	191	102	14	3	7	2	50		86	2	8	1	1	2		9		478	7.3%	
一併	9	5							7					1			1		23	0.4%	
外									1										1	0.0%	
合計	811	3448	149	15	30	22	515	4	1361	28	10	4	2	46	1	86	10	6542			
比率	12.4%	52.7%	2.3%	0.2%	0.5%	0.3%	7.9%	0.1%	20.8%	0.4%	0.2%	0.1%	0.0%	0.7%	0.0%	1.3%	0.2%				
石器重量比	BL1	76.91	2265.2	355.78		15.23	73.33	1589.7		1380.11	1168				129.99		254.06	26.84	7332.9	6.6%	
	BL2	74.34	3292.5	80.14	31.51	20.29	53.96	1025.1	185.78	1163.8	76.55				19.54		366.52	8.21	6398.2	5.8%	
	BL3	1225.03	36984.3	657.43	28.65	100.26	650.51	5629.5		6346.1	2167.3				312.58		4979.5	43.96	62123	55.9%	
	BL4	149.03	2428.8	43.94		17.9		79.09		579.07								190.21	7.4	3495.5	3.1%
	BL5	149.21	994.99	166.4	6.43		25.06	311.1	13.25	671.04	54.22				7.43		74.64		2467.8	2.5%	
	BL6	335.31	1213.3	24.7	1.56	8.93		3703.2		536.81			4.75		11.54		192.26	61.53	6090.9	5.5%	
	BL7	244.61	1198.7	70.97	8.93	4.8	10.29	1862.7		2213.1	125.37		2.68		37.22	37.89	14.92		5830.7	5.2%	
	BL8	217.28	86.61	386.21	1.48		7.76	158.79		262.21					4.91		7.11		1141.4	1.0%	
	BL9	33.09	223.28	426.77				451.25	43.44	481.58			0.21		4.89		99.38		1763.9	1.6%	
	BL10	384.72	2074	124.73	18.63		3.73	416.89		793.07		423.56			3.45		493.42		4736	4.3%	
	BL11	1023.7	3036.2	143.98	9.45	48.01	15.71	1096		566.3	869.55	554.46	24.19	0.14	12.7		2041.2		9441.6	8.5%	
一併	40.91	34.74							81.43					22.35				117.5	296.93	0.3%	
外									21.12										21.12	0.0%	
合計	3956.2	56832	2480.2	100.64	216.42	840.45	16332	242.47	15096	4461	978.02	31.23	22.49	539.35	37.89	8831.3	147.94	111145			
比率	3.6%	51.1%	2.2%	0.1%	0.2%	0.8%	14.7%	0.2%	13.6%	4.0%	0.9%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	7.9%	0.1%				

第24表 東裏H2地点石材組成

刃255点、剥片4316点、砕片300点、石核445点、斧形石器9点、斧形石器破片3点、礫器5点、敲石41点、敲石破片1点、原石6点となっている。

道具としての機能を持つ製品が全体の3割近くあり非常に高い割合となっている。また、砕片数が300点と少なく、剥片類も調整剥片類よりも、道具としての機能が考えられるものや石器の素材となりうるものが目立つことから、一般的な石器製作の痕跡を残すブロックとは様相が異なっている。ただし、砕片の少なさは流路の影響により流されたことも考えられる。

礫については自然流路内に大量に存在していた。そのため、そのほとんどは自然状態で存在するもので、人為的持ち込みは想定できないもののため、遺物として扱わないこととした。この自然礫のほとんどが、多孔質の安山岩である。

### (3) 石材組成 (第24表)

数量的に最も多いのは無班品質安山岩で全体の約5割となっている。次いでチャートが約2割、黒曜石が1割強となっている。重量的にも無班品質安山岩が約5割を占めるが、黒曜石は小形品が多いために重量比は低い。

## 2 遺構

### (1) 遺物の分布

遺物の多くは自然流路内の砂礫層から出土している。この砂礫層は2次堆積層と考えられているため、石器は2次的に動いていることが考えられる。

しかし、遺物を観察すると、遺物の摩滅はあまりなくローリングを受けていると判断できるものは少ない。また、遺物分布にはブロックの様な粗密が見られ、場所により石器、石材組成に偏りがあり、石器の接合関係に法則性が認められる。これらのことを考慮すると遺物は2次的に動いていることは否定できないまでも、大きくは移動されていないということがいえよう。また、流路外にブロックがあったと考えるには流路外の遺物密度が低いことから、ブロックは流路内部に形成されたと考えるのが妥当と思われる。

## (2) 自然流路

あくまで、自然の作用によってできた流路と考えられるが、ブロック配置と流路には強いつながりが認められることから、遺構同様の扱いをすることとした。

### 1. 第1号流路 (NR1)

V VグリッドからVI Bグリッドにかけて、北北西から南南東に向かって流れる。南端でNR2と交わるが、土層断面からNR2に切られていることが明らかとなっている。最上流部はV V8グリッド付近でNR2と重なってしまいはっきりしない。第8号ブロックのほぼ全部、第6号ブロックの南隅、第10号ブロックの北隅が分布している。

大きさは長さ約30m、幅5m、深さ30cmで底面はほぼ平である。東縁には人頭大の礫が流路に崩れかかるように散在している。この礫に混じて遺物が出土している。

覆土の堆積状況は上位より柏原黒色火山灰層(第12図、断面3、1層)、砂礫層(同11層)、水成堆積と思われるシルト層で、遺物は約20cmある砂礫層から出土しており、下位のシルト層からの遺物の出土はない。

### 2. 第2号流路 (NR2)

V V、V W、VI B、VI Cグリッドにまたがって、北から南に向かって流れている。調査区南でNR1と交わるが、土層断面(第13図、断面4)からNR1を切っていることが明らかとなっている。最上流部はV Qグリッド内にある湧水地点となっているが、NR4、NR1の上流部と一体化しており、流路の境界がはっきりしない。湧水点がNR4上流部からNR2上流部の100m前後の幅を持っていたことが予想される。

第6号、第10号ブロックの大半、第9号ブロックのほぼ全体、第7号ブロックの東側の分布と重なっている。

調査した大きさは長さ約66m、幅12mで、流路の北側は底部が深く抉られ、東側で浅く、南側で深くなっている。また、山際の東側には断層があり低くなっているが、断層下にも流路跡が残されているために、断層形成以前にすでに流路があったことが確認されている。

覆土の堆積状況(第13図、断面4)は上位より1層表土、2層柏原黒色火山灰層、3・4層砂礫層となつて15・18層泥炭層となっており、3・4層の砂礫層中から拳大の礫と共に遺物が出土している。15層の中間には黄ゴマ(大山倉吉テフラ)が確認されている。

### 3. 第3号流路 (NR3)

V P、V U、V Vグリッドにまたがって、北北西から南南東に向かって流れているが、上下流の両端とも調査範囲外へと続いている。V VII、I6グリッド付近でNR4と交わっているが、底面の高低差が1.5mとNR3のほうが深くなっている。両者の切りあいはっきりしないことから、同時存在でNR4がNR3に合流していたと考えられる。水源は他の自然路から北に離れた調査区の伊勢見山裾にあることが予想される。

第1～3号、第5号ブロックのほとんどの部分が重なって分布している。

調査範囲での流路の大きさは長さ約68m、幅16mで、今回検出された自然流路中最も大規模なものとなっている。底部はU字形をしており、(第12図、断面3)ではオーバーハングも見られる。

覆土の地積状況(第12図、断面3)は上位より1層柏原黒色火山灰層、2層砂礫層、3層シルト層となっており、2層の砂礫層中から拳大の礫を伴い約4000点の石器が出土している。この砂礫層は上流へ行く程薄くなり、それに伴い礫と石器も減少する。

流路底から約30cm上にあたる1層中より、縄文時代早期末葉の条痕文系土器が石皿と共に面的に出土している。このことから、縄文時代早期末葉には自然流路の埋没が始まっていたことが確認できる。

#### 4. 第4号流路 (NR4)

V Vグリッド内を北から南に向かって流れている。V V11、16グリッド付近でNR3と交わっているが、底面の高低差が1.5mとNR3のほうが深くなっている。両者の切りあいははっきりしないことから、同時存在でNR4がNR3に合流していたと考えられる。上流部はNR2の上流部と一緒にしている。水源はNR2とほぼ同じと考えられる。

第4号ブロックのほとんどの部分が重なって分布している。

調査範囲での流路の大きさは長さ約17m、幅がNR3との合流部が8m、中央が3mで、今回検出された自然流路中最も小規模なものとなっている。底部はU字形を呈している。

覆土の地積状況(第12図、断面3)は上位より1層柏原黒色火山灰層、2層と、8層が砂層となっており砂層中から石器が出土しているが、他の流路とは異なり礫が伴わない。

#### 5. 第5号流路 (NR5)

VICグリッド内を東北東から西南西に向かって流れている。V Bグリッドとの境界付近でNR2と合流している。上流はそのまま水源と考えられる山裾に向かっていて、NR2より速なる断層が存在する。第13図、断面6で断層の断面を確認することができるが、断層が水をせき止めた影響からか泥炭層が見られる。この泥炭層の下にはシルト層があり、流路の痕跡が残されていることから断層以前にNR5が存在していたことが確認できる。

第11号ブロックの北半分の分布が重なっている。

覆土の地積状況(第13図、断面5)は1層柏原黒色火山灰層、2層砂礫層、3層シルト層となっている。遺物は礫を伴い2層から検出される。

### (3) ブロック

#### 1. 第1号ブロック (図版112)

NR3内のV PI07グリッドを中心として北-南に約23m、東-西に約8mの楕円形の広がりを持つ。南南東に第2号ブロックが位置しているが、ブロック間の遺物空白部は試掘調査によるトレンチ跡で、本来は一連に連なっていたと考えられる。

石器278点が出土した。出土層位は不明が多いが、その大部分は流路底に堆積する砂礫層である。器種組成はナイフ形石器10点・彫器2点・搔器9点・削器5点・2次加工のある剥片6点・微細剥離のある剥片10点・石刃4点・剥片169点・石核55点・敲石7点・敲石破片1点となっている。石材は無疵品質安山岩が多用されている。

基部加工のナイフ形石器が特徴的に存在し、槍先形尖頭器が組成しないことからV a-IV層の時期に相当しようか。

第2号ブロックと2点、第3号ブロックと2点の接合資料を共有している。

#### 2. 第2号ブロック (図版113・114)

NR3内のV PL16グリッドを中心として北北東-南南西に約19m、西北西-東南東に約16mの楕円形の広がりを持つ。NR3の上流にあたる北北西に第1号ブロック、同下流の南南東に第3号ブロックが接している。

石器335点が出土した。出土層位は不明が多いが、その大部分は流路底に堆積する砂礫層である。器種組成は槍先形尖頭器1点・ナイフ形石器6点・削片1点・搔器14点・削器10点・2次加工のある剥片9点・微細刻離のある剥片5点・石刃6点・剥片231点・砕片6点・石核45点・敲石1点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

基部加工のナイフ形石器が特徴的で、第1号ブロックとの共通点も多い。槍先形尖頭器が組成するが、その特徴は隣接する第3号ブロックのものと同通することから、第3号ブロックからの混入と考えられよう。これらのことを考慮すると本ブロックはVa~IV層の時期に属すると思われる。

第1号ブロックと2点、第3号ブロックと6点の接合資料を共有している。

### 3. 第3号ブロック (図版113~122)

NR3内のV UQ05グリッドを中心として北北西-南南東に約27m、東北東-西南西に約17mの楕円形の広がりを持つ。NR3の上流の北北西に第2号ブロック、北東にあるNR4との合流地点には第4号ブロック、NR4との合流地点より下流の南東に第5号ブロックが位置している。

第2地点の過半数におよぶ石器3700点が出土した。出土層位は不明が多いが、その大部分は流路底に堆積する砂礫層である。器種組成は槍先形尖頭器18点・有茎尖頭器1点・ナイフ形石器38点・台形石器4点・彫器54点・削片4点・搔器184点・削器134点・採錐器8点・角錐状石器4点・楔形石器9点・2次加工のある剥片85点・微細刻離のある剥片82点・石刃194点・剥片2534点・砕片95点・石核227点・礫器4点・敲石21点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

器種の特徴としては、左右非対称形で小形の槍先形尖頭器、石刃とはいい難い縦長剥片を素材とした形態の斉一性の低いナイフ形石器、大量の搔器、彫器、削器、石刃が挙げられる。槍先形尖頭器が組成するもの、ナイフ形石器の方が数量的に上回り、横長剥片素材のナイフ形石器や角錐状石器、搔器の組成は武蔵野台地IV層下部、V層段階との共通点が多いと考えられよう。

第1号ブロックと2点、第2号ブロックと6点、第4号ブロックと1点、第5号ブロックと3点、第11号ブロックと1点の接合資料を共有している。

### 4. 第4号ブロック (図版115・122・123)

NR4内のV VE01グリッドを中心として北北西-南南東に約48m、東北東-西南西に約11mの楕円形の広がりを持つ。NR3内の第3号ブロックが西南西に、第5号ブロックが南に隣接し、NR2上流部にある第6号ブロックが東南東に位置している。

石器272点が出土した。出土層位はII層~III層および流路底に堆積する砂礫層で、III層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は槍先形尖頭器2点・ナイフ形石器4点・彫器7点・削片1点・搔器9点・削器11点・採錐器2点・楔形石器1点・2次加工のある剥片6点・微細刻離のある剥片12点・石刃20点・剥片178点・砕片7点・石核11点・礫器1点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

ナイフ形石器や搔器の特徴は第3号ブロックとの共通点が多く見られ、組成も矛盾しないことから第3号ブロックと同じ、IV層の時期に属すると思われる。

第3号ブロックと1点、第5号ブロックと1点の接合資料を共有している。

### 5. 第5号ブロック (図版121・124)

NR3内のV VE14グリッドを中心として北北西-南南東に約29m、東北東-西南西に約10mの楕円形の広がりを持つ。北西にNR3上流の第3号ブロック、北にNR4内の第4号ブロックが位置している。

石器221点が出土した。出土層位は不明が多いが、その大部分は流路底に堆積する砂礫層である。器種組成は槍先形尖頭器1点・ナイフ形石器5点・彫器3点・削片1点・搔器14点・削器12点・角錐状石器1点・楔形石器2点・2次加工のある剥片4点・微細刻離のある剥片6点・石刃12点・剥片134点・砕片16点・

石核8点・敲石1点・原石1点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

ナイフ形石器や搔器の特徴は第3号ブロックとの共通点が多く見られ、組成も矛盾しないことから第3号ブロックと同じ、IV層の時期に属すると思われる。

第3号ブロックと3点、第4号ブロックと1点、第11号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 6. 第6号ブロック (図版119・123・125)

NR2上流部のV VM04グリッドを中心として北-南に約36m、東-西に約24mの楕円形の広がりを持つ。西北西にNR4内の第4号ブロック、南南東にNR1内の第8号ブロックが、南東にNR2内の第7号ブロックが位置している。

石器346点が出土した。出土層位は不明が多いが、その大部分は流路底に堆積する砂礫層である。器種組成は槍先形尖頭器2点・ナイフ形石器7点・台形石器5点・彫器3点・削片1点・搔器5点・削器19点・楔形石器3点・2次加工のある剥片7点・微細刻離のある剥片20点・石刃7点・剥片215点・碎片29点・石核19点・斧形石器2点・敲石2点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

器種組成の特色としては左右側縁を折りこむように加工を施した台形石器と先端の尖る先断形のナイフ形石器を特色としており、V a～IV層の時期に属するものが主体を占めるとと思われるが、種子架型石斧も存在することから、複数時期が混ざり合っているのも事実である。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 7. 第7号ブロック (図版124・126)

本ブロックはNR2からその外側にかけて分布しているが、NR2の流路と陸部分との境界は漸移的で明瞭ではない。V VT15グリッドを中心として北-南に約23m、東-西に約15mの楕円形の広がりを持つ。NR2の上流にあたる北北西に第6号ブロック、下流にあたる南に第10号ブロックが位置し、南東にある第9号ブロックは対岸に位置する。NR1内の第8号ブロックは西に位置している。

石器379点が出土した。出土層位は不明が多いが、その大部分は流路底に堆積する砂礫層である。器種組成は槍先形尖頭器1点・剥片尖頭器1点・ナイフ形石器6点・台形石器2点・彫器4点・削片2点・搔器2点・削器9点・揉錐器2点・楔形石器1点・2次加工のある剥片13点・微細刻離のある剥片33点・石刃1点・剥片241点・碎片31点・石核25点・敲石3点・原石2点となっている。石材はチャートが多用されている。

剥片尖頭器、基部を折りこむように加工を施したナイフ形石器、国府型ナイフ形石器、台形石器が特徴的に存在するため、V a～IV層の時期に属すると思われる。

第9号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 8. 第8号ブロック (図版126・127)

NR1内のV VO17グリッドを中心として北西-南東に約24m、北東-南西に約11mの楕円形の広がりを持つ。NR2内のブロックとして北に第6号ブロック、東北東に第7号ブロック、南南東に第10号ブロックが位置しており、それぞれのブロックのとの間に明瞭な遺物空白部はない。

石器141点が出土した。出土層位は不明が多いが、その大部分は流路底に堆積する砂礫層である。器種組成は槍先形尖頭器1点・剥片尖頭器1点・ナイフ形石器8点・台形石器2点・彫器1点・搔器3点・削器4点・2次加工のある剥片5点・微細刻離のある剥片7点・石刃4点・剥片94点・碎片7点・石核4点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

剥片尖頭器、基部加工のナイフ形石器、台形石器に特徴を持ち、第7号ブロックとの共通点も多いことから、V a～IV層の時期に属すると思われる。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

9. 第9号ブロック (図版128)

NR2内のVI CD01グリッドを中心として北-南に約19m、東-西に約10mの楕円形の広がりを持つ。NR2内のブロックとして北北西に第7号ブロック、南西に第10号ブロックが、NR5内の第11号ブロックが南南東に位置している。

石器77点が出土した。出土層位は1層～3層で3層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・削器4点・2次加工のある剥片6点・微細刻離のある剥片4点・石刃1点・剥片48点・破片3点・石核9点・敲石1点となっている。石材はチャートが多用されている。

国府型ナイフ形石器や背面にボジ面を持つ横長剥片が見られることから、V a～IV層の時期に属すると思われる。

第7号ブロックと1点の接合資料を共有している。

10. 第10号ブロック (図版127・128)

NR1、NR2、NR5の合流地点のVI BS07グリッドを中心として北北西-南南東に約26m、東北東-西南西に約12mの楕円形の広がりを持つ。北北西にNR1内の第7号ブロックが、NR2内のブロックでは北に第8号ブロック、北東に第9号ブロックが、東南東にはNR5内の第11号ブロックが位置している。

石器291点が出土した。III層および流路底の砂礫層(2層と不明)から多くの遺物が出土している。器種組成は槍先形尖頭器1点・ナイフ形石器16点・台形石器3点・貝殻状刃器2点・彫器1点・搔器状石器1点・削器3点・採錐器2点・楔形石器1点・2次加工のある剥片10点・微細刻離のある剥片29点・石刃2点・剥片177点・破片22点・石核15点・斧形石器2点・敲石2点・原石2点となっている。石材はチャートが多用されている。

斧形石器、基部加工のナイフ形石器を組成することから、V b～V a層の時期に属すると思われる。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

11. 第11号ブロック (図版129)

本ブロックはNR5内およびその氾濫原に分布している。VI CJ11グリッドを中心として北北西-南南東に約45m、東北東-西南西に約26mの楕円形の広がりを持つ。北北西にNR2内にある第9号ブロック、西北西にNR1、NR2、NR5の合流地点にある第10号ブロックが位置している。

石器478点が出土した。出土層位は1層～2層で1層から最も多くの遺物が出土しているが、1層の遺物もほとんどが、1層最下部付近である。器種組成はナイフ形石器14点・台形石器2点・貝殻状刃器5点・搔器2点・搔器状石器1点・削器13点・採錐器1点・2次加工のある剥片15点・微細刻離のある剥片18点・石刃4点・剥片284点・破片83点・石核25点・斧形石器5点・斧形石器破片3点・敲石3点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

国府型ナイフ形石器と斧形石器が特徴となっているが、両者が共伴するかどうかは微妙である。そのため、V b～V a層の時期とV a～IV層の時期の2時期あるという考え方と、V a～IV層の1時期が主体となっているという異なる2つの考え方ができようか。

第3号ブロックと1点、第5号ブロックと1点の接合資料を共有している。

(4) 水洗選別遺物の分布 (図版111)

部分的に土を採集して水洗選別を行い微細遺物の検出を行った。土壌の採集は50cm四方の平面を1単位として行った。土壌の採集場所、水洗選別により検出された遺物数、および単点測量を行った遺物との位置関係(図版111)右側に示した。図中の小さな正方形が土壌採集範囲を示し、その中の数値が検出遺物数値である。なお検出遺物数0は水洗選別を行った結果1点も遺物が出検されなかったことを示し、空白は土壌採集を行ったが何らかの原因で結果が得られなかったことを示す。



土壌採集においては、採集時に検出された遺物はその場に残留して単点測量を行っている。そのため、水洗選別遺物は発掘調査時に検出できなかった遺物になる。したがって、大多数は1cm未満の微細な遺物となっている。

その結果、単点測量遺物数が多い場所では水洗選別遺物数も多く、単点測量遺物が少ない場所でも水洗選別遺物が多く検出される場所が存在することがわかった。つまり、水洗選別遺物は単点測量を行った遺物の分布域外にも拡散して存在することがわかった。

土壌採集場所はいずれも自然流路内であり、遺物の多くは水成の2次堆積層の砂礫層中から検出されていることから、微細な遺物については水の影響による移動が考えられる。しかし、そのまま遺物集中域に留まっている微細遺物も多く存在することも事実である。

### 3 遺物

#### (1) 第1号ブロック

##### 1. ナイフ形石器 (図版130~131・報告番号1~10)

1・2は縦長剥片を縦に用いて基部に加工が施されるナイフ形石器である。基部側縁線に正方向の加工を施しているが、打面は残されている。1の先端は加工がなく尖っており、2の先端には正方向の加工が見られるが尖っていない。共に左右対称形となっている。

3は縦長剥片を斜めに用いている。右側縁は正方向の強・中剥離により素材が折断されており、基部両側縁には反方向の平坦な加工が施されている。これら加工により素材の打面、バルブは除去され、左右はほぼ対称形で、先端は鋭く尖っている。

4は玉髓の縦長剥片の打面を基部側に置き、素材を縦に用いている。左側縁全体と右側縁に正方向の中剥離を施しており、打面は除去され丸い基部が作出されている。平面形は左右が非対称形で先端は尖らない。

5は黒曜石の横長剥片を横に用いている。打面側にあたる左側縁は折れ面もしくは大きな剥離面により打面が除去されている。基部両側縁には正方向の剥離が見られる。左右は非対称形で基部先端とも尖らない。

6は凝灰岩の横長剥片を横に用いている。打面側である右側縁に正方向の強剥離を施して打面を除去している。基部裏面には大きく平坦な剥離が、左側縁には正方向の弱剥離が認められる。平面形は左右対称形で先端は尖るが、基部は尖らない。3と共通点が多いといえよう。

7は無斑晶質安山岩の横長剥片を横に用いている。打面側である左側縁に正方向の強・中剥離を施して打面を除去している。右側縁基部にも正方向の加工が見られる。左右非対称形を呈するが先端は尖り、基部両側はややノッチ状に作出されている。

8は横長剥片を横に用いている。素材背面に主要剥離面と同一方向の1枚の剥離痕と末端にゴジ面が見られる。打面側である右側縁は正方向の加工が施され打面は除去されている。平面形は左右ほぼ対称形で先端は尖るが、基部は欠損している。

9・10は先断形のナイフ形石器である。9は縦長剥片を素材としており、先端が尖るように斜めにブラントニングを施している。10は縦長剥片の末端を石器の主軸と直交するように正方向のブラントニングが施されている。

##### 2. 彫器 (図版131・報告番号11)

11は欠損部位が多く全体形状の把握ができない。素材の末端部に正方向の中剥離を施して、そこを打面として極状剥離を施している。

3. 掻器 (図版131~132・報告番号12~18・20・21)

15が縦長剥片を素材としている以外は貝殻状剥片を素材としている。いずれも素材の末端を中心に正方向の加工により弧状の刃部が作出されているが、黒曜石製(19・20)には外周全体に加工が見られる。

4. 削器 (図版132~133・報告番号23・24・26・28)

22・23は寸詰まりの縦長剥片を素材としている。刃部への加工は比較的切り立った正方向の剝離が用いられている。共に素材の持つ鋭い縁刃部には微細剝離痕が見られる。

28は横長剥片を素材としている。剥片の末端部に正方向の中・平坦剝離を施して弧状の刃部を作出している。素材が横長のため幅広の刃部となっている。

その他の削器は素材の一部に加工を施して刃部を作出しているもので、斉一性は低い。

5. 石核 (図版134~135・報告番号29~34)

29~33は剥片を素材とした石核である。剥片の背面もしくは腹面を打面に、相対する面を作業面に設定して横長剥片や貝殻状剥片を剝離している。「瀬戸内技法」のように打点が直線的に交代しているようなことはなく、基本的には横に移動している。また、打面と作業面の入れ替えは認められる。

34は90°単位の打面作業面転移を繰り返して、貝殻状剥片を剝離するサイコロ状の石核である。

(2) 第2号ブロック

1. ナイフ形石器 (図版136・報告番号35~40)

35は無斑晶質安山岩の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き基部両側縁に正方向のブランティングを施している。基部端はわずかに欠損しているが、加工による打面の除去はなかったようだ。先端は石器の主軸に対して折れ面が存在するが、それが加工であるか欠損であるかはわからない。

36は珪質頁岩の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き、基部両側縁に対する正方向の弱剝離により打面は除去されている。先端部に明瞭加工は認められないが、先端方向から左側縁にかけては細い楯状剝離が見られる。平面形は左右対称形で、先端は尖り基部は丸くなっている。

37は凝灰岩の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部側に置き、基部右側縁に正方向のブランティングを施しているが、線状の打面は残されている。その他に加工部位は認められず、平面形は左右対称形を呈し、先端は尖るが基部は平たい。

38は無斑晶質安山岩の寸詰まりの縦長剥片を斜めに用いている。正方向のブランティングを右側縁全体および左側縁下半部に施している。平面形は左右非対称形を呈し、先端は尖り基部は欠損している。

39と40は無斑晶質安山岩の横長剥片を横に用いている。素材の打面側の側縁全体に正方向の加工を程し打面を除去している。また、反対側の側縁の下半部にも正方向の加工が見られる。平面形は左右非対称形となっており、39は先端と基部を、40は先端を欠損している。40は背面に見られる大きく古い剝離面は平坦でボジ面の可能性が考えられる。そのため、国府系の石器文化に見られるような横長剥片剝離技術の存在が示唆されようか。

2. 槍先形尖頭器 (図版136・報告番号41)

41は無斑晶質安山岩の横長剥片を横に用いている。正方向の中・弱剝離がほぼ全周に施されている。左右対称形を呈し、先端は尖り基部は丸い。槍先形尖頭器としたが先端付近にはわずかに素材縁辺も見られることから、ナイフ形石器や角錐状石器として理解することもできようか。

3. 掻器 (図版132・137~138・163~164・報告番号19・42~49・206・207・209)

42~45は縦長剥片もしくは寸詰まりの縦長剥片を縦に用いている。素材の末端に正方向の中・弱・平坦剝離を施して弧状の刃部を作出している。刃部以外に加工が施されるものも存在するが、形状を大きく変えるような加工ではない。

46はチャートの礫片の一端に加工を施し刃部を作出している。

47・48の裏面には大きく平坦な剥離面に覆われている。両者にはその剥離を切る刃部加工が認められることから、刃部再生が行われた可能性が指摘できようか。

49は大形の無斑晶質安山岩の横長剥片を横に用いている。打面側となる左側縁は正方向の強剥離により強く折断され打面、パルプが除去されている。それ以外の周縁も正方向の中・弱・平坦剥離により刃部が作出されている。そのため、広く長い刃部を有することとなるが、部位によっては鋭角な側縁もあるために削器的機能も果たす複合石器として考えられる。

#### 4. 削器 (図版132・133・138~140・報告番号22・25・27・50~56)

50は正方向の強剥離により刃部が作出されているが、この加工により打面は折断されている。

52は無斑晶質安山岩の縦長剥片の側縁に正方向のノッチ状の加工が施されている。

51・53~56は寸詰まりの縦長剥片の側縁に正方向の弱・平坦剥離を施すことにより弧状の刃部を作出したものである。

#### 5. 石刃 (図版140・報告番号57~58)

57には打面調整および稜上調整が認められる。58の打面は欠損しているが、薄く反りの少ない整った形状を呈している。

#### 6. 石核 (図版141・報告番号59~61)

59は小形の縦長剥片を目的とした石核である。上下に打面を設定し180°の打面転移が見られる。

60は緑色凝灰岩の石刃石核である。上面を打面として石刃が剥離されている。打面調整が顕著で、作業面とは反対側に稜上調整のような背の作出が認められる。また、180°の打面転移も確認できる。

61は板状に分割した礫片より貝殻状剥片を剥離している石核である。図上裏面の大きな剥離面を打面、正面を作業面として打点を横に動かしながら数枚の貝殻状剥片を剥離している。

### (3) 第3号ブロック

#### 1. ナイフ形石器 (図版142~144・報告番号62~87)

62・66・69は尖鋭な先端を持ち、縦長剥片を縦もしくは斜めに用いて2側縁に加工が施されるナイフ形石器である。加工は正方向のブランティングが用いられ、左右は非対称形となっている。

63・64は横長剥片を横または斜めに用いて、基部の片側のみ加工が施されるものである。

67・68・70・71は尖鋭な先端を持ち、2側縁に加工が施されるナイフ形石器である。このナイフ形石器加工はブランティングとしては角度が緩く、面的なものである。平面形は左右非対称形を呈するが、同ブロック内の槍先形尖頭器の形状との共通性が高い。

72~74・77は横長剥片を横に用いるナイフ形石器である。いずれも正方向の強剥離により打面を折断しており、相対する側縁基部にも正方向の中・弱剥離が施されている。73は背面の上端の剥離がボジ面の可能性がある他に背面のボジ面は確認できない。

75は縦長剥片を縦に用いているものだが、1側縁に正方向の中・平坦剥離が施されている。

80・81は刃部が斜めとなる台形石器との中間的なものである。片側縁縁に正方向の強・中剥離を施しており、80ではその加工が基部まで回りこんでいる。この加工による素材の断ち切りは比較的強い。

82~87のナイフ形石器は欠損部位が大きいため、全容がつかめないものである。

#### 2. 台形石器 (図版145・報告番号88~90)

88は無斑石の貝殻状剥片を斜めに用いている。左側縁は正方向の強・中剥離が施され、右側縁には切り立った節理面が見られ、そこからの正方向の弱剥離が確認できる。器体が厚いため右側縁への加工による断ち切りは強いが、打面は基部に残されている。平面形は切出状を呈している。

89は玉髄の貝殻状剥片を斜めに用いている。左右側縁には反方向の中剥離が見られ、素材の打面および末端を折断している。平面形は切出状を呈するが、先端付近は欠損している。

90は凝灰岩の貝殻状剥片を斜めに用いている。左右側縁には正方向の平坦剥離を施され、基部付近には反方向の平坦剥離も見られる。この加工により打面は除去されている。刃部は平たく基部は尖るため平面形は三角形を呈している。

### 3. 槍先形尖頭器 (図版145~147・報告番号91~111)

91~101・105・110は両面に加工が施されている槍先形尖頭器である。横長剥片を横に用いているものが確認できる。5cm以下の小形が多いことから、礫素材は少ないと思われる。加工には平坦剥離により表裏両面に加工が施されているが、片面は平坦となるため断面形はD字状となる。縁辺に素材の剥離面が残っているものは見られるが、楕状剥離は確認できない。平面形は左右非対称となり、ナイフ形石器と良く似ているのが見られる。

102~104・106~109・111は片面加工の槍先形尖頭器である。横長剥片や貝殻状剥片を横や斜めに用いているものが多い。加工には器面を覆う平坦剥離と、ブランディング状の剥離が見られ、前者の断面形はD字状に、後者の断面形は平たい台形状を呈する。平面形は片側が肩の張る左右非対称形が多く見られ、片面加工の槍先形尖頭器同様ナイフ形石器と似た形状を呈している。

### 4. 有茎尖頭器 (図版147・報告番号112)

平坦な剥離により両面が覆われている。左右表裏は対称形で均整のとれた形状を呈している。基部は左右の基部を弱いノッチ状にすることで作出されている。

### 5. 角錐状石器 (図版147~148報告番号113~116)

113は横長剥片を横に用いている。周囲に正方向の中剥離を施して、先端と平たい基部を作出している。角錐状石器というよりは周縁加工の槍先形尖頭器とした方がよからうか。

114~116は縦長剥片を縦に用いている。左右側縁に正方向の強剥離を施して先端を作出しており、側縁は鋸歯縁状を呈している。

### 6. 彫器 (図版148~152・報告番号117~135)

117~120は縦長剥片を縦に用いている。素材の剥離軸に直交するように、正方向の中剥離を施して楕状剥離打面を作出している。したがって彫刀面は縁辺にほぼ平行している。117と120には周縁への加工も見られる。平面形は短冊状を呈する。

121は搔器と彫器の複合石器である。やや縦長の搔器の基部を斜めに折断するように、正方向の中剥離を直線的に施し、楕状剥離打面を用意している。彫刀面は石器の主軸に対して斜交し、腹面側を向いている。

122・123は円形搔器を彫器に転用したものと思われる。縁辺の一部に正方向の中剥離を直線的に施して楕状剥離打面を作出している。彫刀面は腹面側を向いている。

124~127は石器の主軸と彫刀面が斜交する彫器である。126以外は正方向の中剥離をノッチ状に施して楕状剥離打面を作出しており、彫刀面は腹面側を向いている。

128~130は打面や折れ面等の素材の切り立った側面を楕状剥離打面としているものである。彫刀面以外の加工部位は少なく、形状の斉一性がなく厚みがありゴロっとしている。

131~135は石刃を素材として、その側縁に平行する彫刀面を持つものである。楕状剥離打面の調整が見られるのは132で、それ以外は素材打面や折れ面等を楕状剥離打面としている。133~135には彫刀面と相對する側縁に加工が認められる。

## 7. 撿録器 (図版152~153・報告番号136~141)

136は黒曜石の石刃を素材としている。左右側縁に正方向の中剝離を施して錐の先端を作出している。図は上下逆になっている。縄文時代の石器の可能性が高いと思われる。

137~141は比較的厚い素材を用いている。素材の一部に正方向のノッチ状の加工を1ヶ所もしくは2ヶ所施すことにより錐の1先端を作出している。素材の形状に斉一性がないことから、完成品の形状も斉一性がない。

## 8. 撿器 (図版153~180・報告番号142~205・208・210~282)

184点と大量の撿器が出土している。

142~169は黒曜石の撿器である。素材には厚手の貝殻状剥片が多用されており、石刃は認められない。素材の末端を中心として正方向の中・平坦剝離を施して弧状の刃部が作出されている。142~152は素材の末端のみに加工が施されており、153~165は加工部位が側縁や基部にまで及び、全周縁が刃部となっているものも見られる。また、165~169には腹面に平坦剝離が見られる。平面形は円形もしくは短い拇指状を呈するものが多い。

170~210は黒曜石、無斑品質安山岩以外の石材の撿器で、特にチャート製が多い。素材は貝殻状剥片が主体となっているが、石刃素材(200~207)も見られる。黒曜石同様に素材の末端を中心として正方向の中・平坦剝離を施して弧状の刃部が作出されている。素材の末端のみに加工が施されるものと、加工部位が側縁や基部にまで及ぶものがある。前者はやや縦に長い素材のものに多く、後者は厚みのある貝殻状剥片が素材となるものが多い。平面形は円形、拇指状を呈する。

211~282は無斑品質安山岩の撿器である。素材は貝殻状剥片と石刃が見られ、他の石材より大きい傾向がある。石刃は同ブロック内に多く見られるものと同種のもので、稜の高い分厚いものである。加工の特徴は他の石材と同じで、素材の末端を中心として正方向の中・平坦剝離を施して弧状の刃部が作出されている。素材の末端のみに加工が施されるものと、加工部位が側縁や基部にまで及ぶものがある。平面形は石刃素材のものは拇指状を、貝殻状剥片素材は円形や短い拇指状を呈する。

## 9. 削器 (図版181~192・報告番号283~331)

134点と大量の削器が出土したが、素材、加工、形状に斉一性が見られない。素材には貝殻状剥片が多用されているが、石刃、縦長剥片も見られる。これらの素材の縁辺にその形状を大きく変えることのない、器・平坦剝離を施して刃部を作出するものが多く見られる。刃部の形状は弧状、直線状、鋸歯縁状のものが見られるが、ノッチ状の刃部は少ない。

## 10. 楔形石器 (図版192~193・報告番号332~336)

9点の楔形石器が出土した。形状の斉一性は低いが小形のものが多い。素材には貝殻状剥片が用いられている。

## 11. 2次加工のある剥片・微細剝離のある剥片 (図版193~194・報告番号337~338・340・342)

337・338は石刃状の縦長剥片の一部に加工と思われる剝離が見られるものである。

341はいわゆる翼状剥片の鉤峰に含まれるものである。打面には山形の調整痕が見られ、背面には底面と主要剝離面と同一方向の剝離痕が1枚確認できる。

## 12. 石刃 (図版194~202・報告番号343~358・360~375・377~401)

194点と大量の石刃が検出されている。石材は無斑品質安山岩の使用が圧倒的に多い。打面調整、頭部調整が顕著に認められる。打面が比較的広く残り、甲高で厚いものが目立つ。また、剝離軸に対して直交するように折れているものが目立つため、意図的な折断があったことが予想される。

### 13. 石核 (図版202~210・報告番号402~424)

402~404は剥片素材の石刃石核である。402・403は素材の主要剥離面を作業面としており、打面には細かな調整が認められる。

404・405は素材末端の切り立った側縁を打面としている。打面の小口部から剥離を行っているが、打面調整は見られない。

406~408は角柱状の石核で、石刃を剥離しているものである。打面調整は見られず、180°の打面転移も確認できる。

409・410は板状の石核で、求心的な剥離が見られる。貝殻状剥片が剥離されていると思われる。

411・412は90°単位の打面転移が頻繁に行われるサイコロ状石核で貝殻状剥片が剥離されている。石核調整は認められない。

413は凝灰岩の石刃石核である。作業面と反対側の背の部分に稜上調整のような加工が施されている。その他の石核調整は認められない。形状は角柱状を呈す。第2号ブロックの報告番号60の石核と良く似ている。

414は珪質頁岩の縦長剥片剥離を目的とする石核と剥片の接合状態の図である。打面を固定して連続して縦長剥片を剥離している。打面調整、頭部調整等の石核調整は認められない。

415は珪質頁岩の板状石核である。打面作業面を固定して打点を横に動かしながら貝殻状剥片を剥離している。

416は石核としたが有効な剥片剥離の痕跡はない。むしろ図上上部の尖頭部を作出する加工のようでもある。

417~420はチャートの縦長剥片剥離を目的とする石核である。いずれも主要剥離面の反対側は礫面となっている。打面と作業面は固定されており、418・420には打面調整が見られる。

421・422はチャートの板状石核である。剥片を素材としているようで、作業面を固定して打面を相対する側縁に設定して、縦長剥片を剥離している。

423・424はチャートのチョッピングツール状の石核である。打面と作業面を頻繁に入れ替えて貝殻状剥片を剥離している。423については打面と作業面の境の稜線が直線的に整えられているため、礫器としても理解できようか。

### 14. 礫器 (図版211・報告番号425~427)

425~427はチョッピングツール状の礫器である。表裏に平坦剥離を施すことにより直線的な刃部が作出されている。素材には礫片や石核が用いられているようだ。

### 15. 敲石 (図版212・報告番号428~429)

いずれも棒状円礫を用いている。敲打痕は棒状の両端部に残されている。429は節理による欠損が見られるが、この節理面を切る敲打痕も見られる。

## (4) 第4号ブロック

### 1. ナイフ形石器 (図版213・報告番号430~433)

430は珪質頁岩の石刃を縦に用いている。打面を基部側に置き、基部両側縁に反方向の中・平坦剥離を施している。先端右側縁には正方向の中剥離が見られる。平面形は左右対称形で、基部先端とも尖る柳葉形を呈している。

431は無斑晶質安山岩の横長剥片を横に用いているが、背面にボジ面はない。打面側の左側縁に正方向のブランティングを施し、打面を除去している。また、右側縁基部にも正方向の加工が認められる。平面形は右側縁の肩が弱く張る左右非対称形である。

432は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を先端側に置き右側縁先端側に正方向の中・平坦剥離を施している。背面先端左側に見られる先端方向からの剥離の主要剥離面との切りあいは微妙で、槌状剥離の可能性も考えられる。これが槌状剥離だとすればナイフ形石器よりも、槍先形尖頭器とすべきであろうか。いずれにしろ槍先形尖頭器に近いナイフ形石器といえよう。

433は無斑品質安山岩の縦長剥片を斜めに用いている。打面を先端側に置き、右側縁全体に正方向の強剥離を施して打面を除去している。左側縁基部には正方向の中剥離が見られる。先端基部とも鋭さはないが尖っている。

## 2. 槍先形尖頭器 (図版213・226・報告番号434・496)

434は両面加工の槍先形尖頭器の一部である。欠損部位が多く全体形状がわからないが、片面は平坦で、断面形がD字状を呈するようである。第3号ブロックの槍先形尖頭器に類するといえようか。

## 3. 彫器 (図版213~214・報告番号435~439)

435は黒曜石の搔器を転用した彫器である。全周に加工が施されている円形の搔器の図上で下の側縁に正方向のノッチ状の加工を施して打面を作出して槌状剥離を施している。続いて上の側縁を打面として数回の槌状剥離を施している。この時の打面作出のための調整は不明瞭である。平面形は楕円形を呈している。

436はチャートの縦長剥片を斜めに用いている。打面を先端側に置き左側縁全体に正方向の中・平坦剥離を施して打面を除去している。その後右側縁に尖頭部を作出する正方向の中剥離を施して、そこを打面として槌状剥離を施している。彫刀面は石器主軸に対して斜めとなっており、平面形は尖頭状を呈する。

437は頁岩の縦長剥片を素材としている。打面を基部に置き、素材末端部に斜めに正方向の弱剥離を施して打面を作出し、槌状剥離を施している。

438は両面加工の石器の先端部からの槌状剥離が施されている彫器である。両面加工の素材の先端部にノッチ状の加工を施して、槌状剥離打面を作出している。槌状剥離後には彫刀面からの平坦剥離が確認できる。

439は珪質頁岩の縦長剥片を素材としているが、下半を欠損している。打面に上に置き線状の打面を槌状剥離打面としている。槌状剥離は複数回確認できるが、古い彫刀面には腹面からの加工が見られる。

## 4. 搔器 (図版214~215・227・報告番号440~446・503)

440~443は黒曜石製の搔器である。分厚い貝殻状剥片を素材として、素材の末端に正方向の中・平坦剥離を施して弧状の刃部を作出している。441・442はやや縦に長い貝殻状剥片を素材としており、左右側縁に正方向の平坦剥離を施して、平面形を寸詰まりの楕円形に作り出している。素材、加工、形状の特徴は第3号ブロックと共通している。

444はチャートの縦長剥片を素材としている。素材の末端に正方向の中剥離を施して刃部を作出しているが、打面側にも正方向の強・中剥離が見られ鋸歯縁状の刃部が作出されている。

445・446は無斑品質安山岩の石刃と縦長剥片を素材としている。445の刃部の大半は欠損している。446は左右側縁全体に正方向の平坦剥離が見られる。

## 5. 削器 (図版215~216・報告番号447~449)

447は珪質頁岩の縦長剥片を素材としている。右側縁に正方向の強剥離を施して鋸歯縁状の刃部を作出している。

448は削器としたが、第3号ブロックに見られた133・134の彫器に類するものと思われる。

449は第3号ブロックの87のナイフ形石器と接合している。87には分割後の加工が認められる。器種が矛盾合っているが、形状や大きさを考えると共に削器で統一すべきか。

6. 石刃 (図版196・217・224・報告番号359・450~453・482)

本ブロックの石刃は無斑晶質安山岩製が多く、分厚く中高のため第3号ブロックの石刃とほぼ共通した特徴を持つと思われる。

7. 礫器 (図版217・報告番号454)

無斑晶質安山岩の板状石核のようにも見えるが、整った縁辺が見られるため礫器とした。やや小形だが425~427の礫器との共通性が見られる。

8. 石核 (図版218・報告番号455)

455はチャートの縦長剥片を目的とした板状の石核である。チャートの剥片(礫片)を素材として、その主要剥離面(節理面)を作業面としている。打面は上下に設定して、180°の打面転移を行いながら縦長剥片を剥離している。

(5) 第5号ブロック

1. ナイフ形石器 (図版219・報告番号456~460)

456は黒曜石の寸詰まりの縦長剥片を素材としている。打面を先端側に置き、左右側縁に正方向の中刺離が施されている。打面は加工により除去されているが、基部には素材の末端がそのまま残る無加工部位が存在する。右側縁の肩が張る左右非対称形で、先端は尖るが基部は平たい。

457は黒曜石の貝殻状剥片を横に用いている。打面を折断する正方向の強刺離が左側縁に施されているが、基部側が欠損しているため、右側縁の加工は確認できない。

459は珪質頁岩の縦長剥片を縦に用いている。素材打面側は欠損しており、残されている縁辺には正方向の弱・平坦刺離が見られる。この刺離はブランディングと比較すると鋭角で滑らかなため、この石器が削器等である可能性も考えられようか。

460は黒曜石の横長剥片を横に用いている。図では表裏が逆で正面図の大きな刺離が主要剥離面となっている。素材打面側に反方向の弱・平坦刺離を施して打面を除去している。先端側は欠損しており残されている部分には明瞭な刃部は見られない。

2. 槍先形尖頭器 (図版219・報告番号461)

461は両面加工の槍先形尖頭器である。両面が平坦な刺離で覆われているため素材がわからない。加工は粗く縁辺はあまり整っていない。左側縁の肩が張る左右非対称の形状を呈しており、断面形は裏面が平らなため、D字状を呈している。

3. 彫器 (図版219~220・報告番号462~464)

462は緑色凝灰岩の石刃を縦に用いている。打面を上置き反方向の中刺離を主軸に対して斜めに施して、打面を除去している。そこを打面として極状刺離を施して彫刀面を作出している。彫刀面は主軸に対して斜めとなる。

463は黒曜石の縦長剥片を素材としている。素材末端側の折れ面を打面として、左右側縁に極状刺離を施している。彫刀面は主軸とほぼ平行している。基部には正方向の中刺離が見られる。

464は凝灰岩の石刃を縦に用いている。素材末端側縁に見られる極状刺離面の可能性が考えられる。切り立った側縁を打面として横からの打撃により極状刺離を行っている。彫刀面は主軸に対して直交から斜めとなっている。極状刺離後の背面には彫刀面幅を減らす平坦な加工が見られる。

4. 礫器 (図版220~221・報告番号465~474)

465は無斑晶質安山岩の縦長剥片を素材としている。右側縁には正方向の平坦刺離により弧状の刃部が作出されており、この刃部は左側縁下半部まで連なっている。

466~471は黒曜石の貝殻状剥片を素材としている。素材末端を中心に正方向の中・平坦刺離を施して弧



状の刃部を作出している。平面形は円形もしくは寸詰まりの拇指状を呈する。467は素材を横に用いている。466・469～471の腹面には平坦剥離が見られる。

472は珪質頁岩の寸詰まりの縦長剥片を素材としており、素材末端に正方向の中・平坦剥離を施して弧状の刃部を作出している。平面形は拇指状を呈している。

473・474は珪質頁岩の縦長剥片を素材としている。素材の末端に正方向の中・平坦剥離を施して弧状の刃部を作出している。また、両者とも腹面には基部の切り立った側縁を打面とする極状剥離が見られる。平面形は拇指状を呈する。

#### 5. 削器 (図版222・報告番号475～476)

475は凝灰岩の縦長剥片を素材としている。左側縁に正方向の平坦・弱剥離を施して弧状の刃部を作出している。

476は無斑晶質安山岩の縦長剥片を素材としている。左側縁に正方向の中・平坦剥離を施して、ノッチ状の刃部を作出している。

#### 6. 楔形石器 (図版222～223・報告番号477～478)

477の背面には上下方向からの細長い平坦剥離が見られ、腹面には背面の剥離軸とは斜め方向の両側の剥離が見られる。一般的な楔形石器とは異なり縁辺の潰れは見られない。

478は角柱状で大形の楔形石器である。下端の剥離は平坦で潰れが伴っているが、上端の剥離は掻器の刃部に見られるような剥離で潰れは伴っていない。

#### 7. 石刃 (図版199・223～224・報告番号376・479～481・483)

無斑晶質安山岩が多用されている。打面調整が見られるものがあり特徴は第3号ブロックに多く見られる石刃と共通している。

#### 8. 石核 (図版224・報告番号485)

485はチャートの角柱状の石核である。上下に打面を設定して縦長剥片を剥離している。打面調整が認められる。

### (6) 第6号ブロック

#### 1. ナイフ形石器 (図版225・報告番号486～489)

486は黒曜石の石刃を縦に用いている。打面を基部側に置き右側縁には正方向の小剥離を施しているが、ほとんど素材の形状は変えられていない。素材打面には打面調整が認められる。平面形は左右ほぼ対称形を呈しており、先端、基部とも尖らない。

487は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を先端側に置き右側縁に正方向の中剥離を施して打面を除去している。左側縁基部にも正方向の中剥離が見られる。先端はわずかに欠損しているが尖るようで、平面形はほぼ対称形を呈し基部は丸い。

488・489は先断形のナイフ形石器である。黒曜石の縦長剥片を縦に用いて、打面側を基部に置くが基部は欠損している。左側縁に正方向の中剥離を施して尖鋭な先端を作出している。

#### 2. 台形石器 (図版225～226・報告番号490～494)

490は黒曜石の貝殻状剥片を縦に用いている。打面を基部側に置き左右側縁に正方向の中剥離を施している。打面は基部にわずかに残っているが、加工による素材の変形は比較的大きい。刃部はほぼ水平で平面形は台形を呈す。

491～493は貝殻状剥片を横に用いている。素材の打面と末端を折断する正方向の中剥離が施されている。この加工はノッチ状に施されるもの(491・492)、反方向の剥離も見られるもの(493)がある。刃部はほぼ水平で平面形は台形もしくは三角形を呈する。これらの台形石器の特徴は東裏H11石器文化の台形

石器に似ているといえよう。

494は無斑晶質安山岩製で大形の横長剥片を素材としている。素材を横に置き打面と末端を折断する正方向の強・中剝離により左右側縁が作出されている。刃部はほぼ水平で平面形は楕形を呈している。

#### 3. 槍先形尖頭器 (図版226・報告番号495)

495は片面加工の槍先形尖頭器である。チャートの貝殻状剥片を斜めに用いて、左右側縁に正方向の平坦剝離を施して先端を作出しているが、基部に加工はなく槍先形尖頭器としては加工頻度が少ない。左右はほぼ非対称形で先端と基部が尖る木葉形を呈し、断面形は裏面が平坦なD字状を呈する。

496は両面加工の槍先形尖頭器である。両面に平坦な加工を施して先端を作出しているが、基部側は大きく欠損しており全体形状がつかめない。

497は両面加工の槍先形尖頭器である。両面に平坦な加工を施しているが、加工は粗く縁辺は整っていない。左右はほぼ対称形で、先端は尖り基部は丸い。断面形はD字状を呈する。

#### 4. 彫器 (図版226・報告番号498～499)

498・499はチャートの縦長剥片を素材としている。周縁に正方向の中剝離を施して、上端の斜め右方向からの打撃により、左側縁に槌状剝離を施している。彫刀面は主軸に対して斜めとなる。499には槌状剝離後の彫刀面への加工が見られる。

#### 5. 搔器 (図版227・報告番号500～502・504)

500は黒曜石の寸詰まりの縦長剥片を素材としている。素材の末端に正方向の中・平坦剝離を施して弧状の刃部を作出している。打面は折れており認められないが、その折れ面には部分的に正方向の中剝離が見られる。右側縁には正方向の平坦剝離によるノッチ状の刃部も見られることから、挟入削器としての機能もあったと思われる。

501は黒曜石の貝殻状剥片を斜めに用いている。下部の厚みのある縁辺を中心に正方向の剝離を施して刃部を作出しているが、きれいな弧状は呈さない。

502は黒曜石の貝殻状剥片を素材としている。ほぼ全周縁に正方向の加工が施され刃部が作出されている。

503は無斑晶質安山岩製の搔器である。素材の末端を中心に正方向の中・平坦剝離を施して弧状の刃部を作出している。裏面には基部側縁からの平坦剝離が見られる。

504は無斑晶質安山岩の寸詰まりの縦長剥片を素材としている。素材の末端を中心に正方向の中・平坦剝離を施して弧状の刃部を作出している。大形で刃部幅も広い。

#### 6. 削器 (図版228・報告番号505～509)

19点の削器が出土しているが、素材、加工、形状は多用で斉一性は低い。

505は彫器との複合石器である。図上右側縁は正方向の平坦剝離が施された後に、半方向の平坦剝離を施して削器の刃部を作出している。右側縁には上部の折れ面を槌状剝離打面とした彫刀面が見られる。

509は周縁全体に正方向の中剝離が施されている。平面形が木葉形を呈するため、周縁加工の槍先形尖頭器のようにも見えるが、先端の尖りは鈍い。

その他の削器については、部分的に刃部作出のための加工が施されているもので、素材、形態は様々である。

#### 7. 削片 (図版228・報告番号510)

510は黒曜石製の削片である。甲高の両面加工の彫器から剝離されていると思われる。

#### 8. 石刃 (図版228～229・報告番号511～512)

511は黒曜石の石刃である。打面調整が認められ、左右側縁には使用痕と思われる微細剝離痕が見られ

る。末端部は折れている。

512は無斑晶質安山岩の石刃である。打面調整が認められる。欠損部位はなく完形である。

#### 9. 石核 (図版229・報告番号513)

513は無斑晶質安山岩の石刃石核である。縦長剥片を目的としていたようであるが、打面の後退により最終的な剥離痕は貝殻状剥片となっている。主要の作業面の反対側には背を作出する加工が見られる。

#### 10. 斧形石器 (図版253・報告番号624～625)

624は凝灰岩製である。図上の裏面に礫面が見られるが、断面は表面の方が凸状になる。左右側縁に正反方向の平坦剥離を施した後、弱剥離で細かい調整を行っている。刃部には研磨が見られる。刃部は丸く、側縁は緩い弧状を呈し、最大幅はほぼ中央に位置する。器体は分厚い。

625は凝灰岩製で、母岩の特徴は624と良く似ている。全体が平坦な剥離に覆われており、礫面は認められない。左右側縁に正反方向の平坦剥離を施した後、弱剥離で細かい調整を行っている。研磨は見られない。刃部は丸く、側縁は直線的で細長い形状を呈する。器体は分厚い。

### (7) 第7号ブロック

#### 1. ナイフ形石器 (図版230・報告番号514・516・519～521)

514は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部側に置き、右側縁上半部に反方向の中剥離を施している。基部は左側縁のほぼ全体となる。平面形は左右ほぼ対称形を呈し、先端と基部は尖らない。

516は凝灰質頁岩の縦長剥片を素材としている。打面を基部側に置き、左側縁全体に正方向の強・中剥離を施している。基部右側縁には正方向の中剥離がノッチ状に施され、茎状の基部が作出されている。平面形は右側縁の肩が弱く張る左右非対称形を呈し先端は尖っている。

519～521は無斑晶質安山岩の横長剥片を横に用いている。素材背面の末端に底面と思われるボシ面が確認でき、打面側には1枚ねが面が認められる。素材打面側の側縁は正方向の強・中剥離により打面が折断されている。いずれも欠損している。「国府型ナイフ形石器」に類するものとして理解できようか。

#### 2. 剥片尖頭器 (図版230・報告番号515)

515は縦長剥片を縦に用いている。打面を基部側に置き基部両側縁に正方向の強・中剥離をノッチ状に施している。右側縁上半部から先端にかけては反方向の弱剥離が見られるが、加工か使用痕かの区別がつかず、それ以外の先端への剥離は見られない。その他に左側縁上半部には正方向の平坦剥離が認められる。平面形は左右ほぼ対称形で先端は鈍く尖り、基部は基状を呈している。基部に打面が残されない等、九州地方に存在する剥片尖頭器とはやや異なる点も見受けられ、石材も珪質頁岩ということから基部加工のナイフ形石器に類するものという見方もできるが、516のナイフ形石器が伴うなど他にも九州地方の剥片尖頭器に伴う器種が一緒に見られるため剥片尖頭器と判断した。

#### 3. 槍先形尖頭器 (図版234・報告番号538)

538は黒曜石の貝殻状剥片を素材としている。打面を先端方向に置き、全周縁に正方向の中剥離を施している。先端付近には反方向の平坦・弱剥離も見られる。平面形は右肩が張る左右非対称形で、先端は尖るが基部は丸い。本来はナイフ形石器や台形石器に類するものと思われるが、刃部が認められないため槍先形尖頭器とした。

#### 4. 台形石器 (図版230・報告番号517～518)

517・518は貝殻状剥片を横に用いている台形石器である。素材打面側の側縁に正方向の中剥離を施して打面を除去している。反対側の側縁は517が反方向の平坦剥離が、518は正方向の中剥離が施されている。いずれも打面側の側縁の方が長いため、刃部は主軸に対して斜めになっている。

5. 彫器 (図版231・234・報告番号522～523・538)

522は珪質頁岩の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部側に置き基部端に正方向の平坦な加工を施して基部を除去しており、その加工部位を楕状剥離打面とする彫刀面が右側縁に見られる。上部は左側縁上部に見られる素材のもつやや切り立った面を打面として背面内部に向かう楕状剥離が見られる。

523は無斑晶質安山岩の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部側に置き末端に素材を主軸に対して斜めに折断する正方向の強・中剥離を施して楕状剥離打面を作出している。彫刀面は背面側を向き主軸に対して平行からやや斜めに傾いている。基部側には折れ面があるため打面は残されていないが、その折れ面を切る正方向の平坦・弱剥離が左側縁に見られる。

6. 掻器 (図版231・報告番号524)

524はチャートの礫片を素材としている。節理面と思われる腹面から正方向の強・中・平坦剥離を基部以外に施して刃部を作出している。典型的な掻器と異なり刃部は弧状を呈さず、鋸齒縁状となっている。

7. 削器 (図版231・報告番号525)

525は黒曜石の貝殻状剥片を素材としている。左側縁から打面にかけて正方向の弱・平坦剥離を施して刃部を作出している。

8. 石核 (図版232・報告番号526～528)

526～528は小形の縦長剥片を目的とする石核である。打面調整、頭部調整が見られるもののあまり顕著ではない。90°単位の打面作業面転移が繰り返されるサイコロ状の石核となっている。

(B) 第8号ブロック

1. ナイフ形石器 (図版233・234・報告番号529～530・532～534・537)

529・530は石刃を縦に用いた基部加工のナイフ形石器である。打面を基部に置き基部両側縁に正方向の中剥離を施して四角基部を作出している。打面はそのまま残されている。石器上半部に加工はなく、529は先端が開き、530は先端が尖る。

532は横長剥片を横に用いている。打面側の右側縁全体に正方向の中剥離を施して打面を除去している。この加工は右側縁の下4分の3まで連なっている。平面形は右肩が張る左右非対称形を呈し、先端はわずかに欠損しているが、基部と共に尖っている。

533は凝灰岩の横長剥片を横に用いている。主要剥離面は図の表面となっているため、本来の表裏は逆である。図上左側縁に加工が見られるが、右側縁全体は折れ面となっており、刃部も残されていないことからナイフ形石器ではなく、大形削器等の破片の可能性もある。

534は石刃の末端側に正方向の中剥離を施して、主軸に対して斜めに折断を行うナイフ形石器である。

2. 剥片尖頭器 (図版233・報告番号531)

531は黒曜石の縦長剥片を縦に用いた剥片尖頭器である。左側縁全体に正方向の中剥離を施しており、基部付近はノッチ状を呈している。基部右側縁には反方向の平坦剥離が見られるが、基部左側縁ほどノッチ状にはならない。右側縁上半には素材の鋭い縁辺が残されており刃部となっているが、使用痕と思われる微細剥離痕が見られる。平面形は左右ほぼ対称形で先端は尖り、基部は茎状を呈する。

3. 台形石器 (図版233・234・報告番号535～536)

535は台形石器となっているが、先頭形のナイフ形石器の1種と捉えられようか。

536はチャートの貝殻状剥片を斜めに用いている。打面を右下に置き、左右側縁に正方向の強・中剥離をノッチ状に施している。この加工により打面は除去されている。刃部は弧状を呈するため平面形は銀杏の葉のような形状を呈している。

537は珪質頁岩の貝殻状剥片を斜めに用いている。左右側縁に正反方向の平坦剥離をノッチ状に施して

いる。この加工により打面は除去されている。刃部は弧状を呈するが、主軸に対して斜めになるため、左右非対称形となっている。

#### 4. 彫器 (図版234・報告番号538~540)

539・540は一般的な彫器とは異なり、楕状剥離が背面側縁ではなく内部に施されるものである。第6号ブロックの522と共通点が多い。

#### 5. 掻器 (図版234・報告番号541~543)

541~543は黒曜石の縦長剥片を素材としている。素材の末端部を中心に正方向の中・平坦剥離を施して弧状の刃部を作出している。541・542には右側縁上部に正方向の加工が認められる。

#### 6. 削器 (図版234・235・報告番号540・544)

544は黒曜石の縦長剥片を素材としている。右側縁に正反方向の平坦剥離を施して刃部を作出している。

#### 7. 微細剥離のある剥片 (図版235・報告番号545)

545は黒曜石の縦長剥片の右側縁に微細剥離痕が見られるものである。

#### 8. 石刃 (図版235・報告番号546)

546は黒曜石の石刃である。打面は点状となっており頭部調整や打面調整は認められない。左右側縁には微細剥離痕が見られる。

### (9) 第10号ブロック<sup>(註1)</sup>

#### 1. ナイフ形石器 (図版236~237・240・242・報告番号548~559・570・584)

548は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き、基部左右側縁に正方向の弱剥離が施されているが、加工頻度は低く素材の形状はほぼそのままとなっている。左右非対称形で先端は尖るが、基部は平たい。

549は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き基部左右側縁に正方向の弱・平坦剥離が施されているが、加工頻度は低く素材の形状はほぼそのままとなっている。左右非対称形で先端は尖るが、基部は平たい。

550は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き右側縁全体と左側縁下半に正方向の中剥離を施している。左右ほぼ対称形で先端は尖るが基部は打面が残されているため平たい。

551は凝灰岩の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き、左側縁の上半に正方向のやや平坦な中剥離を施しているが、先端部には加工はない。左右対称形に近く、先端は尖るが基部は打面が残されているために平たい。

552は珪質頁岩の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き先端右側縁に正方向の中剥離を施している。また、基部左側縁には反方向のやや平坦な中剥離も見られるが打面が残されている。平面形は左右ほぼ対称で先端は尖り基部は平たい。

553は凝灰岩の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き、左右側縁下半に反方向の中剥離を施し尖る基部を作出して、打面を除去している。また、先端左側縁には正方向の中剥離が施され、尖鋭な先端が作出されている。平面形は左右対称で先端と基部が尖る柳葉形を呈している。

554はチャートの縦長剥片を斜めに用いている。打面を基部左側に置き、左側縁全体に正方向の中剥離を施して打面を除去している。また、右側縁下半にも正方向の中剥離が施されている。平面形は右側縁が弧状に張る左右非対称形を呈し、先端は尖るが基部は尖らない。

555は黒曜石の横長剥片を横に用いている。先端は欠損しており、残された側縁全面に正方向の強・中剥

(註1) 一部に第9・11号ブロックと関連が強いと思われる石器があり、それについては第9・11号ブロックの石群の記述内で触れることとする。

離が施され、打面を除去している。また、残存部に刃部は認められない。加工による素材の変形度は高い。左右対称で柳葉形を呈するようだ。

556・557は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。いずれも先端側は欠損しており残されている周縁は正反方向の中剥離が施されている。また、先端が欠損した折れ面に加工痕が見られるため、ナイフ形石器で無い可能性も考えられる。

558は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き右側縁全体に正方向の中・平坦剥離が施されている。この加工部位はブランディングには滑らかなため、削器類の刃部の可能性も考えられる。先端には正方向の中剥離が施されているために先鋭さはない。平面形は左右ほぼ対称で三角形を呈す。

559はナイフ形石器の基部のようだが、先端側が大きく欠損している。素材打面を基部に置いているが、基部両側縁への加工により打面は除去されている。

## 2. 台形石器 (図版237~238・報告番号560~562)

560は珪質頁岩の貝殻状剥片を斜めに用いている。基部左側に打面を置き、左右側縁に正方向の中剥離を施している。打面加工により除去されており、平たく反りの少ない腹面となっている。左側縁の方が長いので刃部は斜めとなり基部は尖る。平面形は左右非対称の三角形を呈している。

561は黒曜石の貝殻状剥片を横に用いている。素材末端にはヒンジフラクチャーになっており、左右側縁は打面と末端の切り立った部分を一部残しながら平坦・弱剥離が正反方向に施されている。

562は黒曜石の貝殻状剥片を横に用いている。左右側縁は正反方向の平坦剥離が施されている。横断面形は凸レンズ状となっている。主軸に対して直交する刃部には、潰れを伴う微細剥離痕が見られる。平面形は台形を呈する。

## 3. 槍先形尖頭器 (図版238・報告番号563)

563は両面に平坦な剥離が見られ、基部が尖頭状を呈するために槍先形尖頭器としたが、折れ面からの2次加工が見られることや、同一ブロック内に他に槍先形尖頭器が組成しないことなどから、削器とすべきだろうか。

## 4. 削器 (図版238・244・報告番号564・593)

564はチャートの寸詰まりの縦長剥片を素材としている。素材を斜めに用いて、右側縁全体に正方向の平坦剥離を施して弧状の刃部を作出している。下端は尖頭状を呈する。

## 5. 斧形石器 (図版238~239・報告番号565~566)

565蛇紋岩製の斧形石器で、水の影響により茶色く風化している。背面に礫面が見られ、腹面は2次加工による剥離面で覆われていると思われる。左右側縁には正反方向の平坦剥離が施され、比較的整った直線的な側縁を作出している。明瞭な研磨は認められないが、背面の礫面中に特に滑らかな部分があり、剥離面との境界部が磨耗して不明瞭となっていることから、研磨が施されている可能性が高いといえよう。刃部と基部は側縁から続く平坦剥離により丸く作出されており、全体的な平面形はわらじ形を呈している。

566は蛇紋岩製の斧形石器で、水の影響により茶色く風化している。背面に礫面が見られ、腹面は2次加工による剥離面で覆われていると思われる。左右側縁には正反方向の平坦剥離が施されているが、565ほど整った縁ではない。表裏両面の刃部から器体内部にかけて、明瞭な研磨痕が見られる。研磨痕と思われる線状痕は刃部縁付近では、縁に対して垂直方向となっているが、器体内部では垂直方向以外に複数の斜め方向の線状痕が認められる。多方向の線状痕が見られる斧形石器は珍しく、研磨法が一般的なものと異なる可能性を示していると思われる。刃部は胴部より狭くなっており、平面形は左右非対称でゆがんでいる。

## ⑩ 第9・11号ブロック

## 1. ナイフ形石器 (図版240~242・報告番号567~569・571~577・579~583)

567・568は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き、左側縁上半に正方向の弱剥離を施しているが、素材の形状はほとんど変えられていない。剥離は弱く使用痕等の可能性も考えられる。

569・570は縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き基部両側縁に正方向の中剥離を施している。569には左右側縁に反方向の平坦・弱剥離が見られる。加工による素材の変形は小さく、素材の反りやゆがみもそのままである。

571は黒曜石の縦長剥片を素材としている。打面を基部に置き、基部左側縁に反方向の中剥離、基部右側縁に反方向の中剥離を施して、尖頭状の基部を作出して打面を除去している。右側縁上半には正方向の中剥離が施され先端が作出されている。刃部は右側縁上半となり主軸に対して斜めとなっている。平面形は左右対称で縦長の菱形を呈している。

572は黒曜石の縦長剥片を素材としている。打面を基部に置き、基部左右側縁に反方向の中剥離を施して、尖頭状の基部を作出し、打面を除去している。先端部への加工は見られない。平面形は左右対称で基部先端の尖る縦長の菱形を呈している。

573は無斑品質安山岩の縦長剥片を素材としている。打面を基部に置き、基部左右側縁に反方向の中剥離を施して、尖頭状の基部を作出して打面を除去している。先端部への加工は見られない。平面形は左右対称で基部先端の尖る縦長の菱形を呈している。

574は黒曜石の縦長剥片を素材としている。打面を基部に置き、左側縁全体と右側縁基部に正方向の中剥離を施しているが打面は残されている。また、先端部には反方向の中剥離も見られる。

575は無斑品質安山岩の縦長剥片を素材としている。打面を基部に置き、右側縁全体と左側縁基部に正方向の中剥離を施して、尖鋭な先端と基部を作出している。この加工により打面は除去されている。左側縁上半が刃部となり主軸に対して斜めになっているが、平面形はほぼ左右対称である。

576~582は横長剥片を横に用いているナイフ形石器である。576以外の背面には底面といえるボジ面が見られ、剥離痕もほぼ1枚となっている。打面側の側縁全体に正方向の強・中剥離を施して打面を除去しており、反対側の側縁基部にも加工が施されるものもある(576・577)。平面形は左右対称に近い柳葉形を呈するものが多い。これらの特色より「国府型ナイフ形石器」に属して近いものとして位置付けられよう。

583・584はナイフ形石器の一部であるが、欠損部位が大きいため全体的な特徴がつかめない。

## 2. 台形石器 (図版243・報告番号585~586)

585は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を先端側に置き、右側縁上半部に正方向の中剥離を施して打面を除去している。また、左側縁基部には正方向の中剥離も見られる。刃部は主軸に対して斜めになり、全体的に細長くナイフ形石器に近い形状を呈している。

586は無斑品質安山岩の貝殻状剥片を横に用いている。左右側縁に正方向の強・中剥離を施して打面と末端を除去している。平面形は左右対称で、主軸に対して刃部が水平となる三角形を呈している。

## 3. 貝殻状石器 (図版243・報告番号587~591)

貝殻状剥片を横に用いるものが多い。側縁には打面、折れ面が目立ち、刃部には使用痕と思われる微細剥離痕が認められる。

## 4. 擡器状石器 (図版243・報告番号592)

592は横長剥片を横に用いている。主軸に対して垂直方向の折れ面に正方向の剥離が施されて刃部が作出されている。刃部加工の剥離の開始部はベントタイプが目立つ。一般的な擡器状石器とはやや異なるため他器種の可能性も考えられる。

5. 削器 (図版244~245・報告番号594~601)

593・594・596は石刃もしくは縦長剥片の側縁に刃部を作出するものである。刃部への加工は急角度のものが目立ち掻器的であるが、刃部は直線的で長い。

595・597~599は貝殻状剥片や剥片の破片の一部に平坦剝離を施して刃部を作出している。形状に齊一性はないが、大形のものが見られる。

600・601は正反方向の平坦剝離により刃部が作出されるものである。

6. 2次加工のある剥片 (図版246~247・報告番号602~607・609)

剥片の一部に加工が見られる剥片だが、齊一性が低く器種名が付けられなかったものである。

7. 石刃 (図版247・報告番号610~611)

610・611は珪質頁岩の石刃である。打面調整、頭部調整は見られない。背面に自然面が見られたり、反りやゆがみが目立つ点は、569・570のナイフ形石器の素材と共通しているといえようか。

8. 石核 (図版248~249・報告番号612~614・616~618)

612・614・616は小形の縦長剥片を目的とした角柱状の石核である。打面調整、頭部調整は認められず、単剝離面や平坦礫面を打面としている。上下両面に打面を設ける180°の打面転移が認められる。

613は黒曜石の剥片素材の板状石核である。貝殻状剥片が剝離されているようだが、数は少なく形状もばらついている。

614は無珪品質安山岩剥片素材の板状石核である。底面と粗い打面調整が認められ、577~581に見られる「国府型ナイフ形石器」に類する石器の素材に関連するものと考えられようか。

617はチャートの板状石核である。礫からの分割面を作業面として貝殻状剥片を剝離している。

618はチャートのチョッピングツール状の石核である。打面と作業面を入れ替える90°の打面転移を繰り返しながら貝殻状剥片を剝離している。

9. 斧形石器 (図版250~252・報告番号619~623)

619は蛇紋岩の薄い横長剥片を素材としているようだが、主要剝離面がはっきりわからない。周縁に正反方向の平坦剝離を施している。研磨は刃部から器体内面に見られ、背面の研磨は基部付近でも認められる。背面の研磨方向は刃部縁辺に対して垂直から若干右上がりに傾いており、腹面の研磨方向は垂直から若干左上がりに傾いている。平面形は最大幅が基部付近に偏り、刃部は直線的だがやや幅が狭い。

620は蛇紋岩の横長剥片を素材としているようだが、主要剝離面がはっきりわからない。周縁に正反方向の平坦剝離を施している。背面には礫面が残されている。研磨は刃部から器体内面に見られ、研磨方向は表裏とも刃部縁辺に対してほぼ垂直方向となっている。平面形は最大幅が中央付近に位置し、刃部と基部は丸くやや狭い。

621は蛇紋岩の横長剥片を素材としているようだが、主要剝離面がはっきりわからない。周縁に正反方向の平坦剝離を施している。背面には礫面が残されている。研磨は刃部から器体内面に見られ、研磨方向は表裏とも刃部縁辺に対してほぼ垂直方向となっている。刃部と側縁は直線的で平面形は短冊形を呈している。

622は斧形石器としたが側縁への加工は微妙で、蛇紋岩の剥片の可能性も考えられる。

623は斧形石器の基部と思われる。刃部側は大きく欠損している。側縁と基部への加工は粗く、未製品の可能性が考えられる。



## 4 母岩別資料と接合資料

### (1) 母岩別資料 (第25～30表)

遺物総数が多く、無斑品質安山岩や黒曜石など個体差が少ない石材もあることから、完全な個体レベルまでの分類は不可能であった。したがって、ここで分類された母岩には複数個体が含まれているものが多いこととなる。

母岩番号は石材ごとに付けてあるが、分類可能で複数あるものについては1から連番で、分類可能で単独のものには900番台の番号を与えた。焼けや風化が原因で分類できなかったものには9999を付けた。また、黒曜石については蛍光X線による産地分析後に母岩分類を行ったため、産地別に番号を付けてある。

#### 1. 黒曜石

数量が多く個体差も少ないことから、数量が多い母岩グループには多くの個体が含まれていると思われる。蛍光X線分析による産地判別では、約6割が和田鷹山群、約2割5分が諏訪星ヶ台群となっている。和田小深沢群が少ない点も特徴として挙げられよう。

第3号ブロックでは和田鷹山群が最も多いものの、諏訪星ヶ台群が半数近く存在する。また、秋田県の男鹿金ヶ崎群が1点含まれる。

5割羽の遺物に礫面が見られる。

#### 2. 無斑品質安山岩

数量が多く個体差も少ないことから、数量が多い母岩グループには多くの個体が含まれていると思われる。無斑品質安山岩の特徴は野尻湖遺跡群に一般的に見られるものと共通しており、産地としては飯山北部から津南方面が予想されようか。

礫面が見られる遺物は3割未満で少ない。これは母岩が元々大きいことと、分割された礫が遺跡内に持ち込まれていることの影響と思われる。

#### 3. チャート

砕片以外の石器の7割近くに礫面が見られる。礫面の特徴から原石は鶏卵大の円礫が多いことがわかる。礫面が見られる石器の多さは、鶏卵大のチャートの原石が遺跡に持ち込まれ、石器製作が行われたことを示していると思われる。

#### 4. 珪質頁岩・珪質凝灰岩・緑色凝灰岩・凝灰質頁岩・凝灰岩・頁岩

頁岩系の石材で新潟県以北に産地が存在すると思われる。多くは珪化が弱く器体表面にややざらつきが見られるもので、津南周辺で採集できるものと同質である。しかし、珪質頁岩の一部には器体表面が光沢を持つほど滑らかなものも含まれ、より遠隔地より持ち込まれた可能性が考えられる。

礫面が見られるものは3割5分前後となっている。

#### 5. その他石材

礫石、台石等の礫石器には安山岩が多用されている。この安山岩は遺跡周辺で採集可能な多孔質の安山岩で、礫石器や礫群の礫として用いられることが多いが、剥片石器の素材にはならない。その他礫石器には砂岩も用いられる。また、斧形石器には蛇紋岩が用いられている。

### (2) 接合資料

130組315点の石器が接合している。最大接合数が9点で多くが2～3点の接合であった。そのため、石器製作を復元できるような接合資料は少なかった。

接合資料の分布は図版108～111に示してある。この分布から自然流路内の遺物がほとんど流されていないことがいえる。

第3章 東葉遺跡

石材	母岩番号	遺物数	刻痕白色調	透明度	縞・斑晶・スジ等	含有物
Ag	1	3	黒褐色	不透明	褐色が縦状に入りこむ	なし
Ag	2	2	黄褐色	不透明	暗褐色の縞も見られる	なし
Ag	3	2	褐色	不透明	淡黄色の縞が見られる	なし
Ag	4	4	明黄褐色	半透明	透明度が高い 白色が粒状に入りこむ	なし
Ag	5	11	黄褐色	不透明	オリブ黄色の縞が見られる	なし
Ag	901	1	灰白色	不透明	なし	なし
Ag	902	1	灰黄色	不透明	灰白色の部分も見られる	なし
Ag	903	1	浅黄色	不透明	なし	なし
Ag	904	1	灰白色	不透明	なし	なし
Ag	905	1	浅黄色	不透明	透明な縞も見られる オリブ褐色が縦状に入りこむ	なし
An	1	449	褐色	不透明	なし	気泡が多い
An	2	340	灰色	不透明	なし	気泡が多い
An	3	716	灰白色	不透明	なし	気泡が多い
An	4	55	灰白色	不透明	なし	気泡が多い
An	5	19	灰色	不透明	なし	気泡が多い
An	6	9	灰色	不透明	なし	気泡が多く、白色粒子が見られる
An	7	15	灰白色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的
An	8	10	灰白色	不透明	なし	気泡はない 表面に白い粉がかかっているように見える
An	9	61	灰白色	半透明	なし	気泡は少なめである
An	10	47	褐色	不透明	なし	気泡が殆んどなく粒子が細かい
An	11	22	灰色	不透明	なし	気泡がなく硬質
An	12	126	灰色	不透明	なし	気泡は少なめである
An	13	220	灰色	不透明	なし	気泡が少なく硬質 割断面が鋭い
An	14	140	灰色	不透明	なし	気泡が少なく硬質
An	15	108	灰色	不透明	なし	気泡は殆んどない
An	16	86	黒褐色	不透明	なし	気泡は殆んどない 表面が砂っぽい
An	17	9	褐灰色	不透明	なし	気泡は少なめで軟質
An	18	17	灰黄色	不透明	なし	気泡は殆んどない 白色粒子が見られる
An	19	63	灰色	不透明	なし	気泡が大きい多めである ガラスのような粒子が見られる
An	20	54	灰色	不透明	なし	気泡が少なく硬質
An	21	38	灰色	不透明	なし	気泡が少なく硬質
An	22	6	灰白色	不透明	なし	気泡は少ない 細かい白色粒子が全体にある
An	23	44	灰白色	不透明	なし	気泡が小さく少なめである 硬質
An	24	8	灰白色	不透明	なし	気泡が多く硬質
An	25	19	灰色	不透明	なし	気泡が小さく少なめである 硬質
An	26	44	灰色	不透明	なし	気泡が少なく硬質
An	27	55	灰白色	不透明	なし	気泡が殆んどなく粒子が細かい
An	28	48	灰白色	不透明	なし	気泡が多めで硬質
An	29	33	灰白色	不透明	なし	気泡が少なく硬質
An	30	14	灰色	不透明	幅1mm程度の細かい灰白色の縞がある	気泡は多めである
An	31	11	黒褐色	不透明	幅1mm~5mm程度の褐灰色の縞がある	気泡の入り方は標準的
An	32	18	灰色	不透明	幅2mm程度の白色の縞の間に細かい縞が散在する	気泡は多めである
An	33	121	灰白色	不透明	幅1mm~5mm程度の灰色の縞が不規則にある	気泡はやや多めである
An	34	60	灰色	不透明	幅1mm程度の細かい灰白色の縞がある	気泡は多めである
An	35	28	灰白色	不透明	幅1mm~3mm程度の灰色の縞が不規則にある	気泡は少なめである
An	36	26	褐灰色	不透明	幅1mm~2mm程度の灰色の縞がある	気泡はやや多めである
An	37	15	灰色	不透明	幅1mm以下の細かい灰白色の縞がある	気泡は多めである
An	38	4	灰白色	不透明	幅1mm以下の細かい白色の縞がある	気泡はない 白色粒子が全体に多数ある
An	39	28	灰白色	不透明	幅1mm以下の灰色の縞がある	気泡は少なめである 粒子が細かく砂っぽい
An	40	25	灰白色	不透明	幅1mm程度の灰色の縞がある	気泡は多めである
An	41	34	灰白色	不透明	幅1mm~3mm程度の灰色の縞がある	気泡は少なめである
An	42	62	浅黄色	不透明	幅1mm以下の非常に細かい褐灰色の縞がある	気泡は少なめである
An	901	1	灰白色	不透明	幅1mm~2mm程度の灰色のはっきりした縞がある	気泡は少なめである 細かい白色粒子が少し見られる
An	902	1	灰白色	不透明	なし	細かい気泡と細かい白色粒子が見られる
An	903	1	灰色	不透明	なし	気泡は殆んど見られない 硬質
An	904	1	浅黄色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的
An	905	1	灰白色	不透明	糸が絡まったような黒褐色の縞が見られる	細かい気泡が全体にある
An	906	1	灰黄色	不透明	なし	細かい気泡が全体にあり軽石のような感じである
An	907	1	灰黄色	不透明	幅1mm~2mm程度の褐灰色の縞がある	気泡は多めである
An	908	1	灰黄色	不透明	幅の一定しない灰色の縞がある	細かい気泡が全体にあり軽石のような感じである
An	909	1	灰黄色	不透明	なし	気泡は殆んどない 細かい白色粒子が全体にある
An	910	1	黄褐色	不透明	なし	細かい気泡が多く軽石のような感じである
An	911	1	灰黄色	不透明	なし	細かい気泡がある

第25表 東葉遺跡H2地点母岩別資料分類基準表1

石材	母岩番号	透物数	斜輝面色調	透明度	結・疵品・スジ等	含有物
An	912	1	淡黄色	不透明	なし	細かい気泡が多い
An	913	1	暗灰色	不透明	フィッシュスケールのような細かい鱗が多く見られる	気泡は少なめである
An	914	1	よい黄色	不透明	なし	細かい気泡が多い
An	915	1	灰白色	不透明	なし	気泡は殆んどない 鱗状
An	916	1	褐色	不透明	なし	気泡は少なめである
An	917	1	灰色	不透明	幅1mm 以下の細かい灰黄色の鱗がある	気泡は殆んどない
Ch	1	285	暗赤褐色	不透明	透明なスジがある	なし
Ch	2	111	暗赤褐色	不透明	白色のスジが多く見られる	なし
Ch	3	8	暗赤褐色	不透明	白色のスジが多く見られる	非常に細かい白色粒子のようなものが見られる
Ch	4	2	暗赤褐色	不透明	黒色のスジが少し見られる	なし
Ch	5	8	暗赤褐色	不透明	透明なスジが見られる	なし
Ch	6	149	暗赤褐色 暗緑灰色	不透明	スジは少なめである	なし
Ch	7	5	暗灰色	不透明	スジは殆んどない	なし
Ch	8	19	暗オリーブ灰色	不透明	スジは少なめである	なし
Ch	9	10	暗灰色	不透明	白色のスジが多く見られる	なし
Ch	10	16	暗灰色	不透明	細かいスジが多く見られる	なし
Ch	11	13	灰色	不透明	スジは少なめである	なし
Ch	12	6	暗灰色	不透明	スジは少なめである	なし
Ch	13	6	褐色	不透明	全体にくもの巣のような鱗が入っている	なし
Ch	14	13	灰色	不透明	スジは少なめである	なし
Ch	15	27	暗灰色	不透明	スジは多めである 黒色の鱗が少し見られる	なし
Ch	16	17	灰色	不透明	スジは多めである 黒色の鱗が少し見られる	なし
Ch	17	35	灰色	不透明	スジは少なめである	なし
Ch	18	6	オリーブ灰色	不透明	スジは多めである	節理面に細かいガラスのような物が見られる
Ch	19	12	暗オリーブ色	不透明	スジは多めである	なし
Ch	20	2	オリーブ黒色	不透明	スジは多めである 黒色の細かい鱗が少し見られる	なし
Ch	21	131	緑灰色	不透明	スジは多めである 黒色の鱗が少し見られる	なし
Ch	22	115	灰色	不透明	黒色の細い鱗が多く入っている	なし
Ch	23	46	灰色	不透明	スジは多めである 黒色のはっきりした鱗が入っている	なし
Ch	24	39	灰色	不透明	スジは少なめである	なし
Ch	25	5	灰色	不透明	スジは少なめである 白色の部分も見られる	なし
Ch	26	2	灰色	不透明	細かいスジが鱗のように入っている	なし
Ch	27	50	灰色	不透明	スジは多めである 黒色の鱗が少し見られる	なし
Ch	28	40	緑灰色	不透明	スジは少なめである 黒色の部分もある	なし
Ch	29	9	暗灰色	不透明	鱗の一定しない灰色の鱗がある	なし
Ch	30	10	緑灰色	不透明	スジは少なめである 黒色の部分もある	なし
Ch	31	28	緑灰色	不透明	スジは多めである	なし
Ch	32	12	暗オリーブ灰色	不透明	なし	白色の粒子のような物が見られる
Ch	33	4	オリーブ黒色	不透明	スジは多めである	なし
Ch	34	4	暗灰色	不透明	スジは少なめである	青黒色の細い鱗が少し入っている
Ch	35	2	灰色	不透明	スジは多めである	なし
Ch	901	1	暗緑灰色	不透明	スジは殆んどない 赤黒色が部分的に見られる	なし
Ch	902	1	灰赤色	不透明	白色の鱗が入っている	なし
Ch	903	1	暗オリーブ色	不透明	スジは殆んどない	なし
Ch	904	1	オリーブ褐色	不透明	スジは殆んどない	なし
Ch	905	1	オリーブ褐色	不透明	なし	なし
Ch	906	1	灰オリーブ色	不透明	細かい鱗が多い	なし
Ch	907	1	オリーブ褐色	不透明	なし	なし
Ch	908	1	褐色	不透明	スジは殆んどない 黒色の鱗がうっすらと見られる	なし
Ch	909	1	灰色	不透明	スジは多めである	なし
Ch	910	1	暗オリーブ色	不透明	スジは表面に多く見られる	なし
Ch	911	1	暗オリーブ色	不透明	スジは少なめである 黒色の鱗が少し見られる	なし
Ch	912	1	暗オリーブ灰色	不透明	スジは多めである 黒色が部分的に見られる	なし
Ch	913	1	灰オリーブ色	不透明	薄くうっすらと鱗が見られる	なし
Ch	914	1	褐色	不透明	黒色と白色の鱗が見られる	なし
Ch	915	1	灰オリーブ色	不透明	スジは少なめである オリーブ黒色の鱗が見られる	なし
Ch	916	1	灰褐色	不透明	スジは少なめである	なし
Ch	917	1	灰オリーブ色	不透明	なし	節理面に粒状の物が見られる
Ch	918	1	淡黄色	不透明	なし	なし
Ch	919	1	灰色	不透明	なし	細かい黒色粒子が見られる
Ch	920	1	黒褐色	不透明	スジは多めである	なし

第26表 東裏遺跡H2地点母岩別資料分類基準表2

石材	母岩番号	漢物数	斜輝面色調	透明度	結・歪晶・スジ等	含有物
Ch	921	1	黒褐色	不透明	なし	なし
Ch	922	1	褐灰色	不透明	フツツと結が見える	なし
Ch	923	1	褐灰色	不透明	白色の線が見られる	なし
Ch	924	1	褐灰色	不透明	なし	なし
Ch	925	1	灰褐色	不透明	なし	細かい白色粒子が見られる
Ch	926	1	灰色	不透明	なし	白色の粉がついているように見える
Ch	927	1	褐灰色	不透明	なし	なし
Ch	928	1	オリーブ黒色	不透明	なし	なし
Ch	929	1	灰オリーブ色	不透明	白色の線が見られる	ガラスのように光っている物が少し見られる
Ch	930	1	灰オリーブ色	不透明	スジは少なめである	なし
Ch	931	1	灰色	不透明	白色の線が幅のように入っている	なし
Ch	932	1	灰色	不透明	スジは少なめである	白色の粉を固めたような物が多く見られる
Cr	901	1	白色	半透明	なし	なし
GT	901	1	明緑灰色	不透明	なし	なし
GT	902	1	オリーブ灰色	不透明	なし	なし
GT	903	1	緑灰色	不透明	なし	なし
GT	904	1	明オリーブ灰色	不透明	細いスジが見られる	なし
Ja	1	7	暗赤色	不透明	褐色の結が見られる 白いスジが見られる	なし
Ja	2	8	褐色	不透明	褐色から暗褐色へ部分的に色が変化している	白色のガラスのような物が見られる
Ja	3	8	オリーブ褐色	不透明	暗褐色の部分も見られる	なし
Ja	4	2	におい赤褐色	不透明	におい黄色が霧状に入っている	なし
Ja	5	11	黄褐色	不透明	明黄褐色が霧状に入っている	なし
Ja	901	1	黒色	不透明	黄褐色が霧状に入りこむ	なし
Ja	902	1	黄褐色	半透明	黒褐色が霧状に入りこむ 白いスジが見られる	なし
Ja	903	1	暗褐色	不透明	なし	なし
Ja	904	1	暗褐色	不透明	灰白色の線が見られる	なし
Ja	905	1	暗褐色	不透明	なし	なし
Ja	906	1	黄褐色	不透明	なし	細かい気泡が見られる
Ja	907	1	におい黄褐色	不透明	明オリーブ色の線が見られる	細かな気泡のある白色粒子が見られる
Ja	908	1	褐色	不透明	なし	気泡が少し見られる
Ob	1	6	黒色	半透明	なし	小さな球顆が入る
Ob	2	5	黒色	半透明	なし	なし
Ob	3	5	黒色	半透明	茶のスジが霧状に見られる	なし
Ob	4	8	灰色	半透明	なし	なし
Ob	5	11	黒色	半透明	黒いスジが霧状に見られる	小さな球顆が入る
Ob	6	25	黒色	透明	なし	なし
Ob	7	2	灰色	半透明	黒い線が見られる	なし
Ob	8	2	灰色	半透明	黒いスジが霧状に見られる	なし
Ob	901	1	黒色	半透明	茶のスジが霧状に見られる	小さな球顆が入る
Ob	902	1	黒色	半透明	茶のスジが霧状に見られる	なし
Ob	9999	5	灰色	半透明	黒い線が見られる	なし
Ob-SWHD	1	14	黒色	半透明	白いスジが霧状に見られる	なし
Ob-SWHD	2	15	灰色	半透明	なし	なし
Ob-SWHD	3	7	灰色	半透明	白いスジが霧状に見られる	なし
Ob-SWHD	4	16	黒色	半透明	黒い線が見られる	なし
Ob-SWHD	5	84	黒色	透明	なし	なし
Ob-SWHD	6	1	黒色	半透明	茶の線が見られる	なし
Ob-SWHD	901	1	黒色	半透明	黒いスジが霧状に見られる	なし
Ob-SWHD	902	1	黒色	半透明	白いスジが多く見られる	なし
Ob-TSTY	1	6	黒色	半透明	薄い茶色の線が見られる	小さな球顆が入る
Ob-TSTY	901	1	黒色	透明	なし	非常に小さな球顆が入る
Ob-TSTY	902	1	黒色	透明	黒い線が見られる	非常に小さな球顆が入る
Ob-WDKB	1	4	黒色	半透明	黒い線が見られる	なし
Ob-WDKB	2	2	黒色	半透明	茶のスジが霧状に見られる	小さな球顆が入る
Ob-WDKB	3	3	黒色	透明	黒いスジが霧状に見られる	なし
Ob-WDKB	4	2	黒色	透明	なし	小さな球顆が入る
Ob-WDKB	901	1	灰色	半透明	薄い茶のスジが霧状に見られる	なし
Ob-WDKB	902	1	黒色	半透明	茶のスジが霧状に見られる	なし
Ob-WDKB	903	1	黒色	透明	黒い線が見られる	小さな球顆が入る
Ob-WDKB	904	1	黒色	半透明	白い線が見られる	なし
Ob-WDTK	1	10	黒色	透明	なし	なし
Ob-WDTK	2	9	黒色	半透明	白いスジが霧状に見られる	小さな球顆が入る
Ob-WDTM	1	2	黒色	半透明	薄い線が見られる	非常に小さな球顆が入る
Ob-WDTM	2	1	黒色	透明	なし	小さな球顆が入る
Ob-WDTM	3	3	黒色	透明	薄い黒色の線が見られる	直径2mm-3mm程度の砂状の球顆が入る
Ob-WDTM	4	2	灰色	半透明	白い線が見られる	なし
Ob-WDTM	901	1	黒色	半透明	なし	大きな球顆が入る
Ob-WDTN	1	9	黒色	透明	なし	なし
Ob-WDTN	2	8	黒色	透明	黒い線が見られる	なし
Ob-WDTN	3	7	黒色	半透明	なし	直径3mm-4mm程度の砂状の球顆が入る
Ob-WDTN	4	6	黒色	半透明	白い線が見られる 黒いスジが霧状に見られる	小さな球顆が入る
Ob-WDTN	901	1	茶色	半透明	黒いスジが霧状に見られる	なし
Ob-WDTY	1	5	黒色	半透明	茶のスジが霧状に見られる	小さな球顆が入る
Ob-WDTY	2	4	黒色	半透明	白い線が見られる	小さな球顆が入る

第27表 東長遺跡H2地点母岩別資料分類基準表3

石材	母岩番号	産物数	剥離面色調	透明度	縞・斑品・スジ等	含有物
Ob-WDTY	3	7	黒色	半透明	なし	小さな球顆が入る
Ob-WDTY	4	15	黒色	半透明	茶の縞が見られる	なし
Ob-WDTY	5	24	黒色	半透明	なし	なし
Ob-WDTY	6	1	黒色	半透明	なし	なし
Ob-WDTY	7	2	黒色	半透明	白い縞が見られる	大きな球顆が入る
Ob-WDTY	8	3	灰色	半透明	黒いスジが霧状に見られる	なし
Ob-WDTY	9	38	黒色	透明	黒い縞が見られる	なし
Ob-WDTY	10	67	灰色	半透明	黒いスジが霧状に見られる	なし
Ob-WDTY	11	23	黒色	半透明	黒いスジが霧状に見られる	なし
Ob-WDTY	12	38	茶色	半透明	黒いスジが霧状に見られる	なし
Ob-WDTY	13	92	黒色	透明	なし	なし
Ob-WOBD	1	7	黒色	半透明	なし	小さな球顆が多く入る
Ob-WOBD	901	1	灰色	半透明	なし	小さな球顆が多く入る
Ob-WOTM	1	7	黒色	半透明	なし	非常に小さな球顆が入る
Ob-WOTM	901	1	灰色	半透明	白い縞が見られる	小さな球顆が入る
Ob-WOTM	902	1	灰色	半透明	なし	非常に小さな球顆が入る
Ob-WOTM	903	1	灰色	半透明	なし	小さな球顆が入る
Qu	1	2	灰白色	不透明	スジは少なめである	透明なガラスのような粒子が多く見られる
Qu	901	1	灰白色	不透明	なし	なし
Rh	901	1	灰白色	不透明	細い灰色の縞がくもの巣状に入っている	白色粒子が見られる
Sa	1	3	灰白色	不透明	なし	なし
Sa	2	3	灰色	不透明	なし	なし
Sa	3	3	灰色	不透明	なし	なし
Sa	4	6	灰色	不透明	なし	光沢のある粒子が見られる
Sa	5	4	灰色	不透明	なし	なし
Sa	901	1	灰色	不透明	なし	なし
Sa	902	1	灰色	不透明	なし	なし
Sa	903	1	灰白色	不透明	表面(自然面)は灰色で剥離面と色調が異なる	なし
Se	901	1	にぶい黄褐色	不透明	なし	なし
Se	902	1	灰黄色	不透明	黒色の縞のような模様有部分的に見られる	なし
Se	903	1	灰白色	不透明	緑灰色の縞が蛇紋状になっているのだが、はっきりとはわからない	なし
Se	904	1	明オリブ灰色	不透明	なし	なし
Se	905	1	灰白色	不透明	なし	なし
Se	906	1	灰白色	不透明	縞がうすらと見られる	なし
Se	907	1	灰白色	不透明	青灰色の縞が蛇紋状になっているのだが、はっきりとはわからない	なし
Se	908	1	緑灰色	不透明	白色が縞状に入っている	気泡は少し見られる
Se	909	1	灰白色	不透明	なし	なし
Se	910	1	灰白色	不透明	なし	なし
Sh	1	3	黒褐色	不透明	なし	なし
Sh	2	2	黒褐色	不透明	なし	なし
Sh	4	4	黒色	不透明	なし	なし
Sh	901	1	黒色	不透明	なし	なし
SS	1	3	灰黄褐色	不透明	黒色が縞状に入っている	表面(自然面)に軽石のような大きい気泡が見られる
SS	2	12	にぶい黄褐色	不透明	茶色が縞状に入っている	なし
SS	3	16	暗灰黄色	不透明	なし	白色粒子が見られる
SS	4	6	にぶい黄褐色	不透明	茶色の縞が流れるように入っている	気泡が少し見られる 光沢のある粒子が見られる
SS	5	3	灰白色	不透明	剥離面に黒色の部分が見られる	なし
SS	6	2	にぶい黄褐色	不透明	なし	白色粒子が見られる
SS	7	5	灰黄褐色	不透明	茶色が見られる	なし
SS	8	2	灰白色	不透明	灰色の縞が見られる	なし
SS	9	13	灰黄色	不透明	細い黒色の縞が不規則にある	なし
SS	10	17	灰色	不透明	細いスジが見られる 黒色が縞状に入っている	なし
SS	11	10	黄灰色	不透明	細いスジが少し見られる	白色粒子が見られる
SS	12	4	暗灰黄色	不透明	細いスジが見られる 細い白い縞が見られる	なし
SS	13	2	暗灰黄色	不透明	なし	白色粒子が見られる
SS	14	2	オリブ黒色	不透明	黒色の縞がうすらと見られる	なし
SS	15	2	灰色	不透明	なし	白色粒子が少し見られる
SS	16	3	黄褐色	不透明	茶色の縞が見られる	なし
SS	17	2	にぶい黄褐色	不透明	なし	なし
SS	18	3	灰色	不透明	なし	なし
SS	19	2	灰色	不透明	はっきりしなないが細いスジが見られる	なし
SS	20	2	にぶい黄褐色	不透明	なし	なし
SS	21	5	オリブ黒色	不透明	非常に細かいスジが見られる 縞1mm程度の白色の縞が見られる	なし
SS	22	2	黒褐色	不透明	なし	なし
SS	23	4	褐色	不透明	なし	細かい白色粒子が部分的に見られる
SS	24	8	褐色	不透明	なし	なし
SS	25	3	褐色	不透明	明2mm程度の茶色の縞が見られる	なし
SS	901	1	褐色	不透明	なし	なし
SS	902	1	灰黄褐色	不透明	なし	なし
SS	903	1	灰白色	不透明	灰色のはっきりした縞が見られる	なし
SS	904	1	灰白色	不透明	明2mm程度の黒色の縞が見られる	非常に細かい気泡が見られる

第28表 東裏遺跡H2地点母岩別資料分類基準表4

石材	母岩番号	造形数	剝離面色調	透明度	鱗・斑晶・スジ等	含有物
SS	905	7	褐色	不透明	なし	なし
SS	906	1	にぶい黄褐色	不透明	剝離面に黒色の部分が見られる	なし
SS	907	1	オリーブ黒色	不透明	なし	なし
SS	908	1	暗灰色	不透明	なし	なし
SS	909	1	オリーブ黒色	不透明	なし	非常に細かい白色粒子が見られる
ST	901	1	灰色	不透明	なし	なし
ST	902	1	浅黄色	不透明	非常に細かい線が見られる	なし
ST	903	1	灰色	不透明	なし	なし
TS	1	11	灰白色	不透明	なし	なし
TS	2	1	灰白色	不透明	なし	気泡は少し見られる
TS	3	4	灰白色	不透明	なし	なし
TS	4	4	灰白色	不透明	非常に細かい線が見られる	気泡は殆ど見られない
TS	901	1	灰白色	不透明	細いスジが見られる	非常に細かい気泡が少し見られる
TS	902	1	灰白色	不透明	なし	なし
Tu	1	25	灰色	不透明	スジは少なめである	なし
Tu	2	29	灰白色	不透明	なし	直径1mm程度の白色粒子が入っている
Tu	3	11	灰色	不透明	スジは少なめである	幾何的に緑色が混ざっている
Tu	4	6	灰色	不透明	なし	なし
Tu	5	7	灰色	不透明	なし	なし
Tu	6	7	灰白色	不透明	なし	全体に白く粉っぽく見える
Tu	7	7	灰色	不透明	なし	なし
Tu	8	3	灰色	不透明	なし	非常に細かい気泡が入っている
Tu	9	8	灰色	不透明	なし	なし
Tu	10	2	灰白色	不透明	なし	なし
Tu	11	6	灰黄色	不透明	スジは少なめである	なし
Tu	12	4	にぶい黄色	不透明	なし	なし
Tu	13	4	暗灰色	不透明	なし	細かい白色粒子が少し見られる
Tu	14	7	にぶい黄褐色	不透明	なし	細かい黒色粒子が多く見られる
Tu	15	6	灰色	不透明	なし	なし
Tu	16	2	灰色	不透明	スジは少なめである	非常に細かい気泡が入っている
Tu	17	3	灰色	不透明	なし	気泡は少なめである
Tu	18	10	灰白色	不透明	スジは少なめである	なし
Tu	19	2	灰白色	不透明	なし	気泡は少なめである 白い粉がついているように見える
Tu	20	3	灰色	不透明	なし	非常に細かい気泡とつぶい粒子が入っている
Tu	21	2	暗灰色	不透明	なし	なし
Tu	22	3	灰色	不透明	なし	なし
Tu	23	7	灰色	不透明	スジは少なめである	細かい黒色粒子が多く見られる
Tu	24	2	灰オリーブ色	不透明	なし	気泡は標準的である
Tu	25	5	灰色	不透明	薄くような線が見られる	なし
Tu	26	11	灰色	不透明	なし	細かい気泡が多い
Tu	27	3	淡黄色	不透明	なし	なし
Tu	28	4	灰白色	不透明	白色のスジが見られる	粒石のようにになっている部分があり気泡が目立つ
Tu	29	4	灰色	不透明	なし	非常に細かい気泡が入っている
Tu	30	2	にぶい黄褐色	不透明	スジは少なめである	なし
Tu	31	12	灰白色	不透明	スジは少なめである	表面が粉っぽく見える
Tu	32	9	灰白色	不透明	なし	なし
Tu	33	10	灰オリーブ色	不透明	なし	細かい気泡がある
Tu	34	13	浅黄色	不透明	なし	なし
Tu	35	43	浅黄色	不透明	なし	なし
Tu	36	45	灰白色	不透明	なし	なし
Tu	37	24	淡黄色	不透明	なし	気泡は少なめである 細かい白色粒子が少し見られる
Tu	38	81	灰白色	不透明	細かな灰色の線がある	ガラスのような粒子が見られる
Tu	39	3	灰白色	不透明	スジは少なめである	細かい気泡が多い
Tu	40	4	灰白色	不透明	細かな灰色の線がある	なし
Tu	41	9	灰白色	不透明	なし	茶色の粒子とガラスのような粒子が入っている
Tu	42	2	灰白色	不透明	なし	なし
Tu	43	2	灰白色	不透明	部分的に緑色の線が入っている	なし
Tu	44	2	淡黄色	不透明	なし	細かい気泡が多い
Tu	45	2	淡黄色	不透明	なし	細かい気泡が多い
Tu	46	2	灰色	不透明	なし	ガラスのような細かい粒子が多く見られる
Tu	47	4	灰色	不透明	スジは少なめである	ガラスのような細かい粒子が見られる
Tu	48	2	灰色	不透明	なし	細かい気泡が表面に多く見られる 細かい白色粒子が見られる
Tu	901	1	灰色	不透明	なし	表面が磨かれたようにツルツルしている
Tu	902	1	灰色	不透明	なし	気泡は少なめである 白色粒子が少し見られる
Tu	903	1	灰白色	不透明	細い黒色の線がある	なし
Tu	904	1	灰オリーブ色	不透明	なし	ガラスのような細かい粒子が少し見られる
Tu	905	1	黄褐色	不透明	なし	なし
Tu	906	1	明黄褐色	不透明	なし	ガラスのような粒子が少し見られる
Tu	907	1	淡黄色	不透明	なし	なし
Tu	908	1	淡黄色	不透明	なし	細かい気泡が少し見られる
Tu	909	1	淡黄色	不透明	なし	細かい気泡がある

第29表 東武遺跡H2地点母岩別資料分類基準表5

石材	母岩番号	産物数	新産面色調	透明度	織・斑品・スジ等	含有物
Tu	910	1	灰白色	不透明	なし	細かい気泡が多い
Tu	911	1	にぶい黄褐色	不透明	なし	なし
Tu	912	1	灰オリーブ色	不透明	なし	白色粒子が少し見られる
Tu	913	1	灰黄色	不透明	なし	なし
Tu	914	1	褐色	不透明	幅1mm～2mm程度の灰白色の縞がある	なし
Tu	915	1	にぶい黄褐色	不透明	なし	なし
Tu	916	1	灰白色	不透明	なし	なし
Tu	917	1	灰色	不透明	なし	細かい気泡が多い 細かいガラスのような粒子が多い
Tu	918	1	灰色	不透明	なし	なし
Tu	919	1	灰色	不透明	なし	細かい気泡が多い 細かいガラスのような粒子と白色粒子が見られる
Tu	920	1	灰色	不透明	なし	白色粒子が見られる
Tu	921	1	灰色	不透明	なし	気泡は少なめである 白色粒子が少し見られる
Tu	922	1	暗灰黄色	不透明	なし	なし
Tu	923	1	灰白色	不透明	なし	ガラスのような粒子が見られる
Tu	924	1	灰白色	不透明	なし	なし
Tu	925	1	灰オリーブ色	不透明	なし	気泡は少なめである
Tu	926	1	灰オリーブ色	不透明	なし	細かい気泡が多い
Tu	927	1	灰色	不透明	なし	細かい気泡が少し見られる
Tu	928	1	灰オリーブ色	不透明	なし	なし
Tu	929	1	黒褐色	不透明	黒色の縞が見られる	なし
Tu	930	1	灰色	不透明	なし	なし
Tu	931	1	暗灰黄色	不透明	縞のようにみえるがオリーブ灰色と灰白色が粒状に入っている	細かい気泡が多い
Tu	932	1	オリーブ灰色	不透明	なし	なし
Tu	933	1	灰オリーブ色	不透明	なし	なし
Tu	934	1	灰色	不透明	なし	なし
Tu	935	1	明オリーブ灰色	不透明	なし	気泡は少なめである
Tu	936	1	明緑灰色	不透明	なし	細かい気泡が多い 白色粒子が見られる
安山岩	1	29	灰白色	不透明	なし	気泡は多めである 黒色粒子が見られる
安山岩	2	11	灰白色	不透明	なし	細かい気泡が多く見られる
安山岩	3	3	灰白色	不透明	なし	気泡は多めである 光沢のある白色粒子が多く見られる
安山岩	4	8	灰色	不透明	なし	非常に細かい白色粒子が多く見られる
安山岩	5	10	灰色	不透明	なし	気泡は多めである 細かい黒色粒子が見られる
安山岩	6	4	明オリーブ灰色	不透明	なし	なし
安山岩	7	2	灰白色	不透明	なし	気泡は多めである 白色粒子が見られる
安山岩	8	3	灰黄色	不透明	なし	黒色粒子が多く見られる
安山岩	901	1	灰黄色	不透明	縞で縛った跡のようなスジが見られる	なし
安山岩	902	1	灰白色	不透明	なし	黒色粒子が見られる
安山岩	903	1	灰黄色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的 直径1mm～3mm程度の黒色粒子が見られる
安山岩	904	1	浅黄色	不透明	なし	気泡は多めである 大ききの異なる黒、白、茶色の粒子が見られる
安山岩	905	1	明黄褐色	不透明	黒い縞が流れるようにうっすらと入っている	気泡は少なめである 黒色粒子が見られる
安山岩	906	1	浅黄色	不透明	なし	軽石のように気泡が立っ
安山岩	907	1	暗灰黄色	不透明	なし	気泡は多めである 細かい黒色粒子が見られる
安山岩	908	1	灰白色	不透明	なし	気泡は多めである 細かい黒色粒子が見られる
安山岩	909	1	明黄灰色	不透明	なし	気泡は多めである 光沢のある黒色粒子が見られる
安山岩	910	1	灰白色	不透明	なし	細かい青色、白色の粒子が見られる
安山岩	911	1	灰白色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的 黒色粒子が少し見られる

第30表 東裏遺跡H2地点母岩別資料分類基準表6

## 5 剥片剥離技術

多くの剥片、破片が存在し盛んに石器製作が行われていたことが予想される。剥片剥離の目的剥片としては次の(1)~(4)が挙げられる。

### (1) 縦長剥片

小形の縦長剥片を剥離する石核は多角柱状を呈するものが多い。打面調整や頭部調整があまり顕著ではなく、上下に打面を設けて180°の打面転移が認められる。大形の石材がないためか、得られる石刃は小形である。石材は黒曜石やチャートが多い。

大形の石刃石核として剥片を素材とする板状石核が見られる。打面調整や稜上調整が認められ、打面の小口部から剥離していく場合と、広い面を作業面とする場合がある。得られる剥片は比較的厚く、打面も広く残っているものが目立ち、掻器の素材となっていることがわかる。石材は大形の素材を得られる無斑晶質安山岩や凝灰岩が見られる。

その他に、打面を固定もしくは180°の打面転移が行われるもので、作業面と反対側の背の部分の稜を調整する石刃石核が見られる。

### (2) 貝殻状剥片

打面、作業面転移を頻繁に行うサイコロ状の石核、作業面が固定される板状の石核、打面と作業面を交互に入れ替えるチョッピングツール状の石核が見られる。剥片の形状の斉一性は低く、スクレイパー類の素材となっている。

また、チャートには鶏卵大の小形円礫器一端をチョッピングツール状に打面と作業面を入れ替えながら剥離を行う石核が見られる。1つの石核から剥離される剥片は少なく、数枚程度と思われる。剥片は分厚いことから掻器の素材となっている。

### (3) 横長剥片

無斑晶質安山岩や凝灰岩の大形の剥片に横長剥片が見られる。これらは板状の剥片を素材としているが、規則性は低く、打面と作業面が入れ替わるなど底面への意識は低い。遺物の中には「翼状剥片」や「国府型ナイフ形石器」が見られるが、遺跡内でこれらの剥片が剥離された痕跡は残されていない。



## 第4章 大久保南遺跡

### 第1節 遺跡と調査の概要

#### 1 遺跡の概要

大久保南遺跡の所在地は長野県上水内郡信濃町大字柏原上ノ原204他である。野尻湖南西側にあたる伊勢見山から北西に延びる尾根上の小丘陵に立地する。

遺跡の北西から南西一帯には谷を挟んで上ノ原遺跡が、南には東裏遺跡がほぼ連なって存在している。

調査区一帯はカラマツ林となっており、表面採集等ができなかったため遺跡外とされていた。しかし、東裏遺跡と貫ノ木遺跡の間はなだらかな地形で、遺跡の存在が予想されたため、重機による試掘調査を行った。その結果、石器が検出されたため、北東側にあった周知の大久保南遺跡の拡張部分として調査が行われることとなった。

#### 2 調査の概要

##### (1) 調査範囲と調査方法 (第14図)

グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様に従い、Ⅰ～Ⅳ区の大々地区を設定した。大々地区のⅠ区は上ノ原遺跡のⅣ区と重複しており、Ⅳ区は東裏遺跡のⅠ区と重複している。調査面積は、約4500㎡であった。

調査は表土剥ぎ後、重機によるトレンチ調査と、人力による約10m間隔に1ヶ所2m四方の掘り下げを併用して遺物検出を行った。遺物が検出された周囲を人力により掘り下げ、遺物が途切れるまで拡幅を繰り返す調査法をとった。その結果、第14図の調査範囲となった。

##### (2) 調査経過 (調査日誌抄)

平成7年度

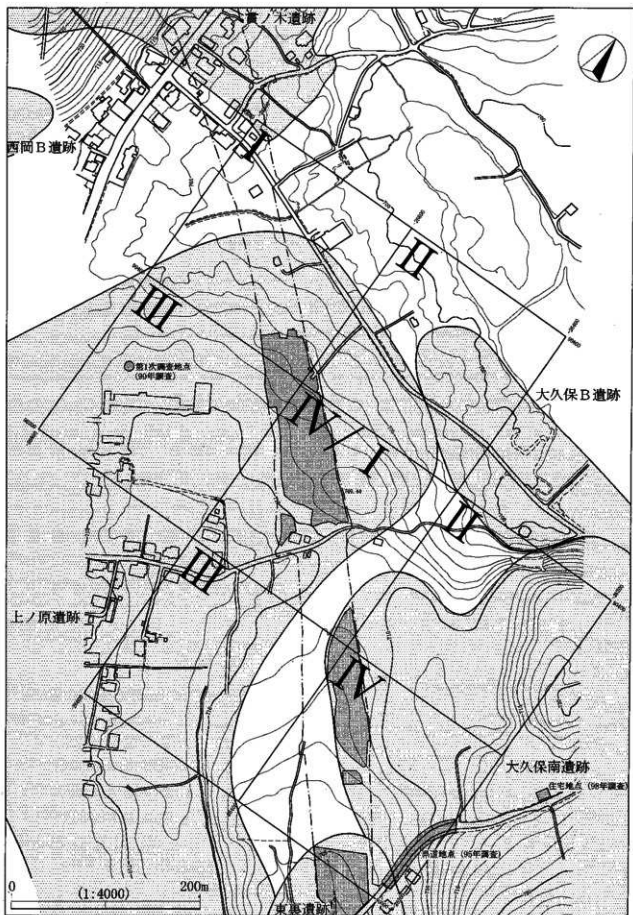
4月5日	重機による表土剥ぎ開始	5月31日	SH3 (黒曜石集中) 検出
4月11日	Ⅵ-L・M区へ重機によるトレンチを入れる	6月7日	文化庁岡村道雄氏による視察・指導
4月17日	Ⅲ層下～Ⅳ層上位で礫群を検出	6月11日	野尻湖人類考古グループ見学
5月2日	頁岩製台形石器出土	6月20日	斧形石器の出土相次ぐ
5月8日	斧形石器出土	8月8日	SH6・SH7を検出
5月18日	Ⅳ層上面の地形測量	8月13日	全景写真撮影

##### (3) 調査結果の概要

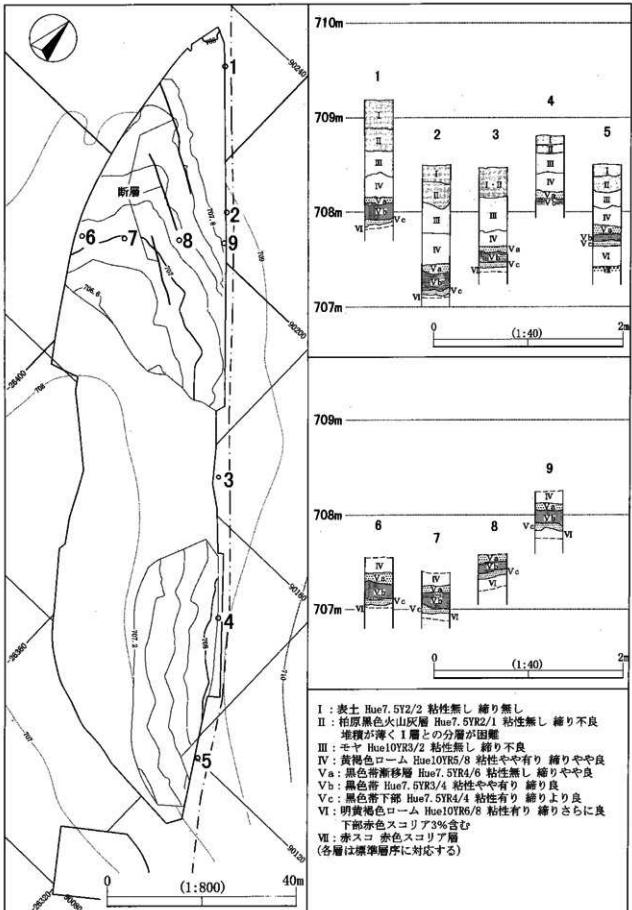
V b層に生活面を持つと思われる大久保南Ⅰ石器文化より、29のブロックが検出され、石器1225点、礫108点が出土した。

斧形石器が22点出土し、日向林B遺跡、貫ノ木遺跡に次ぐ数量となった。それに縦長剥片素材のナイフ形石器が特徴的に組成する。

また、大久保南Ⅰ石器文化は無斑肌質安山岩を主体とする大久保南Ⅰa石器文化 (BL11～BL29) と、黒曜石を主体とする大久保南Ⅰb石器文化 (BL1～10) に細分することができる。



第14図 大久保南・上ノ原遺跡の調査範囲と地形



第15図 大久保南遺跡の微地形と層序

大久保南 I b 石器文化では環状ブロック群が認められ、大形黒曜石製石器の集中出土地点 (SH3) が検出された。

## (4) 基本層序 (第15図)

調査区内の標高差が 1 m 程度で、野尻湖遺跡群内では比較的平坦な地形に立地しており、調査区の全域がほぼ同じ堆積状況を示していた。堆積は比較的厚く地表から遺物検出面までが 1 m 強に及ぶ。当センタ一の信濃町内の標準層序に準拠しており、他の遺跡との対比も可能である。

I 層は表土で調査区内は山林だったため、耕作土等は存在しない。

II 層は柏原黒色火山灰層で色調が濃く、I 層との境界は漸移的である。

III 層は漸移層で 20~40cm 程度の厚みを持つ。樹木根の影響からか IV 層との境界は波打っている。

IV 層は黄褐色のソフトロームで 25~40cm 程度の厚みを持つ。

V a 層は IV 層と V b 層の漸移的な層で、10cm 前後の厚みを持つ。始良丹沢火山灰 (AT) の火山ガラスが最も多く検出される層準である。

V b 層は 20cm 前後の厚みを持つ。黒色帯であるが他の遺跡よりも色が濃く黒い。また、大久保南 I a、I b 石器文化の主たる遺物包含層となっている。

V c 層は黒色帯下部に見られるやや色調が薄い層で、10cm 未満と堆積は薄い。

VI 層は明黄褐色のローム層で非常に硬い。VII 層は中部野尻ローム層トップに見られる赤スコである。

遺構	I	II	III	IV上	IV中	IV下	IV	V a	V b	V c	攪乱	合計	比率
BL1							2	6	3			12	0.9%
BL2			1	1	5	2	5		1	5		20	1.5%
BL3				8				2		1		11	0.8%
BL4		2	9		2	1	21	25	62			122	9.0%
BL5		3	17			2	13	10	93			138	10.2%
BL6					1	1	4	12	21			39	2.9%
BL7	1	1	12	1			7	13	29	1		65	4.8%
BL8		1	21	5	2	5	6	33	129			202	14.9%
BL9	1	2	2		1	1	5	7	17			36	2.7%
BL10		1	10	1	1		1	1	9			24	1.8%
BL11							3		10	2	1	16	1.2%
BL12				2	1	2		9	40			54	4.0%
BL13		4	6	3	1	1		5	12		1	33	2.4%
BL14					1	1		3	23	1		29	2.1%
BL15								2	7	1		10	0.7%
BL16				1	2			3	7	1		14	1.0%
BL17			3	3	3	10		20	65	6	1	111	8.2%
BL18				3	3	3		13	16			35	2.6%
BL19			2	5	4	4		12	36	1		64	4.7%
BL20					2	4		7	29	3		45	3.3%
BL21					1	1			9	1		12	0.9%
BL22			11		2		2	13	4			32	2.4%
BL23					2	2		2			1	7	0.5%
BL24			4		1	4		3	11	2		25	1.8%
BL25			18		1			1	3	1		24	1.8%
BL26			37					2	2	1		42	3.1%
BL27			1					4	2	1		8	0.6%
BL28			4		1			2	5			12	0.9%
BL29			5		3			2	8	2		20	1.5%
SH3									47			47	3.5%
SH4									11			11	0.8%
SH5									12			12	0.9%
SH7									12			12	0.9%
外		1		1	2	1		2	5			12	0.9%
合計	2	16	171	27	39	51	61	202	754	28	5	1356	
比率	0.1%	1.2%	12.6%	2.0%	2.9%	3.8%	4.5%	14.9%	55.6%	2.1%	0.4%		

第31表 大久保南 I 石器文化ブロック別出土層位組成

また、調査区北西部には北西-南東方向の断層が3ヶ所確認された。

## 第2節 大久保南I石器文化

### 1 大久保南I石器文化の概要

#### (1) 遺物の出土層位 (第31表)

I～Vc層で遺物が検出されており主体はVb層となっている。大久保南I a石器文化、大久保南I b石器文化での層位差はほとんどなく、共にVb層中に生活面を持つと考えられる。しかし、大久保南I b石器文化の方が若干浅いとの調査時の所見がある。

#### (2) 器種組成 (第32表)

石器1225点、礫108点が出土した。主な器種組成はナイフ形石器27点、台形石器12点、貝殻状刃器12点、楔形石器12点、石核67点、斧形石器22点となっている。剥片、砕片の数も多く石器製作の痕跡が見られる一般的な組成といえよう。

#### (3) 石材組成 (第33表)

大久保南I石器文化全体では黒曜石が最も多く、無斑品質安山岩、玉髄、珪質凝灰岩、チャートと続いている。

大久保南I a石器文化では無斑品質安山岩が最も多く半数弱を占め、頁岩系と玉髄が1割以上となっている。

大久保南I b石器文化では黒曜石が8割以上を占めている。

重量比では両石器文化とも黒曜石の比率は下る。

### 2 遺構

#### (1) 遺物の分布 (図版254～255)

上ノ原遺跡と大久保南遺跡の間に谷が存在するが、大久保南I a石器文化はその大久保南遺跡側の谷頭付近、標高706.6mから708mの間に分布している。北西-南東方向に細長い調査区内を埋めるように、散漫にブロックが分布している。

BL14、BL16～19の間で接合資料の共有が多くなっている。さらにVb層に生活面を持つ石器文化であり、遺物の平面分布を考慮すると、第17号ブロックの遺物密度の高い部分を中央として、第14・16・18～20号ブロックが環状に配列する環状ブロック群である可能性が高いと考えられる。そこで第14・16～20号ブロックを「大久保南I a石器文化環状ブロック群」(以下I a環状ブロック群)として位置付けることとする。しかし、それ以外のブロックも多く、北東の調査区外に遺物分布域が広がっていることが予想されるため、すべてのブロックがI a環状ブロック群に関連する同時期の環状外ブロック群としての位置付けはできない状況である。

大久保南I b石器文化は同I a石器文化の分布域付近から約300m下流の標高707m～708m付近の丘陵裾の張出部に分布している。平面分布では第7号ブロックを中央として、第4・5・6・8・9号ブロックが環状に配列しており、それぞれのブロック間に接合資料の共有が多く見られることから、環状ブロック群として考えられる。

中央ブロック群として第7号ブロックが、環状配列ブロック群として第4～6・8・9号ブロックが位置付けられようか。第2・3・10号ブロックについては石材が共通することから、環状ブロック群に関連

する環状外ブロック群として位置付けられようか。これら、第2～10号ブロックを「大久保南I b環状ブロック群」(以下I b環状ブロック群)として位置付けることとする。

I b環状ブロック群の北東部は調査区外となっている。そのため、今回調査区内に含まれたのは環状ブロック群の約5～6割程度と思われ、残りは調査区外に分布している。

## (2) ブロック

## 1. 第1号ブロック (図版256)

IV MG16グリッドを中心として北-南に約5m、東-西に約12mの楕円形の広がりを持つ。最も近いのが

遺構・石材	ナイフ形石器	台形石器	貝殻状石器	棒器	棒器状石器	閉器	鋸歯状石器	厚刃棒器	楔形石器	2次加工のみの制片	微細制片のある制片	制片	砕片	石核	斧形石器	斧形石器刃部破片	斧形石器破片	砥石	敲石	磨石	原石	礫	合計	比率	
BL1		1									10			1									12	0.9%	
BL2	2										1	10	1	2									3	19	1.4%
BL3	1								1		5	2											1	10	0.8%
BL4	1									2	7	90	13	2	1	3	1						1	122	9.2%
BL5	3		3						1	5	8	88	23	2	2							1	2	138	10%
BL6										3	3	28	4	1										39	2.9%
BL7	1		1							1	6	49			1	1	1						4	65	4.9%
BL8	3		2	1						4	14	131	38	4	2		1						2	202	15%
BL9	2		2								4	23			1	3							1	36	2.7%
BL10	1		1								2	11	2										6	24	1.8%
BL11											7			1						1			6	15	1.1%
BL12											1	44	4	3									2	54	4.1%
BL13	1				1			1	2	2	1	13		6									4	31	2.3%
BL14	1	4									16	2	1	4			1							29	2.2%
BL15											7												1	8	0.6%
BL16	1	2								1	1	5			3								1	14	1.1%
BL17	2		1								1	77	15	6			1						7	110	8.3%
BL18		1									27	3	1	2									1	35	2.6%
BL19			1			1					2	43	1	7	1								5	61	4.6%
BL20	2	2	1					3			18	2	4	2	1				1				7	43	3.2%
BL21	2										4		1										3	10	0.8%
BL22		1					1	1			23	1	1				1						3	31	2.3%
BL23											4		1					1						6	0.5%
BL24		1							1		2	15		3									1	23	1.7%
BL25	1								2		13	1	3	1									1	22	1.7%
BL26	2								1		26	2	4						1				5	41	3.1%
BL27											6		2											8	0.6%
BL28											6	1	2						1				2	12	0.9%
BL29											16								1				3	20	1.5%
SH3											35	5	7											47	3.5%
SH4																							11	11	0.8%
SH5																							12	12	0.9%
SH7																							12	12	0.9%
外		1										7	1										2	11	0.8%
黒曜石	18		9	1			2	1	8	12	41	424	81	19										616	46%
無味黒質安山岩	3	2	1							1	1	234	18	21										281	21%
珧質頁岩	2										1	29	4	2										38	2.9%
珧質凝灰岩	1										3	4	48	3	5								1	65	4.9%
玉髓	1	8	2			1			1	1	1	44	5	7										71	5.3%
凝灰岩	1										2	10		4	1		1							19	1.4%
緑色凝灰岩												4												4	0.3%
チャート		2			1				3	1	3	39	2	9										60	4.5%
砂岩												4	1						1	3	1			10	0.8%
蛇紋岩										1	11	5		21	5	5						1		49	3.7%
鉄石英												9	1											10	0.8%
安山岩												1											108	109	8.2%
頁岩	1																							1	0.1%
合計	27	12	12	1	1	1	2	1	12	21	51	857	120	67	22	5	6	1	3	1	1	109	1333		
比率	2.0%	0.9%	0.9%	0.1%	0.1%	0.1%	0.2%	0.1%	0.9%	1.6%	3.8%	64%	9.0%	5.0%	1.7%	0.4%	0.5%	0.1%	0.2%	0.1%	0.1%	8.2%			

第32表 大久保南I石器文化器種組成



第2号ブロックだが、約30m離れており孤立している。距離が離れているため、I b環状ブロック群の環状外ブロックとして位置付けは微妙である。

石器12点が出土した。出土層位はIV層～V b層でV a層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は台形石器1点・剥片10点・石核1点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

### 2. 第2号ブロック (図版256)

IV LK02グリッドを中心として北-南に約12m、東-西に約15mの楕円形の広がりを持つ。北東に第3号ブロックが位置している。I b環状ブロック群の環状外ブロックとして位置付けられる。

石器16点、礫3点が出土した。出土層位はII層～V b層で、IV～V b層間に分散している。器種組成はナイフ形石器2点・微細剥離のある剥片1点・剥片10点・砕片1点・石核2点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

### 3. 第3号ブロック (図版257)

IV GO17グリッドを中心として西西北-東南東に約12m、北北東-南南西に約5mの楕円形の広がりを持つ。南西に第2号ブロック、北北東に第4号ブロック、北西に第5号ブロックが位置している。I b環状ブロック群の環状外ブロックとして位置付けられる。

石器9点、礫1点が出土した。出土層位はIII層～V b層でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・楔形石器1点・剥片5点・砕片2点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有は無い。

### 4. 第4号ブロック (図版258)

VIGP14グリッドを中心として北西-南東に約10m、北東-南西に約9mの円形の広がりを持つ。北東には調査範囲境界があるが、ブロックは調査範囲内でほぼ収束していると思われる。南南西に第3号ブロック、西に第5号ブロック、北に第6号ブロックが隣接しており、境界の線引きが難しくなっている。I b環状ブロック群の環状配列ブロックとして位置付けられる。

石器121点、礫1点が出土した。出土層位はII層～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・鋸歯縁状削器1点・2次加工のある剥片2点・微細剥離のある剥片7点・剥片90点・砕片13点・石核2点・斧形石器1点・斧形石器刃部破片3点・斧形石器破片1点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第7号ブロックと1点、第8号ブロックと2点の接合資料を共有している。

### 5. 第5号ブロック (図版257)

VIGK13グリッドを中心として西西北-東南東に約14m、北北東-南南西に約8mの楕円形の広がりを持つ。南東に第3号ブロック、東南東に第4号ブロック、北東に第7号ブロック、北北西に第8号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。I b環状ブロック群の環状配列ブロックとして位置付けられる。

石器136点、礫2点が出土した。出土層位はII層～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器3点・貝殻状刃器3点・楔形石器1点・2次加工のある剥片5点・微細剥離のある剥片8点・剥片88点・砕片23点・石核2点・斧形石器2点・原石1点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第7号ブロックと1点、第8号ブロックと3点の接合資料を共有している。



## 6. 第6号ブロック (図版256)

IV GP11グリッドを中心として北-南に約4m、東-西に約5mの半円形の広がりを持つが、北東の調査範囲外へブロック範囲はさらに広がっていると思われる。南に第4号ブロック、西北西に第7号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。I b環状ブロック群の環状配列ブロック、もしくは第4号ブロックの中央への張出部として位置付けられる。

石器39点が出土した。出土層位はIV層中～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は2次加工のある剥片3点・微細刺離のある剥片3点・剥片28点・砕片4点・石核1点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

## 7. 第7号ブロック (図版259)

IV GM10グリッドを中心として東北東-西南西に約9m、北北西-南南東に約7mの楕円形の広がりを持つが、北東側の調査範囲外にもブロック範囲は広がっていると思われる。南西に第5号ブロック、東南東に第6号ブロック、西北西に第8号ブロック、北北西に第9号ブロックが隣接しており、境界の線引きが難しくなっている。I b環状ブロック群の中央ブロック群として位置付けられる。

石器61点、礫4点が出土した。出土層位はI層～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・貝殻状刃器1点・2次加工のある剥片1点・微細刺離のある剥片6点・剥片49点・斧形石器1点・斧形石器刃部破片1点・斧形石器破片1点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第4号ブロックと1点、第5号ブロックと1点、第8号ブロックと1点の接合資料を共有している。

## 8. 第8号ブロック (図版258)

IV GI10グリッドを中心として北北東-南南西に約12m、西北西-東南東に約9mの楕円形の広がりを持つ。南南東に第5号ブロック、東南東に第7号ブロック、北東に第9号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。I b環状ブロック群の環状配列ブロックとして位置付けられる。また、中央ブロック群の第7号ブロック側への張出部には黒曜石の火形剥片、石核が集中して出土するSH3が存在する。

石器200点、礫2点が出土した。出土層位はII層～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器3点・貝殻状刃器2点・搔器1点・2次加工のある剥片4点・微細刺離のある剥片14点・剥片131点・砕片38点・石核4点・斧形石器2点・斧形石器破片1点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第4号ブロックと2点、第5号ブロックと3点、第7号ブロックと1点、第9号ブロックと2点、第3号礫群と2点の接合資料を共有している。

## 9. 第9号ブロック (図版258)

IV GK06グリッドを中心として北西-南東に約10m、北東-南西に約4mの楕円形の広がりを持つが、北東の調査範囲外へブロック範囲はさらに広がっていると思われる。南南西に第8号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。I b環状ブロック群の環状配列ブロックとして位置付けられる。

石器35点、礫1点が出土した。出土層位はI層～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器2点・貝殻状刃器2点・微細刺離のある剥片4点・剥片23点・石核1点・斧形石器3点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第8号ブロックと2点、第3号礫群と1点の接合資料を共有している。

## 10. 第10号ブロック (図版259)

IV GF05グリッドを中心として北東-南西に約13m、北西-南東に約11mの楕円形の広がりを持つ。南東に第8号ブロック、東に第9号ブロックが位置している。I b環状ブロック群の環状外ブロックとして位置付けられる。

石器18点、礫6点が出土した。出土層位はII層～V b層でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・貝殻状刃器1点・2次加工のある剥片2点・微細剥離のある剥片1点・剥片11点・砕片2点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 11. 第11号ブロック (図版260)

IV FN05グリッドを中心として西北西-東南東に約15m、北北東-南南西に約9mの楕円形の広がりを持つ。最も近いブロックが北北西にある第12号ブロックだが10m以上離れている。

石器9点、礫6点が出土した。出土層位はIV層下～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は剥片7点・石核1点・磨石1点となっている。石材は安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 12. 第12号ブロック (図版261)

IV AK13グリッドを中心として北-南に約14m、東-西に約11mの楕円形の広がりを持つ。北東に第13号ブロックが位置している。

石器52点、礫2点が出土した。出土層位はIV層上～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は2次加工のある剥片1点・剥片44点・砕片4点・石核3点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

第13号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 13. 第13号ブロック (図版261)

IV AM08グリッドを中心として北西-南東に約11m、北東-南西に約7mの楕円形の広がりを持つ。北西に第12号ブロックが位置している。

石器27点、礫4点が出土した。出土層位はII層～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・搔器状石器1点・厚刃搔器1点・楔形石器2点・2次加工のある剥片2点・微細剥離のある剥片1点・剥片13点・石核6点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第12号ブロックと1点、第27号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 14. 第14号ブロック (図版260)

IV AE11グリッドを中心として東北東-西南西に約9m、北北西-南南東に約6mの楕円形の広がりを持つ。北西に第16号ブロック、北に第17号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。I a環状ブロック群の環状配列ブロックとして位置付けられる。

石器29点が出土した。出土層位はIV層中～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・台形石器4点・剥片16点・砕片2点・石核1点・斧形石器4点・斧形石器破片1点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 15. 第15号ブロック (図版260)

III ES12グリッドを中心として東北東-西南西に約6m、北北西-南南東に約4mの楕円形の広がりを持つ。北東に環状ブロック群に属する第16号ブロックが位置しているが、本ブロックの環状ブロック群に関連しているとは言い切れない。

石器7点、礫1点が出土した。出土層位はV a層～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。

る。器種組成は剥片7点となっている。石材は珪質凝灰岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 16. 第18号ブロック (図版262)

IV AB10グリッドを中心として北-南に約6m、東-西に約6mの円形の広がりを持つ。東南東に第14号ブロック、北東に第17号ブロック、北西に第19号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。ブロック南縁には斧形石器が集中出土したSH6が存在する。I a環状ブロック群の環状配列ブロックとして位置付けられる。

石器13点、礫1点が出土した。出土層位はIV層上～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・台形石器2点・2次加工のある剥片1点・微細剥離のある剥片1点・剥片5点・斧形石器3点となっている。石材は蛇紋岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 17. 第17号ブロック (図版262)

IV AE07グリッドを中心として北北東-南南西に約13m、西北西-東南東に約10mの楕円形の広がりを持つ。南に第14号ブロック、西南西に第16号ブロック、北東に第18号ブロック、西に第19号ブロック、北北西に第20号ブロックが位置している。I a環状ブロック群の中央ブロックに位置付けられる。

石器103点、礫7点が出土した。出土層位はIII層～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器2点・貝殻状刃器1点・微細剥離のある剥片1点・剥片77点・砕片15点・石核6点・斧形石器破片1点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

第18号ブロックと1点、第19号ブロックと5点の接合資料を共有している。

#### 18. 第18号ブロック (図版262)

IV AI05グリッドを中心として北北西-南南東に約8m、東北東-西南西に約4mの楕円形の広がりを持つ。南西に第17号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。I a環状ブロック群の環状配列ブロックに位置付けられる。

石器34点、礫1点が出土した。出土層位はIV層中～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は台形石器1点・剥片27点・砕片3点・石核1点・斧形石器2点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

第17号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 19. 第19号ブロック (図版263)

III ET07グリッドを中心として北北西-南南東に約10m、東北東-西南西に約10mの円形の広がりを持つ。南東に第16号ブロック、東に第17号ブロック、北東に第20号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。I a環状ブロック群の環状配列ブロックに位置付けられる。

石器56点、礫5点が出土した。出土層位はIII層～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は貝殻状刃器1点・削器1点・微細剥離のある剥片2点・剥片43点・砕片1点・石核7点・斧形石器1点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

第17号ブロックと5点の接合資料を共有している。

#### 20. 第20号ブロック (図版263)

IV AD03グリッドを中心として東北東-西南西に約17m、北北西-南南東に約8mの楕円形の広がりを持つ。南南東に第17号ブロック、東南東に第18号ブロック、南西に第19号ブロックが位置している。I a環状ブロック群の環状配列ブロックに位置付けられる。

石器36点、礫7点が出土した。出土層位はIV層中～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土してい

る。器種組成はナイフ形石器2点・台形石器2点・貝殻状刃器1点・楔形石器3点・剥片18点・砕片2点・石核4点・斧形石器2点・斧形石器刃部破片1点・敲石1点となっている。石材はチャートが多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 21. 第21号ブロック (図版264)

III EO06グリッドを中心として北-南に15m、東-西に7mの楕円形の広がりを持つ。東に第19号ブロックが位置しているが、I a環状ブロック群との関係は明言できない。

石器7点、礫3点が出土した。出土層位はIV層中～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器2点・剥片4点・石核1点となっている。石材は黒曜石・安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 22. 第22号ブロック (図版264)

III ER01グリッドを中心として北-南に約9m、東-西に約7mの楕円形の広がりを持つ。東南東に第20号ブロックが位置しているが、I a環状ブロック群との関係は明言できない。

石器28点、礫3点が出土した。出土層位はIII層～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は台形石器1点・鋸歯縁状刃器1点・楔形石器1点・剥片23点・砕片1点・石核1点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 23. 第23号ブロック (図版265)

II UB17グリッドを中心として東北東-西南西に約7m、北北西-西南東に約4mの楕円形の広がりを持つ大部分が調査区内に入っているが、北東端は調査区外となっている。隣接するブロックはなく、やや孤立している。

石器6点が出土した。出土層位はIV層中～V a層でIV中・IV下・V a層から遺物が出土している。器種組成は剥片4点・石核1点・斧形石器破片1点となっている。石材は無斑品質安山岩・チャートが多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 24. 第24号ブロック (図版265)

I YN17グリッドを中心として北北西-西南東に約12m、東北東-西南西に約10mの楕円形の広がりを持つ。東北東に第25号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。また、第5号礫群が南西に隣接している。

石器22点、礫1点が出土した。出土層位はIII層～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は台形石器1点・楔形石器1点・微細刻線のある剥片2点・剥片15点・石核3点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 25. 第25号ブロック (図版265)

I YR14グリッドを中心として東北東-西南西に約10m、北北西-西南東に約7mの楕円形の広がりを持つ。大部分が調査区内に入っているが、北東端は調査区外となっている。西南西に第24号ブロック、北北西に第26号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。

石器21点、礫1点が出土した。出土層位はIII層～V c層でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・楔形石器2点・剥片13点・砕片1点・石核3点・斧形石器1点となっている。

石材は珪質凝灰岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 26. 第26号ブロック (図版266)

I YP10グリッドを中心として北西-南東に約12m、北東-南西に約7mの楕円形の広がりを持つ。北東側約半分は調査区外にあると思われる。南南西に第24号ブロック、南南東に第25号ブロック、北西に第28・29号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。

石器36点、礫5点が出土した。出土層位はⅢ層～Vc層でⅢ層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器2点・楔形石器1点・剥片26点・碎片2点・石核4点・敲石1点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 27. 第27号ブロック (図版266)

I YL11グリッドを中心として西北西-東南東に約8m、北北東-南南西に約7mの楕円形の広がりを持つ。南南東に第24号ブロック、東南東に第25号ブロック、東に第26号ブロック、北北東に第28号ブロック、北に第29号ブロックがやや距離をおいて位置している。また、第7号礫群の分布域と重なっている。

石器8点が出土した。出土層位はⅢ層～Vc層でVa層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は剥片6点・石核2点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

第13号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 28. 第28号ブロック (図版266)

I YM07グリッドを中心として北-南に約4m、東-西に約7mの楕円形の広がりを持つ。大部分が調査区内に入っているが、北東端は調査区外となっている。南東に第26号ブロック、北西に第29号ブロックが位置しており、境界の線引きが難しくなっている。

石器10点、礫2点が出土した。出土層位はⅢ層～Vb層でVb層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は剥片6点・碎片1点・石核2点・敲石1点となっている。石材は無斑品質安山岩・砂岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 29. 第29号ブロック (図版266)

I YK06グリッドを中心として北-南に約6m、東-西に約8mの楕円形の広がりを持つ。調査区北西端に位置しており、大部分が調査区内に入っているものの数点の遺物が調査区外に存在する可能性がある。南東に第28号ブロックが位置している。

石器17点、礫3点が出土した。出土層位はⅢ層～Vc層でVb層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は剥片16点・敲石1点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

### (3) 石器集中

#### 1. SH3 (図版268)

I b環状ブロック群の環状配列ブロックである第8号ブロックの中央ブロック側の端に位置している。出土層位はVb層上半部で、大形石器の上端はVa層に及んでいる。黒曜石の剥片35点、石核7点、碎片5点、合計47点が折り重なるように集中して出土した。黒曜石の総重量は2088.81gで平均重量は44.44gで黒曜石の平均重量8.12gを大きく上回っている。15点が接合資料Ob-1に、14点が接合資料Ob-4に含まれる。接合資料には、こぶし大強の原石を分割する剝離と、その剥片を石核とする縦長剥片の剝離が見られる。

## 2. SH6 (図版270)

I a 環状ブロック群の環状配列ブロックである第16号ブロックの外縁に位置している。出土層位はV b 層上半部である。斧形石器3点と、斧形石器の素材と思われる2次加工のある剥片1点が、並んで出土した。石材はいずれも蛇紋岩である。

### (4) 礫群

#### 1. 第4号礫群 (図版269)

第20号ブロック北西端に位置している。V b 層から11点の安山岩の礫が出土している。8点が円礫、3点が亜角礫で、4점에焼けと思われる赤化が見られる。礫の総重量は2080gで、平均重量は189gとなっている。礫分布はまばらで配石として位置付けられる。

#### 2. 第5号礫群 (図版269)

第24号ブロック南西に隣接している。V b 層から12点の安山岩の礫が出土している。礫形状は角礫10点、円礫1点、亜角礫1点で、9점에焼けと思われる赤化が見られる。礫の総重量は1630.5gで、平均重量は136gとなっている。分布はまばらで配石として位置付けられる。

#### 3. 第7号礫群 (図版271)

第27号ブロックとはほぼ重なっている。V b 層から12点の安山岩の礫が出土している。礫形状は角礫2点、円礫5点、亜角礫5点で、9점에焼けと思われる赤化が見られる。礫の総重量は1166.5gで、平均重量は97gとなっている。分布はまばらで配石として位置付けられようか。

## 3 遺物

### (1) ナイフ形石器 (図版272~276・報告番号1~27)

1~14は縦長剥片を素材として、基部に加工が施されるナイフ形石器である。素材の縦長剥片は打面が広く残る厚いもので、打面調整や頭部調整は見られない。打面を基部に置き、基部の両側縁もしくは片側側縁に加工が施されるが、多くは打面がそのまま残される。加工の方向は正方向が主体だが、反方向も見られる。1・5・7・8・13には先端に加工が施されており、1・7・13は尖鋭な先端が作出されている。加工による素材の形状の変形度は低く、素材自体が茶直な直線的な縦長剥片でないものがあるため、平面形は左右非対称のものが多くなっている。

15~19は2側縁に加工が施されるナイフ形石器である。素材には縦長剥片、横長剥片が用いられている。縦長剥片は主軸と平行、または斜めに用いられ、横長剥片は横に用いられている。2側縁に施される加工により素材が折断されるため、打面は除去されており、形状の変形も大きい。基部に加工が施されるナイフ形石器よりも、小形で形状の斉一性も低い。

20の主要剥離面は表面図左の剥離面で、表面右側と裏面の剥離面もボジ面であるが主要剥離面に切られている。断面形は角柱状を呈し、側縁には鋸歯縁状の強剥離が見られる。

21は黒曜石の縦長剥片を素材とした先断形のナイフ形石器である。打面を基部に置いているが、打面は折れにより欠損している。素材末端を斜めに折断する正方向の強・中剥離が施されている。

22はナイフ形石器の基部と思われるが、上半部が大きく欠損しているため全体像が見えない。

23~26は黒曜石の縦長剥片もしくは寸詰まりの縦長剥片の素材を縦に用いている。打面を基部に置き、基部の片側側縁に正方向の中剥離が施されるが、打面は広く残される。上半部に加工はなく、尖らずに開いた素材の形状がそのまま維持されている。

27は珪質頁岩の縦長剥片を素材としている。打面を基部に置き、左右側縁下半部に弱剥離が施されているが、素材の形状はほとんど変えられていない。先端は欠損しているが尖ると思われる。

## (2) 台形石器 (図版276~277・報告番号28~31・36~42)

28~31は貝殻状剥片もしくは寸詰まりの縦長剥片を、斜めに用いた台形石器である。打面を基部横に置き左右側縁に正反方向の中剥離を施している。この時期の台形石器に特徴的に見られる平坦剥離は30の腹面と31の背腹面に見られる。加工部位は基部だけではなく刃部露近くまで施され、打面は除去されている。30以外は主軸に対してほぼ直交する刃部を持ち、平面形は細長い台形を呈している。

36~42は貝殻状剥片を、横に用いた台形石器である。左右側縁に中剥離を施して打面と末端を折断しており、加工方向は正方向が主体だが37のように反方向も見られる。平坦剥離は36・38に見られる。主軸に対してほぼ直交、もしくは斜交する刃部を持ち、平面形は台形を呈している。

本石器文化の台形石器の特徴としては平坦剥離よりもプランティング状の中剥離が目立ち、大久保南I a 石器文化には主体的に組成するが、大久保南I b 石器文化では客体的な存在といえようか。

## (3) 貝殻状刃器 (図版276・289・報告番号33~34・87~89)

33は玉髄の貝殻状剥片を横に用いている。左側縁に打面が大きく残されており側縁となっている。打面から背面に加工と思われる平坦な剥離が見られる。また、下側縁には反方向の中剥離も見られる。刃部は上辺から右辺で鋭利である。

34は玉髄の横長剥片を横に用いている。打面と末端で側縁が構成されており、末端側には正方向の弱剥離が部分的に施されている。

87~89は縦長剥片を折断したものを横に用いたものである。87は打面と折れ面が側縁に、88・89は2面の折れ面が側縁となっている。刃部には微細剥離痕が顕著に見られる。

## (4) 鋸歯縁状削器 (図版276・報告番号32)

32は黒曜石の貝殻状剥片を素材としている。反方向の強・平坦剥離を鋸歯縁状に施して打面を除去し刃部を作出している。図の上辺の素材縁辺は鋭く、使用痕と思われる微細剥離痕が見られるため、貝殻状刃器としての使用もあったと考えられる。

## (5) 楔形石器 (図版276~277・報告番号35・45~48)

黒曜石やチャートの貝殻状剥片が素材となっているが、いずれも3cm以下で小形である。上下両端を開始部とする潰れを伴う平坦な剥離が表裏に見られる典型的な楔形石器といえよう。

## (6) 搔器 (図版277・報告番号43)

1点の搔器が出土しているが、層位は浅く黒曜石の産地分析では葎科双子池群と推定され単独で存在するため、平面分布こそ重なっているが、異なる時期の石器の可能性も考えられる。

43は黒曜石の縦長剥片を素材としている。素材背面の大部分は礫面となっている。素材の末端に正方向の中・弱剥離を施して弧状の刃部を作出している。上部には右側縁からの楕状剥離が見られるが、主要剥離面との切りあいは微妙である。

## (7) 削器 (図版277・報告番号44)

44は玉髄の縦長剥片を素材としている。右側縁に反方向の平坦剥離を施して鋸歯縁状の刃部を作出している。刃部が鋸歯縁状のため、鋸歯縁状削器とすべきであろうか。

## (8) 斧形石器 (図版278~286・報告番号49~70)

49・50・53・56・66は刃部付近が最大幅となる撥形を呈する斧形石器である。50と66以外には背面に礫面が見られる。これらは蛇紋岩の扁平円礫を側面方向から薄く分割するかのようには剥離された剥片を素材としていることが想定される。この素材の特徴は野尻湖遺跡群内では一般的である。表裏に平坦な剥離を施して、なめらかで緩い弧状を呈する側縁を作出している。刃部は丸く作出されており、50以外には研磨が施されている。研磨面に見られる線状痕は刃部に対してほぼ垂直方向か、わずかに左上がりに傾いてい

るものがある。53・56・66は研磨により非常に鋭利な刃部が作出されている。この形態の斧形石器はいずれも大久保南Ⅰa石器文化に属しており、同石器文化の斧形石器の特徴的な形態として注目される。

55・64・67・68は胴部中央付近が最大幅となり、刃部が丸いわらじ形を呈する斧形石器である。55以外には背面に礫面が見られる。これらは蛇紋岩の扁平円礫を側面方向から薄く分割するかのように剥離された剥片を素材としていることが予想される。表裏に平坦な剥離を施して、なめらかで弧状を呈する側縁を作出している。55と67の刃部には研磨が施されている。研磨面に見られる線状痕は刃部に対してほぼ垂直方向か、わずかに左上がりに傾いている。いずれも大久保南Ⅰa石器文化に属しており、平面形が撥形を呈する斧形石器との共通性が認められる。

51・57・59-61は胴部中央付近が最大幅となり、刃部が丸いわらじ形を呈する斧形石器である。礫面は61の側面にある他は見られない。素材を得るための原石が一般的なものより大形で、1つの母岩から剥離される剥片数も多いことを示しているのだろうか。母岩の石質も一般的なものよりはざらついており、やや緻密さが足りない感がある。表裏に平坦な剥離を施して、緩い弧状を呈する側縁を作出しているが、やや滑らかさが無い。刃部には研磨が施されており、研磨面に見られる線状痕は刃部に対してほぼ垂直方向か、わずかに左上がりに傾く。いずれも、大久保南Ⅰb石器文化に属するもので、前記してきた大久保南Ⅰa石器文化との相違点が見られる。

54は胴部中央付近が最大幅となり、刃部が平たいわらじ形を呈する斧形石器である。腹面にわずかに礫面が見られる。表裏に平坦な剥離を施して、緩い弧状を呈する側縁を作出している。刃部には研磨が施されており、研磨面に見られる線状痕は刃部に対して垂直方向から、わずかに左上がりに傾く。この石器は接合資料となっており、大久保南Ⅰb石器文化の第5号ブロックと第8号ブロックに分かれて出土しているが、隣接するブロック同士で出土位置は近い。

58は刃部付近が最大幅となる撥形を呈している。側縁への加工は粗く縁辺も整っていない。刃部には研磨が見られ、研磨面の線状痕は刃部に対して斜めとなっている。全体的に加工が粗く、形状も整っていないため、未製品もしくは欠損品を再加工しかけたものの可能性が考えられる。大久保南Ⅰb石器文化に属する。

65は大久保南Ⅰa石器文化に属する平たい刃部を持つ斧形石器である。小形で礫面が見られない。刃部は表裏に研磨が施されており鋭く作出されている。

52は最大幅が刃部付近に偏る撥形を呈する斧形石器であるが、刃部には折れ面が見られることから、刃部の一部が欠損していると思われる。大久保南Ⅰa石器文化に属する。

62・63は細長い形状を呈する斧形石器である。表裏に平坦な剥離を施して、滑らかな側縁を作出している。刃部には研磨が認められるが、研磨による線状痕は見られない。大久保南Ⅰa石器文化に属する。

69・70は欠損部位が大きいため全体形状がわからない。丸い刃部が確認できる。大久保南Ⅰb石器文化に属する。

#### (9) 2次加工のある剥片・微細剥離のある剥片・剥片 (図版287～288・報告番号71-86)

71-86は大久保南Ⅰb石器文化に属する。いずれも同石器文化内に多く見られる縦長剥片剥離によるものと思われる。打面調整、頭部調整等の石核調整がほとんど見られないため、石刃としなかった。打面は単剥離面か平坦な礫面となっており、剥片に大きく残されている。全体的に厚く、背面の後縁も平行しない不揃いのものが多いため、剥片の反りや湾曲が見られる。

#### (10) 石核 (図版289～290・報告番号90-95)

91-95は貝殻状剥片を目的剥片とする板状石核である。92・93・95にはボジ面が見られ、素材が剥片であることが確認できる。作業面を固定して、打点を側縁に沿って横に移動して剥離を行っている。91・



94には求心的な剥離が見られる。

#### ⑩ 敲石

3点の敲石が出土しているが、いずれも大久保南I a石器文化属にする。長さ61mmの卵形と、95mmの棒状の2点が完形で、100mmで折れている棒状が1点となっている。いずれも砂岩製で、端部に敲打痕が見られる。

#### ⑪ 砥石 (図版291・報告番号96)

96は軟質砂岩の角礫を素材としている。角柱状を呈しており、表裏に砥面が見られる。表面には幅4cm前後の楕状の砥面4面が切りあっている。4面の砥面に見られる線状痕は斜めに交差している。裏面には幅2.5cm程度の砥面が1面確認できる。

#### ⑫ SH3出土石器 (図版292～293・報告番号97～107)

97～107はSH3およびSH3が位置する第8号ブロックより出土した石器である。

97～101は接合資料Ob-1に含まれる石器である。98・99は石核で、原石より剥離された大形剥片を素材としている。素材の切り立った面を打面に、剥片の腹面を作業面として縦長剥片を剥離している。打面調整、頭部調整、稜上調整は認められない。97・100・101はそれらに接合した縦長剥片である。

102～107は接合資料Ob-4に含まれる石器である。102は石核であるが、球状礫を素材としており、最初に剥離した単剥離面を打面としている。正面と左右側面が作業面となっており角柱状の形状を呈している。打面調整、頭部調整、稜上調整は認められない。初期段階では104のような板状の石核の素材が剥離されており、終わりに近くなると直接縦長剥片が剥離されている。103は剥片素材の石核で素材の打面をそのまま打面として用いて、小口部分を敲いて縦長剥片を剥離している。104も剥片素材の石核であるが、貝殻状剥片が剥離されている。105～107はこれらの石核から剥離された縦長剥片である。

## 4 母岩別資料と接合資料

### (1) 母岩別資料 (第34表)

母岩分類は石器文化別ではなく遺跡全体で行った。遺物総数が多く、無斑晶質安山岩や黒曜石など個体差が少ない石材もあることから、完全な個体レベルまでの分類は不可能であった。したがって、ここで分類された母岩には複数の個体が含まれているものが多いこととなる。

母岩番号は石材ごとに付けてあるが、分類可能で複数あるものについては1から連番で、分類可能で単独のものには999の番号を与えた。焼けや風化が原因で分類できなかったものには9999を付けた。また、黒曜石については蛍光X線による産地分析後に母岩分類を行ったため、産地別に番号を付けてある。

#### 1. 黒曜石

数量が多く個体差も少ないことから、数量が多い母岩グループには多くの個体が含まれていると思われる。大久保南I b石器文化では8割以上を占めており、そのうちの8割以上が和田鷹山群となっている。

4割強の遺物に礫面が見られる。

#### 2. 無斑晶質安山岩

数量が多く個体差も少ないことから、数量が多い母岩グループには多くの個体が含まれていると思われる。無斑晶質安山岩の特徴は野尻湖遺跡群に一般的に見られるものと共通しており、産地としては飯山北部から津南方面が予想されようか。

大久保南I a石器文化で多く用いられている石材である。

礫面が見られる遺物は3割弱で少ない。これは母岩が元々大きいことと、分割された礫が遺跡内に持ち込まれていることの影響と思われる。

石材	母岩番号	産物数			制限面色調	透明度	珎・炭晶・スジ等	含有物
		大久保南1a	大久保南1b	その他				
Ag	1	15			明褐色	不透明	暗褐色、黄褐色、オリーブ色が見られそれぞれが塊状に入り込む	なし
Ag	2	12	1		よよい黄褐色	不透明	黄褐色と青黒色が見られ部分的に色調が異なる	なし
Ag	3	2			暗緑灰色	不透明	暗緑灰色が部分的に見られる	気泡は大きく少なめである
Ag	4	2			暗褐色	不透明	暗褐色、黄褐色が見られ部分的に色調が異なる	なし
Ag	5	2			灰白色	不透明	白色部が塊状に見られる	なし
Ag	6	11			淡黄色	不透明	黄色部が塊状に見られる	なし
Ag	7	2			褐色	不透明	赤褐色、灰黄褐色が見られ部分的に色調が異なる	なし
Ag	8	3			灰白色	不透明	白色部が塊状に多く見られる	なし
Ag	999	13	2					
An	1	40	4		暗灰色	不透明	なし	気泡は大きく多めである
An	2	126	13		灰色	不透明	なし	気泡は大きく多めである
An	3	14	2		黄褐色	不透明	なし	気泡は少なめである
An	4	6	2		灰色	不透明	なし	細い気泡が多めである
An	5	64	9	1	灰色	不透明	なし	なし
An	999	3	4	3			約1-3mm程度の白色の珎が見られる	気泡は大きく多めである
Ch	1	14	3		暗赤褐色	不透明	暗緑灰色が部分的に見られる、チャート状の部分が多い	なし
Ch	2	7	2		灰色	不透明	暗赤褐色の珎が見られる	なし
Ch	3	7			灰色	不透明	青黒色の細い珎が少し見られる	なし
Ch	999	21	4	1				
Cl	999	1	3					
Ja	2	3			黄褐色	不透明	なし	なし
Ja	3	3			赤褐色	不透明	暗灰色が部分的に見られる	なし
Ja	1	2			よよい褐色	不透明	明緑灰色が部分的に見られる	なし
Ob-HUHM	999			1				
Ob-SWHD	1	11			茶褐色	半透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-SWHD	2	10			黒色	透明	なし	小さな球顆が入る
Ob-SWHD	3	6			灰色	半透明	暗灰色のスジが塊状に僅かに見られる	なし
Ob-TSHG	999		1					
Ob-TSTY	999		1					
Ob-WDHT	999		2					
Ob-WDRY	1	4			黒色	半透明	なし	小さな球顆が少し入る
Ob-WDRY	2	6			黒色	半透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDRY	3	23			灰色	透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDRY	4	10			灰色	半透明	暗灰色のスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDRY	999		2					
Ob-WDRK	1	2			灰色	半透明	暗灰色のスジが塊状に少し見られる	小さな球顆が少し入る
Ob-WDRK	2	1			黒色	透明	黒いスジが塊状に見られる	大きな球顆が入る
Ob-WDRK	3	1			黒色	透明	なし	小さな球顆が少し入る
Ob-WDRK	999		1					
Ob-WDTM	999		1					
Ob-WDTN	999		3	1				
Ob-WDTY	1	2	93		灰色	半透明	白いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDTY	2	2	46		黒色	半透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDTY	3		5		黒色	透明	なし	小さな球顆が少し入る
Ob-WDTY	4		15		灰色	半透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDTY	5		2	19	灰色	半透明	暗灰色の部分が塊状に見られる、白いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDTY	6		3	87	黒色	半透明	黒いスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDTY	7		6	61	黒色	透明	僅かな暗灰色のスジが塊状に見られる	なし
Ob-WDTY	8		11	75	黒色	透明	なし	なし
Ob-WDTY	9		2	2	灰色	半透明	黒いスジが塊状に見られる、梨のようにザラザラしている	小さな球顆が入る
Ob-WDTY	999		1	1				
Ob-不明	999		2					
Ob-不明	999		1	12				
Ob-不明	999		2	3	暗灰色	不透明	なし	なし
Ob-不明	999		2	1				
Ob-不明	999		1	2	明緑灰色	不透明	暗緑灰色の珎が粒状に見られる	なし
Ob-不明	999		2	3	黄灰色	不透明	明黄灰色が塊状に見られる	なし
Ob-不明	999		14	24				
Ob-不明	999		1					
Ob-不明	999		1	22	灰黄褐色	不透明	色の珎が見られる	なし
Ob-不明	999		4	1	灰黄褐色	不透明	なし	なし
Ob-不明	999		4	1				
ST	1	12	23		灰白色	不透明	珎が一定しない淡黄褐色の珎がわずかに見られる	なし
ST	2	9	1		灰白色	不透明	なし	珎面に僅かに黒色粒子が見られる
ST	3	2	3		灰白色	不透明	珎が一定しない淡黄褐色の珎が見られる	黒色粒子が一部分に見られる
ST	4	2	1		灰白色	不透明	なし	なし
ST	5	2			灰白色	不透明	珎が一定しない暗緑色の珎が一部分に見られる	なし
ST	999		1					
ST	999		1	5				
Tu	1		2		灰白色	不透明	部分的に淡黄褐色が見られ色調が異なる	なし
Tu	2		3		灰白色	不透明	なし	なし
Tu	3		4		灰白色	不透明	約1mm程度の灰オリーブ色の珎が見られる	ガラスのような粒子が見られる
Tu	999		7	3				
Tu	999		4	1				
Tu	999		4	1				

第34表 大久保南1石器文化母岩別資料分類基準表

### 3. チャート

大久保南1b石器文化ではわずかに見られるのみで、Ia石器文化でも1割弱と利用率は低い。碎片以外の石器の約7割に礫面が見られる。

### 4. 珪質頁岩・珪質凝灰岩・緑色凝灰岩・凝灰岩・頁岩

大久保南1b石器文化ではわずかに見られるのみで、Ia石器文化では約1割5分の石材が頁岩系の石材となっている。

### 5. その他石材

斧形石器には蛇紋岩が用いられている。野尻湖遺跡群の一般的な斧形石器の背面には礫面が見られるが、大久保南1b石器文化の斧形石器に礫面が見られるものが少ない。礫面保有が少ないことは原石が大形であったことを示すと思われる。Ib石器文化の蛇紋岩の質は一般的なものと比較すると、緻密さに欠け風化が進んでいる。これらの差は石材採取地の違いと考えられようか。

通常、岩石は露頭に近いほど大形であるが、露頭からの崩落、転落、または河川による淘汰が進まないため軟弱な部分が多い。逆に、露頭から遠ざかるほど淘汰が進み小形となるが、硬い部分のみが残る。

一般的な斧形石器の石材は光沢を持つほど緻密で硬いことから、河川下流域もしくは海岸で採集された可能性が考えられる。一方、これらと比較して、礫面が少なく軟弱なIb石器文化の蛇紋岩は、より露頭に近い河川上流域で採集された可能性が考えられる。

敲石、台石等の礫石器には安山岩が多用されている。この安山岩は遺跡周辺で採集可能な多孔質の安山岩で、礫石器や礫群の礫として用いられることが多いが、剥片石器の素材にはならない。その他礫石器には砂岩も用いられる。

#### (2) 接合資料

49組157点の石器が接合している。SH3に関連するもの以外では最大接合数が8点で多くが2～3点の接合であった。そのため、石器製作を復元できるような接合資料は少なかった。

SH3関連の接合資料はOb-1とOb-4で、それぞれ20点と18点の接合となっている。これらの接合資料は大形の黒曜石の原石から板状石核の素材となる剥片と、この剥片から剝離されたものとの接合資料となっており、板状剥片石核からは縦長剥片と貝殻状剥片の両者が剝離されている。共に完全な礫に戻らず、初期段階の大形剥片及び、製品と思われる中心部付近の剥片や石核の素材となりうる大形剥片が欠落している。これらは調査区外に存在するか、他の遺跡に残されてきたか、あるいは持ち出された可能性が考えられる。

接合資料の分布は図版254～255に示してある。

## 5 剥片剝離技術

多くの剥片、碎片が存在し盛んに石器製作が行われていたことが予想される。剥片剝離の目的剥片としては次の(1)～(4)が挙げられる。

### (1) 板状石核の素材剥片

素材には大形礫が選択されている。単剝離面や平坦な礫面を打面としている。打点はこの打面のかなり奥を敲いており、中には打面の中央付近にパンチコーンが見られるものもある。そのため得られる剥片は分厚く石核としては適しているといえよう。この剥片には縦長、横長の意識はあまりないようである。この剥片を素材とする石核には、縦長剥片を目的とするものと、貝殻状剥片を目的とするものが見られ、両者が同一母岩に共存する例も見られる。

## (2) 縦長剥片

剥片を素材とする板状石核が見られる。打面調整や稜上調整が認められず、打面の小口部から剥離していく場合が顕著に見られる。得られる剥片は比較的厚く、打面が広く残っている。剥片を素材とする石核剥離から剥離されるため、背面に礫面やボジ面が見られるものが多い。

## (3) 貝殻状剥片

打面、作業面転移を頻繁に行うサイコロ状の石核、作業面が固定される板状の石核が見られる。剥片の形状の斉一性は低く、台形石器や貝殻状刃器の素材となっている。

# 第3節 その他の石器

## 1 遺構

### (1) 遺物の分布 (図版294)

平面的に分布が重なっているものが多いが、型式と層位を考慮して大久保南Ⅰ石器文化とは分別したものである。いずれも製品が単独で存在している。

礫群との関係は平面的に重ならないため、同一時期とはいえない状況にある。

### (2) 礫群

#### 1. 第1号礫群 (図版295)

調査区南東部に位置しており第2号礫群が隣接している。周囲からの石器の出土はない。中心部をウレタンバックして周囲の土壌ごと取り上げ保管したために、その部分の礫の数量不明で、計測も行っていない。

出土層位はIV層下部となっており、51点の礫が確認されている。礫形状は拳程度の円礫を中心としており、焼け礫には亜角礫が見られる。焼け礫の分布は中央50cm四方に集中して分布する。炭化粒子は礫群内外に散在して見られる。

隣接している第2号礫群と同時期と見られる。

#### 2. 第2号礫群 (図版295)

調査区南東部に位置しており第1号礫群が隣接している。また、縄文時代遺構の第3号土坑が隣接しており、一部切られている。

出土層位はIV層下部で、119点の礫が出土している。礫は直径約60cmの円形に集中する部分と、そこを中心として、弧状に礫が散在する部分とが見られる。

礫形状は円礫36点、亜角礫36点、角礫46点、不明11点で、91点に焼け面が見られる。焼け礫の一部に割れている板状礫が見られ、割れ口を上に向けて中央の集中部中央に弧状に配置されている。

礫の総重量は86561.5gで、平均重量は733.6gとなっている。

隣接する第1号礫群と同時期と思われる。

## 2 遺物

### (1) ナイフ形石器 (図版294・報告番号1)

1は無斑品質安山岩の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き基部両側縁に正方向の強・中剥離を施して打面を除去している。先端側は欠損している。

## (2) 槍先形尖頭器 (図版294・報告番号2～4)

2は無斑晶質安山岩の縦長剥片を素材としている。打面を基部に置き正方向の平坦剥離を施して先端を作出している。断面はD字状を呈する。基部側は大きく欠損している。

3はチャートの節理に沿って割れた剥片、もしくは礫片を素材としている。表裏両面に平坦な加工が施されている。断面形はD字状を、平面形は最大幅が基部側に偏る形状を呈している。先端は欠損している。

4は無斑晶質安山岩の横長剥片を素材としている。背面に平坦な剥離を施して素材を大きく折断している。また、腹面の一部にも平坦な剥離が見られる。先端は尖り、基部は丸く最大幅が基部側に偏る平面形を呈している。断面形はD字状を呈する。

## (3) 石刃 (図版294・報告番号5)

5は珪質頁岩製の石刃である。打面は折れており小形で、細石刃の可能性も考えられる。

## (4) 細石核 (図版294・報告番号6)

6はいわゆるホロカ型の細石核として理解できるものである。単剥離面を打面として、頭部調整と下縁調整を施して船底形の形状を作出している。打面調整は見られない。細石刃は打面の小口部分より剥離されており、打面は弧状を呈しながら後退している。

蛍光X線分析では深浦八森山群と判別されており、北方から伝播してきた技術による石器型式と矛盾しない結果が得られている。

## (5) 削器 (図版294・報告番号7)

7は無斑晶質安山岩の大形の貝殻状剥片を素材としている。素材末端に正方向の中・平坦剥離を施して刃部を作出している。刃部は削器にしては厚い。打面は欠損している。

## 第5章 上ノ原遺跡

### 第1節 遺跡と調査の概要

#### 1 遺跡の概要

所在地は長野県上水内郡信濃町大字柏原上ノ原240他。上ノ原遺跡は国道18号線の東側に沿って延びる旧北部高校信濃町分校跡地小丘陵全体が遺跡範囲とされる。遺跡北西の谷を挟んで貫ノ木遺跡が、北東側の丘陵下には大久保B遺跡が、西の谷を挟んで大久保南遺跡が、南東丘陵下には東裏遺跡が隣接している。それぞれの遺跡の境界には谷等が存在しているが、地形的にはなだらかな部分が多く、遺物出土地点も100mも離れないことから、これらの遺跡は事実上連なっているといえよう。

高速道路予定地は当初遺跡範囲外とされていたが、用地南西約150mには上ノ原遺跡第1次調査地点(1990年調査区)が存在し、地形もなだらかに連なっていたため、遺物を包蔵する可能性が示唆された。そのため、重機による試掘調査を行った。その結果石器が検出されたため、上ノ原遺跡の拡張部分として調査が行われることとなった。

#### 2 調査の概要

##### (1) 調査範囲と調査方法 (第14図)

グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様に従い、I～IV区の大々地区を設定した。大々地区のI区は貫ノ木遺跡のXVII区と、IV区は大久保南遺跡のI区と重複している。調査面積は、約7500㎡であった。

調査は表土剥ぎ後、重機によるトレンチ調査と、人力による約10m間隔に1ヶ所2m四方の掘り下げを併用して遺物検出を行った。遺物が検出された周囲を人力により掘り下げ、遺物が途切れるまで拡張を繰り返す調査法をとった。その結果、第14図の調査範囲となった。

##### (2) 調査経過 (調査日誌抄)

###### 平成6年度

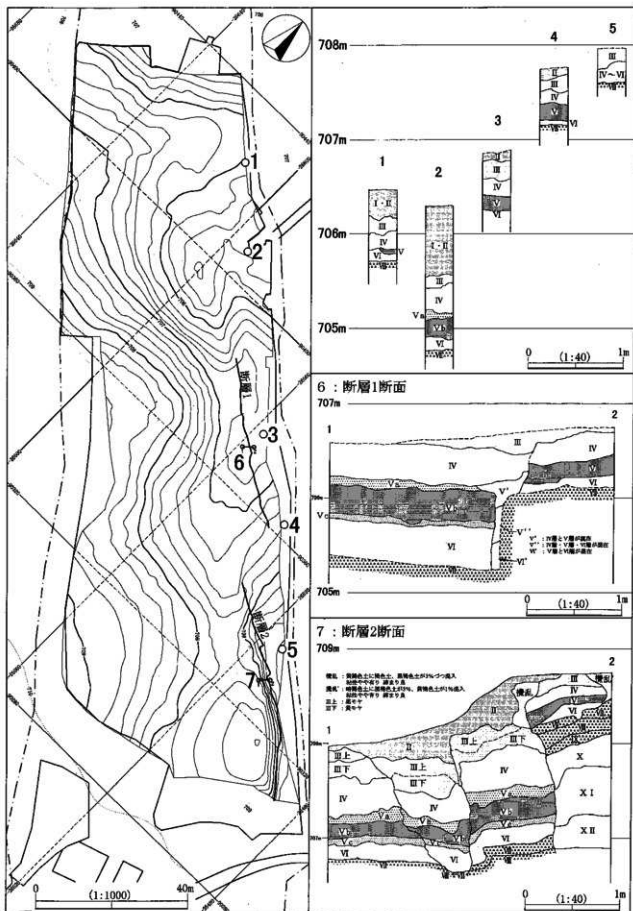
10月24日	重機による表土剥ぎ開始	11月25日	脂肪酸分析用サンプリング (楕先形尖頭器他)
10月25日	トレンチより楕先形尖頭器出土	12月7日	旧石巻面掘り下げは終了 遺物分布状況写真撮影
10月26日	旧石器時代のブロックを確認	12月9日	作業終了
10月27日	手掘りによるテストピット掘り下げ		
11月2日	遺物が検出されたテストピット周囲を拡張する		

###### 平成7年度

8月17日	IV-L区等のジョレンがけ 作業開始	10月20日	旧石器調査進む
8月30日	IV-F区ブロック検出、周囲を拡張	11月17日	SH07検出
9月7日	旧層下部面での地形測量	11月28日	作業終了
9月25日	V層からの遺物出土多し 石斧を伴う		

##### (3) 調査結果の概要

Vb層に生活面を持つと思われる上ノ原I石器文化より、24のブロック、4基の礫群が検出され、石



第16図 上ノ原遺跡の微地形と層序

器1874点、礫209点が出土した。斧形石器5点、ナイフ形石器10点、台形石器7点などが出土し、野尻湖遺跡群におけるAT下位の石器文化の基準的資料となった。

III層に生活面を持つと思われる上ノ原II石器文化より、9のブロック、2基の礫群が検出され、石器544点、礫188点が出土した。槍先形尖頭器23点が出土した。槍先形尖頭器は細身で両面加工の緻密なもので、槍先形尖頭器文化後半から終末の時期に位置付けられよう。野尻湖遺跡群内における概期の石器文化としては、非常にまとまりが良く基準資料の1つとなりうる。

#### (4) 基本層序 (第16図)

調査区内の標高差が3m程度で細かい起伏が見られる。土層堆積は場所によって異なるが、高い部分は薄く、低い部分は厚い傾向がある。堆積の薄い場所では、V層の分層ができない状況だが、厚い場所ではabcの分層が可能であった。特に標高の低い部分のVb層は、標準的なVb層よりも濃い色調のため、分層が容易だった。

調査区内には北東-南西に走る断層が2ヶ所確認された。第16図断面6、7がそれぞれの断面であるが、V層が完全にずれている様子がうかがえる。主たる遺物包含層であるVb層も例外ではなく、ブロックが分断される状況も見られた。IV層上部では断層境がはっきりしなくなるため、時間的にはIV層堆積中に断層が生じたと考えられようか。断層の上と下での土層の堆積は異なる。上は堆積が薄くV層の分層はできないが、下は堆積が厚くV層はabcに分層することができる。断層の上下でV層の堆積が異なることは、断層上部は堆積しづらく、風雨による弱い侵食があったと考えられようか。

## 第2節 上ノ原I石器文化

### 1 石器文化の概要

#### (1) 遺物の出土層位 (第35表)

II～VI層で遺物が検出されており主体はVb層となっている。頁岩系石材が主体となっている第22・24号ブロックではVa層が主体となっており、器種組成、石材も異なることからやや時期が新しい可能性が考えられようか。

土層の堆積は比較的厚く安定しているが、一部が平面的に上ノ原II石器文化と重なっているために、上層出土の遺物については一部混入の可能性が考えられる。

#### (2) 器種組成 (第36表)

石器1874点、礫209点が出土した。主な器種組成はナイフ形石器10点、台形石器7点、貝殻状刃器4点、搔器2点、搔器状石器5点、削器4点、彫器12点、揉錐器1点、楔形石器15点、斧形石器5点となっている。剥片、砕片、石核数は多く一般的な石器製作の痕跡が良く残されている遺跡と言えよう。

#### (3) 石材組成 (第37表)

全体的には、チャート、無斑晶質安山岩、黒曜石が2割前後で、特定の石材に偏ることはないが、ブロックによって石材組成は異なり、3つのグループに分けることができる。

IVM区の第1～9号ブロックでは黒曜石が4割5分、無斑晶質安山岩が3割強となっている。この黒曜石は蛍光X線分析による産地推定結果では夢科冷山群が主体である。

IVB・IVG区に分布する第10～19号ブロックではチャートが5割5分、無斑晶質安山岩が2割5分となっている。

IVA区に分布する第21・22・24号ブロックでは凝灰質頁岩や凝灰岩の頁岩系石材が過半数を占めている。



これらのグループは器種組成にも差が見られ、時間差や集団差が考えられるため、石器文化の細分が可能と思われる。

## 2 遺構

### (1) 遺物の分布

調査区は北西-南東方向に細長い長方形を呈しているが、遺物の分布域はIVM区周辺と、IVA・IVB・IVG区周辺の2カ所に大きく分かれている。両遺物分布域は周囲よりも若干低い、すり鉢状の地形に位置している。

IVM区にある第3～8号ブロックは馬蹄形に配列しており、一種の環状ブロック群として理解できよう。跡の直径は20m程度となっている。石材や分布の関連から第1・2・9号ブロックも共通性が見られるため、これらを含めて第1～9号ブロックを「上ノ原I a環状ブロック群」と位置付けておく。

IVB・IVG区に分布する第10～15号ブロックは環状に配列しており、一種の環状ブロック群として理解できよう。環の直径は約20mとなっている。また、第16～19号ブロックと石材が共通していることから第10～19号ブロックを「上ノ原I b環状ブロック群」として位置付ける。なお、第16～19号ブロックは弧状に配列しており、調査区外で弧が閉じ環状となる可能性も考えられる。

環状ブロック群とはならないが、第21・22・24号ブロックは石材や器種組成に共通性が見られるため、1つのまとまりとして捉えることができる。

### (2) ブロック

#### 1. 第1号ブロック (図版298)

IV MQ09グリッドを中心として北西-南東に約8m、北東-南西に約6mの楕円形の広がりを持つ。北に

遺構	II	III	IV上	IV中	IV下	IV	V a	V b	V c	V	VI	擾乱	合計	比率
BL1		1	1	1	7		18	84	9				121	5.8%
BL2			1	1		10	10	12	4			1	39	1.9%
BL3			4	3	13		22	51	2				95	4.6%
BL4			5	10	20		68	88					191	9.2%
BL5		5	6	3	5		9	16					44	2.1%
BL6	3	10	6	8	18		39	42	1				127	6.1%
BL7	1	15	2	10	12		22	39					101	4.8%
BL8	1	2	5	2	4		22	17	1				54	2.6%
BL9							3	4					7	0.3%
BL10		2	2		3		10	24					41	2.0%
BL11			5	8	6		15	35					69	3.3%
BL12	4	3	3	6	8		17	9	4			2	56	2.7%
BL13		7	22	10	7		12	48	3				109	5.2%
BL14		6	7	6	4		13	36	4				76	3.6%
BL15		2	3	4	1		8	22					40	1.9%
BL16	4	23	15	10	18		46	204	9				329	15.8%
BL17	1		1	3	3		6	16	3				33	1.6%
BL18		10	6	1	7		2	5	1			1	33	1.6%
BL19		11	10	13	8		13	3	2				60	2.9%
BL20		9	4		2	1	2	8					26	1.2%
BL21		3	6	14	36		46	61	1		4		171	8.2%
BL22					6	1	22			2			31	1.5%
BL23			1		1		4	1					7	0.3%
BL24		1			2		62	8		32			105	5.0%
SH4										36			36	1.7%
SH5										18			18	0.9%
SH6								32					32	1.5%
外	1	3	2	2	6		8	7	2	1			32	1.5%
合計	15	113	117	115	197	12	499	872	46	89	4	4	2083	
比率	0.7%	5.4%	5.6%	5.5%	9.5%	0.6%	24.0%	41.9%	2.2%	4.3%	0.2%	0.2%		

第35表 上ノ原I石器文化ブロック別出土層位組成

第2号ブロック、西に第3号ブロック、西北西に第4号ブロックが位置しているが、それぞれのブロックとの間には遺物空白部があり境界の線引きは容易であった。上ノ原I A環状ブロック群に属する。

石器116点、礫5点が出土した。出土層位はIII層～Vc層でVb層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は2次加工のある剥片2点・微細刻痕のある剥片1点・剥片50点・砕片62点・石核1点となっている。石材は数量的には蛇紋岩が多くなっているが、ほとんどが砕片で目的な剥片はない。その他は黒曜石が多用されている。他のブロックとの接合資料の共有はない。

2. 第2号ブロック (図版298)

IV MQ05グリッドを中心として北-南に6m、東-西に9mの楕円形の広がりを持つ。南に第1号ブロッ

遺物・石材	ナイフ剥片	合形石器	貝殻状石器	播磨石	播磨石	播磨石	播磨石	播磨石	石刀	2次加工のある剥片	微細刻痕のある剥片	剥片	砕片	石核	斧形石器	斧形石器	礫	合計	比率		
BL1										2	1	50	62	1			5	121	5.8%		
BL2												24	14	1				39	1.9%		
BL3	1				1	3			1	2	3	56	21	3		2		95	4.6%		
BL4												2	83	95	3	1		191	9.2%		
BL5	2								1		1	29	3	2		1		44	2.2%		
BL6	1	1							1	1	1	71	39	6		2		127	6.1%		
BL7		1			1				1		7	65	13	10			2	101	4.8%		
BL8	1								1	1	1	32	11	8				54	3%		
BL9										1		6						7	0.3%		
BL10									1		1	31	4	1		1	2	41	2.0%		
BL11									1		7	47	10	8		1		69	3.3%		
BL12			2							1	1	31	5	9			8	56	2.7%		
BL13			1								1	77	13	16				110	5.2%		
BL14			1								1	59	7	1			6	76	3.6%		
BL15									2			21	2	9	2		2	40	1.9%		
BL16	2	2			3				2	1	1	201	76	11	3	2	25	329	16%		
BL17						1			2		2	15	1	2			10	33	1.6%		
BL18					1				2		2	22	1	3			3	33	1.6%		
BL19									2		1	44	4	5		2	5	60	2.9%		
BL20						1						18	3				4	26	1.2%		
BL21					1	4					3	219	15	6		1	19	171	8.2%		
BL22						1					1	16	1	4			8	31	1.5%		
BL23												6	1					7	0.3%		
BL24						1	1				2	74	22	3			1	105	5.0%		
SH4																		36	36	1.7%	
SH5																		18	18	0.9%	
SH6																		32	32	1.5%	
外	3	3										14	2	2				8	32	1.5%	
黒曜石	7	3			1	1	2		3	4	7	18	229	98	30			403	19%		
無珪晶質安山岩	1	2					1	2			9	3	317	140	13			488	23.4%		
瑠璃頁岩	1	1	1					2				1	11					17	0.8%		
瑠璃凝灰岩												2	16	1				19	0.9%		
三輪	1	1										22	5					29	1.4%		
福沢頁岩層					1			5			1	2	141		13			163	7.8%		
福沢頁岩					1		1	1	1		2	59	22	2			5	94	4.5%		
緑色凝灰岩												3						3	0%		
チャート			3		4				3		3	355	85	55				3	511	25%	
砂岩																	6	11	17	0.8%	
蛇紋岩												37	46		4	1	1		89	4.3%	
水島												14	10	1					25	1.2%	
泥岩																		1	1	0.0%	
粘板岩																		1	2	0.1%	
鉄石炭												1		1						2	0.1%
凝灰岩												3								3	0.1%
花崗岩																		2		2	0.1%
灰山岩												8					1	189	196	9.5%	
頁岩						1						9		1			1	1	13	0.6%	
ヒン岩																			1	1	0.0%
礫石																		1	1	1	0.0%
合計	10	7	4	2	5	4	12	1	15	4	16	21	1211	422	117	5	4	15	2	209	2083
比率	0.5%	0.3%	0.2%	0.1%	0.2%	0.2%	0.6%	0.0%	0.7%	0.2%	0.8%	1.0%	56%	20%	5.6%	0.2%	0.2%	0.7%	0.1%	10%	

第36表 上ノ原I 石器文化器種組成



く、西に第5号ブロック、北西に第9号ブロックが位置しているが、それぞれのブロックとの間には遺物空白部があり境界の線引きは容易であった。上ノ原I a環状ブロック群に属する。

石器39点が出土した。出土層位はIV層上～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は剥片24点・碎片14点・石核1点となっている。石材は水晶が多用されている。水晶を組成するのは本ブロックの他には第1号ブロックに7点である。他のブロックとの接合資料の共有はない。

### 3. 第3号ブロック (図版298)

IV MK09グリッドを中心として北西-南東に約8 m、北東-南西に約5 mの楕円形の広がりを持つ。東に第1号ブロック、北北東に第4号ブロック、北に第6号ブロック、西に第8号ブロックが位置している。第4号ブロックとは近接しており、境界の線引きが難しくなっている。上ノ原I a環状ブロック群に属する。

石器93点、礫2点が出土した。出土層位はIV層上～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・削器1点・彫器3点・石刃1点・2次加工のある剥片2点・微細刻離のある剥片3点・剥片56点・碎片21点・石核3点・敲石2点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第4号ブロックと2点、第5号ブロックと1点、第6号ブロックと1点、第8号ブロックと1点の接合資料を共有している。

### 4. 第4号ブロック (図版299)

IV ML07グリッドを中心として北西-南東に約6 m、北東-南西に約3 mの楕円形の広がりを持つ。南西に第3号ブロック、北北東に第5号ブロック、北北西に第6号ブロックが近接しており境界の線引きが難しくなっている。上ノ原I a環状ブロック群に属する。

石器184点、礫7点が出土した。出土層位はIV層～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は微細刻離のある剥片2点・剥片83点・碎片95点・石核3点・敲石1点となっている。石材は無斑晶質安山岩が特に多く、黒曜石が多い周囲のブロックとは異なる。

第3号ブロックと2点、第5号ブロックと1点、第6号ブロックと1点、第8号ブロックと1点の接合資料を共有している。

### 5. 第5号ブロック (図版299)

IV MM05グリッドを中心として北北西-南南東に約9 m、東北東-西南西に約6 mの楕円形の広がりを持つ。東に第2号ブロック、南南西に第4号ブロック、西に第6号ブロック、北北東に第9号ブロックが位置しており、第4・6号ブロックとは境界の線引きが難しくなっている。上ノ原I a環状ブロック群に属する。

石器39点、礫5点が出土した。出土層位はIII層～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器2点・楔形石器1点・微細刻離のある剥片1点・剥片29点・碎片3点・石核2点・敲石1点となっている。石材は無斑晶質安山岩と黒曜石が多用されている。

第3号ブロックと1点、第4号ブロックと1点の接合資料を共有している。

### 6. 第6号ブロック (図版299)

IV MJ05グリッドを中心として北北西-南南東に約8 m、東北東-西南西に約7 mの楕円形の広がりを持つ。南東に第4号ブロック、東に第5号ブロック、西に第7号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。上ノ原I a環状ブロック群に属する。

石器125点、礫2点が出土した。出土層位はII層～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・台形石器1点・彫器1点・楔形石器1点・石刃1点・2次加工のある剥片

1点・微細刻離のある剥片1点・剥片71点・砕片39点・石核6点・敲石2点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第3号ブロックと1点、第4号ブロックと1点、第7号ブロックと3点の接合資料を共有している。

#### 7. 第7号ブロック (図版299)

IV MH05グリッドを中心として北西-南東に約10m、北東-南西に約9mの楕円形の広がりを持つ。東に第6号ブロック、南に第8号ブロックが近接しており、境界の線引きが難しくなっている。上ノ原I a環状ブロック群に属する。

石器99点、礫2点が出土した。出土層位はII層～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は台形石器1点・搔器状石器1点・彫器1点・石刃1点・微細刻離のある剥片7点・剥片65点・砕片13点・石核10点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第6号ブロックと3点の接合資料を共有している。

#### 8. 第8号ブロック (図版298)

IV MG09グリッドを中心として北北西-南南東に約10m、東北東-西南西に約9mの楕円形の広がりを持つ。東に第3号ブロック、北に第7号ブロックが位置しており、第7号ブロックとは境界の線引きが難しくなっている。上ノ原I a環状ブロック群に属する。

石器54点が出土した。出土層位はII層～V c層でV a層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器1点・楔形石器1点・2次加工のある剥片1点・剥片32点・砕片11点・石核8点となっている。石材は黒曜石が多用されている。

第3号ブロックと1点、第4号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 9. 第9号ブロック (図版300)

IV MO02グリッドを中心として西北西-東南東に約8m、北北東-南南西に約7mの楕円形の広がりを持つ。南南西に第5号ブロックが位置している。

石器7点が出土した。出土層位はV a層～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は2次加工のある剥片1点・剥片6点となっている。石材は黒曜石・無斑品質安山岩・凝灰岩が2点づつとばらついている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 10. 第10号ブロック (図版301)

IV GI05グリッドを中心として北-南に5m、東-西に5mの円形の広がりを持つ。北に第11号ブロック、北北西に第13号ブロック、西に第15号ブロックが位置している。上ノ原I b環状ブロック群に属する。

石器41点が出土した。出土層位はIII層～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は楔形石器1点・微細刻離のある剥片1点・剥片31点・砕片4点・石核1点・斧形石器破片1点・敲石破片2点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

第15号ブロックと2点の接合資料を共有している。

#### 11. 第11号ブロック (図版300)

IV GJ02グリッドを中心として北-南に8m、東-西に6mの楕円形の広がりを持つ。南に第10号ブロック、北北西に第12号ブロック、西北西に第13号ブロックが位置している。上ノ原I b環状ブロック群に属する。

石器69点が出土した。出土層位はIV層上～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は搔器1点・楔形石器1点・2次加工のある剥片1点・剥片47点・砕片10点・石核8点・敲石1点となっている。石材はチャートが多用されている。第12号ブロックと1点の接合資料を共有している。

12. 第12号ブロック (図版300)

IV BI19グリッドを中心として北-南に8m、東-西に11mの楕円形の広がりを持つ。本ブロック南端付近に断層が見られる。南南東に第11号ブロック、西南西に第13号ブロック、北西に第17号ブロックが位置している。上ノ原I b環状ブロック群に属する。

石器48点、礫8点が出土した。出土層位はII層～V c層でV a層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は貝殻状刃器2点・2次加工のある剥片1点・剥片31点・碎片5点・石核9点となっている。石材はチャートが多用されている。

第11号ブロックと1点、第16号ブロックと1点、第17号ブロックと1点の接合資料を共有している。

13. 第13号ブロック (図版302)

IV GG20グリッドを中心として北-南に5m、東-西に9mの楕円形の広がりを持つ。東南東に第11号ブロック、北東に第12号ブロック、西南西に第14号ブロックが位置している。上ノ原I b環状ブロック群に属する。

石器108点、礫1点が出土した。出土層位はIII層～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は貝殻状刃器1点・楔形石器1点・剥片77点・碎片13点・石核16点となっている。石材はチャートが多用されている。

第16号ブロックと1点、第17号ブロックと1点、第19号ブロックと1点の接合資料を共有している。

14. 第14号ブロック (図版302)

IV GC02グリッドを中心として北北西-南南東に約12m、西南西-東北東に約6mの楕円形の広がりを持つ。東北東に第13号ブロック、南東に第15号ブロック、北北西に第16号ブロックが位置している。上ノ原I b環状ブロック群に属する。

石器70点、礫6点が出土した。出土層位はIII層～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は貝殻状刃器1点・削器1点・楔形石器1点・剥片59点・碎片7点・石核1点となっている。石材はチャートが多用されている。第16号ブロックと1点の接合資料を共有している。

15. 第15号ブロック (図版303)

IV GF05グリッドを中心として北-南に12m、東-西に8mの楕円形の広がりを持つ。東に第10号ブロック、北西に第14号ブロックが位置している。上ノ原I b環状ブロック群に属する。

石器38点、礫2点が出土した。出土層位はIII層～V b層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は楔形石器2点・剥片21点・碎片2点・石核9点・斧形石器2点・敲石2点となっている。石材は無珩品質安山岩とチャートが多用されている。第10号ブロックと2点の接合資料を共有している。

16. 第16号ブロック (図版301)

IV BA16グリッドを中心として西北西-東南東に約16m、南南西-北北東に約9mの楕円形の広がりを持つ。南南東に第14号ブロック、東に第17号ブロック、北に第18号ブロックが位置している。また、第4号礫群と分布が重なっている。上ノ原I b環状ブロック群に属する。

石器304点、礫25点が出土した。出土層位はII層～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成はナイフ形石器2点・台形石器2点・搔器状石器3点・楔形石器2点・石刃1点・2次加工のある剥片1点・剥片201点・碎片76点・石核11点・斧形石器3点・敲石2点となっている。石材はチャートが多用されているが無珩品質安山岩も多い。

第12号ブロックと1点、第13号ブロックと1点、第14号ブロックと1点の接合資料を共有している。

17. 第17号ブロック (図版304)

IV BE16グリッドを中心として北北西-南南東に約10m、西南西-東北東に約9mの楕円形の広がりを持つ。

つ。本ブロック南端付近に断層が見られる。南東に第12号ブロック、西に第16号ブロック、西北西に第18号ブロックが位置している。また、第4号礫群と分布が重なっている。上ノ原I b環状ブロック群に属する。

石器23点、礫10点が出土した。出土層位はII層～V c層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は削器1点・楔形石器2点・2次加工のある剥片2点・剥片15点・砕片1点・石核2点となっている。石材は無斑晶質安山岩とチャートが多用されている。

第12号ブロックと1点、第13号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 18. 第18号ブロック (図版304)

IV BA13グリッドを中心として北-南に約5 m、東-西に約9 mの楕円形の広がりを持つ。本ブロック南端付近に断層が見られる。南に第16号ブロック、東南東に第17号ブロック、北に第19号ブロックが位置している。また、第4号礫群と分布が重なっている。上ノ原I b環状ブロック群に属する。

石器30点、礫3点が出土した。出土層位はIII層～V c層でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は搔器状石器1点・楔形石器2点・2次加工のある剥片1点・剥片2点・砕片1点・石核3点となっている。石材は無斑晶質安山岩とチャートが多用されている。第20号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 19. 第19号ブロック (図版302)

IV AT10グリッドを中心として北-南に約6 m、東-西に約4 mの楕円形の広がりを持つ。南に第18号ブロックが位置している。上ノ原I b環状ブロック群に属する。

石器55点、礫5点が出土した。出土層位はIII層～V c層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は剥片44点・砕片4点・石核5点・敲石2点となっている。石材はチャートが多用されている。

第13号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 20. 第20号ブロック (図版303)

IV A011グリッドを中心として北東-南西に約15 m、北西-南東に約9 mの楕円形の広がりを持つ。本ブロックのほぼ中央を西北西-東南東方向の断層が見られる。南東に第16号ブロック、東南東に第18号ブロック、東に第19号ブロック、西北西に第21号ブロックが位置している。上ノ原I b環状ブロック群との関係は微妙である。

石器22点、礫4点が出土した。出土層位はIII層～V b層でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は彫器1点・剥片18点・石核3点となっている。石材は凝灰質頁岩が多用されている。

第18号ブロックと1点、第21号ブロックと1点の接合資料を共有している。

#### 21. 第21号ブロック (図版305)

IV AM09グリッドを中心として西北西-東南東に約10 m、北北東-南南西に約7 mの楕円形の広がりを持つ。東南東に第20号ブロック、北北東に第22号ブロック、北西に第24号ブロックが、東北東に第5号礫群が位置している。

石器152点、礫19点が出土した。出土層位はIII層～VI層でV b層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は搔器1点・削器1点・彫器4点・2次加工のある剥片3点・微細剥離のある剥片2点・剥片119点・砕片15点・石核6点・敲石1点となっている。石材は凝灰質頁岩が多用されている。

第20号ブロックと1点、ブロック外と1点の接合資料を共有している。

#### 22. 第22号ブロック (図版301)

IV A004グリッドを中心として北-南に5 m、東-西に9 mの楕円形の広がりを持つ。南に第20号ブロック、南南西に第21号ブロックが位置している。また、南には第5号礫群が接しており、一部が重なっている。

る。

石器23点、礫8点が出土した。出土層位はIV層下～V層でV a層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は彫器1点・微細刺鏝のある剥片1点・剥片16点・砕片1点・石核4点となっている。石材は凝灰質頁岩が多用されている。他のブロックとの接合資料の共有はない。

23. 第23号ブロック (図版302)

IV FL13グリッドを中心として北東-南西に約8m、北西-南東に約4mの楕円形の広がりを持つ。周囲にブロックはなく単独で存在している。

石器7点が出土した。出土層位はIV層上～V b層でV a層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は剥片6点・砕片1点となっている。石材はチャートが多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

24. 第24号ブロック (図版305)

II UA01グリッドを中心として北東-南西に約14m、北西-南東に約10mの楕円形の広がりを持つ。周囲にブロックはなく単独で存在している。

石器104点、礫1点が出土した。出土層位はIII層～V層でV a層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は彫器1点・採錐器1点・微細刺鏝のある剥片2点・剥片74点・砕片22点・石核3点・敲石1点となっている。石材は凝灰岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

(3) 礫群

1. 第4号礫群 (図版306)

IV BB14グリッドを中心として、北-南16m、東-西18mの楕円形の広がりを持つ。第16～18号ブロックと平面分布が重なっている。

36点の礫が出土している。石材は多孔質の安山岩が32点あるが、砂岩、ヒン岩、泥岩も見られる。礫形状は円礫8点、亜角礫22点、角礫6点で、20点に焼けと思われる赤化が見られる。礫の総重量は23705gで、平均重量は658gとなっている。礫分布は非常に散漫で、配石として位置付けられる。

2. 第5号礫群 (図版307)

IV AO06グリッドを中心として直径約8mの円形の広がりを持つ。第20～22号ブロックの間に位置し、わずかに第22号ブロックと平面分布が重なっている。

18点の礫がV層から出土している。石材はすべて多孔質の安山岩である。礫形状は円礫1点、亜角礫12点、角礫5点で、13点に焼けと思われる赤化が見られる。礫の総重量は4700gで、平均重量は261gとなっている。礫分布は非常に散漫で、配石として位置付けられる。

3. 第6号礫群 (図版307)

III EL16グリッド付近に直径約2mの円形の範囲に多くがまとまっている。周囲にブロックは存在しないが、2点の石器が礫群内より検出されている<sup>(註1)</sup>。

32点の礫がV b層より出土している。石材は25点が多孔質の安山岩で、他に砂岩、頁岩、礫岩が見られる。礫形状は円礫22点、亜角礫10点で、2点に焼けと思われる赤化が見られる。礫の総重量は2816gで、平均重量は88gとなっている。礫群とするには散漫で、焼けがほとんど見られない。円礫が大半を占め、礫そのものは敲石や、磨石になりうるものであるが、敲打痕や磨痕は見られない。それらの素材を遺跡内に持ち込んだ跡であろうか。

(註1) ブロック外出土遺物となっている



#### (4) 炭化物集中 (SF-3)

第16号ブロック南半から第14号ブロックの北端にかかる範囲に炭化粒子が集中する範囲が確認された。この炭化物集中は断層の陥没によってできた小凹地に分布しており、北西-南東約8m、北東-南西約3mの楕円形の広がりを持つ。Vb層掘り下げ時に検出され、VI層上面まで分布していたため周辺の石器検出層からやや深い層に分布することとなる。中央付近に礫が3点分布していたが焼けは無く、周辺に焼土も見られない。

### 3 遺物

#### (1) ナイフ形石器 (図版308・報告番号1~10)

1は珪質頁岩の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き、基部両側縁に正方向の中剥離を施して打面を除去し鈍く尖る基部を作出している。また、この加工を切る基部腹面への平坦な剥離も見られる。先端から左右の刃部にかけて微細剥離痕が見られるが、明瞭な加工はない。左右ほぼ対称で先端は尖り、平面形は木葉形を呈している。

2は黒曜石の縦長剥片を斜めに用いている。図では表面に主要剥離面がある。打面を基部左脇に置き、左側縁全体に正反方向の中剥離を施して打面を除去している。右側縁全体には反方向の中剥離が施されている。左右側縁の加工は上半部ではいずれも反方向の加工となっており、先端部まで達しており先鋭な先端が作出されている。そのためナイフ形石器としての刃部は存在せず、槍先形尖頭器が伴う時期であれば周縁調整の槍先形尖頭器と判別されるものと思われる。平面形は左右対称で柳葉形を呈し、先端は尖り基部は丸みを持つ。

3は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き右側縁に正反方向の中剥離を施している。打面は残され平たい基部となっている。平面形は左右ほぼ対称で、先端は欠損している。

4は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を基部に置き、先端に正方向の中剥離をわずかに施して、先鋭な部分を落としている。打面部に加工はないが、剥離時の衝撃のためか、打面は砕けている。

5は黒曜石の縦長剥片を縦に用いている。打面を先端側に置き、先端左側縁に正方向の中剥離を施して打面を除去している。この加工により先鋭な先端が作出されているようだが、先端はわずかに欠損している。これ以外に加工は見られない。

6は黒曜石のナイフ形石器の先端部である。先端左側縁に正方向の弱剥離を施して先鋭な先端を作出している。

7~10は貝殻状剥片または横長剥片を、横もしくは斜めに用いている。左右側縁に加工を施して打面を除去している。加工には台形石器的な平坦な剥離の他、ブランディング状のものが見られ、方向も正反面方向が見られる。先端は鈍く尖り、平面形は片側の肩が張る非対称となっている。素材や加工は台形石器に近く、ナイフ形石器と台形石器の中間的な石器として位置付けられようか。

#### (2) 台形石器 (図版309・報告番号11~17)

11・12は貝殻状剥片を横に用いている。左右側縁に正反方向の平坦な剥離をノッチ状に施して打面を除去し、側縁を作出している。刃部は稜のため山形を呈している。

13は珪質頁岩の貝殻状剥片を横に用いている。左右側縁に正方向の強・中剥離をノッチ状に施して打面を除去し、側縁を作出している。加工による素材の折断は大きい。刃部は水平で平面形は左右対称となっている。

14は玉髄の貝殻状剥片を横に用いている。左側縁は反方向の剥離が見られるが、腹面側までは達せず、打面内で取まっている。右側縁下半に正方向の中剥離をノッチ状に施している。刃部は斜めとなっている。

が、全般的に加工が粗く、側縁も凸凹して安定しない。

15~17は貝殻状剥片を縦に用いている。打面を基部に置き、片側側縁全体に正方向の中剥離を施している。打面はそのまま残されたい基部となっている。先端方向に加工はなく16は折れているが他は素材末端が残されている。この末端及び、加工のない側縁上部が刃部となろうか。

(3) 貝殻状刃器 (図版309・報告番号18~20)

18~20はチャートの貝殻状剥片を横に用いている。打面もしくは折れ面を側縁として、部分的に正方向の中剥離を施している。縦横は1:1で平面形は台形を呈する。

(4) 掻器状石器 (図版309・報告番号21~25)

21~25はチャートの貝殻状剥片を素材としている。素材の末端に正方向の中・弱剥離を施して刃部を作出している。21の刃部はノッチ状を呈するが、それ以外は丸い弧状を呈している。

(5) 斧形石器 (図版310~311・報告番号26~30)

26・27は蛇紋岩を石材としている。図上で26は腹面に、27は背面に礫面が見られることから、礫面を有する剥片(礫片)を素材としている。左右側縁に正反方向の平坦な剥離を施して側縁を作出している。刃部から器体下半部には両面に研磨面が見られる。研磨面には稜が見られ、稜を境に研磨方向が若干ずれている。研磨方向は刃部に対してほぼ垂直のものと、やや右上がりに傾くものが見られる。左右は対称で、直線的な側縁と、緩い弧状の刃部により短冊形の平面形を持つ。

28・29は斧形石器の刃部である。胴部から基部にかけて大きく欠損している。共に蛇紋岩製で研磨面が見られる。

30は緑色凝灰岩の剥片を素材としている。背面にわずかに礫面が見られる。左右側縁に正方向の強・中剥離を施して側縁を作出している。刃部には表裏に研磨が見られ、鋭い刃部が作り出されている。研磨方向は主軸に対して平行からやや右上がりに傾いているものが見られる。平面形は最大幅が下半に偏る撥形を呈し刃部の弧は急で、幅が狭くなっている。

(6) 彫器 (図版311~313・報告番号31~38)

12点の彫器が出土しているが、いずれも折れ面や打面、切り立った側縁、他の極状剥離面を打面とするもので、AT降灰以降に見られる彫器とは異なるものである。

31は黒曜石の貝殻状剥片を素材としている。図の表面に主要剥離面が存在するが、楔形石器に見られるようなボジ面となっており、普通の剥離面のリングとは異なる。この石器には3点の削片が接合している。いずれも図の上面にある切り立った側縁を打面として極状剥離が行われたものだが、1枚目剥離後に、右側縁上端からの極状剥離があり、その後再び上面を打面とした痕跡が見られる。

32は黒曜石の貝殻状剥片を素材としている。素材側縁にある切り立った側縁を打面として数回の極状剥離が見られる。

33~37は凝灰質頁岩の縦長剥片および貝殻状剥片を素材としている。素材の打面や折れ面、他の極状剥離面を打面として、極状剥離が行われている。形状に斉一性が無く、極状剥離以外の2次加工は見られない。

38は無斑晶質安山岩の縦長剥片を素材としている。形状が直方体状を呈しており、それぞれの切り立った側縁より極状剥離や平坦な剥離が施されている。極状剥離打面作出のための加工は認められない。

(7) 削器 (図版313~314・報告番号40~41)

4点の削器が出土しているが、いずれも部分的に刃部加工が施されるものである。

41は頁岩の剥片を素材としている。図の裏面には大きく礫面が残されており、周縁に平坦な剥離が施されているが加工は粗い。斧形石器の未製品の可能性も考えられようか。

**(8) 掻器** (図版313~314・報告番号39・42)

2点の掻器が出土しているが、いずれも部分的に刃部加工が施されているもので、円形掻器や拇指状掻器などの一般的なものと大きく異なる。

42は凝灰岩の貝殻状剥片の一端に反方向の加工を施して刃部を作出したものである。図の表面に主要剥離面が存在する。

**(9) 楔形石器** (図版314~315・報告番号43~45)

15点の楔形石器が出土している。剥片の両端に潰れを伴う平坦な剥離が見られるが、その他に大きさ、形状とも多様である。

**(10) 石刃**

4点の石刃が出土している。打面調整、頭部調整、稜上調整は見られない。剥片を素材として、打面や切り立った側縁を打面として、打面の小口部分から剥離するものが認められる。黒曜石には細石刃のような小形のものが見られる。

**(11) 微細剥離のある剥片** (図版315・報告番号46)

46は珪質頁岩の寸詰まりの縦長剥片に微細剥離が見られるものである。左側縁下半部に微細剥離痕が見られる。

**(12) 石核** (図版315・報告番号47~48)

117点の石核が出土した。石材によりその特徴が大きく異なっている。

黒曜石の石核は小形の縦長剥片を目的とするものが目立つ。角柱状または板状を呈しており、単剥離面を打面として剥離を行うもので、打面調整、頭部調整、石核調整は見られない。石核に残されている剥離痕には有効なもの1~2点程度しか見られないものが多い。

最も数量が多いのはチャートである。チャートの石核の多くに、礫面が大きく残されている。礫面の状況からそのほとんどが、鶏卵程度の円礫であることが予想される。チャート製の石核のほとんどが貝殻状剥片を目的としている。最初の剥離面を打面として、打面と作業面を交互に入れ替えるチョッピングトゥール状のもの、さらに90°単位で打面転移が行われサイコロ状になるものがある。

無斑晶質安山岩の石核には大形の剥片素材の板状石核が見られる。作業面を固定して打点を横に動かしていくもので、大形の貝殻状剥片、横長剥片が剥離される。

**(13) 敲石** (図版316~317・報告番号49~53)

やや扁平な棒状の円礫が用いられる例が多い。石器には在地の多孔質安山岩より、砂岩や凝灰岩が用いられる。棒状礫の端部に敲打痕が見られるものが多いが、側縁にも敲打痕が見られる。また、51~53の腹部には敲打痕および線状の傷が認められる。

**4 母岩別資料と接合資料****(1) 母岩別資料** (第38~39表)

母岩分類は石器文化別ではなく遺跡全体で行った。遺物総数が多く、無斑晶質安山岩や黒曜石など個体差が少ない石材もあることから、完全な個体レベルまでの分類は不可能であった。したがって、ここで分類された母岩には複数個体含まれているものが多いこととなる。

母岩番号は石材ごとに付けてあるが、分類可能で複数あるものについては1から連番で、分類可能で単独のものには999の番号を与えた。焼けや風化が原因で分類できなかったものには9999を付けた。また、黒曜石については蛍光X線による産地分析後に母岩分類を行ったため、産地別に番号を付けてある。

**1. 黒曜石**

第5章 上ノ原遺跡

石材	母岩番号	遺物数		その他	剥離面色调	透明度	綺・斑晶・スジ等	含有物
		上ノ原 I	上ノ原 II					
Ag	1	5			灰白色	不透明	なし	なし
Ag	2	11	1		灰黄褐色	不透明	微面付近は暗オリーブ色を呈す	微面は礫石のようで気泡が多い、小さな白色粒子が降雷様に見られる
Ag	3	3	1		灰白色	不透明	灰色、黄褐色が見られ部分的に色调が異なる	なし
Ag	4	5	1		灰白色	不透明	灰色の線が線状に入り込む	なし
An	1	128	75		灰色	不透明	なし	気泡は多めである
An	2	2	2		灰色	不透明	なし	大きな気泡が多い
An	3	26	50		にぶい黄褐色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的である
An	4	14	21		灰色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的である
An	5	118	26		灰色	不透明	幅1mm程度の白色の綺が見られる	気泡の入り方は標準的である
An	6	2	34		灰オリーブ色	不透明	なし	大きな気泡が見られる
An	7	8	40		灰色	不透明	なし	細かい気泡が見られる
An	8	5	3		灰色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的である
An	9	3	5	1	灰色	不透明	なし	気泡の入り方は標準的である
An	10	25	6		灰色	不透明	幅1~5mm程度の暗灰色の綺が見られる	細かい気泡が多い
An	999	1	14	1				
An	9999	18	76					
Ch	1	16	2		暗赤褐色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	2	21	2		暗赤色	不透明	幅1mm程度の白色の綺とチャート特有のひび有り	なし
Ch	3	27	1		暗赤褐色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	4	3			灰赤色	不透明	部分的に緑灰色が入っている	なし
Ch	5	21	2		暗赤褐色	不透明	部分的に緑灰色が入っている、チャート特有のひびが少しある	なし
Ch	6	2			暗緑灰色	不透明	部分的に暗赤灰色が入っている	なし
Ch	7	40	1		灰色	不透明	青黒色の細かい線が不規則に入っている、チャート特有のひび有り	なし
Ch	8	16			オリーブ灰色	不透明	チャート特有のひびが少しある	なし
Ch	9	8	2		暗灰色	不透明	チャート特有のひびが多くある	なし
Ch	10	53	2		緑灰色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	11	8	1		暗褐色	不透明	チャート特有のひび有り	なし
Ch	12	7	1		灰色	不透明	暗灰色の部分が見られる	なし
Ch	13	5			灰オリーブ色	不透明	なし	なし
Ch	14	2			緑灰色	不透明	なし	なし
Ch	15	9			灰色	不透明	青黒色の細かい線が不規則に多く入っている	なし
Ch	16	4	1		灰色	不透明	青黒色の細かい線が不規則に入っている	なし
Ch	17	9			灰色	不透明	青黒色の細かい線が不規則に少し入っている、チャート特有のひび有り	なし
Ch	18	3			灰色	不透明	なし	なし
Ch	19	4	1		灰色	不透明	なし	なし
Ch	20	4			緑灰色	不透明	暗灰色の部分が見られる	なし
Ch	21	3			暗オリーブ灰色	不透明	チャート特有のひびが少しある	なし
Ch	22	3			暗オリーブ灰色	不透明	チャート特有のひびが少しある	なし
Ch	23	5			灰オリーブ色	不透明	線の一定しない暗灰色の線が不規則に入っている	なし
Ch	24	4			灰色	不透明	暗灰色の部分が見られる	なし
Ch	25	2			オリーブ黒色	不透明	チャート特有のひびが少しある	なし
Ch	999	26	5	1				
Ch	9999	115	10					
Cr	1	3			白色	半透明	なし	なし
Cr	2	11	6		無色	透明	なし	なし
GT	999	1						
GT	9999	3	3					
Ja	999	2	2					
Ob-KZOB	999		1					
Ob-OGKS	999			2				
Ob-SWHD	1	2	1	1	黒色	透明	なし	なし
Ob-SWHD	999	1	2	1				
Ob-TSHG	999		2					
Ob-TSTY	1	54	2		灰色	半透明	灰色と濃茶色のスジが線状に見られる	小さな球顆が少し入る
Ob-TSTY	2	46	2		黒色	半透明	白い綺がうっすらと見られる	非常に小さな球顆が入る
Ob-TSTY	3	15			黒色	半透明	灰色の非常に細かいスジが線状に見られる	小さな球顆が入る
Ob-TSTY	4	49	4		黒色	半透明	なし	非常に小さな球顆が多く入る
Ob-WDHY	1	4			黒色	半透明	部分的に黒いスジが線状に僅かに見られる	小さな球顆が少し入る

第38表 上ノ原遺跡母岩別資料分類基準表1

数量が多く個体差も少ないことから、数量が多い母岩グループには多くの個体が含まれていると思われる。上ノ原I a 環状ブロック群では約4割5分が黒曜石となっているが、そのうち3分の2が夢科冷山群、3分の1が和田鷹山群となっている。近くて石質の良い和田鷹山群を3分の1程度持ちながら、遠くて石質の劣る夢科冷山群が主体になることはどのような事なのであろうか。

また、中性子放射化分析では第4号ブロック出土の碎片1点に神津島産と推定されたものがあった。

碎片以外の石器では約5割に礫面が見られる。

## 2. 無斑晶質安山岩

個体差が少ないことから、数量が多い母岩グループには多くの個体が含まれていると思われる。無斑晶質安山岩の特徴は野尻湖遺跡群に一般的に見られるものと共通しており、産地としては飯山北部から津南方面が予想されようか。

上ノ原I a 環状ブロック群、上ノ原I b 環状ブロック群ともに2番目に多く用いられている石材である。

石材	母岩番号	遺物数			顔面色調	透明度	縞・斑晶・スジ等	含有物
		上ノ原I	上ノ原II	その他				
Ob-WDHY	2	4			黒色	半透明	黒いスジが縞状に見られる	なし
Ob-WDHY	999	1						
Ob-WDKB	4	1			黒色	透明	なし	大きめの球顆が入る
Ob-WDTK	999	1						
Ob-WDTN	999	1						
Ob-WDTY	1	74	1		黒色	半透明	なし	小さな球顆が少し入る
Ob-WDTY	2	4	1		黒色	半透明	黒いスジが縞状に見られる	小さな球顆が少し入る
Ob-WDTY	3	13			灰色	半透明	白いスジが縞状に見られる	なし
Ob-WDTY	4	13	2		黒色	透明	なし	大きめの球顆が入る
Ob-WDTY	5	3	2		黒色	透明	黒いスジが縞状に見られる	なし
Ob-WDTY	9999	3	1					
Ob-WOBD	999		1					
Ob-WOTM	999		1					
Ob-不可	1	2						
Ob-不可	999		1					
Ob-不可	9999	14	6					
Rh	1	3	2		灰白色	不透明	明黄色部が一部に見られる	光沢のある褐色粒子が多く入っている
Sa	999		1					
Se	1	5			明緑灰色	不透明	よく見るとやや色の濃い部分と薄い部分があり、蛇紋状に入り乱れているが遠目では単色に見える	なし
Se	2	2			明緑灰色	不透明	縞の一定でない緑灰色の部分縞状に見られる	なし
Se	999	5						
Se	9999	29	1					
Sh	1	3			におい黄色	不透明	暗緑灰色の部分が入る	非常に細かい気泡が僅かに見られる
Sh	2	2			灰色	不透明	縞の一定でない灰白色の縞が見られる	なし
Sh	999	1						
Sh	9999	7	7					
SS	1	9			におい黄色	不透明	なし	なし
SS	2	3			黒色	不透明	なし	なし
SS	999	8	8	2				
ST	999	1						
TS	1	117	4		淡黄色	不透明	なし	気泡は少なめである
TS	2	3			淡黄色	不透明	僅かだが部分的に赤褐色が見られる	なし
TS	3		3		灰白色	不透明	なし	なし
TS	999		4					
TS	9999	41	14					
Tu	1	41	3		灰白色	不透明	灰オリーブ色が縞状に見られる	光沢のある無色の(ガラスのような)粒子が見られる
Tu	2	7			淡黄褐色	不透明	黄褐色の小さな斑が隣接のように入っている	なし
Tu	999	5	2					
Tu	9999	14	11					
安山岩	999	8	5					

第39表 上ノ原遺跡母岩別資料分類基準表2

礫面が見られる遺物は3割弱で少ない。

### 3. チャート

上ノ原Ⅰb環状ブロック群で5割以上用いられている石材である。比較的個体差がある石材のため多くの母岩に分類されている。

砕片以外の石器の約3分の2に礫面が見られる。

### 4. その他石材

その他の石材のほとんどが野尻湖遺跡群で一般的に見られる石材の範疇に入るものとなっている。産地についても同様の場所が考えられる。

#### (2) 接合資料

63組167点の石器が接合している。最大接合数が10点で多くが2～3点の接合であった。そのため、石器製作を復元できるような接合資料は少なかった。

接合資料の分布は図版296～297に示してある。

## 5 剥片剥離技術

上ノ原Ⅰ石器文化では遺物分布、器種組成、石材組成の違いから、上ノ原Ⅰa環状ブロック群、上ノ原Ⅰb環状ブロック群、第21・22・24号ブロックの3つのまとまりが確認されたが、そのまとまりごとに剥片剥離技術が異なっている。

上ノ原Ⅰa環状ブロック群では、黒曜石が石材の主体として用いられている。目的剥片は縦長剥片となっているが、石刃のように長くはなくやや寸詰まりである。石核は角柱状または板状を呈しており、単剥離面を打面として剥離を行うもので、打面調整、頭部調整、石核調整は見られない。90°単位の打面転移が認められるが、貝殻状剥片を目的とするサイコロ状石核ほど顕著ではない。石核に残されている剥離痕には有効なもの1～2点程度しか見られないものが多い。無斑晶質安山岩の板状石核も見られるが数は少ない。

上ノ原Ⅰb環状ブロック群ではチャートが石材の主体となっている。目的剥片は小形の貝殻状剥片で、貝殻状刃器や搔器状石器の素材となっている。ナイフ形石器に縦長剥片が見られるが、遺跡内には剥離の痕跡はない。鶏卵大の円礫を素材とし、最初の剥離面を打面として、打面と作業面を交互に入れ替えるチョッピングツール状のものと、さらに90°単位で打面転移が行われサイコロ状になるものがある。1つの石核からの剥離数は少ない。無斑晶質安山岩の板状石核も見られるが数は少ない。

第21・22・24号ブロックでは凝灰質頁岩等の頁岩系の石材が主体となっている。ここでは大形の貝殻状剥片を素材とする板状石核が見られる。素材の打面、折れ面等の切り立った備縁を打面として、打面の小口部より縦長剥片を連続して剥離している。剥片は小さく遺跡内では剥離されたものが直接ナイフ形石器等素材となっていることは認められない。打面調整、頭部調整、稜上調整は認められない。

## 第3節 上ノ原Ⅱ石器文化

### 1 石器文化の概要

#### (1) 遺物の出土層位 (第40表)

Ⅱ層～Ⅳ層下部で遺物が出土している。土層の堆積は厚く安定しているが、一部が上ノ原Ⅰ石器文化のブロックと重なっているため、多少の混入が考えられる。

遺構	II	III	IV上	IV中	IV下	IV	攪乱	合計	比率
BL1	14	49	5	3	1	1		73	10.0%
BL2	2	30	9	4	2			47	6.4%
BL3	10	111	16	1	2	1	1	142	19.4%
BL4	6	27	3	1				37	5.1%
BL5		4	2	1				7	1.0%
BL6	12	62	10	3	9			96	13.1%
BL7		38	1			6		45	6.2%
BL8		9	5					14	1.9%
BL9		42	11		17	76		146	20.0%
SH2		24						24	3.3%
SH7		62				2		64	8.8%
外		31	3			1	1	36	4.9%
合計	44	489	65	13	31	87	2	731	
比率	6.0%	66.9%	8.9%	1.8%	4.2%	11.9%	0.3%		

第40表 上ノ原II石器文化ブロック別出土層位組成

遺構・石材	接先形式頭器	掻器	座器	形器	拭塵器	楔形石器	角錐状石器	角錐状石礫破片	石刃	2次加工のある破片	微細刻線のある破片	刮片	砕片	石核	磨石	原石	礫	合計	比率
BL1			2			1					1	50	5	3			11	73	10.0%
BL2	2		2									26	6	1			10	47	6.4%
BL3	6		2						1			107	12	3			11	142	19.4%
BL4		2							2	1	22	1	3				6	37	5.1%
BL5										1		6						7	1.0%
BL6		1	5	1		2	3	1		1		50	9	3	1		19	96	13.1%
BL7	7	1	3				1		1	1	22	6	3					45	6.2%
BL8	2										1	6	2				3	14	1.9%
BL9			2	1						2		105	6	7			23	146	20.0%
SH2																		24	3.3%
SH7																		64	8.8%
外	6		1		1						1	6	3		1		17	36	4.9%
黒曜石					1	1			1	3	21	3	2		1			33	4.5%
無珪晶質安山岩	10	1	14	1		2	3	1		6	1	298	39	12				388	53.1%
珪質頁岩	4		2	1								3	1					11	1.5%
珪質凝灰岩	1												1					2	0.3%
玉髓		1										2						3	0.4%
凝灰質頁岩	5		1						1	1	16		1					25	3.4%
凝灰岩	2										13	2	1					18	2.5%
緑色凝灰岩												3						3	0.4%
チャート	1					1						24	3	5				34	4.7%
砂岩			1														7	8	1.1%
蛇紋岩												1						1	0.1%
木炭												6						6	0.8%
鉄石美			1									1						2	0.3%
流紋岩												2						2	0.3%
花崗岩																		21	2.9%
安山岩												3		1	1			160	22.6%
頁岩												7		2				9	1.2%
合計	23	2	19	2	1	3	4	1	1	7	5	400	48	25	1	1		188	731
比率	3.1%	0.3%	2.6%	0.3%	0.1%	0.4%	0.5%	0.1%	0.1%	1.0%	0.7%	54.7%	6.6%	3.4%	0.1%	0.1%		25.7%	

第41表 上ノ原II石器文化器種組成

III層から最も多くの遺物が検出されており、IV層の出土数も多いため、生活面はIII層下部からIV層上面あたりになると思われる。

### (2) 器種組成 (第41表)

石器543点、礫188点が出土した。主な器種組成は槍先形尖頭器23点、搔器2点、削器19点、彫器2点、揉錐器1点、楔形石器3点、角錐状石器4点、角錐状石器破片1点、石刃1点となっている。ナイフ形石器を伴わない槍先形尖頭器は石器文化として評価される。

### (3) 石材組成 (第42表)

石器の石材としては無斑晶質安山岩が7割近くを占め、次いで凝灰質頁岩等の頁岩系石材、チャート、黒曜石と続く。製品になると無斑晶質安山岩の比率が下り、頁岩系石材の比率が高くなる。

礫の石材は多くが多孔質の安山岩で、砂岩が若干混ざる。

## 2 遺構

### (1) 遺物の分布

北西-南東方向に細長い長方形を呈している調査区の各所に分散してブロックが存在している。下層の上ノ原I石器文化と次のブロックの分布が重なっている。第1号ブロックが上ノ原Ia環状ブロック群の各ブロックに、第6号ブロックが第17号ブロックと第16号ブロックの一部に、第8号ブロックが第24号

遺構	黒曜石	加島系安山岩	無斑晶質安山岩	凝灰質頁岩	頁岩系石材	凝灰岩	緑色凝灰岩	チャート	砂岩	蛇紋岩	水晶	鉄石英	凝灰岩	花崗岩	安山岩	頁岩	合計	比率	
BL1	13	26	2		2	2		7	7	1	6	1			4	2	73	10.0%	
BL2	2	23	2		3	3		3						7	3	1	47	6.4%	
BL3	2	126			1	1						1		11			142	19.4%	
BL4		23				2		2						2	4	4	37	5.1%	
BL5		2				5											7	1.0%	
BL6	4	44	4		2	2	1	17	1						21		96	13.1%	
BL7	3	19	3	2	1	8	4	1	2						1	1	45	6.2%	
BL8	2	3			2	1							2		4		14	1.9%	
BL9	2	118				1		1							23	1	146	20.0%	
SH2															24		24	3.3%	
SH7															64		64	8.8%	
外	3	4				3	3	3						1	17		36	4.9%	
合計	33	388	11	2	3	25	18	3	34	8	1	6	2	2	21	165	9	731	
比率	4.5%	53.1%	1.5%	0.3%	0.4%	3.4%	2.5%	0.4%	4.7%	1.1%	0.1%	0.8%	0.3%	0.3%	2.9%	22.6%	1.2%		
BL1	41.81	130.47	5.42		32.88	40.2		53.56		3.33	21.56	1.96				85.99		417.4	4.3%
BL2	6.74	102.31	13.48		122.57	4.15		10.1								0.87		260.22	2.7%
BL3		6834.69			3.73	0.74						4.15						849.31	8.7%
BL4		417.18						12.56									44.67	475.61	4.9%
BL5		29.28			303.46													322.74	2.4%
BL6	3.63	363.38	39.79		49.2	4.49	23.01	56.93	42.5					482.18			1064.51	10.9%	
BL7	11.53	184.19	15.19	53.43	1.78	88.3	1195.4	23.36	212.84					485.79	11.23		2258.04	23.2%	
BL8	13.81	136.98			18.71	1.17							39.05		5.97		51.9	215.69	2.2%
BL9	19.55	3431.9			11.03			10.82										1525.17	39.2%
外	110.87	69.69			227.58	9.99		16.15							2.48			435.86	4.5%
合計	213.36	5700	72.88	53.43	50.96	708.26	1267.8	89.19	300.78	42.5	3.53	21.56	6.11	39.05	0	945.42	194.46	9731.55	
比率	2.2%	58.6%	0.8%	0.5%	0.5%	7.3%	13.0%	0.6%	3.6%	0.4%	0.0%	0.2%	0.1%	0.4%	0.0%	9.7%	2.0%		
BL1								239.64										2315.41	3.6%
BL2															1994	868.06		2862.09	4.4%
BL3															5417.1			5417.05	8.4%
BL4															358.76	15302		15660.66	24.3%
BL6															116.9			116.9	0.2%
BL8															1763.4			1763.35	2.7%
BL9															3310.5			3310.48	5.1%
SH2															18396			18309	28.4%
SH7															9660			9660	15.0%
外															430	4694.1		5124.08	7.9%
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	239.64	0	0	0	0	0	8199.8	56100		94539.02	
比率	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.7%	86.9%	0.0%		

第42表 上ノ原II石器文化石材組成



ブロックにそれぞれ重なっている。

## (2) ブロック

### 1. 第1号ブロック (図版319)

IV MK06グリッドを中心として北-南に23m、東-西に36mの楕円形の広がりを持つ。北西に第2号ブロックが位置しており、境界の線引きが難しくなっている。

石器62点、礫11点が出土した。出土層位はII層～IV層でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は削器2点・楔形石器1点・微細剥離のある剥片1点・剥片50点・碎片5点・石核3点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

### 2. 第2号ブロック (図版319)

IV HG19グリッドを中心として北-南に13m、東-西に13mの円形の広がりを持つ。南東に第1号ブロック、北西に第3号ブロックが位置しており、境界の線引きが難しくなっている。

石器37点、礫10点が出土した。出土層位はII層～IV層下でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は槍先形尖頭器2点・削器2点・剥片26点・碎片6点・石核1点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

### 3. 第3号ブロック (図版320)

IV HB15グリッドを中心として北北西-南南東に約13m、西南西-東北東に約20mの楕円形の広がりを持つ。南東に第2号ブロック、北に第4号ブロックが位置しており、境界の線引きが難しくなっている。

石器131点、礫11点が出土した。出土層位はII層～IV層でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は槍先形尖頭器6点・削器2点・2次加工のある剥片1点・剥片107点・碎片12点・石核3点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

### 4. 第4号ブロック (図版321)

IV HA10グリッドを中心として北北東-南南西に約11m、西北西-東南東に約15mの楕円形の広がりを持つ。南に第3号ブロックが位置しており、境界の線引きが難しくなっている。

石器31点、礫6点が出土した。出土層位はII層～IV層中でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は削器2点・2次加工のある剥片2点・微細剥離のある剥片1点・剥片22点・碎片1点・石核3点となっている。石材は無斑品質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

### 5. 第5号ブロック (図版321)

IV GN05グリッドを中心として北北西-南南東に約6m、西南西-東北東に約4mの楕円形の広がりを持つ。東南東に第4号ブロックが位置しているが、やや距離が離れている。

石器7点が出土した。出土層位はIII層～IV層中でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は2次加工のある剥片1点・剥片6点となっている。石材は凝灰質頁岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

### 6. 第6号ブロック (図版320)

IV BE15グリッドを中心として北-南に11m、東-西に12mの楕円形の広がりを持つ。南東に第5号ブロック、西に第7号ブロックが位置しているが、距離が離れている。第2・3号礫群と分布が重なっており、石器と礫がいっしょに出土する状況となっている。

石器77点、礫19点が出土した。出土層位はII層～IV層下でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は搔器1点・削器5点・彫器1点・楔形石器2点・角錐状石器3点・角錐状石器破片1点・2次加工のある剥片1点・剥片50点・砕片9点・石核3点・磨石1点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 7. 第7号ブロック (図版320)

IV AF18グリッドを中心として北西-南東に約32m、北東-南西に約15mの楕円形の広がりを持つ。東に第6号ブロック、北に第8号ブロックが位置しているが、距離が離れている。第7号礫群と分布が重なっており、石器と礫と一緒に出土する状況となっている。

石器45点が出土した。出土層位はIII層～IV層でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は槍先形尖頭器7点・搔器1点・削器3点・角錐状石器1点・石刃1点・微細刻離のある剥片1点・剥片22点・砕片6点・石核3点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 8. 第8号ブロック (図版319)

II UC19グリッドを中心として西北西-東南東に約14m、北北東-南南西に8mの楕円形の広がりを持つ。南に第7号ブロック、北西に第9号ブロックが位置しているが距離が離れている。

石器11点、礫3点が出土した。出土層位はIII層～IV層上でIII層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は槍先形尖頭器2点・微細刻離のある剥片1点・剥片6点・石核2点となっている。石材は安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

#### 9. 第9号ブロック (図版321)

IYL09グリッドを中心として北北西-南南東に約21m、西南西-東北東に約15mの楕円形の広がりを持つ。南東に第8号ブロックが位置しているが距離が離れている。

石器123点、礫23点が出土した。出土層位はIII層～IV層でIV層から最も多くの遺物が出土している。器種組成は削器2点・彫器1点・2次加工のある剥片2点・剥片105点・砕片6点・石核7点となっている。石材は無斑晶質安山岩が多用されている。

他のブロックとの接合資料の共有はない。

### (3) 礫群

#### 1. 第2号礫群 (図版322)

IV BD15グリッドを中心として北-南7m、東-西5mの楕円形の広がりを持つ。第6号ブロックと平面分布が重なっている。

24点の礫が出土している。石材はすべてが多孔質の安山岩である。

#### 2. 第7号礫群 (図版322)

IV AE16グリッドを中心として北西-南東19m、北東-南西10mの楕円形の広がりを持つ。第7号ブロックと分布が重なっている。

62点の礫がIII層、2点の礫がIV層から出土している。石材はすべて多孔質の安山岩である。礫形状は円礫54点、亜角礫7点、不明3点で、44点に焼けと思われる赤化が見られる。礫の総重量は9660gで、平均重量は151gで軽い。礫は中央部付近に集中しているが、それでも散漫で一般的な礫群とは異なり、石器と共に礫が出土するといった状況である。

## 3 遺物

## (1) 槍先形尖頭器 (図版323~326・報告番号1~21)

1~3は珪質頁岩製の両面加工の槍先形尖頭器である。ほぼ全面が平坦な剝離に覆われているために素材が把握できないが、やや反りが見られることから剥片素材の可能性が高いと思われる。加工は丁寧で、器体を薄く仕上げ、側縁も直線的で整っていることから、これらは完成品と思われる。平面形は基部と先端が両者の区別が困難なほど尖鋭で、左右対称の柳葉形を呈しているが、1は側縁下半に弱い角があり菱形に近い形状を呈している。断面形は薄い凸レンズ状を呈している。

4は無斑品質安山岩製の両面加工の槍先形尖頭器である。ほぼ全面が平坦な剝離に覆われているために素材が把握できない。加工は丁寧で、器体を薄く仕上げ、側縁も直線的で整っている。平面形は基部と先端が尖り、最大幅がほぼ中央にある左右対称の木葉形を呈している。断面形は薄い凸レンズ状を呈している。

5・6は凝灰質頁岩製の両面加工の槍先形尖頭器である。ほぼ全面が平坦な剝離に覆われているために素材が把握できない。5への加工は丁寧であるが、器体中央で折れたものが接合しており、欠損後の再加工痕も見られる。製作途中で欠損したものであろうか。6の加工は粗く、器体も厚いことから未製品と考えられる。共に平面形は先端と基部が尖り、左右対称で側縁に角が見られる隅丸の菱形を呈する。断面形は凸レンズ状を呈している。

7はチャート製の両面加工の槍先形尖頭器である。ほぼ全面が平坦な剝離に覆われているため、素材が把握できない。加工は丁寧で側縁も直線的で整っている。左側縁上半部には先端方向からの槌状剝離が見られ、腹面の剝離を切っているが、右側縁と左側縁下半への加工には切られている。平面形は先鋭な先端と、鈍く尖る基部を持ち、左右対称で側縁に弱い角を持つ隅丸の菱形を呈する。断面形は腹面が平坦なD字もしくは山形を呈する。

8~21の槍先形尖頭器は欠損しており、完形の状態がわからないものである。両面が平坦な加工に覆われていて、素材が把握できないものが多い。頁岩系石材製は細身で、無斑品質安山岩製はやや太い平面形となる傾向が見られる。

8・15は丸い基部を呈しており、完形品では見られない基部形状となっている。

## (2) 角錐状石器 (図版327・報告番号22~24)

22・24は無斑品質安山岩の縦長剥片を素材としている。左右側縁全体に正方向の中・弱・平坦剝離を施して、素材を折断している。22は打面が残されているが、23は加工により折断されている。側縁は鋭角縁状を呈せず滑らかで、背面と腹面の角度は鈍角で搔器の刃部的な加工が施されている。共に甲高でグロっとした棒状を呈し、22は下端が尖っている。共に折れているものが接合しているが、折れた後の加工が見られる。ナイフ形石器に伴うような一般的な角錐状石器とは大きく異なり、搔器や削器的な石器として位置付けられようか。

23はチャートの節理で剝離した剥片を素材としている。左側縁及び稜上に平坦な加工が見られる。グロっとした棒状を呈しており、断面形は正方形に近い。

## (3) 彫器 (図版328・報告番号25)

25は珪質頁岩の折れた縦長剥片を素材としている。折れ面を上、打面を基部に置き折れ面以外に正方向の中・平坦剝離を施して素材を折断しており、打面は除去されている。槌状剝離は折れ面を打面として右側縁に施されている。彫刀面以外の部分は22・24の角錐状石器の折れたものに良く似ている。

(4) 獲器 (図版328・報告番号26~27)

26は分厚い玉髓の剥片を素材としている。全周に正方向の中・弱・平坦剥離を施して刃部を作出している。非常に分厚く平面形は楕円形を呈し、亀の甲羅のような形状を呈している。

27は無斑晶質安山岩の貝殻状剥片を素材としている。打面以外の側縁に弱・平坦剥離を施して半円状の刃部を作出している。刃部は薄く削器的である。

(5) 削器 (図版329~330・報告番号28~32・34)

28は無斑晶質安山岩の横長剥片を素材としている。周縁に正方向の弱・平坦剥離を施して刃部を作出している。刃部の加工は27と良く似ているが、弧状に丸い部分とノッチ状になる部分がある。

29・30は無斑晶質安山岩を素材としている。共に分厚く細長い形状を呈しているが、上下端が欠損している。側縁には正方向の中・平坦剥離が、腹面には平坦な剥離が見られる。22・24の角錐状石器に類する石器の可能性が考えられようか。

31・32・34は無斑晶質安山岩を素材としている。素材の一辺に正方向の弱・平坦剥離を施して刃部を作出している。刃部以外に加工はなく素材の形状がほぼそのまま残されている。

(6) 2次加工のある剥片 (図版330・報告番号33)

33は折れた無斑晶質安山岩の剥片の一部を素材としている。正方向の平坦な剥離が数枚見られる程度で加工は粗い。また、折れ面からも平坦な剥離が見られる。

(7) 楔形石器 (図版330・報告番号35~36)

35・36は無斑晶質安山岩の寸詰まりの縦長剥片を縦に用いている。上下両端に潰れを伴う平坦な剥離が見られ、素材の打面と末端は除去されている。共に薄い。

(8) 石核

25点の石核が出土している。いずれも貝殻状剥片を目的とするもので、サイコロ状、チョッピングトゥール状の石核が見られる。目的剥片の大きさや形状に斉一性がないようで、石核の大きさ、形状も多様である。本石器文化内に見られる製品類では楔形石器や削器類の素材として利用が可能と思われるが、槍先形尖頭器や角錐状石器の素材を剥離する石核は確認できない。

(9) 磨石

1点の磨石が出土している。多孔質の安山岩製で野球のボール大の球状を呈するものもある。明瞭な磨痕は見られないが、整った形状は人工的と考えられる。表面に暗赤褐色の付着物が見られる。

## 4 母岩別資料と接合資料

(1) 母岩別資料 (第38・39表)

母岩判別は上ノ原Ⅰ石器文化と共に行っている。各母岩は野尻湖遺跡群で用いられている一般的な石材となっている。

蛍光X線分析の黒曜石産地推定で、神津恩賜島群と推定されたものが1点あった。これは第6号ブロック出土の剥片である。剥片は小形で、素材として持ち運ばれるようなものではない。第6号ブロックは調査区隅に位置しているため、調査区外にも神津恩賜島群の黒曜石が存在するのであろうか。

(2) 接合資料

9組20点の石器が接合した。最大接合数が4点で、それ以外はすべて2点接合で、石器製作を復元できるようなものはなかった。接合資料の分布は図版318を示す。

## 5 剥片剥離技術

サイコロ状、チョッピングツール状の石核から貝殻状剥片を剥離する技術が認められるものの、製品の素材の剥離は認められない。

全般的に数量も少なく、石器製作肯工程の部分のみが残されている状況と思われ、剥片剥離技術を復元できるような資料は見られない。

# 第4節 その他の石器

## 1 遺構

### (1) 遺物の分布 (図版331)

上ノ原Ⅰ・Ⅱ石器文化に属さないものである。これらは平面的に単独に出土したものと、平面的な分布の重なりはあるものの、型式学的に明らかに時期が異なるものがあるが、多くは単独出土である。

## 2 遺物

### (1) ナイフ形石器 (図版331・報告番号1～4)

1は黒曜石の石刃を縦に用いている。打面を基部に置き、基部両側縁と先端左側縁に正方向の弱剥離を施している。打面は加工により除去されているが、加工による素材の変形度は低い。平面形は左右対称で先端と基部が尖る柳葉形を呈しており、側面形は薄く反りも少ない。周囲に遺物はなく完全に単独の出土である。

2は珪質頁岩の縦長剥片を斜めに用いている。打面を先端右側に置き、右側縁と左側縁基部に正方向の弱・中剥離を施して打面を除去している。右側縁への加工は基部に近づくほど漸移的に弱くなり、基部端付近では加工が見られない。平面形は右肩が張る非対称形で、先端は尖るが基部は丸い。平面的には上ノ原Ⅱ石器文化の第2号ブロックと、第3号ブロックの境界付近に分布するため、上ノ原Ⅱ石器文化に属する可能性が考えられる。しかし、上ノ原Ⅱ石器文化にナイフ形石器が組成しないことからその他とした。

3・4は横長剥片を横に用いたナイフ形石器である。打面側の側縁に正方向の中剥離を施して打面を除去している。反対側の側縁は、3の先端付近と、4の基部に正方向の加工が見られる。左右非対称で片側側縁の肩が張る切り出し状を呈しており、先端は尖るが基部は丸い。

### (2) 石刃 (図版331・報告番号5～6)

珪質頁岩と無珪品質安山岩の石刃2点が見られる。5には稜上調整が、6には頭部調整が見られる。

### (3) 細石核・細石刃 (図版331・報告番号7～8)

7は単剥離面を打面として、頭部調整を顕著に行い、小口部分より細石刃を剥離しているものである。下縁調整は見られないが、ホロカ型に類する細石核として評価できようか。

蛍光X線分析では男鹿金ヶ崎群と判別されている。

8は細石刃である。加工痕は見られない。産地推定では諏訪星ヶ台群となっており、細石核と異なっている。

## 第6章 成果と課題

### 第1節 各石器文化の位置付け

#### 1 はじめに

本報告では4遺跡8石器文化の事実報告を行ってきたが、ここで各石器文化の概略をまとめて時間的・空間的位置付けについて考察を行うこととする。なお時間的位置付けにおいては、編年研究が進んでいる南関東の武蔵野台地の層序と、野尻湖人類考古グループの設定した文化層（野尻湖人類考古グループ1994）を比較に用いる。

#### 2 各石器文化の様相

##### (1) 裏ノ山Ⅰ石器文化

Iブロックのみで、遺物数も少ないため、石器文化全体の様相が見えていない可能性が考えられる。主な器種組成は斧形石器、台形石器、砥石となっている。斧形石器は刃部に研磨が施されている一般的なものが見られるが、石材が蛇紋岩ではなく凝灰岩となっている。台形石器は貝殻状剥片を横に用いるものと、縦に用いるものが見られる。出土層位は層序が薄いため、V層となっているが、斧形石器、台形石器の特徴からVb層の石器文化として評価できる。

武蔵野台地IXからX層段階、野尻湖人類考古グループの黒色帯上部文化層に相当しようか。

##### (2) 裏ノ山Ⅱ石器文化

石器7631点が出土しており、大規模な石器文化として評価できる。主な器種組成はナイフ形石器、台形石器、石刃、貝殻状刃器、搔器、削器、彫器、楔形石器となっており、搔器と削器の数が卓越している。石材組成は黒曜石が約4割、無斑晶質安山岩が2割、チャートが2割となっている。

ナイフ形石器は2割縁に加工が施されるものが主体となっているが、石刃が素材となる大形と、寸詰まりの縦長剥片や貝殻状剥片が素材となる小形のものが存在する。素材は縦や斜めに用いられ、加工により打面が除去される場合が多い。

台形石器は日向林Ⅰ石器文化に見られるような形態の斉一性はない。素材も縦、斜め、横に用いられるものが見られる。左右側縁に施される加工はブランディングと平坦剥離が見られる。

搔器は分厚い貝殻状剥片を素材とした円形、拇指状の形状を呈するものが多く、削器は縦長剥片の側縁に刃付けが行われるものが多くなっている。

石材の主体となっている黒曜石の産地は蛍光X線分析では和田鷹山群が8割以上を占めていた。蛍光X線分析では和田峠にある採集地の原石と、鷹山遺跡群のある星糞峠で採集される原石を分けることができなかったが、中性子放射化分析ではこの両者を分けることができた。中性子放射化分析を行ったのは砕片82点だけで、その結果82点中46点がTAKAYAMAと推定された。そのため、蛍光X線分析の和田鷹山群となっているものについても、半数以上がTAKAYAMAとなる可能性が考えられる。鷹山遺跡群では鷹山Ⅰ遺跡M地点において、大量の石刃製作跡が検出されている。裏ノ山遺跡にも黒曜石の石刃が素材となっているナイフ形石器が多く存在するが、黒曜石の石刃が遺跡内で剥離された痕跡はほとんどない。

そのため、鷹山I遺跡M地点のような遺跡で製作された石刃が遺跡内に持ち込まれた可能性が考えられる。

ナイフ形石器は茂呂型の範疇に含まれるものとして理解できるが、台形石器に見られる平坦剥離にはVb層段階の特徴が見られ、貝殻状刃器も多く組成する。出土層位はIV層が主体で次いでIII層、V層となっているが、層序が薄く、V層に入っても多く遺物が出土することを考慮すると、Va層からIV層下部のどこかの時期に属する可能性が高いと考えられようか。

武蔵野台地で茂呂型ナイフ形石器が見られるのはVI層段階とIV層段階であるが、武蔵野台地のIV層は野尻湖遺跡群のIV層上部に対応すると思われるため、ナイフ形石器的には武蔵野台地VI層段階に対応すると考えられようか。しかし、台形石器、貝殻状刃器の存在を考慮すると、多少古くなる可能性も考慮すべきと思われる。そのため、より幅を持って、武蔵野台地VII層からVI層間に相当するとしておこうか。野尻湖人類考古グループ層序では、上II最下部文化層に相当する。

### (3) 東裏H I 石器文化

6ヶ所のブロックが検出され、石器461点、礫10点が出土した。平面的に他の時期の遺物分布域と重なりはなく、層序の堆積も厚いためにまとまりが良い。主な器種組成はナイフ形石器、台形石器、貝殻状刃器、搔器状石器、石刃、斧形石器となっている。石材組成は黒曜石が主体で8割以上を占める。

ナイフ形石器は末端が尖る寸詰まりの縦長剥片を縦に用いて、基部両側縁に加工を施してベン先状を呈するもの、石刃を縦に用いて基部両側縁に加工が施され先端が尖るもの、石刃を縦に用いて2側縁に加工が施されるものが存在する。また、台形石器には素材を縦に用いるものが見られる。

貝殻状刃器、搔器状石器は貝殻状剥片を素材としており、日向林I石器文化に近い様相が見られる。

石刃はやや甲高で打面が大きく残されるものが多く、反りやねじれが目立つ。打面調整、頭部調整、稜上調整等の石核調整はほとんど見られない。

出土層位はVb層が最も多く、縦長剥片と貝殻状剥片の両者を目的とする剥離技術が見られるVb層の石器文化として評価される。縦長剥片剥離が行われる類似の石器文化として後述する大久保南Ib石器文化が挙げられる。武蔵野台地IXからX層段階、野尻湖人類考古グループの黒色帯上部文化層に相当する。

### (4) 東裏H II 石器文化

12ヶ所のブロックが検出され、石器257点、礫129点が出土している。主な器種組成はナイフ形石器、台形石器、削器、石刃、斧形石器、砥石となっている。石材組成は無斑品質安山岩が約5割、黒曜石が2割5分となっている。

台形石器に特徴を持つ石器文化となっている。この台形石器は貝殻状剥片を横に用いて、左右側縁にノッチ状の加工を施すもので、九州地方において「狸谷型ナイフ形石器」(松藤1994)や、「原の辻型台形石器」(萩原博文・川道 寛1981)に類似している。

ナイフ形石器は縦長剥片を縦に用いて、2側縁に加工が施されるもの、横長剥片を横に用いて2側縁に加工が施されるもの、縦長剥片を縦に用いて先端を斜めに折断するものが認められるが、形状の斉一性は低い。石刃や石刃素材の石器は見られるが、遺跡内で剥離される剥片は貝殻状剥片がほとんどとなっている。斧形石器は蛇紋岩を石材として刃部に研磨が見られるもので、AT下位の石器文化に見られる斧形石器と特に変わることはない。

「狸谷型ナイフ形石器」や「原の辻型台形石器」は九州地方ではAT降灰直後に位置付けられており、剥片尖頭器、中原型ナイフ形石器、角錐状石器、国府系のナイフ形石器等と共伴している。本石器文化では剥片尖頭器、中原型ナイフ形石器の共伴はないが、隣接する東裏H2地点では同種の台形石器と同一ブロックから剥片尖頭器、中原型ナイフ形石器に類似する石器が出土しており、九州地方に近い様相が野尻

湖遺跡群内にあったといえるのではないだろうか。出土層位はIV層が主体であるが、堆積が薄くV層からもある程度の数の石器が検出されていることから、V a層からIV層下部の石器文化としての位置付けができようか。この層準は野尻湖人類考古グループの上II最下部から上II下部文化層に対比できる。斧形石器は全国的にAT層準より下位から検出されるのが一般的であり、AT層準に近いとされる本石器文化の時期の確実な組成例はない状況にある。しかし、石器の分布状況から斧形石器や砥石を分けることは不自然な状況にある。野尻湖周辺や飯山地方では、朽久保型ナイフ形石器に伴うなど、AT降灰以降まで斧形石器が残る可能性が考えられるとの指摘（大竹1989）もあることから、本石器文化に斧形石器が組成すると位置付けておく。

武蔵野台地でのAT層準はVI層となっているが、現時点で直接その直上と対比するのは難しい。剥片尖頭器、中原型ナイフ形石器に類似する石器は、九州地方のものよりも、東北日本の石刃を素材とする基部加工のナイフ形石器に類するものとの捉え方もできる。そうするとATよりの下位の武蔵野台地VII層まで視野に入れておくべきと思われる。したがって、幅を持たせて本石器文化は武蔵野台地VII層から、V層の間に対比されるとしておく。

#### (5) 東裏H1 III石器文化

6ヶ所のブロックより石器180点、礫12点が出土している。主な器種組成はナイフ形石器、削器となっているが、遺物数が少ないため部分的なものと思われる。石材は無斑品質安山岩と黒曜石が多用されている。

ナイフ形石器には横長剥片を横に用いるものが見られ、国府型ナイフ形石器と呼べるものも含まれている。縦長剥片を縦に用いて2側縁に加工が施されるナイフ形石器も見られるが、加工部位が広く刃部が狭いため、周縁加工の槍先形尖頭器や角錐状石器的なものとなっている。削器は貝殻状剥片を素材としているが、加工・形状に齊一性がない。

出土層位はIII層が最も多いが、層序が薄く不安定なためそのままIII層の石器文化とは考えられない。ナイフ形石器の状況からAT降灰直後から槍先形尖頭器が組成する以前が考えられるため、V a層からIV層下部に本来の生活面があると思われる。東裏H1 II石器文化に並行、もしくはやや後の時期が考えられようか。

野尻湖人類考古グループの上II最下部から上II下部文化層段階に、武蔵野台地V層からIV層下部段階に対比できようか。

#### (6) 東裏遺跡H2地点

11ヶ所のブロックから石器6542点が出土した。大半が埋没自然流路内に堆積する砂礫層中から検出されており、直径20m近くなるブロックが多く、一般的なものと大きく異なるものである。層位的にもAT下位と思われる石器から縄文時代早期の押型土器が同一層から検出される状況である。しかし、多少の混在は認められるものの、平面的に器種分布の違いが認められる。そのため、剥片類等の石器個々の石器文化分けは困難なものの、製品類での石器文化の想定は可能な状況となっている。以下に想定された3つの石器文化を挙げる。

##### 1. 東裏H2 I石器文化

斧形石器、基部加工のナイフ形石器を特徴とする石器文化である。第10・11号ブロックに分布する。

主な器種に斧形石器、ナイフ形石器、台形石器が挙げられる。斧形石器は背面に礫面を持つ蛇紋岩が素材となり、刃部には研磨が見られる一般的なものである。ナイフ形石器は縦長剥片を縦に用いるもので、打面を基部に置き基部に加工が施されるものである。基部以外への加工頻度は低く素材の形状がほぼそのまま残されるものである。台形石器は平坦な剝離が施されるものと、プランティング的な加工が施される



ものがあるが、東裏H2 II石器文化の台形石器が混在している可能性も考えられる。

ナイフ形石器等にみられる縦長剥片の特徴は東裏H1 I石器文化と共通する部分が多く時期的にも近いと思われる。そのため、V層の石器文化として位置付けておく。野尻湖人類考古グループの黒色帯文化層、武蔵野台地のIX・X層段階に対比される。

## 2. 東裏H2 II石器文化

基部に挟りを持つナイフ形石器、台形石器を特徴とする石器文化で、国府型ナイフ形石器も見られる。第1・2・6～11号ブロックに分布する。

主な器種組成はナイフ形石器、台形石器、剥片尖頭器、彫器となっている。搔器は同一ブロック内にあるものの、搔器を大量に組成する東裏H2 III石器文化のものが混入している可能性が考えられるため、確実に組成するとは言いえない状況である。ナイフ形石器は石刃を縦に用い、打面を基部に置いて、基部または2側縁に加工が施されるもので、基部に挟り部が作出される剥片尖頭器や中原型ナイフ形石器に類するものが含まれる。

また、横長剥片を横に用いて、1側縁もしくは2側縁に加工が施されるナイフ形石器も見られる。この中には背面が底面と1枚の剥離面から構成されている翼状剥片を素材とするものが含まれ、国府型ナイフ形石器と呼べるものが含まれている。

台形石器は側縁がノッチ状に作出されるもので、加工にはプランティングの他平坦剥離も見られる。加工方向も正方向が主体ではあるが、反方向の加工も見られる。「狸谷型ナイフ形石器」や「原の辻型台形石器」に類似している。

彫器は一般的な彫器ではなく、背面に楕状剥離が平行して数条見られ、明瞭な彫刀面を持たないもので、数量こそ多くないが特徴的に伴っている。

剥片尖頭器、中原型ナイフ形石器、国府型ナイフ形石器、狸谷型ナイフ形石器の組成は九州地方のAT降灰直後の石器文化に見られる組成であり、他に類例は少ない。しかし、剥片尖頭器や中原型ナイフ形石器を含む基部に加工が施されるナイフ形石器の主な石材は頁岩系の石材で、東北地方から北陸に見られる基部加工のナイフ形石器の影響も無視できない状況にある。また、九州地方には組成しない器種も一緒に見られることから九州地方の石器文化そのものではない。野尻湖と九州の距離は遠く、現時点ではその間に同種の組成を持つ遺跡も発見されていない点も直接的に結びつけることを難しくしている。ただ、剥片尖頭器、中原型ナイフ形石器、国府型ナイフ形石器、狸谷型ナイフ形石器の組成が九州地方で見られる時期はかなり限定されており、近畿地方の国府型ナイフ形石器の時間的位置付けもほぼ同じことから、これらの時期から大きく逸脱することはないと考えられる。したがって、本石器文化はVa層からIV層下部の石器文化として位置付けられようか。

野尻湖人類考古グループの上II最下部文化層から上II下部文化層、武蔵野台地VI層からIV層下部段階に対比される。

## 3. 東裏H2 III石器文化

左右非対称の槍先形尖頭器、小形で形態の斉一性の低いナイフ形石器と大量の搔器、石刃を特徴とする石器文化である。第3～5号ブロックに分布する。

槍先形尖頭器は4cm前後と小形品が多く、平面形は片側側縁の肩が張る左右非対称形のものの特徴的に存在する。肩が張る側の先端側の縁辺には素材背面の剥離面が縁辺に残されているものがある。加工は平坦剥離が主に用いられ、両面に加工が施されるが、断面形は腹面が平坦となるD字状を呈するものが多い。

ナイフ形石器は素材の斉一性が低く、縦長剥片、横長剥片、貝殻状剥片などが用いられており、これらに2側縁の加工を施している。そのため、製品自体の形態の斉一性も低い。これらの中には素材、加工、

形状が槍先形尖頭器に非常に近いものが含まれている。

搔器は200点以上組成し非常に数が多い。黒曜石、チャート製の搔器は分厚い貝殻状剥片や寸詰まりの剥片を素材としており、円形、寸詰まりの拇指状を呈する。無斑品質安山岩を石材とするものは、大量に組成する石刃を素材とするものが見られる。その石刃は主に無斑品質安山岩製で打面調整、頭部調整、後上調整が認められるが、打面が広く残り折れている（折られている）ものが多い。

左右非対称の槍先形尖頭器は長野県茅野市の渋川遺跡や、千葉県東内野遺跡に類例が求められる。前者は槍先形尖頭器発生段階に位置付けられ、後者はナイフ形石器があまり組成しなくなり、槍先形尖頭器が組成の主体となる時期に位置付けられている。本石器文化ではナイフ形石器数が槍先形尖頭器を上回っており、ナイフ形石器形態的にも小形幾何形化する終末期の様相とは異なるため、槍先形尖頭器発生段階に位置付けるのが妥当と思われる。IV層中部に位置付けられる七ツ栗I石器文化にも、左右非対称の槍先形尖頭器が1点出土していることから、同一層準に位置付けることができよう。

野尻湖人類考古グループの上II下部から上II中部文化層、武蔵野台地V層からIV下部段階に対比されようか。

#### (7) 大久保南I a 石器文化

斧形石器、ナイフ形石器、台形石器を特徴とする石器文化である。19ヶ所のブロック、3基の礫群より石器568点、礫87点が出土している。主な器種に斧形石器、ナイフ形石器、台形石器、楔形石器が挙げられる。大久保南I石器文化の第11～29号ブロックが相当し、第14・16～20号ブロックは大久保南I a環状ブロック群に位置付けられる。

ナイフ形石器は縦長剥片を縦に用いて、打面を基部に置き基部両側縁に加工が施されるものである。先端部への加工はほとんど見られない。素材の縦長剥片は打面が大きく残るもので、形態の斉一性は低いため、製品の形状も多様である。石材は無斑品質安山岩が最も多く半数弱を占め、頁岩系と玉髓が1割以上となっている。

台形石器は貝殻状剥片を縦に用いるものと横に用いるものがある。加工には平坦剥離が主に見られる。斧形石器は蛇紋岩を石材とする一般的なものであるが、研磨が顕著で丸い刃部が作出されているものが目立つ。

出土層位はV b層が主体で、堆積も厚く、器種組成の矛盾もないため、そのままV b層に位置付けられる石器文化として評価できる。

野尻湖人類考古グループの黒色帯上部文化層、武蔵野台地X層からIX層段階に対比できる。

#### (8) 大久保南I b 石器文化

斧形石器、ナイフ形石器を特徴とする石器文化である。10ヶ所のブロックより石器694点、礫20点が出土している。主な器種に斧形石器、ナイフ形石器、楔形石器が挙げられる。大久保南I石器文化中の第2～10号ブロックが相当し、これらは大久保南I b環状ブロック群に位置付けられる。石材は黒曜石が8割以上を占めている。

ナイフ形石器は縦長剥片を縦に用いて、打面を基部に置き基部両側縁に加工が施されるものである。先端部への加工はほとんど見られない。素材の縦長剥片は打面が大きく残るもので、形態の斉一性は低いため、製品の形状も多様である。石材は無斑品質安山岩が最も多く半数弱を占め、頁岩系と玉髓が1割以上となっている。

台形石器は貝殻状剥片を縦に用いるものが主体となっており、加工には平坦剥離が主に見られる。斧形石器は蛇紋岩を石材とする一般的なものであるが、研磨が顕著で丸い刃部が作出されているものが目立つ。

出土層位はV b層が主体で、堆積も厚く、器種組成の矛盾もないため、そのままV b層に位置付けられる石器文化として評価できる。

野尻湖人類考古グループの黒色帯上部文化層、武蔵野台地X層からIX層段階に対比できる。

#### (9) 上ノ原I a 石器文化

小形の縦長剥片を特徴とする石器文化で、石斧を組成しない。9ヶ所のブロックより石器761点、礫18点が出土している。主な器種にナイフ形石器、台形石器、彫器、楔形石器が挙げられる。上ノ原I 石器文化の第1～9号ブロックが相当し、上ノ原I a 環状ブロック群に位置付けられる。石材は黒曜石と無斑品質安山岩が多用されており、黒曜石の産地は蓼科冷山群が主体となっている。野尻湖遺跡群でこれだけの蓼科冷山群のまとまりは初めての確認である。近くて良質の和田エリアや諏訪エリアの黒曜石より、遠くてやや質の劣る蓼科冷山群が用いられているのはどのような理由があるのだろうか。

ナイフ形石器は小形の縦長剥片を縦に用いて、打面を基部に置き1側縁もしくは2側縁に加工が施される。側縁への加工は切り立っており、同一部分に正反両方向の加工が見られる部分がある。素材となる小形の縦長剥片は石器文化内で主に剥離されているものとなっている。

台形石器は貝殻状剥片もしくは寸詰まりの縦長剥片を縦に用いて、打面を基部に置き、1側縁に正方向の加工が施される。左右側縁に加工が施される一般的な台形石器と異なっている。

彫器は貝殻状剥片を素材としたもので、素材の切り立った面もしくは、他の彫り面を極状剥離打面としており、極状剥離打面の意図的な作出は認められない。

野尻湖遺跡群のV b層相当の石器文化としては斧形石器を組成しないのはめずらしい。調査区外に分布する可能性も考えられる。

出土層位はV b層が主体で、堆積も厚く、器種組成の矛盾もないため、そのままV b層に位置付けられる石器文化として評価できる。

野尻湖人類考古グループの黒色帯上部文化層、武蔵野台地X層からIX層段階に対比できる。

#### (10) 上ノ原I b 石器文化

斧形石器、貝殻状刃器、搔器状石器を特徴とする石器文化である。10ヶ所のブロック、1基の礫群より石器786点、礫96点が出土している。主な器種に斧形石器、ナイフ形石器、台形石器、貝殻状刃器、搔器状石器、楔形石器が挙げられる。上ノ原I 石器文化の第10～19号ブロックが相当し、上ノ原I b 環状ブロック群に位置付けられる。

2点のナイフ形石器は縦長剥片を縦に用いるものと、寸詰まりの縦長剥片を斜めに用いるものが見られる。後者は、台形石器との中間的なものとなっており、前者は基部に加工が施されるが、素材は遺跡内の剥片剥離されるものと異なる。

台形石器は貝殻状剥片を横に用いるものである。側縁への加工がノッチ状になる特徴を持つ。

貝殻状刃器及び搔器状石器はチャートの小形貝殻状剥片を素材としている。この素材は石器文化内で主に剥離されているもので、縦長剥片を主体とする上ノ原I a 石器文化とは対照的である。

斧形石器は蛇紋岩と緑色凝灰岩を石材としている。側縁と刃部がやや直線的になり、短冊形を呈するものと、刃部が丸く基部が尖る涙形を呈するものが見られ、研磨面中に稜が認められる特徴を持つが、AT下位の斧形石器と理解できるものである。

出土層位はV b層が主体で、堆積も厚く、器種組成の矛盾もないため、そのままV b層に位置付けられる石器文化として評価できる。

野尻湖人類考古グループの黒色帯上部文化層、武蔵野台地X層からIX層段階に対比できる。

### (1) 上ノ原I c 石器文化

凝灰質頁岩の彫器と縦長剥片を特徴とする石器文化である。3ヶ所のブロック、1基の礫群より石器279点、礫46点が出土している。主な器種が彫器ぐらいしがなく、部分的なものしか見えていないと思われる。上ノ原I 石器文化の第21・22・24号ブロックが相当する。石材は凝灰質頁岩や凝灰岩が多用されている。

彫器は貝殻状剥片を素材としたもので、素材の切り立った面もしくは、他の彫刀面を極状剥離打面としており、極状剥離打面の意図的な作出は認められない。

縦長剥片は剥片を素材として、打面や折れ面等の素材の切り立った面の小口部分から剥離されるものが見られる。

出土層位はV b層を主体とするブロックと、V a層を主体とするブロックがある。そのため、上ノ原I a・I b石器文化より新しい可能性が考えられ、V b層からV a層の石器文化として位置付けられる。

野尻湖人類考古グループの黒色帯上部文化層もしくは上II最下部文化層、武蔵野台地XからVII層段階に対比できようか。

### (2) 上ノ原II 石器文化

柳葉形の槍先形尖頭器を特徴とする石器文化である。9ヶ所のブロック、2基の礫群より石器543点、礫188点が出土している。主な器種は槍先形尖頭器、削器、角錐状石器となっている。無斑晶質安山岩が多用されているが、製品には頁岩系の石材が目立つ。

槍先形尖頭器はいずれも両面加工のもので、断面形が凸レンズ状となる。平面形は柳葉形と木葉形が見られる。いずれも丁寧で細かい加工が施されており、器体は薄く反りも少ない。

ナイフ形石器が組成せず、槍先形尖頭器の形状も整って完成されていることから、槍先形尖頭器でも新しい段階に位置付けられる。

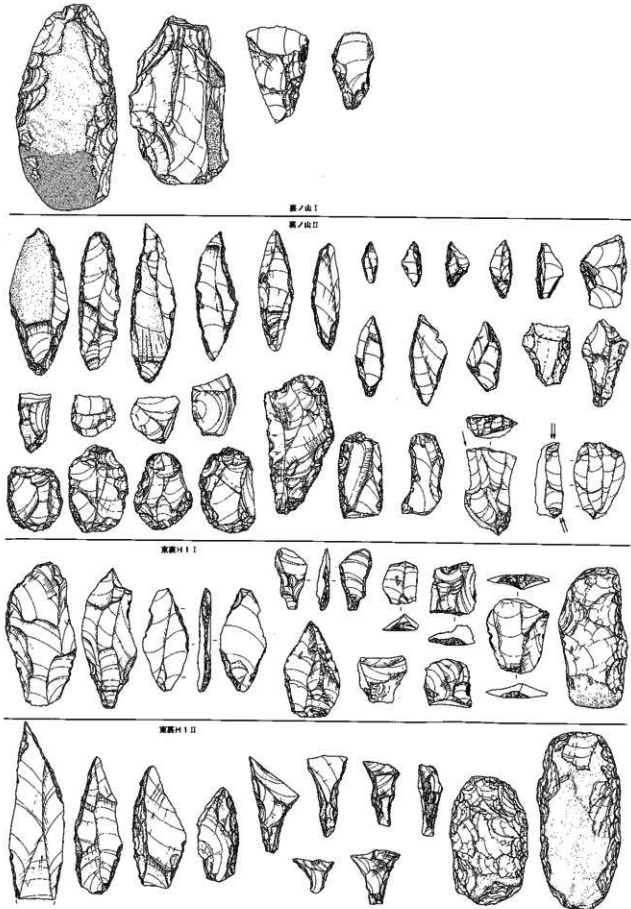
出土層位はIII層を主体としており、石器文化の内容からも同期の石器文化として位置付けられる。

野尻湖人類考古グループの上II上部からモヤ下部文化層、武蔵野台地III層段階に対比される。

## 3 まとめ

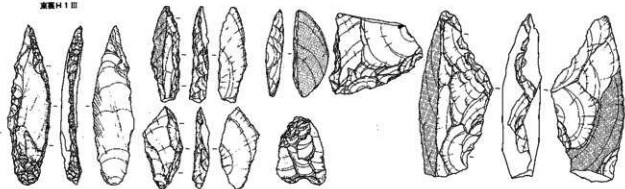
以上のように各石器文化の時間的位置付けを行ってきた。それらのまとめを第17～18図に示した。

南関東等と比べるとロームの堆積も薄く、層位的な編年にも限界がある。しかしながら、野尻湖遺跡群には1地域だけではなく、関東、近畿、九州、東北、北陸などと直接的に対比可能な石器文化が存在する。今回の高速道建設に伴う調査により、かなりの面積の調査が行われ様々な石器文化が確認されたが、それでも、まだ野尻湖遺跡群のごく一部が見えたに過ぎないと思われる。今後も各地域をつなぐ接点のな地域として野尻湖遺跡群は注目されていくと思われる。

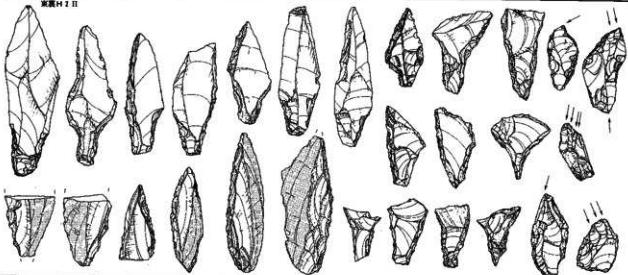


第17図 各石器文化の主な石器1

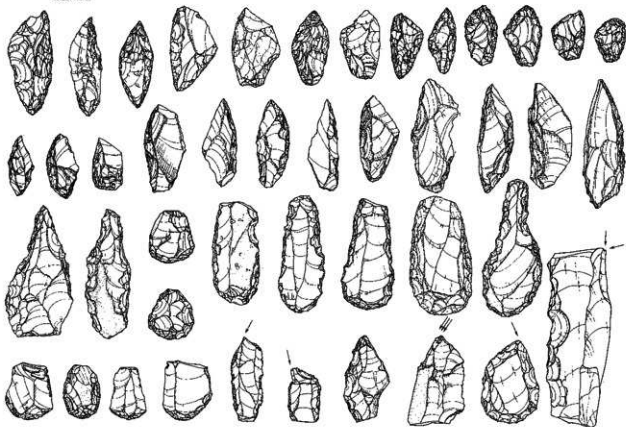
原圖H1 III



原圖H2 II

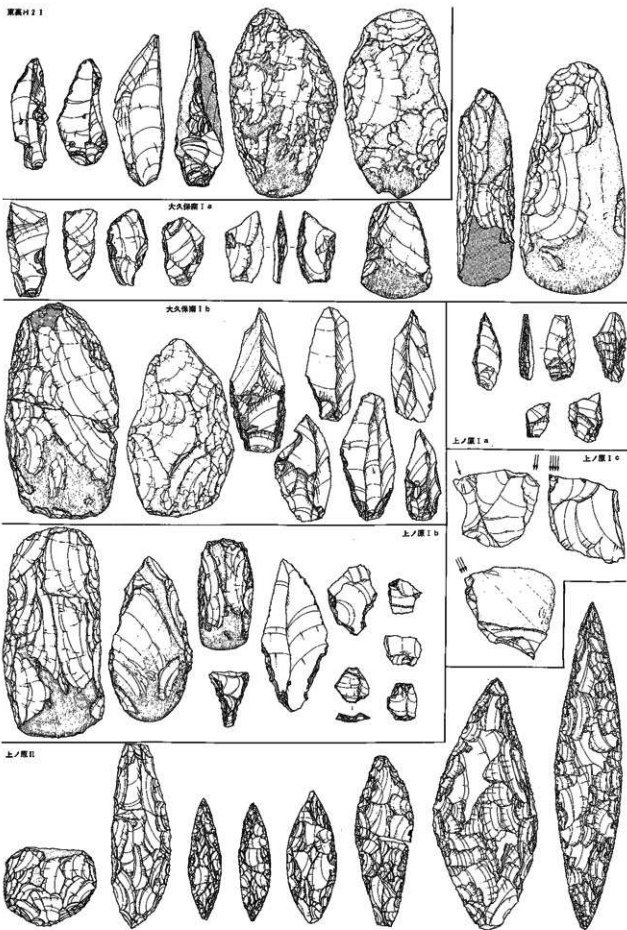


原圖H2 III



第18図 各石器文化の主な石器2

原圖(2)



第19図 各石器文化の主な石器 3

## 第9章 結語

平成5年度から7年度にかけておこなわれた上信越自動車道建設に伴う信濃町内の発掘調査は、旧石器時代の大道跡群である野尻湖遺跡群にかかり、これまでに例のない大規模なものとなった。この調査成果は平成8年度から11年度に行われた整理作業によってまとめられ『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15—信濃町内その1—』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16—信濃町内その2—』として刊行されることとなった。本書はそのうちの裏ノ山遺跡、東裏遺跡、大久保南遺跡、上ノ原遺跡の旧石器時代についての報告書となる。本書に掲載されている調査成果の概要について、時期別にまとめ総括とする。

**V b層の石器文化（AT 降灰以前）** この時期に該当するのが裏ノ山Ⅰ、東裏 H1Ⅰ、東裏 H2Ⅰ、大久保南Ⅰ a、大久保南Ⅰ b、上ノ原Ⅰ a、上ノ原Ⅰ b 石器文化である。

上ノ原Ⅰ a 石器文化以外で斧形石器を組成しており、野尻湖遺跡群の地域的な斧形石器の出土長量の多さを裏付けている。また、日向林Ⅰ石器文化に見られなかった縦長剥片剝離技術が見られる石器文化が確認されている。

大久保南Ⅰ a 環状ブロック群、大久保南Ⅰ b 環状ブロック群、上ノ原Ⅰ a 環状ブロック群、上ノ原Ⅰ b 環状ブロック群が想定された。これらは日向林Ⅰ石器文化に見られる大規模な環状ブロック群と比較すると、規模は小さいものの、斧形石器を複数組成する場合が多く、日向林Ⅰ石器文化とは異なる器種組成も見られることから、野尻湖遺跡群における環状ブロック群の新たなあり方を示す貴重な発見となった。

**V a層の石器文化（AT 降灰前後）** 裏ノ山Ⅱ、東裏 H1Ⅱ、東裏 H1Ⅲ、東裏 H2Ⅱ 石器文化が該当する。

裏ノ山Ⅱ石器文化では、2側縁に加工が施される大小のナイフ形石器が出土し、野尻湖遺跡群周辺では最もまとまりの良い「茂呂型ナイフ形石器」に類する石器を組成する石器文化として評価される。

東裏 H1Ⅱ、東裏 H1Ⅲ、東裏 H2Ⅱ 石器文化では、九州や近畿・瀬戸内地域で特徴的に見られる「剥片尖頭器」、「国府型ナイフ形石器」、「狸谷型ナイフ形石器」に類似する石器が検出された。細かな違いはあるものの共通点も多く見られることから、はるか離れた地である九州や近畿・瀬戸内地方との関連を示唆できる資料となった。

**IV層の石器文化（AT 降灰以降）** 東裏 H2Ⅲ 石器文化では、ナイフ形石器、搔器等に左右非対称形の槍先形尖頭器が共存した。これらは、槍先形尖頭器でも古く位置付けられるものである。また、ブロックが自然流路内に形成されている特殊な遺跡の立地となっている。

**III層の石器文化（旧石器時代末）** 上ノ原Ⅱ石器文化はナイフ形石器が組成しない槍先形尖頭器を特徴とする石器文化となった。槍先形尖頭器はやや大形で細身であり縄文時代草創期になる前の槍先形尖頭器の姿をあらわしているものと考えられる。

以上が本書に掲載した遺跡の概要である。7間にわたり行われたこれらの調査成果は、不十分な点も多々あると思われるが、旧石器時代を踏んで新たな重要な資料になったと考えている。最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまでお世話になった皆様へ深くお礼を申し上げるとともに、本書が多くの方々にご活用いただくことを願うものである。



引用、参考文献

- 赤羽貞幸 1996 「野尻湖の生い立ちとその変遷」『アーバンクボタ』35  
安斎正人 1988 「新幹線石器器群からナイフ形石器器群への移行—前、中期/後期旧石器時代過渡期の研究」『先史考古学研究』第1号  
安藤政雄 1990 「先土器時代人の生活空間—先土器時代のムラー」『日本村居史講座2 景観1 原始・古代・中世』雄山閣  
安藤政雄 1997 「旧石器時代の集団—南関東の移動生産集団と石器製作者集団—」『考古学』100  
安藤政雄 1997 「石器時代の物々交換とミチ」『考古学における日本歴史9 交易と交通』雄山閣  
大竹憲爾 1989 「長野県の石斧」『旧石器時代の石斧（斧形石器）をめぐって』北陸旧石器文化研究会  
岡村道雄 1995 「旧石器時代石斧研究の現状と若干の検討」『考古学ジャーナル』No.385  
小田勝夫 1971 「台形石器について」『物質文化』No.18  
小畑弘己 1983 「台形石器」『季刊考古学』第4号  
柏倉亮吉他1963 「山形県新庄盆地の先縄文遺跡」『日本考古学協会第29回総会研究発表要旨』  
小林達雄 1982 「伊勢見山遺跡」『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡（北・東信）』雄山閣  
酒井潤一 1996 「野尻湖と最終氷期の研究」『アーバンクボタ』35  
佐藤宏之 1988 「台形石器研究序説」『考古学雑誌』第73巻第3号  
佐藤宏之 1992 「日本旧石器文化の構造と進化」柏倉亮  
石清之 1978 「西南日本におけるナイフ形石器終末期の予察」『神奈川考古』第3号  
石清之 1990 「旧石器時代の石斧—関東地方を中心として—」『考古学雑誌』75-3  
杉原英介・戸沢久則 1971 「佐賀県東遺跡における細石器文化の経緯」『考古学雑誌』4-4  
鈴木美保 1995 「関東西南部の石斧と石斧製作法」『考古学ジャーナル』No.385  
須田勝司 1986 「群馬県教員遺跡の石器文化—ナイフ形石器の型式学的考察—」明治大学考古学博物館報 No.2  
須田勝司 1983 「石斧について」『神奈川考古』第15号  
芥沢長介・麻生優 1953 「北信、野尻湖底発見の無土器文化」『考古学雑誌』39-2  
芥沢長介・中村一明・麻生優 『神山 新潟県中魚沼郡津南町神山遺跡調査報告』津南町教育委員会  
竹岡俊樹1989 『石器研究法』言文社  
谷和隆1995 「野尻湖遺跡群における先土器時代の石器石材」『長野県縄文文化財センター紀要』4  
谷和隆 1995 「野尻湖遺跡群と石斧」『考古学ジャーナル』No.385  
谷和隆 1996 「日向川B遺跡の石器組成—台形石器の検討—」『長野県縄文文化財センター紀要』5  
谷和隆 1998 「尖頭器文化と黒曜石」第10回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨  
中川和哉 1994 「原の辻型台形石器に関する若干の考察」『百花台遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告第8号  
長崎潤一 1990 「後期旧石器時代前半期の石斧—形態変化論を視点として—」『先史考古学研究』第3号  
中島庄一 1983 「石器Ⅰ 使用痕」『縄文文化の研究』第7巻  
中村敦子、中村由克 1994 「信濃町上ノ原遺跡の第2次調査」第6回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨  
中村由克 1992 「〈速報〉長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（Ⅰ）」『考古学ジャーナル』No.342  
中村由克 1992 「〈速報〉長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（Ⅱ）」『考古学ジャーナル』No.344  
中村由克 1995 「長野、新潟における石器石材について」『石器文化—北関東の黒石とその流通を中心として—』第3回岩槻フォーラム予稿集  
中村由克 1996 「信濃町上ノ原遺跡（原道地点）の調査」第8回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨  
中村由克 1997 「信濃町上ノ原遺跡（原道地点）の調査—その2—」第9回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨  
中村由克 1999 「信濃町大久保南遺跡の調査」第11回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨  
戸田哲也・篠原正他1977 『東内野遺跡発掘調査概報』  
萩原博文・川道 寬 1981 「田助遺跡発掘調査概要」『九州の旧石器文化（Ⅰ）九州旧石器文化研究会・長崎県旧石器研究会  
萩原博文 1983 「原の辻型台形石器について」『人間・遺跡・遺物（麻生優編）』文叢出版  
橋本勝雄 1995 「関東東南部における後期旧石器時代前半期の石斧」『考古学ジャーナル』No.385  
林茂郎、樋口昇一、森嶋聡、笠沢浩、小林学、畑田充、北村直次1970 「杉久保A遺跡緊急発掘調査報告」『長野県考古学雑誌』第8号  
樋口清之・小林達雄 1964 「伊勢見山遺跡調査概報」  
藤沢宗平、林茂郎 1961 「神子梁遺跡—第1次調査概報—」『古代学』9-3  
麻原一志 1986 「いわゆる立野ヶ原型ナイフ形石器の基礎的整理」『旧石器考古学』33  
松原和人 1994 「百花台石Ⅰ器群の編年的位置付けとその評価」『百花台遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告第8号  
松村和男 1988 「先土器時代の局部磨製石斧について—その1—」『群馬の考古学』群馬県縄文文化財事業部  
宮坂英之・宮坂虎次 1962 「淡川」『矢石考古館研究報告書』第1冊  
宮坂英之・宮坂虎次 1966 「藤科」『矢石考古館研究報告書』第2冊  
矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』第1号  
山中一郎 1975 「石器研究法」『史林』58巻3号  
山本正敏 1987 「調査の成果 馬場山D遺跡における磨製石斧の製作」『北陸自動車道遺跡調査報告書—朝日町編3—馬場山D遺跡・馬場山G遺跡・馬場山H遺跡』富山県教育委員会  
山本正敏 1990 「調査の成果 磨製石斧の製作」『北陸自動車道遺跡調査報告書—朝日町編5—境A遺跡石器群』富山県教育委員会  
渡辺哲也 1994 「信濃町東遺跡の調査」第6回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨  
渡辺哲也 1996 「信濃町大久保南・上ノ原遺跡（住宅地点ほか）の調査」第8回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨  
秋田県教育委員会 1985 「七曲遺跡群発掘調査報告書」  
飯島町教育委員会 1987 「針ヶ平第1遺跡」  
地学団体研究会編 1996 『新編地学辞典』平凡社  
東京都縄文文化財センター 1999 「多摩ニュータウン遺跡—No.72-795-796遺跡—(Ⅰ)」東京都縄文文化財センター調査報告第50集  
富山県教育委員会 1987 「北陸自動車道遺跡調査報告書—朝日町編3—馬場山D遺跡・馬場山G遺跡・馬場山H遺跡」  
富山県教育委員会 1990 「北陸自動車道遺跡調査報告書—朝日町編5—境A遺跡石器群」

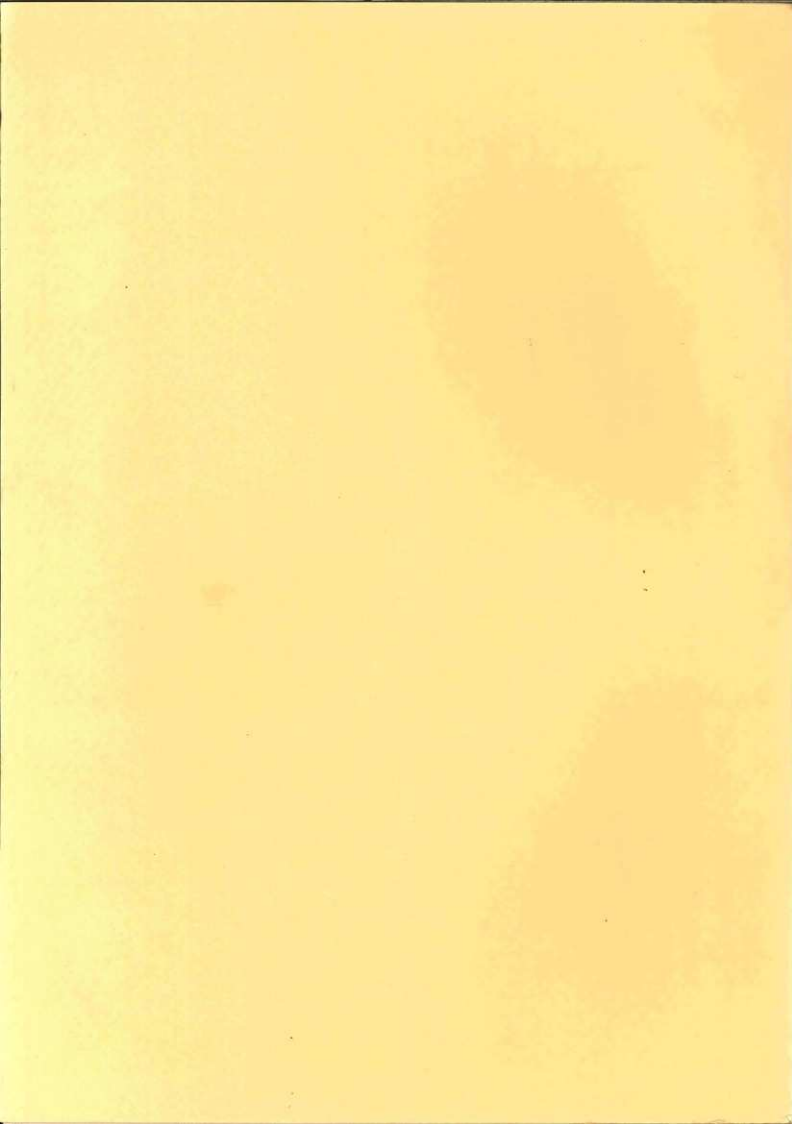
- 信濃町誌編纂委員会 1968 『信濃町誌』
- 信濃町教育委員会 1995 『貫ノ木遺跡、日向林B遺跡（個人住宅地点）発掘調査報告書』
- 長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団 1989 『長野県小県郡長門町鷹山遺跡群Ⅰ』
- 長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団 1991 『長野県小県郡長門町鷹山遺跡群Ⅱ』
- 沼津市教育委員会 1989 『中見代第Ⅰ遺跡調査報告書』沼津市文化財調査報告第45集
- 野尻湖人類考古グループ 1987 『野尻湖遺跡群の旧石器文化Ⅰ』野尻湖発掘の考古学的成果 第1集
- 野尻湖人類考古グループ 1990 『野尻湖遺跡群の旧石器文化Ⅱ』野尻湖発掘の考古学的成果 第2集
- 野尻湖人類考古グループ 1994 『野尻湖遺跡群における文化層と旧石器文化』『野尻湖博物館研究報告』第2号
- 北陸旧石器文化研究会 1989 『旧石器時代の石斧（斧形石器）をめぐって』

報告書抄録

ふりがな	じょうしんえつじどうしゃどうまいぞうふんかざいはくつちょうきほうこくしよ
書名	上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	信濃町内その1 裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡
巻次	15
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	48
編著者名	土屋 積 谷 和隆
編集機関	財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒387-0007 長野県更埴市屋代260-6 TEL026-274-3891
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査面積			
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	°' "	°' "	調査期間	m <sup>2</sup>	調査原因	
裏ノ山遺跡 うしろのやま	長野県上水内郡 信濃町大字 柏原 字裏ノ山525-1他	205834	71	36°48'15"	138°12'56"	1994年4月18日～ 1994年11月11日	8,500	高速道路建設に伴う事前調査
東裏遺跡 ひがしうら	長野県上水内郡 信濃町大字 柏原 字東裏405他		70	36°48'28"	138°12'33"	1993年4月19日～ 1993年12月10日 1994年11月14日～ 1994年12月13日 1995年7月18日～ 1995年10月13日	44,500	
大久保南遺跡 おおくほなん	長野県上水内郡 信濃町大字 柏原 字上ノ原204他		61	36°48'41"	138°12'18"	1995年4月5日～ 1995年11月28日	94,500	
上ノ原遺跡 うのはら	長野県上水内郡 信濃町大字 柏原 字上ノ原240他		65	36°48'50"	138°12'08"	1994年10月24日～ 1994年12月9日 1995年8月17日～ 1995年11月28日	7,000	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
裏ノ山遺跡	集落	旧石器	石器集中地点(ブロック) 28	ナイフ形石器・掻器・削器	茂呂型ナイフ形石器と掻器大量に出土
東裏遺跡	集落	旧石器	石器集中地点(ブロック) 35	ナイフ形石器・掻器・槍先形尖頭器・石刃	斧形石器、剃片尖頭器、肩の張る槍先形尖頭器、大量の掻器など出土
大久保南遺跡	集落	旧石器	石器集中地点(ブロック) 29・礫群5	ナイフ形石器・台形石器・斧形石器	AT下位より環状ブロック群検出
上ノ原遺跡	集落	旧石器	石器集中地点(ブロック) 33・礫群5	ナイフ形石器・台形石器・槍先形尖頭器	AT下位の環状ブロック群と槍先形尖頭器の良好な資料



長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 48

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 15

—信濃町内 その1—

裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡

旧石器時代

本文編

発行 平成 12 年 3 月 31 日  
発行者 日本道路公団  
長野県教育委員会  
助長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
TEL 026-274-3891 FAX 274-3892  
印刷 信毎書籍印刷株式会社  
TEL 026-243-2105 FAX 243-3494